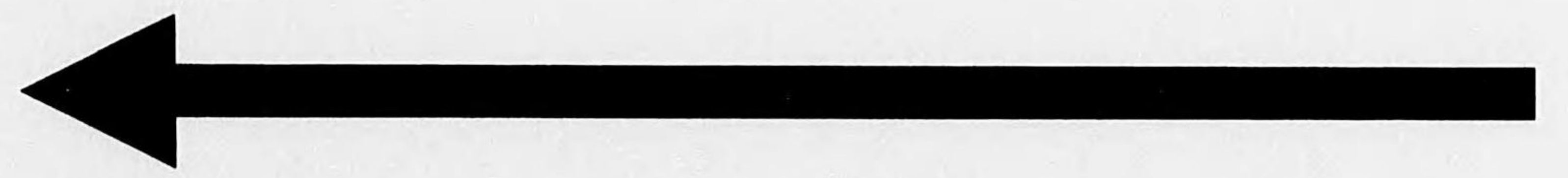


522. 5-A43-2ウ  
1200500745264  
2.5  
13  
⑦



始



52

20年 4月 23日

12

0	1	0	1							

明  
治  
三  
十  
四  
年

522.5  
A43  
2

昭和十八年

訂正  
增補



印度佛塔巡禮記

上冊



天沼俊一



522.5  
A43  
2

522.5  
A43  
2



989  
106

## 序

昭和十年十二月中旬から翌十一年三月の末迄、約三ヶ月に亙り印度内地各方面を旅行した時の記事を、前回即ち大正十一年末から同十二年二月初迄の分と併せ、見學した塔婆を主とし、『印度佛塔巡禮記』と題し雑誌【四天王寺】へ二十回に分けて揚げたものを、終了後四天王寺當局の厚意により、塔婆以外の建築風景等の圖版を追加挿入して一冊に綴り、昭和十三年に施本として知人に頒布したが、此度更に訂正増補をなし、上下二冊とし、法隆寺貫主佐伯定胤猥下に書いて戴いた文字で背と扉とを飾り、各二千部の限定版として世に貽る事にした。上册は印度及び錫蘭島に於ける佛塔、下冊はネバル國の旅行記と其國所在の佛塔竝に印度教祠に就き、夫夫記載を試みたので、上下冊共昭和十八年中發行の豫定が、いろいろの都合で本年にまでのびてしまったのである。

下冊には何故佛塔以外のものを記したかといふに、此國は表面絶對の鎖國である

から、歐米人でも入國は容易でない。本邦人としても、正式の手續を経て——旅行といつても事實國境から首都迄の往復であるが——したものは僅に十指を屈する位の少數であるし、又建築專攻者でこれ迄入國したものは一人もないから、私は旅行の有様と珍しい建築の紹介とをしたのである。恐らくこれは本邦人の著した建築を主とせるネバル紀行の最初のものであらう。尤も世尊生誕の藍毗尼園へ印度から往復した邦人は相當の數に上り、従つて同地所在の阿育王柱其他に就いては、寫眞も記事も決して珍しくはないが、他の地方は全然紹介されてゐない。私としても實は僅に首都に六日間滞在しただけで、孤立無援の異教徒との理由を以て、些の便宜を與へられた事なく、各宗教建築は、夫等が廢墟に非ざる限り、遠方から雙眼鏡の力を借りて望見したに過ぎず、何等權威のある解説の聽取も出來なかつたが、寫眞だけは幸に撮る事を得たので、成るべく夫等の多くを揚げておく事にした。私は最早再遊の見込はないが、此等の記事及び圖版の幾分でもが、他日少壯有爲の士の旅行の手引ともならば望外の幸である。

\*

\*

\*

\*

\*

尙ほ固有名詞の發音に一般に通用してゐる漢字又は似た假名を當嵌ておいた。いふ迄もなく地名・人名等は、其國の文字で書いておくのが最もよろしい、さうすれば正しい音がでる筈である。併し夫ができもせず、又夫程迄にする必要がない以上、發音には多少の距離があつても、日本人に判り易い方がよからう。「劍橋」や「牛津」のやうな名譯で、而も原語の通り——といつても Kenburizzi と Okusufodo だらうが——發音し得る様な文字が見付からないとすれば、似た所でがまんするべきであらう。又假名では「ヴ」・「ヅ」・「テイ」等を使つてみても、夫が語學の書物か何かでない以上、大して効果があるとも思はれない。

外國の地名に漢字を當嵌るのは、(夫が東洋に於いて漢字を用ひてゐる國でない限り)不都合で時代後れた、宜しく全部假名にすべきであるといふ議論がある。如何にも尤も千萬ではあるが、使ひ馴れた字を用ひても何等差支へのある筈はない。今日でも米英撃滅等と書いてゐるのでも判る。「アメリカ」と「イギリス」だから、「米英」と書く代りに假名で「アイ」等と書いたら何の事かまごつくであらう。私が昔小學校で外國地理を習つた時、「日耳曼」と書いたのを「ゼルマン」と教はつた、今のド

イツの事であるが、これでは如何にも難解である、しかし英吉利とか亞米利加等は少しも差支へはあるまい。

故に本書に於いては「ボンベイ」を「孟買」、カルカッタを「甲谷他」、「コロンボ」を「古倫母」としたし、「Timevelly」を「チンネベリ」、「Amaravati」を「アマラバチ」といふ風に便宜適當に記しおいた。

昭和十九年四月三十日

京都市に  
於いて

著 者 敬 白

## 目 次

一 緒 言	二
二 佛塔の分布	二
三 見學の順序	三
四 私の旅行した路	三
五 錫 蘭 嶋	四
六 アナラジャブラ	六
七 塔 婆	九
(イ) ジエタワナラマ塔  祇園塔	二
(ロ) アバヤギリヤ塔  無畏山塔	四
(ハ) ルアンウエリ塔  金粉塔	五
(ニ) ミリスウエチャ塔  蕃椒塔	九
(ホ) ッパラマ 塔	三〇
(ヘ) ランカラマ塔	三三

(ト)	セラチャイチャ塔	一四
八	ミヒンタレ	一七
九	塔 婆	一七
(イ)	アンバスタラ塔	一七
(ロ)	マハ・セヤ塔	一八
(ハ)	ギリバンダ塔	一八
一〇	アナラジャプラからポロンナルワへ	一九
一一	ポロンナルワのレスト・ハウス	一九
一二	遺跡の分布	二〇
一三	塔 婆	二〇
(イ)	キリ 塔 白 塔	二一
(ロ)	ランコット塔 金輪塔	二一
(ハ)	ニッサンカ・ラタ・マンダバヤの小塔	二二
一四	古 倫 母 へ	二二
一五	古 倫 母 の 一 日	二三
一六	再 び 印 度 へ	二三

一七	アジャンタ窟	二四
一八	カネリ窟	二五
一九	カーリ窟	二五
二〇	バージャ窟院とベドサ窟院の見學	二六
二一	バージャ窟	二六
(イ)	制 多 窟	二七
(ロ)	塔 婆 窟	二七
(ハ)	毘 訶 羅 窟	二八
二二	ベドサ窟	二八
二三	ナシツク窟と町の觀光	二九
二四	ナシツク窟	二九
(イ)	制 多 窟	三〇
(ロ)	毘 訶 羅 窟	三〇
其一	ゴウタミプトラ窟	三一
其二	ナハバナ窟	三一
二五	エロラ窟	三一



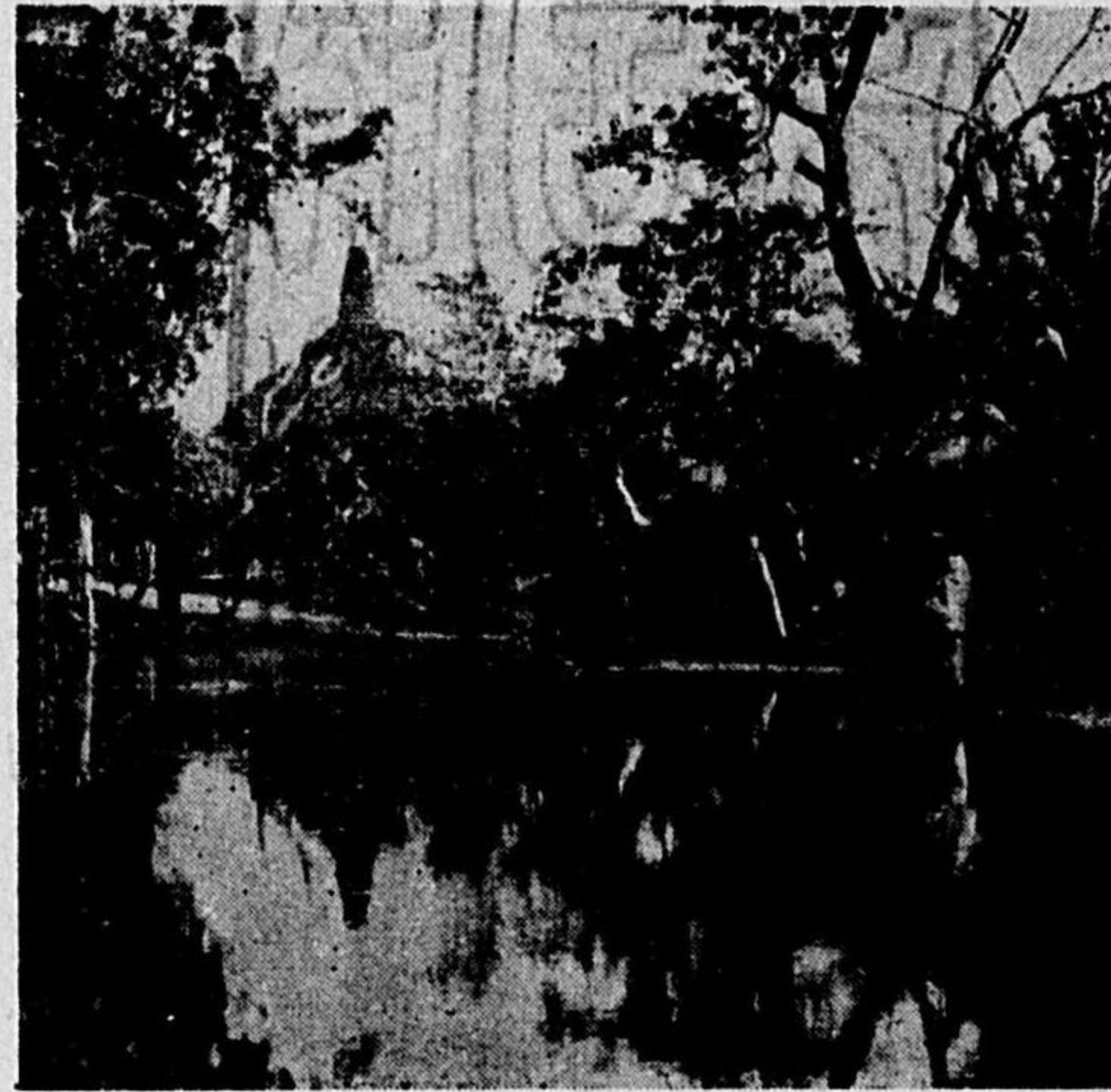
二六	サンチ	へ	二六
二七	塔婆	.....	二七
	(イ) 第一塔	.....	二七
	(ロ) 第二塔	.....	二七
	(ハ) 第三塔	.....	二七
二八	サンチ發グワリヤへ	.....	二八
二九	グワリヤ市の觀光	.....	二九
三〇	グワリヤからラワル・ピンチへ	.....	二九
三一	マニキヤラ塔	.....	二九
三二	ラワル・ピンチからタキシラへ	.....	二九
三三	タキシラの遺跡	.....	二九
三四	クナーラ塔	.....	二九
三五	ダルマラージカ塔	.....	二九
三六	ビバラ僧坊の小塔婆	.....	二九
三七	モラー・モラーズ僧坊の塔婆	.....	二九
三八	バーラー塔	.....	二九

三九	タキシラの氣候	.....	三〇
四〇	ラホールからモントゴメリーへ	.....	三〇
四一	ハラツバの遺跡	.....	三〇
四二	モントゴメリーからラルカナへ	.....	三〇
四三	モヘンジョ・ダロ往復	.....	三〇
四四	モヘンジョ・ダロの塔婆及僧坊廢墟	.....	三〇
四五	タキシラ發ノウシエラへ	.....	三〇
四六	ノウシエラ滞在、タクチ・バハイとシャーリ・パール見學	.....	三〇
四七	タクチ・バハイ廢寺の塔婆	.....	三〇
四八	ノウシエラからベシャワーへ	.....	三〇
四九	ベシャワー市及郊外の觀光	.....	三〇
五〇	廢迦膩色迦寺塔婆	.....	三〇
五一	ベシャワーからラホールへ	.....	三〇
五二	孟買から甲谷他へ	.....	三〇
五三	甲谷他の數日	.....	三〇
五四	佛陀伽耶往復	.....	三〇

五五	佛陀伽耶と北島道龍師……………	二九八
五六	佛陀伽耶大塔及玉垣附奉獻小塔婆……………	二七七
五七	ガヤからベナレスへ……………	二八三
五八	鹿野園の廢墟……………	二九一
五九	塔婆……………	二九四
	(イ) ダメーク塔……………	二九四
	(ロ) ダルマラージカ塔……………	二九五
	(ハ) 「本殿」側面の小塔婆 附奉獻小塔婆……………	二九六
六〇	ベナレスからバトナへ……………	二九六
六一	バトナからナランダ經由モカメー・ガートへ……………	二九八
六二	那爛陀僧伽藍……………	三〇二
六三	甲谷他とマドラス……………	三〇六
	(イ) 大正の甲谷他と昭和の甲谷他……………	三〇六
	(ロ) 大正のマドラスと昭和のマドラス……………	三〇七
六四	甲谷他からブーリへ……………	三〇八
六五	ブーリ及び近郊の見學……………	三一〇

	(イ) ブバネスワール……………	三一九
	(ロ) カンダギリ窟院とウダヤギリ窟院……………	三二〇
	(ハ) ブラック・パゴダ……………	三二五
六六	マドラスからママラブラム(マハバリブラム)へ……………	三二八
六七	ママラブラムの二日……………	三三三
六八	マドラスからコンジーベラムへ……………	三五二
六九	華氏城址の塔婆玉垣……………	三五五
七〇	スワット溪谷發見の小塔婆……………	三五六
七一	パールハット塔婆……………	三五九
七二	アマラバチ塔婆……………	三六七
七三	モカメー・ガートからラクサウルへ……………	三六八
七四	ラクサウルのパンガロー……………	三七七
七五	ラクサウルの農家……………	三九六

# 印度佛塔巡禮記



謂はゆる祇園塔の遠望  
(大正十二年一月二十六日)

豪雨出水のため凹地に水が溜り、かかる光景を呈した。祇園塔と呼んでゐるが、實は「無畏山塔」で、近頃名稱は元に戻して正しく呼ぶ様になつた。

(第一回)

## 一、緒言

我々が現今普通印度と呼んでゐるのは、東はビルマ、西はアフガニスタン及びイランに接し、北はヒマラヤ山脈に限られたところの、北から南に向ひ太平洋に突出した三角形をしてゐる大國を指すのである。セイロン嶋は行政上全く別になつてゐて、入國出國に一一旅券の検査があつたり、檢疫が甚だやかましかつたり、頗るやつかいであるが、これは印度の一部分とみて少しも差支はないのである。北方ヒマラヤ山麓には、ネバル・ブータンの二小獨立國があるけれども、これも亦地勢からみれば何れも一つものとみるべきである。故にここでは總てを引くるめて印度に入れておく。

此小編は勿論佛塔に就いての記載が主であるが、私の歩いた道を地圖に現し、本文にも時時記して旅行記を兼ねさせておいた。理由は今後入竺さるる諸君に多少の參考にもならうし、又これが何十年か後には、昭和の初め頃の印度旅行の有様が判り、いくらか役にたつことがあるかも知れぬと考へたからである。何分國が大きいために、うまくやらぬと日を空費することが少くない。少し邊鄙なところへ行くと、一日に一度きり汽車の發着せぬ驛は珍らしくない。

## 二、佛塔の分布

地上に半球形に造られた龐大な塔婆は、さう數多く殘存してはゐないが、各所の佛蹟にある奉獻小塔

婆、及び各窟殿の制多内に見出さるるものは可なり多い。私は幸にこれ等を例ひ一部分ではあるが、見學することができたから、大體の記述をして見やうと思ふ。此等の大小幾多の塔婆が、印度國內に如何に分布されてゐるかは、地圖に就いて知るべきで、地圖に於ける大小黒圓がそれである。勿論私の見たものだけを記したので、未見のものは總て省いておいた。

## 三、見學の順序

此等の佛塔を巡禮するには、どう歩けばいいかといふに、先づ以て印度への上陸地點を考へねばならぬ。それによりて順序は決る筈である。上陸地點は日本から直接行くとすれば、古倫母・甲谷他・孟買の三港で、歐洲からなら孟買港が普通であらう。知人でもあればとにかく、左もなくばカラチ等へは上陸せぬ方がよろしい。

日本からだと荷物船はマドラス港へもつく。客船がつくか否かは知らない。とにかく佛塔巡禮の目的のためには、甲谷他とマドラスとが不便であらう。といふのは兩者共近所に目的物がなからである。尤も甲谷他の博物館 (Indian Museum) には健駄羅地方發掘の珍しい小塔があり<sup>(後出)</sup>、マドラスの博物館 (Madras Museum) には有名なアマラバチ (Amaravati) 塔婆の美事な殘闕が陳列してあるから<sup>(後出)</sup>、これ等が目的ならどちらへ上陸しても失望することは斷じてない。殊に前者には優秀なる多數の彫刻や、他に類例のないパールハット塔婆玉垣もあるで、印度上陸後第一に此等を見學すれば、其印象

極めて深いものがあらう。

孟買にしたところで市中に塔婆はない。これ等を見學するがためには、カネリ (Kanheri)・カーリ (Karti)・バーシヤ (Bhaja)・ベドサ (Bedsa) 等へ出かけねばならぬ。これ等のうち下車驛から歩いても知れたものはバーシヤ窟だけで、あとは先づ歩くのはやめた方がいい位、而も乗物は前以て要意しておかぬと、どうすることも出来ぬ状態である。カーリは此頃標柱等をたてて途もよく判る様にしてあるが、ベドサときた日にはとても山が険しく、二度行く氣にはなれないし、案内者なしでは辿りつく見込は更にはないのである。さうして孟買から自動車で行ったにしても、一日に二つは中中困難である。私は朝正六時に孟買を出で、ベドサとバーシヤの兩窟を見學して、歸着したのは夜の十時で、動くのがいやな位にくたびれてしまった。

一層思ひ切るならナシク (Nasik) 窟迄孟買から車で往復するのがよろしい。ここ一つなら車から下りてから、ゆっくり緩斜面を歩くこと二十分位で、至極容易に達することができ、序にもう少しのしてナシクの町の見物をゆっくりして歸ってくる事ができる。ナシクの町には泊るところはないさうだし、汽車だと洵に都合が悪い。

有名なアジャンタ (Ajanta) とエロラ (Ellora) とは、どうしたって孟買を夜汽車で出かけ、且つ夫れ夫れ下車驛たるシアルガオン (algaon) 及びダウラタバード (Daulatabad) あたりで一泊せねばならない。夫れにしても萬一 D・B が満員であつたら泊るところはない。だから誰かに案内でもして貰

はなければ、初めのうちは心細くて一人で出かける勇氣はなからう。

其上に上記した七個所は、何れも窟殿であり、従つて其制多の中央にある塔婆は古いものであるが規模は小さい。堂堂たる大塔婆が見度くばどうしてもサンチ (Sanchi) まで行かねばならぬ。アジャンタ・エロラ・サンチの三所だけみようとすると、一週間位はすぐたつて了ふのである。

故に日本から行くなら、私は古倫母へ上陸が最もよからうと思ふ。夫れは頗る新しく且つ拙いが、塔婆なら市内にもあるし、小工藝品ならば同地の博物館にも出陳してある。誰れでも最初の時はカンディー (Kandy) へ行くやうだが(佛徒は勿論、殊に僧侶は)、あそこにもある。併し此等は何れも大したものではない。其最も古くて大きく立派なものは、アナラジャプラ (Anuradhapura) とポロンナルフ (Polonnaruwa) とにあり、何れも古倫母から汽車で樂に行けるし、夫れ夫れホテル(ホテル) と R・H・(ハレスト) とあるから、前以て電報か手紙でも出しておけば、泊る所に困ることは絶対にない。さうして遺跡たるや甚だ豊富であり、殊に前者にはミヒンターレ (Mihintale) の佛蹟さへ程近いし、此三所なら従者なくとも少しも不自由なく旅行ができるから、ゆっくり充分にと望めば勿論限りはないが、急げば四日でも古倫母から往復ができる。だから日数の充分にとれぬ人は、古倫母へ上陸してセイロン嶋の佛跡だけ一週間かけて見學して卒業しておくのである。また尙ほ進んで印度の佛塔巡禮を望むならば、渡印して思ふままに歩けばよろしい。

私が假に立案するとすれば、先づセイロン嶋だけを旅行するものとして、最初にアナラジャプラへ行

く、さうしてポロンナルワからカンチーを経て、再び元のところへ歸ってくるのである。即

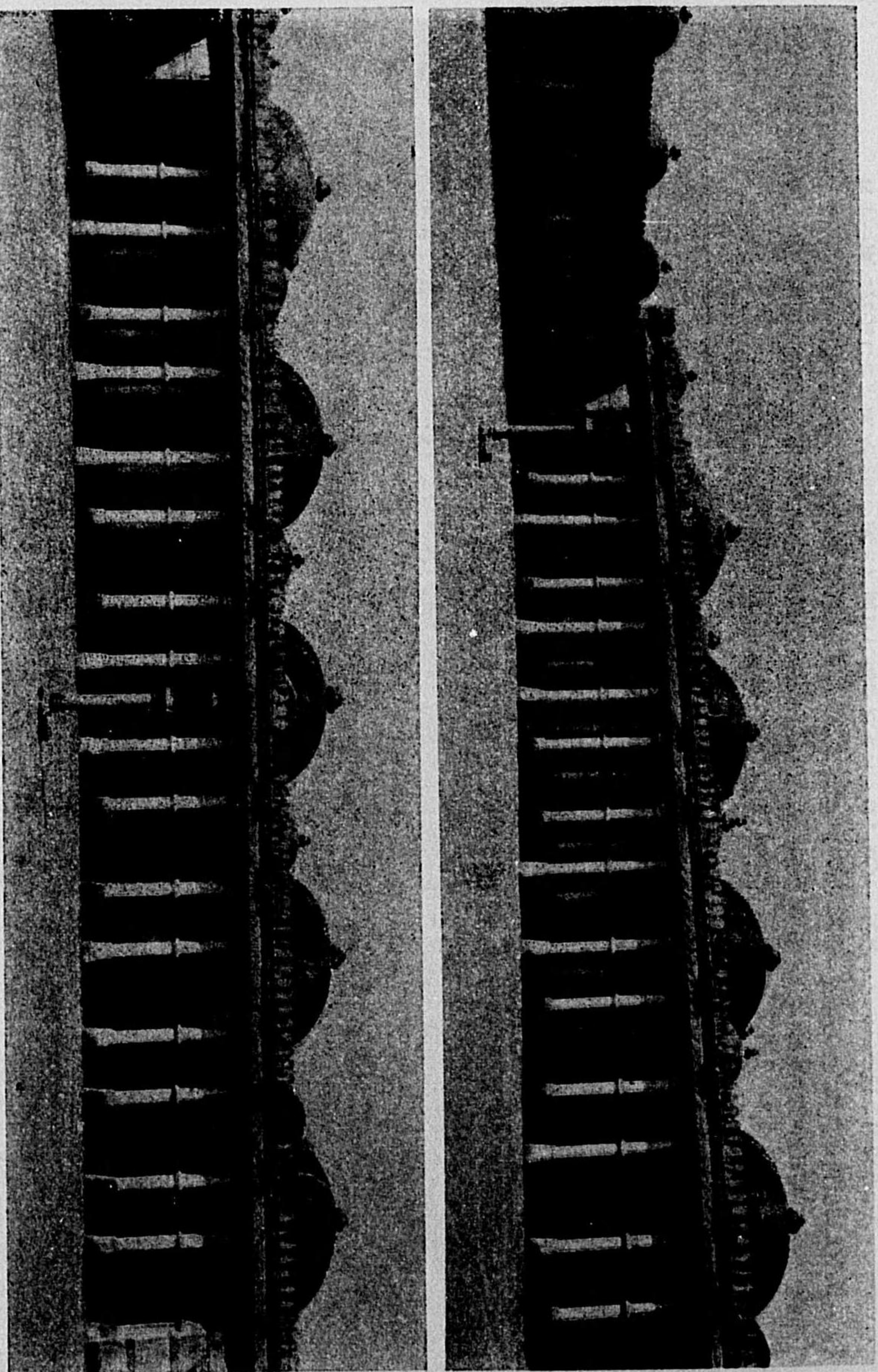
Mihintale

Colombo → Anuradhapura → Polonnaruwa → Sigiriya → Dambulla → Kandy → Colombo

の順序に巡るのである。これならスーツ・ケースと小鞆一つ位で、身軽に出かけられる。必要缺くべからざる従僕もなしですむ。ホルダア (Holder) へぐるぐる巻きにした寝具も、なければなしでがまんできないこともない。毛布一枚あればポロンナルワの R・H・でねることはできる。アナラジャプラとカンチーには大きな設備の行届いたホテルがある。但しアナラジャ市からカンチー迄は自動車を雇ふべきで、アナラジャ市で談判の仕様により、ポロンナルワに二泊位してカンチー迄行き、ここで乗捨にする様にしておけばいいのである。

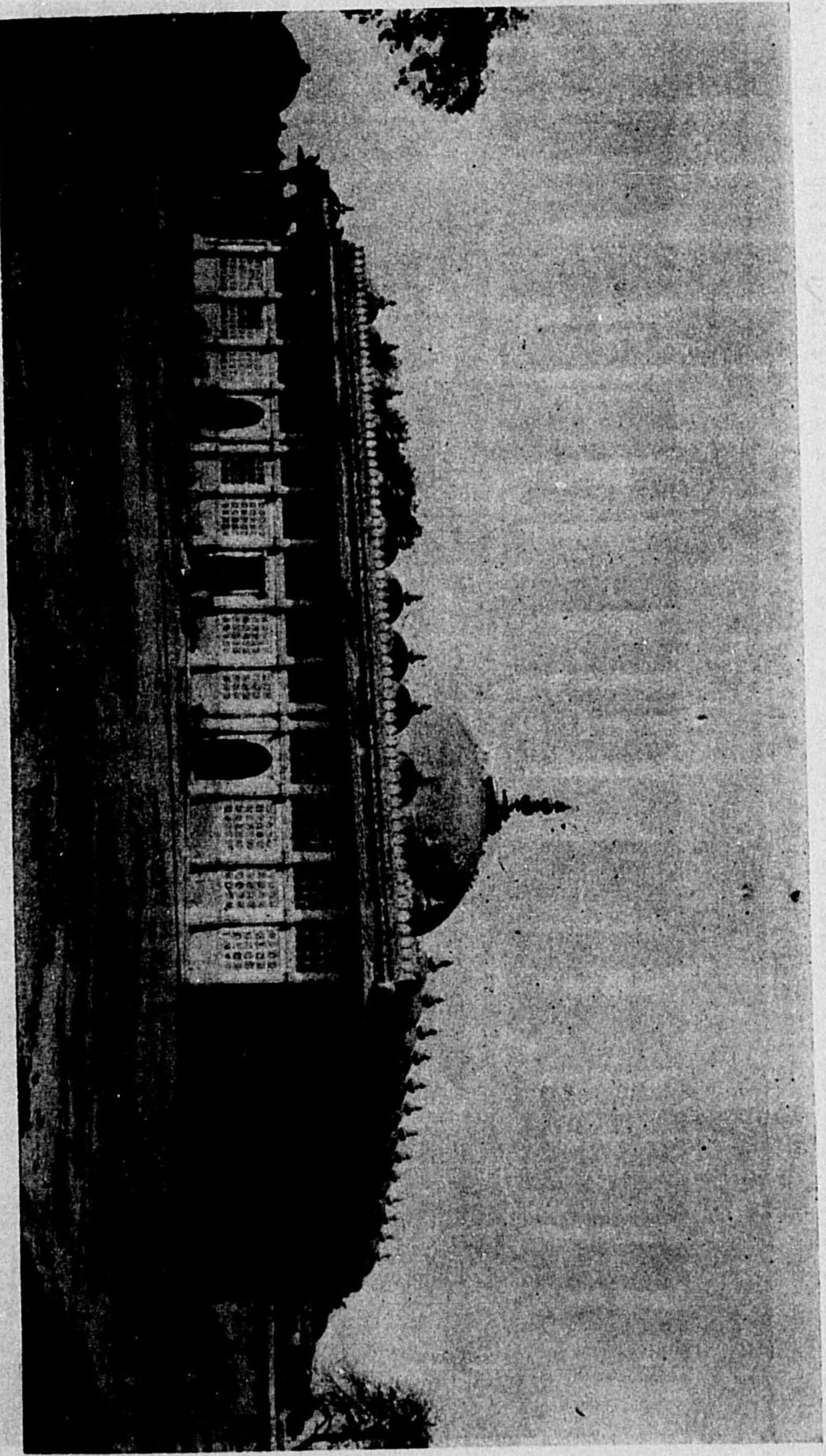
\* \* \*

此小旅行で印度の内地を歩く経験を得ておき、見當をつけておいてから出かければよからう。例ひかかる小旅行でも忘れてならぬものは蚊捕線香である。何分日本なら寒中で、ストーブにかざりつく様な時に、蝿が飛んでゐる有様だから、蚊の襲撃は猛烈を極めてゐるからである。南京蟲は埃及國有鐵道の豪華を極めた一等寢臺車にはゐるが、印度や錫蘭の田舎の D・B・や R・H・等には居ないから、今津蠅捕粉をもって歩く必要はない。



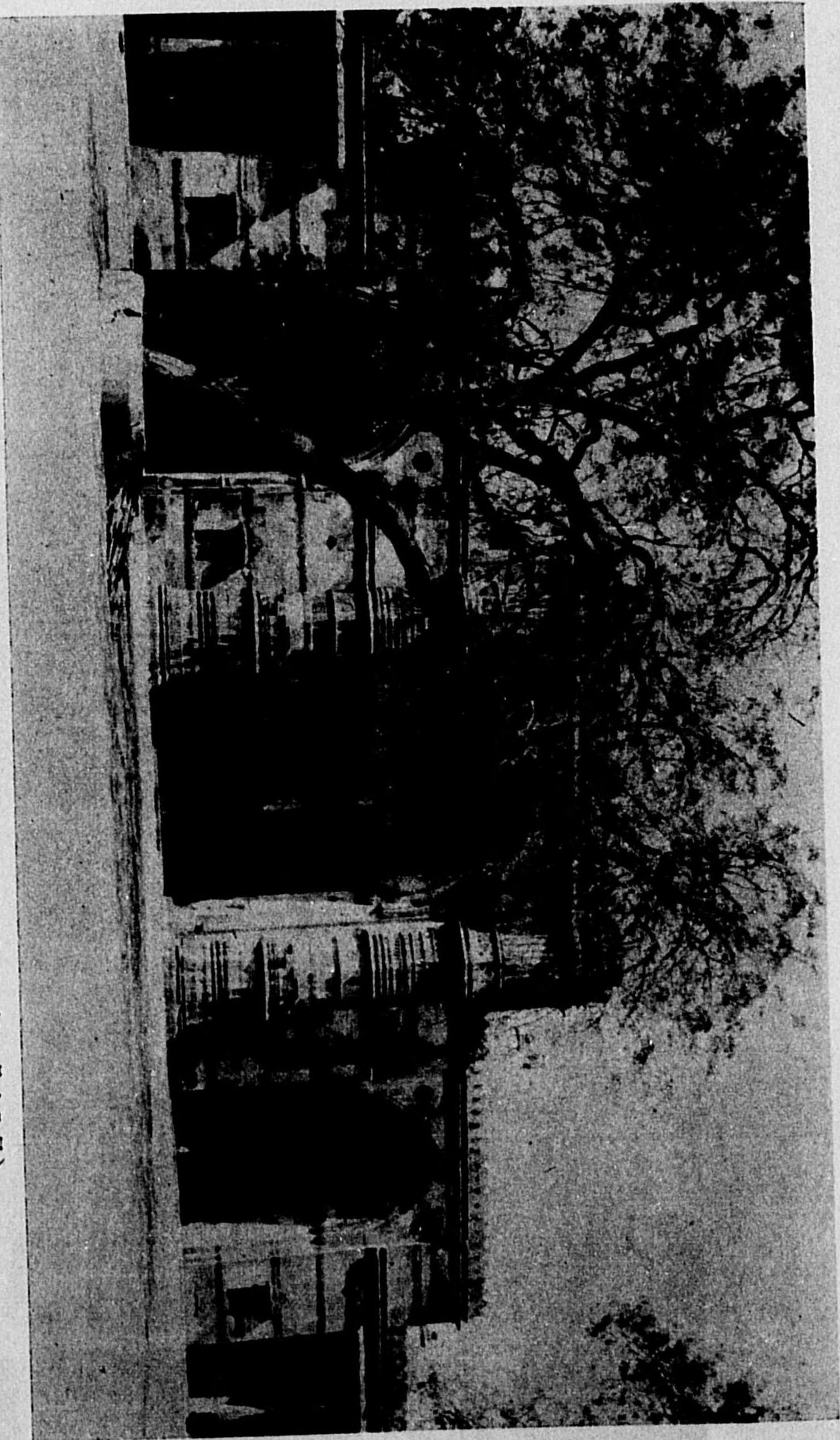
サルケツジ (Sarkej) のモスク二景 (昭和十一年二月二十日)

アーメダバード市を距る6哩にあるサルケツジのモスクで、フアガツソソをして「洗練されたる簡素」(elegant simplicity) と評せしめしもの。三方廻廊に圍まる。上圖左方に見ゆるはその一部。下圖は正面の全景。



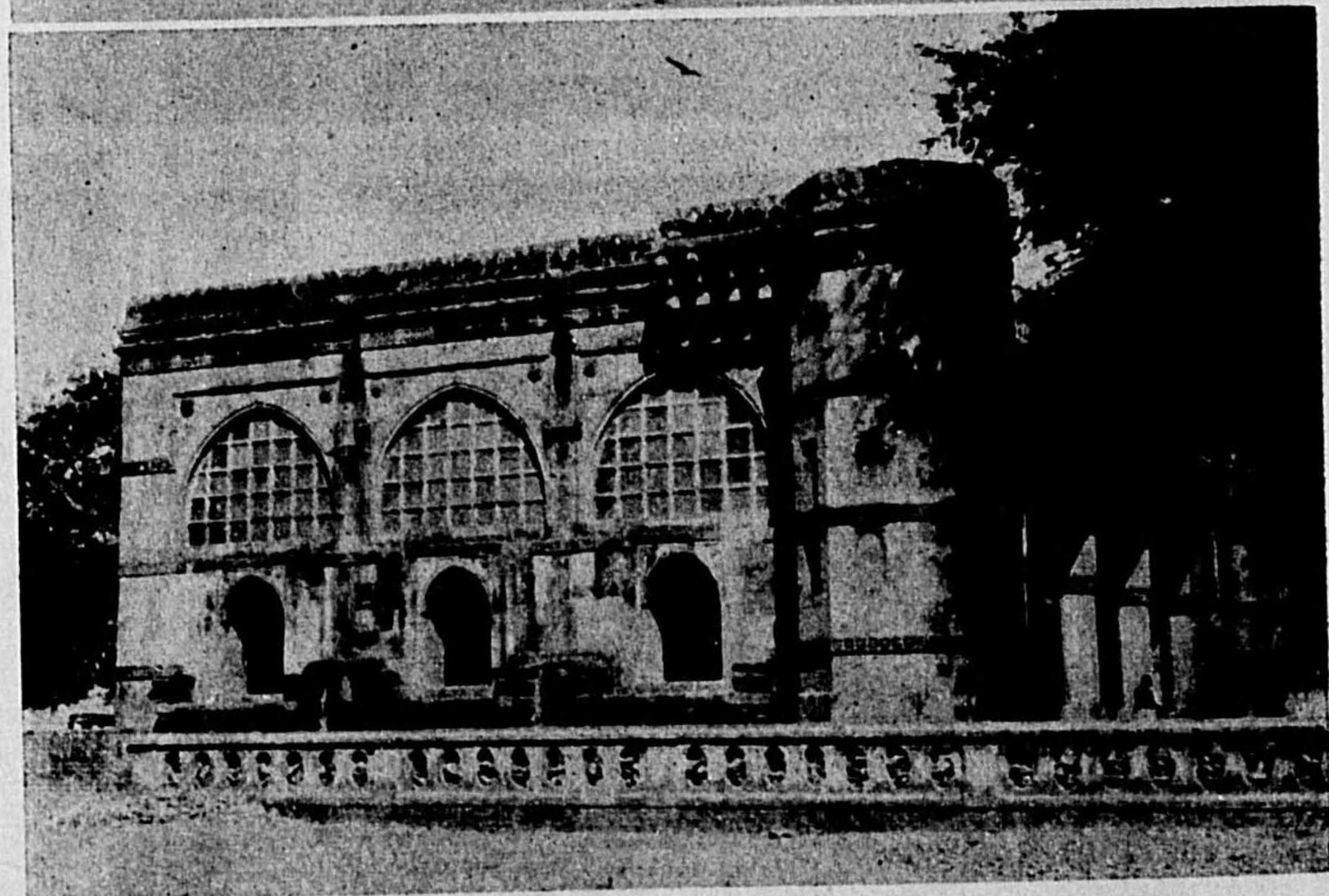
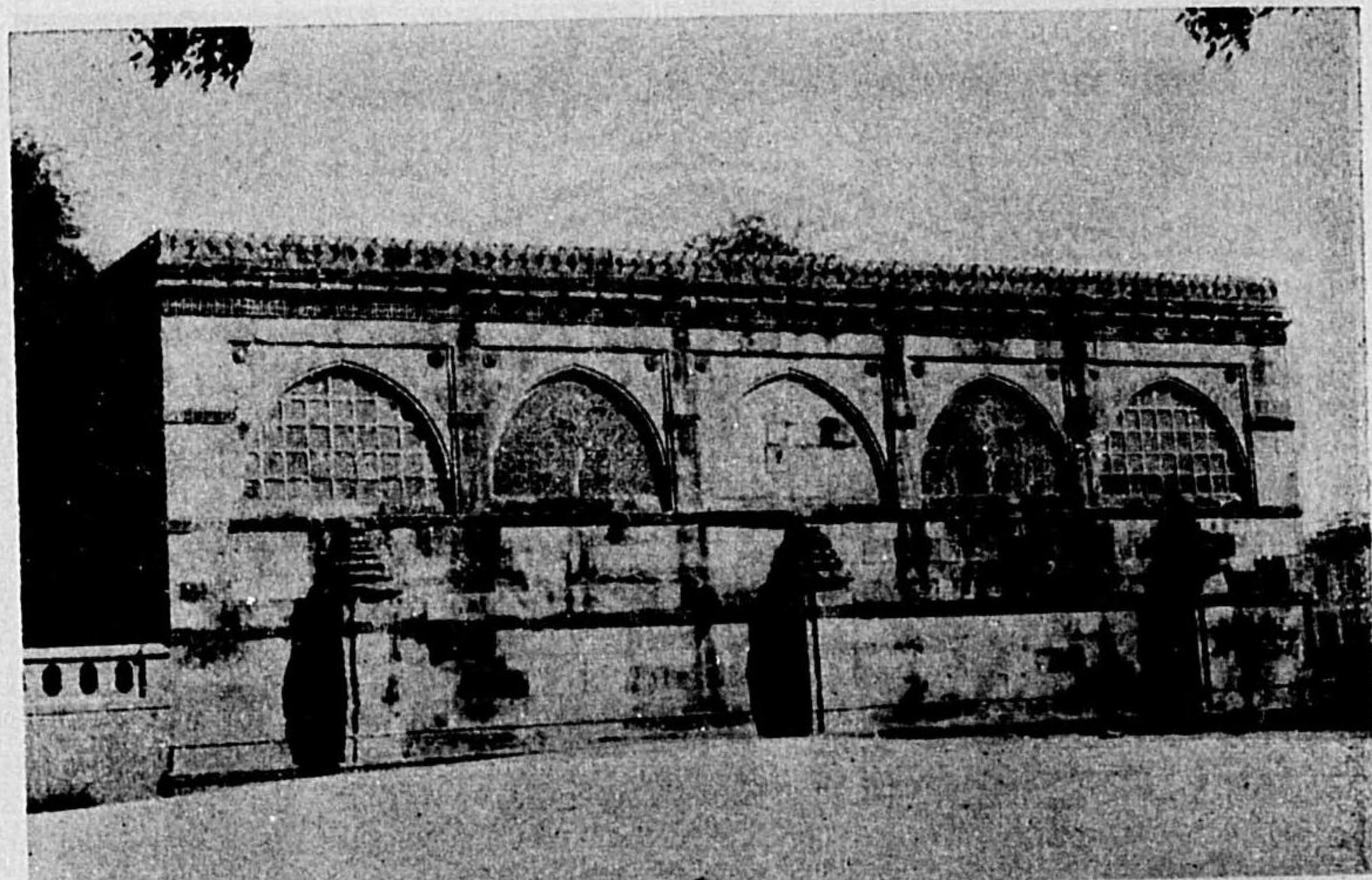
サルケッジに於けるマグラビ廟 (昭和十一年二月二十日)

圖に見る如く方十三間の堂堂たる廟で、中央に大ドーム、周圍に多くの小ドームがある。マグラビ(Maghribi)はガンジ・バクシユ(Shaiikh Ahmad Khatu Gauj Bakhsh)と呼ぶ、回教の聖人として有名であったが、後サルケッジへ隠退し、1445年(文安二年)百十一歳で死去した。此大規模の廟と、前頁に掲げたモスクは、此人の記念のために建設されたもの。1473年(文明五年)建設の銘ありといふ。



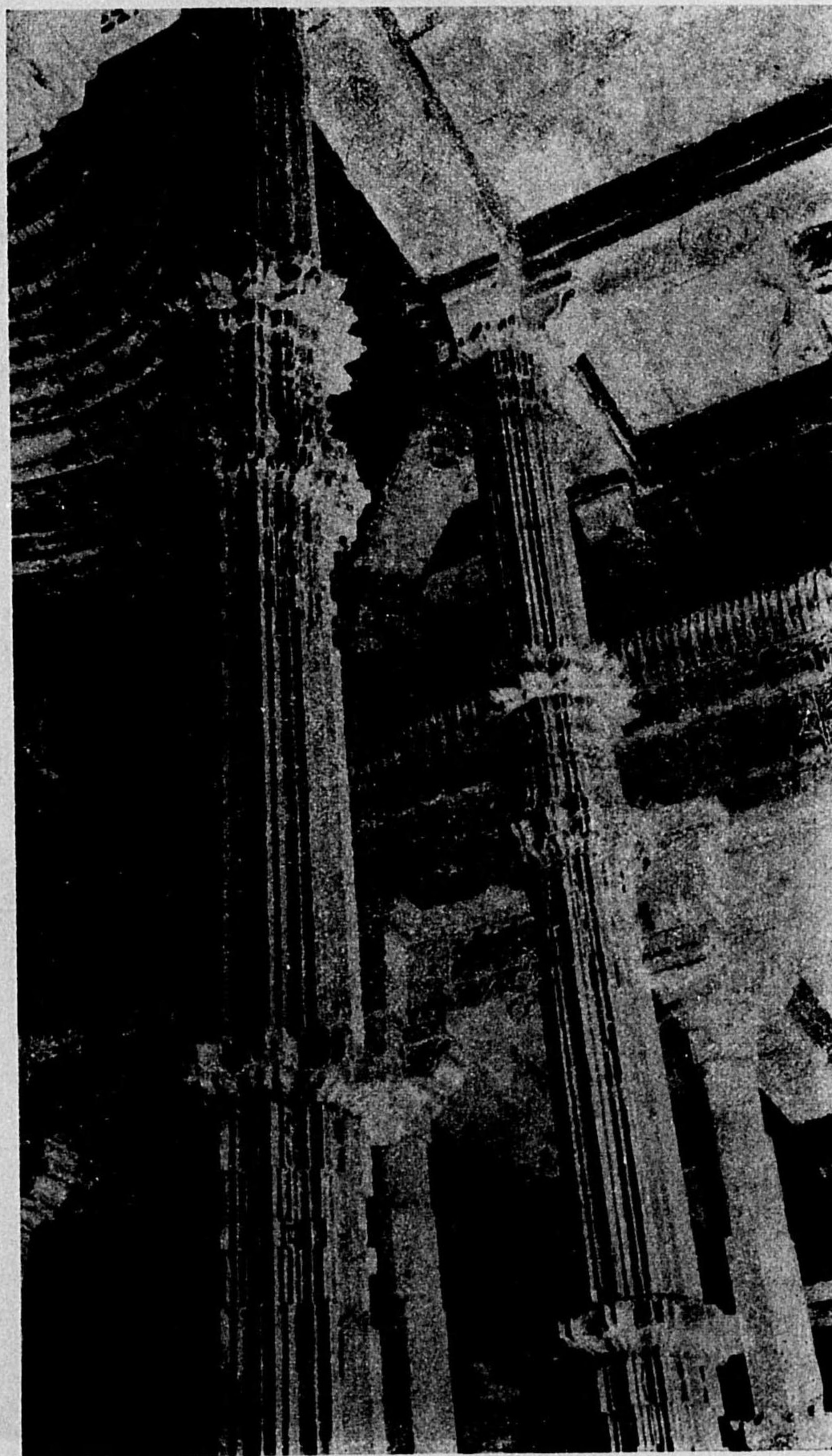
アヘマダバード市のジャミー・マシト全景 (昭和十一年二月十八日)

ソルタン・アーマツト一世(Sultan Ahmad I=Ahmad Shah)が1424年(應永三十一年)に建つる所。大きな境内に建ち、回廊により取圍まれてゐる。外部からは此圖の如く左程でもないが、内部は其一部を次圖に示した様に非常に美しいので、もっと多く圖示したいが、今はさうできかねるのを遺憾とする。正面出入口左右の光塔は、1819年(文政二年)六月十六日の地震で半分以上崩壊し、現在の高さ43尺といふ。



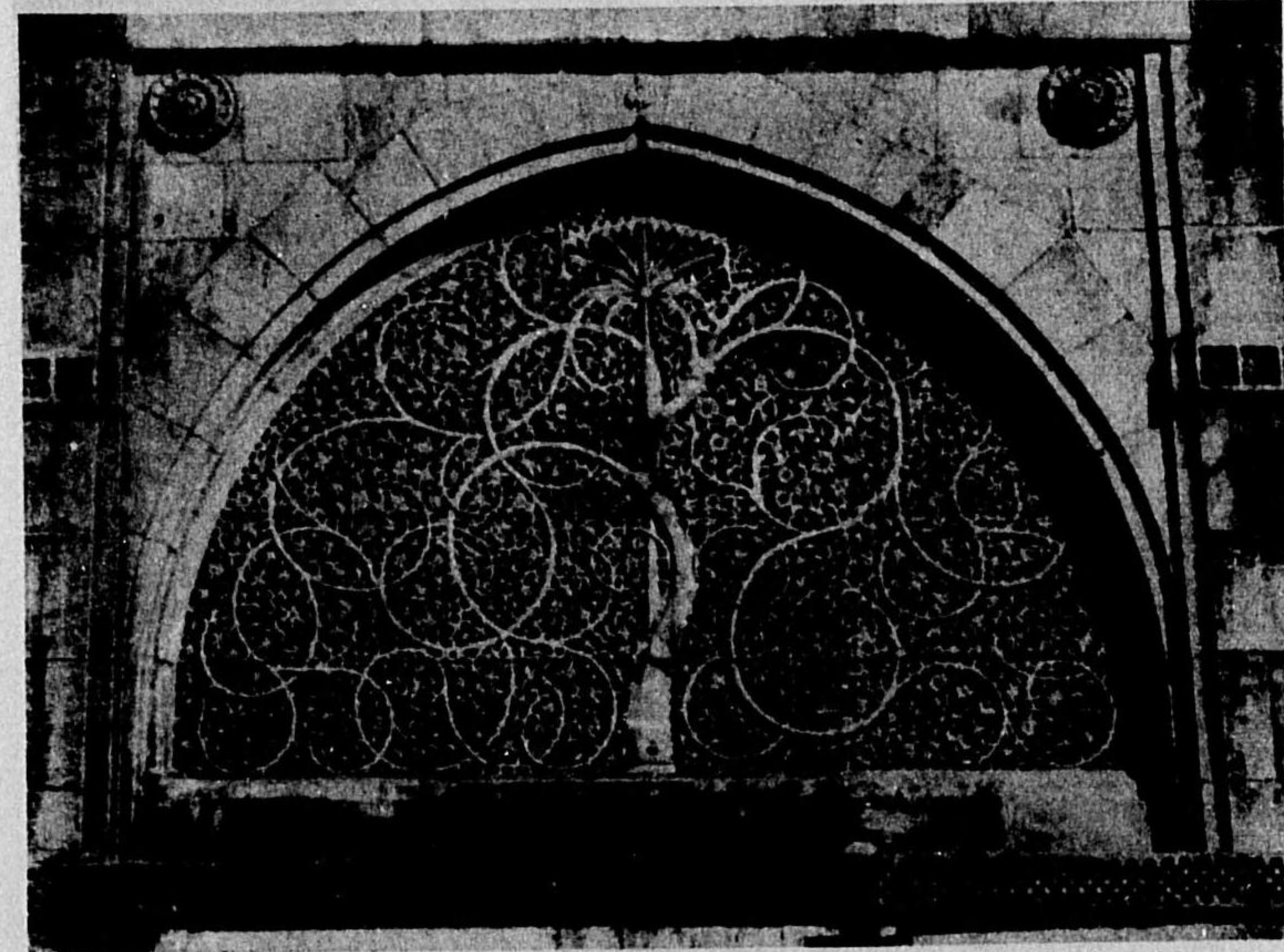
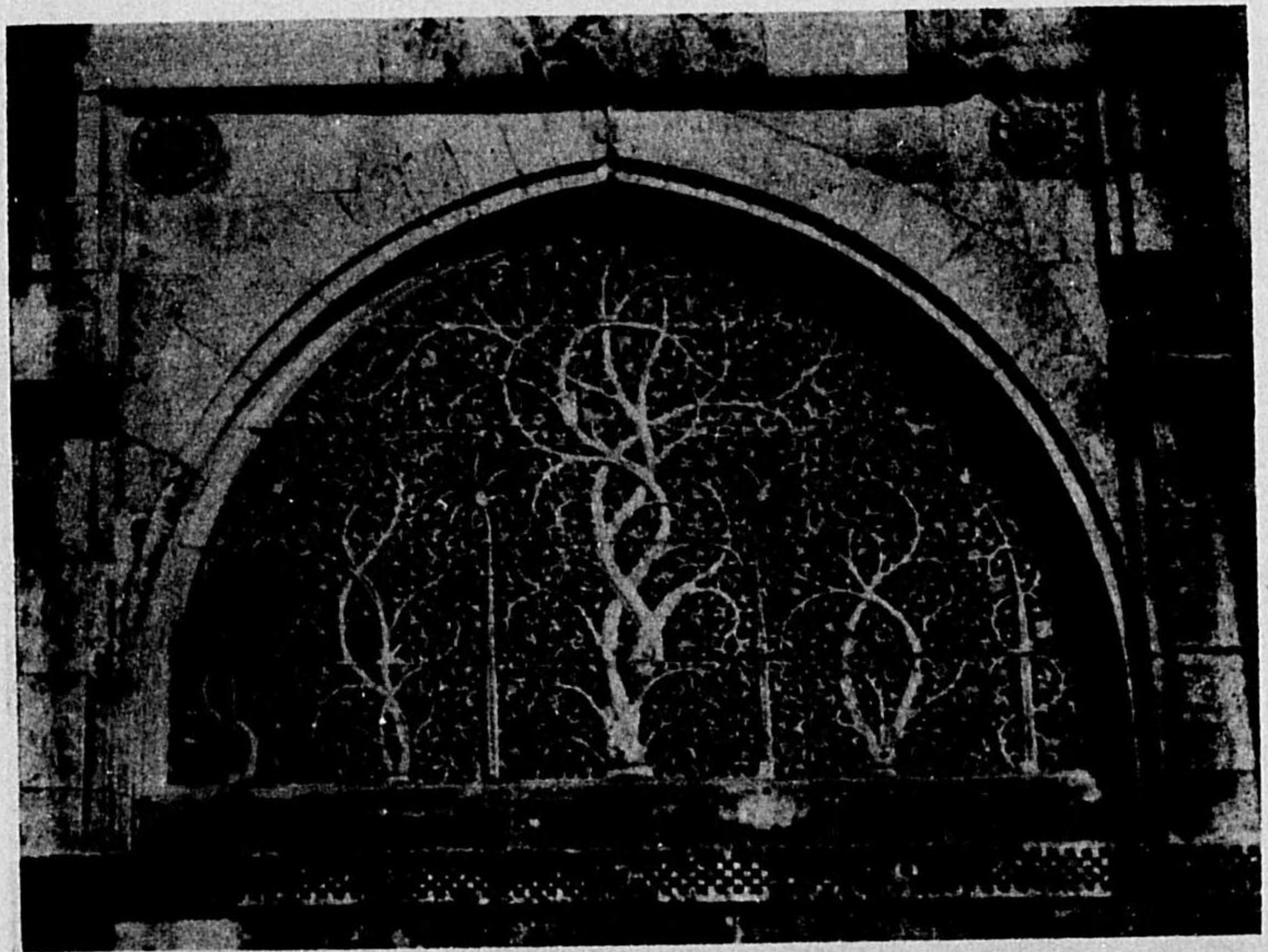
シヂ・サイヤド (Sidi Saiyad's)・モスク 背面 (昭和十一年二月十八日)  
同 側面 (昭和十一年二月十八日)

アームゲバード市にある。規模は小さいが窓の狭間飾、殊に背面の二つは、これこそ眞に天下並ぶものはない。其中央の窓は盲になってゐるのが不思議だが、これは英人が取り外して倫敦市の南譚信屯博物館へもって行ってしまったのださうだ。ひどい事をしたものである。



アームゲバード市のジャミー・マスジド内部  
内部中央圓屋根の一部を見上げたところ。其周囲の柱は特に立派に裝飾されてゐる事この圖の如くで、角が多く觸ると手が切れさうに見える。隅弓の取扱は普通の方法によらず、火打梁の様なものを通じて、四角なところを隅切りにしてある。ファガッソンは最美のモスクの一例だといつて褒めてゐる。  
(昭和十一年二月十八日)





シヂ・サイヤド・モスク便化樹木窓二種（昭和十一年二月十八日）  
 上は前頁上圖の右、下は左の便化樹木を狭間飾にした窓。中央楔石にある菩提樹の  
 葉に注意せよ。もう一つ中央のがあったら、三つ共意匠を異にし、  
 如何に美しくあったか想像に餘りがある。

#### 四、私の旅行した路

大正十一年十一月から、同十二年二月にかけて第一回の旅行の時は、ポトサイ坡西土から乗船して孟買に上陸し、カーリ・エレファンタ・アジャンタ等の見學をすまし、ベシヤワー（Peshawar）へ行き、カルカタに出で、南下して錫蘭嶋に渡り、更に印度へ戻り孟買に歸着したのであった。だから丁度三角形をなした國を四角に歩いたが、この時はいろいろの都合で、大分重要などころをぬかして了った。重要といても、夫れは私の立場からさう思ふので、一般の謂はゆるツーリスト（漫遊者・觀光旅行者）にとっては、大した問題でないこと勿論である。殊に此時は二ヶ月間旅行をつづけ、錫蘭嶋への往復は汽車不通のため、忠竹林（Tuticolin 船會社では「忠竹林」の字を當嵌めてゐる）・古倫母間をB・I・（ブリチッシュ・インディア）の汽船でさんざんゆられ、相當の難行苦行であつたため、可なりいやになつてしまつた。

此度の第二回は、昭和十年十二月から翌年三月末までで、期間は可なり長かつたが、孟買を根據にして三回に分けたから、さうつかれずに目的を達し得た。即ち地圖に矢を以て示した通り、最初孟買を出て南下し、錫蘭の佛跡を探り孟買歸着。日數三十二日。次は孟買發西北方に行き、健駄羅の史跡を見學し、ラホール（Lahore）から信渡河（Indus）の流域に沿ひて下り、カラチ（Karachi, Karachee 日本人は「唐地」の字を當ててゐる）からマウント・アブツ（Mt. Abu）及びアーメダバード（Ahmedabad）を経て孟買歸着。日數三十三日。次も亦同じく孟買發甲谷他へ行き、中印度と北印度を一巡して三度孟買歸着。日數三十三

日。旅行日數合計九十八日。孟買滞在前後二十八日で、此間エレファンタ (Elephanta)・カネリ・バー  
ジャ・ベドサ・ナシク等の窟院を見學し、孟買市中の觀光等をした。

其旅行の順路は附圖に掲げておいた。圖中には大小の黒圓を以て佛塔の所在地を示しておいたが、こ  
れ等は私のみたものだけで、未見のものには及ぼしてゐない。尙ほここに佛塔としたのは、大規模の半  
球形石築のものから、半肉彫の極めて小型のものに及んでゐる。だから苟もスツーパー (Stupa)・トープ  
(Tope)・制多 (制底) (Chaitya)・チョルテン (Chorten) と稱し得るものは全部含まれておいた。さ  
うして私の記載は、南から北に及ぼしておくことにしたから、自然錫蘭嶋の分からとなつたのである。

五、錫 蘭 嶋 (地圖 III 6)

【法顯傳】に

……冬初ノ信風ヲ得テ晝夜十四日ニシテ師子國ニ至ル。……其國ハ本ト洲上ニ在リ、東西五十由  
延、南北三十由延アリ。左右ノ小洲ハ乃チ百數アリテ其間相去ル或ハ十里・二十里或ハ二百里、皆大  
洲ニ統屬シ、多ク珍寶珠璣ヲ出ス。摩尼珠ヲ出ス地アリ、方十里アルベシ、玉ハ人ヲシテ守護セシ  
メ、若シ探ル者アラバ十分三ヲ取ル。其國ニハ本ト人民ナク、正ニ鬼人アリ及ビ龍之ニ居ル。諸國ノ  
商人共ニ市易ス。市易ノ時ニハ鬼人自ラ身ヲ現ハサズ、但寶物ヲ出シテ其價値ヲ題ス。商人ハ則チ價  
ニ依テ直ニ物ヲ取ル。因テ商人來往シテ住ス。故ニ諸國ノ人其土ノ樂ヲ聞キ、悉ク亦復來リ、是ニ於

イテ遂ニ大國ト成レリ。其國ハ和適ニシテ冬夏ノ異ナク、草木ハ常ニ茂リ、田種ハ人ニ隨ヒ時節有ル  
コト無シ。……

【大唐西域記】には、卷第十一のはじめに、

僧伽羅國雖非原度之  
國路次附出

と標題を掲げてある。僧伽羅國とは即ち此島のことである。本文には

僧伽羅 (Seng-kia-lo, Sinhala=Ceylon) 國ハ周リ七千餘里アリ。國ノ大都城ハ周リ四十餘里アリ。土  
地ハ沃壤ニシテ氣序ハ溫暑ナリ稼穡ハ時ニ播シ、花果ハ具ニ繁シ。人戸ハ殷盛ニシテ家産ハ富饒ナ  
リ、其形ハ卑黒ニシテ其性ハ獷烈ナリ。學ヲ好ミ德ヲ尙ビ、善ヲ崇メ福ヲ勤ム。此國本ハ寶渚ナリ、  
多ク珍寶アリテ鬼神ヲ棲止セシム……

とあるが、其廣袤面積等は、昔の事だから何れも精確でないとしても、地味豊壤、年中五穀は實り、住  
民の風采は頗るあがらないが、學問がすきで善事を崇び、いろいろの寶石等を産するところで、生活の  
至極樂なところであることが判る。法顯は「其國和適」で冬夏の差別がないといひ、玄奘は「氣序溫暑」  
とかいてゐるが、實は随分あつた。私が此島にゐたのは二回共僅か一週間位で、何れも一月であつた  
が、それでも暑くて蚊がゐて困つた。夏だったらどの位あつか見當がつかぬが、可なりこたへるだら  
う。こんなところだから、春や秋はない筈だから、割合にしるぎ易い氣候の時機が過ると、直に夏にな

\* 師子國＝錫蘭嶋

つて了ふのである。だから「和適」だの「温暑」だのといふ生やさしい氣候ではなくて、暑氣猛烈とか劇烈とかにしなければ感じが出ない。日本の内地にゐるのに夏暑がつてはだかになるやうな人は、師子國を旅行する資格は全くない。

此嶋の面積地勢等は、どの案内記にもかいてあるから、ここには省略しておくが、旅行の時期は自分が行たからではないが、一月位が一番いいやうである。まづ一月から二月までの間がよからう。

### 六、アナラジャプル (Anuradhapura) (地圖三) 6・1)

錫蘭嶋の北方から渡印せんとするならば、タライマンナ・ビーヤ (Talamanner Pier) から、連絡船で對岸なるダヌシニコチ (Dhanushkodi) へ上陸——いふ迄もなく印度からこちらへ来るなら反對である——するので、連絡船は僅に二時間、涼しくて最も便利である。これが若し古倫母から忠竹林(又は其反對)だと、十二時間位かかって、而も随分ゆれるから、船に弱い人はこの方面を撰ばぬ方がよからう。夫れはとにかく、目的のアナラジャプル驛は、古倫母とタライマンナとの間にあるのだから、南からにしても北からにしても、若干の距離は汽車にのらねばならぬ。

去る大正十二年一月二十日、印度から渡島せんとした時には、アナラジャプルの北で鐵道線路が水害によつて破壊され、それが復舊せぬため汽車不通とあつたので、止むを得ず忠竹林に出で、遠淺の海を長い間舳にのり、本船に移つてから一晚中ひどくゆられたのみならず、満員以上で洵にひどい目にあひ、

漸く古倫母へつき、同二十五日朝古倫母發アナラジャプルにつき、同地唯一のアナラジャプル・ホテルへ宿した夜、再び豪雨があり折角二三日前修理落成した汽車の線路が再び壊れて不通となつたため、ここから元へ引返し、反對に古倫母から忠竹林に渡つて孟買へ歸つたが、今度は幸にそんなことはなく、昭和十年十二月三十一日早朝南印の大都チンネハリ (Timevely) を發、マヅラ (Madura Jn.) 經由ダヌシニコチに出でてここから渡嶋し、同夜タライマンナ・ビーヤ發、昭和十一年一月一日午前一時半、アナラジャプルに着了したのであつた。但し宿屋の名がグランド・ホテルとなつてゐたことを知らなかつたので、下車するなり多少まごついたが、行つてみたら十三年前と同じ建物であつた。

前の時には豫告なしに行つたら、餘りいい室がなかつたので、今度は電報を打つておいたが、殆んど満員で漸く一室(丁度以前の時の隣室)を得られた。どの案内記にでも室の豫約を注意してあるから、日取が決まったら成るべく早く手紙をだすか電報を打つかしておいた方がよからう。

アナラジャ市(ただではない、總て錫蘭嶋の佛跡)に就ては【錫蘭の古都】(G. E. Mitton: "The Lost Cities of Ceylon") に詳細に記してあるから夫れに譲るが、丁度附圖に關係もあるから、そのうちの極一部分の抜き書きをしておく。

"The three mighty dagabas, Ruanweli, Abhayagiri and Jetawanarama with their tree grown summits—great mounds of millions and millions of bricks—can at some points be seen all at once; while the glimmering of the blue or sunsetdyed water of Tissa Wewa or Basawak Kulam

seen through the trees adds distance and mystery to many a view. Kulam is the word for tank in Tamil, as wewa in Singalese, and wapi or vapi in Pali or Sanskrit. Further north, where the people are almost all Tamils, the word kulam is generally used."

"Many people "do" Anuradhapura in a day and think they have seen it all. It is possible that they can see a good deal, for the principal sights are near together, but many weeks may easily be spent here without exhausting its wonders, Fergusson says that Ceylon alone of all known countries possesses a series of Buddhistic monuments extending from the time of Asoka to the present day. Most of them may be found in this city."

以上の文句のうち、後段の「大多數の観光客はアナラジャ廢墟の見物を一日ですまし……」から終り迄は、一に掲げた平面圖を参照せば、事實であることが想像できやう。ほんとうに一つ一つのみに集まいてゐるから、自動車で一巡すれば急ぐと半日ですむ。

此古都には代表的の名所舊跡が八所ある。夫等の名稱は次に記す通りだが、便宜上序に其位置も示しておかう (一參照)

- 一、マン・ビハラ (ろ・ン)
- 二、ブレーズン・バレーズ (ろ・ン)
- 三、アバヤギリヤ・ダガバ (は・ン)……實はジエタワナラマ・ダガバ

- 四、ジエタワナラマ・ダガバ (ろ・イ)……實はアバヤギリヤ・ダガバ
- 五、ルアンウエリ・ダガバ (ろ・ン)
- 六、ミリスウエチャ・ダガバ (い・ン)
- 七、ツバーラマ・ダガバ (ろ・ロン)
- 八、ランカラマ・ダガバ (ろ・ロ)

以上のうち、最初の二つを除き、左に三以下の六塔婆と、もう一つ至極小さいものであるが、セラチヤイチャ・ダガバ (地圖ろ・ハ、ルア) に就いて數行を費しておかうと思ふ。

### ナ、塔 婆

此處では塔婆を何れもダガバ (dagaba) といつてゐる。それはどういふことかといふと、判り易からしむるため方程式で示しておへ。

- (Dhatu) + (Garbha) = Dagaba 日本では「駄都」といふ。  
(Dhatu) relic, element  
(Garbha) womb, receptacle

辭書には "A domeshaped monument, or shrine, built on a mound and containing sacred relics (Singhalese)" といふので明らかである。大小精粗種種雜多の種類があるが、要するに何れも伏鉢型で

現在其大なるものは小山の如くに全部樹木で覆はれ、上から相輪の部分のみが露出し、平地から特立してゐるから、遠方からいい目標となり(二・三・四・五)、最もよく人目を惹くのである。左に其重なるものを表示しておくが、これは大正十二年(一九二三年)八月発行の“The Architectural Review” Vol. XIX, No. 321 から抜き書きしたもので、各塔婆の創立年次は、Wickremasinghe といふ人の最近(一九二三年か)の調査に基づく断つてある。

尙ほ次表に於いては、アバヤギリ塔とジェタワナラマ塔と、原因も時代も不明だが、名稱が入れ替つてしまつた以來、今では其入れ替つた名で呼んでゐるが、その方が反つて誤りがないから、表には反對に記入してある。それから錫蘭に於けるキュービット(Cubic)は二呎三吋に當るさうである。

名 稱	現	高	伏鉢徑	原	高	創 建 年 代
ジェタワナラマ	二九四呎(相輪共)		三一〇呎	四五〇呎(一八〇キュービット)		八八(B・C・)
アバヤギリヤ	二三〇呎 相輪を除く 一八九〇(明治十四年)復原		三二五呎	二七〇呎(一一〇キュービット)		二七五—二九二 (A・D・)
ルアンウエリ	一七八呎		二九四呎	二七〇呎(一一〇キュービット)		一二五(B・C・)落成
ミリスウエチャ	八二呎半(其形骸を留むるのみ)		一三五呎半	一四〇呎(八〇キュービット)		一〇一(B・C・)
ツパーラマ	六三呎		四〇呎半			二四七(B・C・)
ランカラマ	三三呎		四四呎			四世紀頃(A・D・)

セラチャイチャ塔といふのは、餘り小さいせいいか何も記してないので、はっきりしない。つまり現在(昭和十一年一月)でも、基壇の上に低い土饅頭型を形成してゐるだけの状態で見ると、夫れでもよくこれだけ復原ができたと思ふのである。學術上の取調はどこ迄もやらなくてはなるまいが、判らぬものは致し方があるまい。

(1) ジェタワナラマ塔 II 祇園塔

名が少し長過ぎて、馴れない人には發音がしにくいから、ここでは「祇園塔」としておく。異人さんの寝言の様な名よりこの方が簡單明瞭である。さうしてこれは曩に斷つた通り、アバヤギリヤ塔と名が入れ替つたのだが、ほんとうは此がアバヤギリ塔であつた筈だが、さうすると反て混雜するから、それを避けるために、間違つたままにしてあるから、取り違へない様に念のためもう一度記しておく。

此はアナラジャ市に於ける最大塔の一で、大伏鉢は全部樹木に覆はれてゐて、其上に四角なものがあり、その四角なものの上に略ぼ圓錐形の棒が立つてゐる。樹木の生へた伏鉢はまるで小山の如くであるから、これが塔の本體であるといふことは、うっかりしてゐると知らずらにゐて、上の四角なところからを塔だと思ふのである。けれども勿論これはさうではなくて、下の半球形のところが最も大事なのである。日本の塔に比べていふと、下が伏鉢で、四角なところは平頭と請花とに當り、一番上の圓錐體は相輪に當るのである(六・七)。

塔の基部即ち地に接するところは、簡単な蓮花の彫刻がある。蓮花は下を向いてゐるので、かういふのを「反花<sup>ソッパガ</sup>」といつてゐる。塔婆基部の裝飾として、上向き又は下向き(又は其兩方)を用ふことは、普く行はれたところで、我國に於いては木造塔婆では瑜祇塔、石造塔婆では五輪塔・寶篋印塔等に多くの實例を見出すのである。祇園塔の場合に在りては、反花の各花瓣の間に彫刻された小さい蓮花を見逃してはならぬ。此蓮花は埃及の彫刻に見出されるものと全く同じで、印度の古代彫刻の類例としては、ナシック (Nasik) 窟院の柱面裝飾やパールハット (Barhut) 塔婆玉垣の笠石の側面(甲谷他博物館にあり・後出) やサンチ (Sanchi)<sup>後出</sup>の塔門の裝飾等に於いて見出し得るので、敢てこゝばかりではないが、とにかく古代埃及の謂はゆるロータスが、そっくり其儘現はれてゐるのは、何といつても興味のつきぬものがあるのである (八・九)。

マラーの案内書 (Murray: Guide to India, Burma and Ceylon) には「後第四世紀の建立」としてあるが、前表に掲げた如く「前八十八年」を事實とすれば、そこに大分の相違があるから、「古いことだしよく判らない」とか、「どちらでも大して差支ない」としておくわけには參らぬ。どっちにか決めるといふなら、私は今でもまだ何も調べてゐないから、常識から判斷して後説の方に贅意を表するのである。さうして尙ほ同書には、此塔とアバヤギリ塔と名前の轉換されたのは、多分第十二世紀かららしいとあるが、理由が示してないので、私にはよく呑み込めない。それから續て

“The Buddhist Atanasthana Committee allowed a Buddhist monk to make “improvements”

on the dagoba: after he had felled all the trees and done more harm than good, the Archaeological Commissioners took over the ruin, in 1910 (明治四十三年), to save it. Supposing that Jetawanarama is the ancient Abhayagiriya, its foundation is dated 88 B. C., and its enlargement 113—125 A. D. (Murray 案内書第十二版 p. 687. Jetawanarama の項)

とあるが、終りにアバヤギリ塔は、祇園塔を夫れと想像して、前八十八年に起原すとして、其説に賛してゐるのである。前八十八年は我が崇神天皇十年に當る。併しここにはまだこれより古い起原の塔があるのである。

【法顯傳】に

佛其國ニ至リ、惡龍ヲ化セント欲シ、神足ノカラ以テ、一足ハ王城ノ北ヲ躡ミ、一足ハ山頂ヲ躡ム。兩跡相去ルコト十五由延ナリ。王ハ城北ノ跡上ニ於イテ大塔ヲ起セリ、高サ四十丈、金銀ニテ莊校シ、衆寶ニテ合成セリ。塔ノ邊ニ復ターノ僧伽藍ヲ起シ、無畏山ト名ヅク。五千ノ僧アリ。一ノ佛殿ヲ起ス、金銀ノ刻鏤悉ク衆寶ヲ以テセリ。中ニ一ノ青玉ノ像アリ、高二丈許、通身ニ七寶ノ焰光アリ、威相ノ嚴顯ナルコト言ノ載スル所ニ非ズ、右ノ掌中ニ一ノ無價寶珠アリ。……

とあるが、【錫蘭の上都】(第九九—一〇〇頁)に

“As the so called Abhayagiri dagaba is due east of the city and Jetawanarama due north, it is plain that the conjecture of experts is right, and that at some time in the past confusion has

arisen and the names have been transposed.”

とかいてある。文中“the city”とは、いふ迄もなくアナラジャ市を指したのである。【法顯傳】から引いた文中、王城北跡の上に高四十丈の大塔を起し、塔邊に一伽藍を創めて無畏山と名づけた、とあるから、北の方がアバヤギリ塔でなければならず、祇園塔は東に當つてゐるから、ミットンのいふ如く、名前が入れ違つたことは確かといへるのである。併し假にさうとしても、今更入れかへて元に戻さない方がいい。間違は間違のままにしておいた方が、反て混雜しないため、皆そのままに用ひてゐるから、私もここではそれに従つておく。

何れにしてもここでは最大最美——樹木の茂り工合をいふのである——で大きな漏斗を伏せたような形をしてゐる。近くでも實に偉大で堂堂として頗る立派だし、遠方から殊にバサワク湖 (Basawak Kulam.) (L. 1. 5) を隔ててみたところ等は、正に天下一品の眺めであらう (二・三)。

□ アバヤギリヤ塔＝無畏山塔

マン・セナ (Maha Sena) 王が後二七五——二九二年 (應神天皇六年より同二十三年に至る) に建立されたもので、一説後三〇二年 (應神天皇三十三年) といふ。相輪は中程から折れてゐるが、塔身が樹木で覆はれてゐるところは、正に前例と同じである。道がついてゐて登れる様になつてゐたから、以前の時は上にあがりあたりの景色を眺めたが、今回はただ遠望しておいたので、今でも登れるかどうか知らない。

アバヤギリヤ (Abhayagiriya) は一にアバヤギリ (Abhayagiri) ともいふ。【大唐西域記】には「阿跋耶祇釐」の文字を用ひてゐる。同書卷第十一に

僧伽羅國ノ先時ハ唯淫祀ヲ宗トセリ。佛世ヲ去ツテ後第一百年ニ無憂王ノ弟ニ摩醯因陀羅 (Mō-hi-in tolo, Mahendra) アリ、欲愛ヲ捨離シ聖果ヲ志求シ、亦神通ヲ得テ八解脱ヲ具シ、足ハ虚空ヲ歩ミ此國ニ來遊シ、正法ヲ弘宣シ遺教ヲ流布セリ、茲ヨリ以降風俗ハ淳信ナリ、伽藍ハ數百所、僧徒ハ二萬餘アリ、大乘上座部 (Shang-tso-pu, Sthavira) ノ法ヲ遵行セリ。佛教至ツテ後二百餘年ニシテ、各専門ヲ擅ニシ、分ツテ二部ヲ成セリ。一ヲ摩訶毗訶羅住部 (Mō-ho-pi-ho-lo-chu-pu, Mahāvihārāv-asinas) トイフ、大乘ヲ斥ケテ小教ヲ習ヘリ。二ヲ阿跋耶祇釐住部 (O-pō-ye-ki-i-chu-pu, Abhayagiri-vasinas) トイフ。二乗ヲ兼ネ學シテ弘ク三藏 (Tripitakas) ヲ演ブ。僧徒ハ乃チ戒行ハ貞潔ニシテ定慧ハ凝明ナリ。儀範師トス可キモノ濟濟如タリ。……

とある。其英譯は “The Fearless Hill”, “No Fear Mountain”, “Mount of Safety” 等とあり、即ち「無畏山」・「安全山」である。此塔はまたマレー案内記に前一世紀頃の建立とあり、祇園塔と同じく大分の相違がある。やはり後説が正しいのであらう。

ハ ルアンウェリ塔＝金粉塔

Ruanweli, Ruwanweli 等となく。Gold dust dagaba とつてゐるから「金粉塔」と譯しておつてゐる。

い筈である。前掲の表には前一二五年落成とあり、マレーには約前九〇年完成とあるので、兩説三十五年の差がある。これはさう大した差でもないから、甚だするいかも知れぬが、約前一世紀として、上下でばかしておく。

【錫蘭の亡都】に挿入の圖は、いつとつた寫真か知らないが、修理着手前と見えて、どうも此が塔であつたと判断するのに苦しむ様な形をしてゐる（今回は圖版組合せの都合上掲載を見合はせたが、拙著『印度旅行記』第519頁にだしておいた）。夫では餘り荒廢のまま放置してあつていけないとでも考へたものか、下から煉瓦を巻いて修理を始めた。其始めたのはいつのことか知らぬが、大正十二年一月には下から半分程巻かけてゐた。一二に掲げたのは、その二十六日にとつた寫真で、どうも見たところ勾配が少し急過ぎるやうだから、このままで進んだら上の納りがうまく行かないのではないか。少しく悪口のやうだが、卵子を長徑に直角に切つた様な、可なり變なものになりはせぬかと、全く餘計なことだが心配にならなくもなかつた。

然るに今度行つてみたら、ともかくも殆んど全部完成に近づいてゐた。そうして十五年前に此塔の前でした心配は、不幸にして杞憂に終らなかつた。半球形につくらるべき伏鉢は途中で一つ段がついてしまつた。ある所まで積み上がった煉瓦の急勾配は、何とかして變へなければ、あのままでは納りがつかないから、止むを得ず急に曲げて、完成してつたのかも知れない。相輪のあたりは勿論未だ出來上らず、一ばいに足場が架渡してあり、相輪基部の壇の上にはセメント樽が行列をしてゐた。上の方をセメントで築造するとは、洵に以て勇敢なる次第だと感服し、早速雙眼鏡でみたが、どうも眼が悪いのでは

つきりしなかつた(一三)。

塔の基部には方約二〇〇呎といふ壇がある。此壇の周圍に頭と一對の前肢を現はせる正面向きの象が行列をさしてある。象は勿論裝飾であるが、同時に擁壁（土留壁）として役立つてゐるのである。象の形は大體煉瓦を以てつくり、間隔約二尺高さ約六尺、當初は全體を白く塗り、眞の象牙をつけてあつたさうで、其象牙をさし込んだ孔は今に残つてゐる。

美濃版和装の【印度旅日記】といふ書物がある、昭和三年八月二十五日の發行だが、此書中に此塔の記載があるが（第二、七頁）、それには

元來此塔の基底部には、象を彫刻した庇がある筈だが、今は全く土中に埋没したのださうだとある。この文句は多分土留壁の象を指したのだらうと思ふが、何のことはつきりしない。「象を彫刻した庇」では困る。けれども若しこれが果してこの象を指したのなら、既に大正十二年一月に全部發掘されてゐたのだから、此記事は何かの誤ではないかと思ふ。とにかくこの塔は、ここの佛教組合が勝手に修理を始め、遂に全部煉瓦を覆ふて了ひ、上壇には現代式の極めて淺薄な拙い建物を建ててしまつた。それでも先年は、塔の周圍に立てる大きな石の彫刻は、そのままにしてあつたが、今度行つてみたら一つ残らず家の内に入り（移して入れたのではなく、其像に覆屋を建てたのである）、番人がゐて金がほしさうな顔をしたので、接近するのがいやになり、可なり遠くから雙眼鏡でみておいたが、どうもどこでも勝手にこんな事をする、其結果はいつも決まつてゐる。中中人の事はいつてゐられない。我國にもかかる實例は殆んど枚擧



に暇ない程ある。

祇園塔と同じく、無畏山塔と金粉塔の遠景は甚だよろしい。以前は、無畏山塔上から金粉塔を、金粉塔上から無畏山塔をみた景がよかったが、今度は登ることが問題を起さうであつたからやめにした。其代りにバサワク湖を一周してみたので、珍らしい遠景をみる事が出来た。**四**は同湖の北側から金粉塔の遠望で、折柄非常ないい天気であり、一面に午後三時頃の日を受けて湖面に寫つてゐるところである。湖の北側から西側へ巡廻したら、遂に湖畔に於いて道を失し、あとは漸く南側に向ひ草原の間をいい加減に歩いたところ、不圖ある地點から、**五**のやうな景をみる事ができた。此圖には塔が二基寫つてゐる。右の方の大きいのは前圖の金粉塔で、左の方の小さいのは無畏山塔である。近景には放牧してある水牛が悠悠と歩きまわり、背中には鳥がとまってる等、實以て平和な場面を展開してゐる。こんな景色は中中他ではみられない。さうしてもう少し南へくると、**三**の祇園塔(即實際は無畏山塔)の遠景が見られるのである。

金粉塔が如何に拙く修理されやうと、それは近づいてみるからあらが判るので、非難も攻撃もしたくなるが、かういふ風に遠方から湖水等を隔てて眺めると、大伏鉢の途中で折れた曲線も、きたならしい足場もセメントの樽も、何も彼もまるで見えす、ただもう遠くB・C・一二五(開化天皇三十三年)落成當時を想像して、千萬無量の感に打たるのみである。いづれ數年後には純白に化粧されるのであらう。

讀者諸君が若し観光のため此地を訪はれるならば、自動車にふん反りかへつて半日位で一巡してすま

しておかず、徒歩して此バサワク湖畔を一周することを切にお勧めする。こんな絶景はどうしたってさうしなけば見られないのである。多少歩きにくいし、汗もでるし、くたびれもあるが、強盗・追剥・猛獸・毒蛇の出でくる虞は絶對になく、思ひ切てやってみると、後日それは洵に楽しい記念となり、後悔する様なことは決してない。

## 二 ミリヌウエチャ塔—蕃椒塔

Miriswetiya, Mirisavetiya, Mirisveti 等かくやうである。【錫蘭の古都】第116頁に、この塔に就いて面白い傳説が掲げてあるから、左に紹介しておく。

“The origin of Mirisavetiya lies in the forgetfulness of the king, who was accustomed to offer a portion of whatever he ate to the monks, but absent-mindedly one day consumed “a condiment flavoured with chillies, called miriswetiya, or chillisambal” (which is the world for a preparation of chillies in Cingalese), omitting the usual celemoney, and felt bound in expiation to erect the dagaba called Mirisavetiya.”

右文中の「王」ミリスウエのはミリスウエ王(Dutugemunu)とミリスウエ王の王位Dutthagamini, Watta Gamini とよかき約前第二世紀の人。塔其物は全然感心のできぬ形をしてゐるが、傳説が満點である。ミリスウエ王が、常に召上るものは、何に限らず其一部分を坊さんに供養することにして居られたの

が、ある日、うっかりしてつい「ミリスウエチャ」といふ名の唐辛で風味をつけた薬味を使ひはたしたので、その補償として其名の塔をたてたといふのである。だから「蕃椒塔」と譯したところは、うまいだらう。

一四・一五でみる様に、其形は巨大なる海膽に酷似してゐる。管足と棘とを除去してむきだしにする  
と、此塔をつくりである。もう少し球形にして上に相輪でもたてると、もつとみよくなることは明らかである。此大海膽は、嘗て暹羅國の先帝が皇太子のとき、修理費として多額の金を下賜せられたので、辛ふじて形を留めてゐた原塔の周圍に、赤煉瓦を巻いて現形の如くしたといふにとである。ところがこの新に巻いた煉瓦と原塔との間が大分すいてゐるので、そのすき間に蝙蝠の大集團が立籠つてゐて、夕方になると無数の蝙蝠が飛びだすが、甚だ壯觀を極めるさうで、それを見物に出かける人があるといふ事である。

何れにせよ形からいふと「蕃椒塔」は甚だ當らず、よろしく「海膽塔」とすべきである。形は決して褒められない。併しながら其四方にある聖壇は洵に美事なもので、珠に西側のものが最美である。其兩方には各面に精巧な唐草を刻した石柱をたて上に石獅がのせてある。

#### (ホ) ッ パ ラ マ 塔

金粉塔と同じく舍利收藏の目的を以て、チッサ (Tissa) 王が前二四七年(孝靈天皇四十四年) たてたさうであ

る。一六は修理前——といったところで年月は明らかでないが——の有様で、一七は今から十三年前の寫眞である。昭和十一年一月一日に參詣した時は、大正十二年一月の時と同じであつたから、寫眞はとらなかつた。こんな拙い修理をしたのは、一度寫せばもう充分で二度と寫す勇氣はない。此前につい寫しそくなつたから、今度は塔の周圍を四重に圍んでゐる石柱を寫さうと思つたが、此頃は何處も随分やかましくなつて、住民がどろだらけの汚い足で上るところへ、我我も靴をぬいで上れといふので、汚いからいやになつて止めて了つた。

塔の周圍に柱が取巻いてゐるのはこれのみではない。次例に示すランカラマ塔は三列にあるし、またミヒンターレ (Mihintale) のアムバスタラ (Ambasthala) 塔にもあるが、四重のはこゝだけらしい。最も塔に近いの外へ順に、其高さは夫れ夫れ二二呎一〇吋・二二呎三吋・一九呎九吋・一四呎あるさうで、柱總數合計一七六本あつたが、四二本亡失し、今は一三四本あるといふことが、ミットンの論文にかいてある (The Architectural Review, Vol. LIV, No. 321, "Buried Cities" pp. 38—39)。フアーガッソンの著書にあげてある寸尺と少し異なるが (Fergusson: "History of Indian and Eastern Architecture," Vol. I, pp. 234—235)、前者の方が新しいだけ、正しいのではないかと思ふ。私は調べなかつたし、又調べることもできなかつたし、何れが正しいか明らかでない。

前にもかいたが、一六と一七を比較するならば、修理前後の差は明らかな筈である。『眞っ白に化粧をした大伏鉢は茄黄色の草、緑色の樹、淡青色の晴れ渡つた空とを前景及び後景として、はつきり浮き

上つてゐるから、夫は景色としては甚だよろしいが、餘り近くへよるとがっかりする。柱はそばへよらねば判りかねるし、そばへよれば鼻の先きに塔があるし、どうもうまいかない』(『印度旅行記』第545頁抜き書き)

① ランカラマ塔

ファーガッソンの【印度及東洋建築史】に、此塔はツバラマ塔に酷似してゐるが、創立は判然しない。併し同様に柱で取巻かれてゐるところをみると、兩者間に左程年代の相違はないと考へられる。惜しいことに再三の修理を経たために、原型は著しく變更されてしまった。第十八世紀に於いては特別の復原——Special restoration といふ文字が用ひてあるが、どういふ風にしたものか——があつた。といふ意味のことが書いてある。

【錫蘭の亡都】には、其書き起しに「此荒廢せる小塔」(This small dilapidated dagaba……)とあるのでみると、此書の初版は一九一六年(大正四年)だから、ミットンが原稿をかけた時分、即ち大正四年以前には、随分ひどくなつてゐたのだらう。一八は一八七〇年とあるから、これは明治三年の寫眞から木版におこしたものである。これなら決して「荒廢」と迄はいかない。だから其後放置しておいたか、或は暴力で破壊をしたか、とにかくひどくなつてゐたらしい。然るに私が大正十二年にみたときは、一九〇の様に修理を修理しかけてゐたので、この木版によりて相當の修理をするか、或は蕃椒塔の様なものにして丁ふかと思つたので、『……大正十二年一月の現状は挿入寫眞(一九〇と同じものだが、端を切つて少し小さくしてある)の如く、足代

をかけて修理しつゝあつたから、今日ではまた蕃椒塔の如き大きな海膽の様なものになつて了つたかも知れない。甚だ心細い次第である。』(『印度旅行記』第547頁)

てツバラマ塔をつくりになつて了つた(110)。  
此書に【印度考古局報告書】一九一〇—一九一一年(丁度この分だけぬけてみて私は所持せぬから原本から引用ができぬ)の分から、次の數行を引用してゐる。

“The dagaba, one of the Eight Sacred sites, has for years been allowed to remain in a dilapidated state, completely ruined on the north side where it has collapsed, without any effort on the part of the Buddhists to restore it, though such restoration would involve little expense and no technical difficulty.

一八をみておき、更に一九の修理の工合をみると、どうも到底木版の様な形になりさうもないことが想像できるであらう。果してどうも思ふ様なうまい形にはならずして、感心のできぬものになつてしまつた。其最も一八と異るところは半球上の四角な部分で、原形に比べて一邊が廣く高さが低いことが明らかに見られる。斯道の専門家に相談せず素人が寄つてたかつて仕事をすると、いつもこんな結果になる。氣をつけべき事である。柱から白いきれが下がつてゐるのは順禮の小旗で、古くなるときならしいが、新しいうちは大に風致を増してゐる。

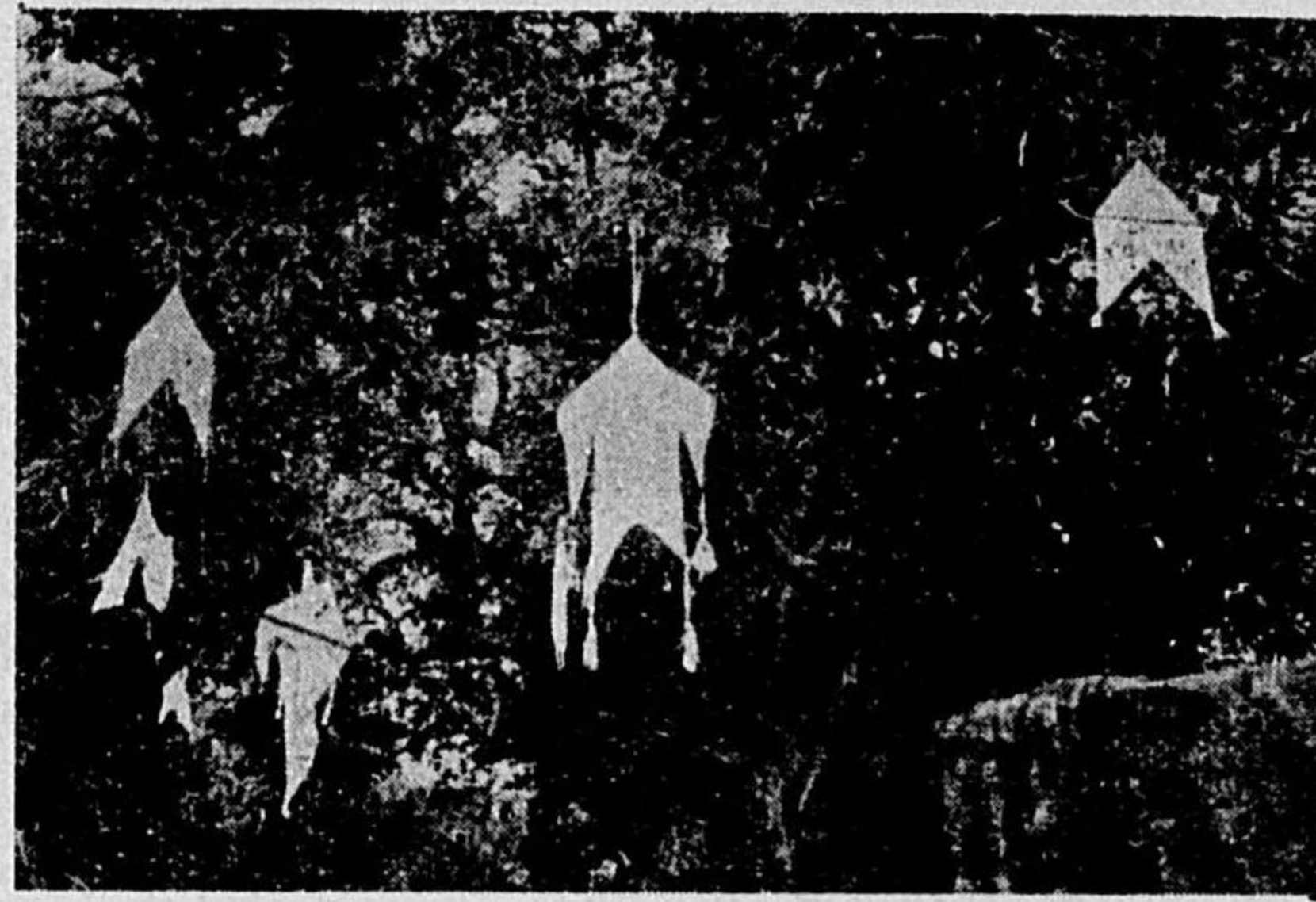
(ト) セラチャイチャ塔

一にクッチャチッサラマ(Kujatissarama)塔といふが、さう言はないでやはりセラチャイチャ(Sela-chaitya)塔と呼んだ方が通りがいい。此塔は随分ひどくなつてゐて、一八九五年(明治三十八年)に發掘調査された迄は、殆んど其存在さへ問題にされなかつた位であつた。小塔であつて、徑僅に三七呎五吋といふ。約前五五年(崇神天皇四十三年頃)のラジ・チサ(Laji Tissa)王の頃のものとせられてゐるやうである。

修理を完了したのはいつか知らぬが、大正十二年には既に寫眞の如くなつてゐた。二一のが夫れで、この時は其前に大きな水溜があつたし、又周圍に家も何もなく、何處からでも自由に近寄れたが、其後は家が建並び、二二三の寫眞をとるために近付かうと思つて、そこいら中を歩いたが、どうしても入口が判らず、遂にその邊を歩いてゐた土人を雇つて連れて行かしたが、とても一人では判らない様なところの、家と家との間を通過して漸く近づけた。塔の形は少しも變つてゐなかつたが、前方の水溜だけはなくなつてゐた。

(昭和十一年九月二十五日稿了)

右記載以外の小塔は數多くある。そのうちでも割合に大きいのはイスラムニヤ(Islamuniya)堂の岩上にも、新しいものか、古いのを修理したものか、とにかくまっ白な遠見は甚だ綺麗なのが建つてゐる。これは現形は圖示する程でもなし、やめておく。奉献小塔では佛陀伽耶大塔の周圍にあるのが最も注目し値するから、後に圖版に掲げることにしてやうと思ふ。



ボロンナルワ黒岩寺前の樹枝に下される巡禮の小旗  
(昭和十一年一月三日)

印度佛塔巡禮記

(第二回)

## 八、ミヒンタレ (Mhintale)

一月二日午前、アナラジャ市からミヒンタレへの往復を試みた。先年も一度参詣したことがあったから、今度はどうしやうか考へたが、折角アナラジャ市まで来てゐながら、お参りをしないのは、佛教を奉ずるものとしては不都合千萬だから、靈塔に敬意を表すことにしたのである。馬車だといくらか安價だが、片道にまた一時間半もかかるから、自動車奮發したら。三十分で山の麓についた。

此邊一圓に分布せる遺跡を全部見學するならば、案内人も或は連れた方がいいかも知れぬし、一泊も必要であらうが、山の上だけのつもりだから、狭いところだし、大概記憶してゐるので、孟買から連れてきた従僕(孟買市江南株式会社支店専屬のボーイでワッサン・カンヂーと呼ぶ正直敏捷な男)だけを同行させた。車の停るところは即ち山の下で、直に石段があり、途中に右方へ分れる道があるだけ、あとは殆んど一本道だから誰にでも判る。さうして其分れ道にも、記念物のあるところは皆名を記した立札(かかると便利な立札は以前はなかつた)があるから、愈間違ひはない筈である。併し初めての人は、案内人を雇つた方が安心であらう。彼等の言ふことは書物の受賣に過ぎぬが、道だけは知つてゐることは確かである。若し雇ふならホテル専屬のあるから、宿から連れて行けばよろしい。尙ほミヒンタレに就ては、割合に詳細拙著【印度旅行記】にかいたら、夫れに譲りここには省略することにした。

唯一つ書残しておき度いことがある。それは此所の遺跡のうちに「獅子湯」といふのがあるので、こ

れは雄獅子の殆んどまる彫が浴槽の側からとび出さうとしてゐるところの、頗る雄健な姿勢をほつたもの。ミットンもこれは實に傑作だといつてベルといふ人の言葉を引用し、大に褒めてゐる。私も先年此寫真をとり、寫真版として【印度旅行記】に掲げ、大に紹介しておいたのであるが(同書5頁)、今回見直すつもりで行つたところ、どういふ次第か鼻の先が缺けてゐた。どうもどう考へても、こんなところにある以上自然に缺ける筈はあり得ない。だから故意に缺いたとしか思へない。果してさうならまことにつまらぬ悪戯をしたもので、困つたものである。さうして我國にも多くの類例を持つてゐるのは決して自慢にはならない。

## 九、塔 婆

ミヒンタレには大小取交せ約十數基の塔婆がある。極めて小型のが石段の終點に近く三四基あつた記憶があるが、これ等は他所に移轉したか或は破却したか、乃至私の不注意からか、つい元の位置に見出せなかつた。併し例ひ此等は滅亡して了つたとしても、大して惜しい程ではない。其主要なるものは次に概略を記す三基で、皆良好の状態に保存されて居り、殊に其中の一基は目下發掘中で、當地に於ける最大最美のものである。小さいのが少し亡くなつたとしても、がまんすべきである。

### (1) アンバスタラ塔 (二四)

Ambasthala とも Ambastale ともかく様である。石段を登りつめて上の平坦な所にでると、そこに建つてゐる左程大きくない白色の塔が夫れである。前二五九(孝靈天皇三十二年)に薨去された阿育王の王子マヒンダ (Mahinda) 埋骨の地に建てたのださうである。今私はこの眞偽を穿鑿しやうとは思はぬし、又思つた所で私には少し荷が勝ち過ぎてゐる。ただ私は姑く其傳説を信じ、絶対に敬意を表してゐるのである。【大唐西域記】には王子マヒンダを王弟マヘンドラ (Mahendra) にしてゐる事既に記した通りである(第2頁5頁)。とにかくここは錫蘭島に於ける靈跡中の靈跡で、是非參詣せねば相すまぬところである。此塔の直後に大岩がある。以前は『至極易く女子供でも行ける』やうになつてゐたが、今度は手摺がとれてゐたり、鎖が切れてゐたり、岩の面が大變に滑かになつてゐたり、そんな事のため折角登りかけたが、途中で進退谷まり、引返すのも可なり困つた。併し漸く無事に下りることができた。そのため塔の俯瞰寫眞をとりそくなつて了ひ、從て遺憾ながら圖示することができない。

アナラジャ市に於けるツバラマ塔 (一六・一七) 及びランカラマ塔 (一八・一九・二〇) と共に此塔は、舍利收藏といふ特別の目的のために建立されたもので、ツバラマ塔には四重に柱があり(第3頁0頁)、ランカラマ塔には三重に柱が取巻いてゐるが(第3頁2頁)、此場合には高さ約十二尺の一本石の柱が二重に廻つてゐるだけである。

□ マハ・セヤ塔 (三〇)

Maha Seva 塔はアンバスタラ塔の西南方の高地にあるが、随分ひどくなつたままである。其西南方に更に二基の一層荒廢した塔があるけれども、これ等に就いては、私は記事を見出さないので何もかけない。【錫蘭の「都」】には此塔を記すに “now falling to pieces” の四字を以てし、其後二基の塔婆は “still more dilapidated” としてゐる。こんな文句で片づく程にあれば果てゐるのであるが、マハ・セヤの方はまだいくらかよらしい。其西側に塔に接して小堂があるが、新しく彩色を施し、俗臭紛紛としてとてもたまつたものではなう。

ハ ギリバンダ塔 (二六)

Giribandha dagaba は最初石段を登りかけたところの右即ち西側の小高いところにある。【錫蘭の「都」】にはこの塔を記すに “… but the top of the flight reveals a precipitous crag on the right heavily draped in foliage, crowned by a tottering dagaba of ruined brick, called Giribandha, which can be reached by a worn and steep path.” といつてゐる位に、荒廢してゐたものと見える。私は歸りがけに此塔を見學したから南の方の石段から登り、正面の方へ下りたのである。併し塔は新に發掘されて、殆んど其全貌を現し、當時は尙ほ數名の人夫で周圍の地均しをしつつあつたが、洵に見たところ美しい立派な塔の様であつた。石段また修理したと見えて「ウォーン・アンド・スチープ」ではなかつた。

勿論塔の上部はない。全高の半分位しか残ってゐない。さうして大きいから廣角の上等な機械をもつて行かないと、私の持つてゐる様な大正十年以來愛用してゐる安物では寫らない。だから高所から俯瞰して全景をとつてがまんしておいたが(二六)、近くへよると四方の聖壇が洵に美しい(二七・二八)。さうして其傍に半肉彫刻の五頭蛇等があったりして興味はつきない(二九)。

ギリバンダ塔の年代は、私の調べたところでは書いたものが見當らなかつた。恐らくまだあるまい。といふのは漸く發掘されたばかりで、調べるのはこれからであらう。而も其未調査の塔の周囲を一巡した位で、何も判る筈はない。だからただ想像をかいてみると、四方の聖壇は既に記した通りで、恰もアナラジャ市の蕃椒塔の夫れの如くである。あの塔は前一〇一年(開化天皇五十七年 第20頁の表参照)と推定されてゐるのだから、約西紀前後としておく。甚だするいかも知れぬが、今の所これ位より年代推定の致し方はない。

### 一〇、アナラジャブラからポロンナルワ (Polonnaruwa) < (地圖III。)

アナラジャブラからポロンナルワへ行くには二つの方法がある。一は汽車で一は自動車へのるのである。時間表や賃錢等はいふ迄もなく一定不變のものではないから、そんな穿鑿は無駄であるが、昭和十一年一月のときのを試にかいてみると、

アナラジャブラ發、前六・四〇。ポロンナルワ着 一五・四〇。汽車賃約八ルービー (一等)

となるので、これより早くは行けない。尤もこれは途中の分岐點のマホ驛 (Maho Jn.) で殆んど三時間

空費するから、こんなに餘計の時間がかかるのである。併し自動車だと二時間餘りで樂に行けるが、賃金は四十ルービーだから、汽車の一等の五倍かかる。若し汽車の三等で行くならば、僅に運賃二ルービー七十セント(錫蘭では一ルービー一を百セントとす)故、約十五倍といふ莫大な費用が在るのである。だからやはり此場合も例により例の如く、時間か金かといふことになるのである。因にアナラジャ市とポロンナルワとの間は其距離直通路で六十五哩。

私は一月三日朝七・一〇ホテル出發、途中十分間路傍で休憩し、九・四〇に着した。つまり二時間と二十分でR・H・についたのである。さうして十時には既に寫真機と手帳とをもつて古蹟巡りにでかけたのだから、つまりまる一日もうけたのである。途中の景色といつたところで、さう大したことはないが、早朝からまるで邪魔のない叢林 (Jungle) の間を突抜けた幅の廣い道路を快速で走るのは、洵に心地のいいものである。四十ルービーは決して高くはない。

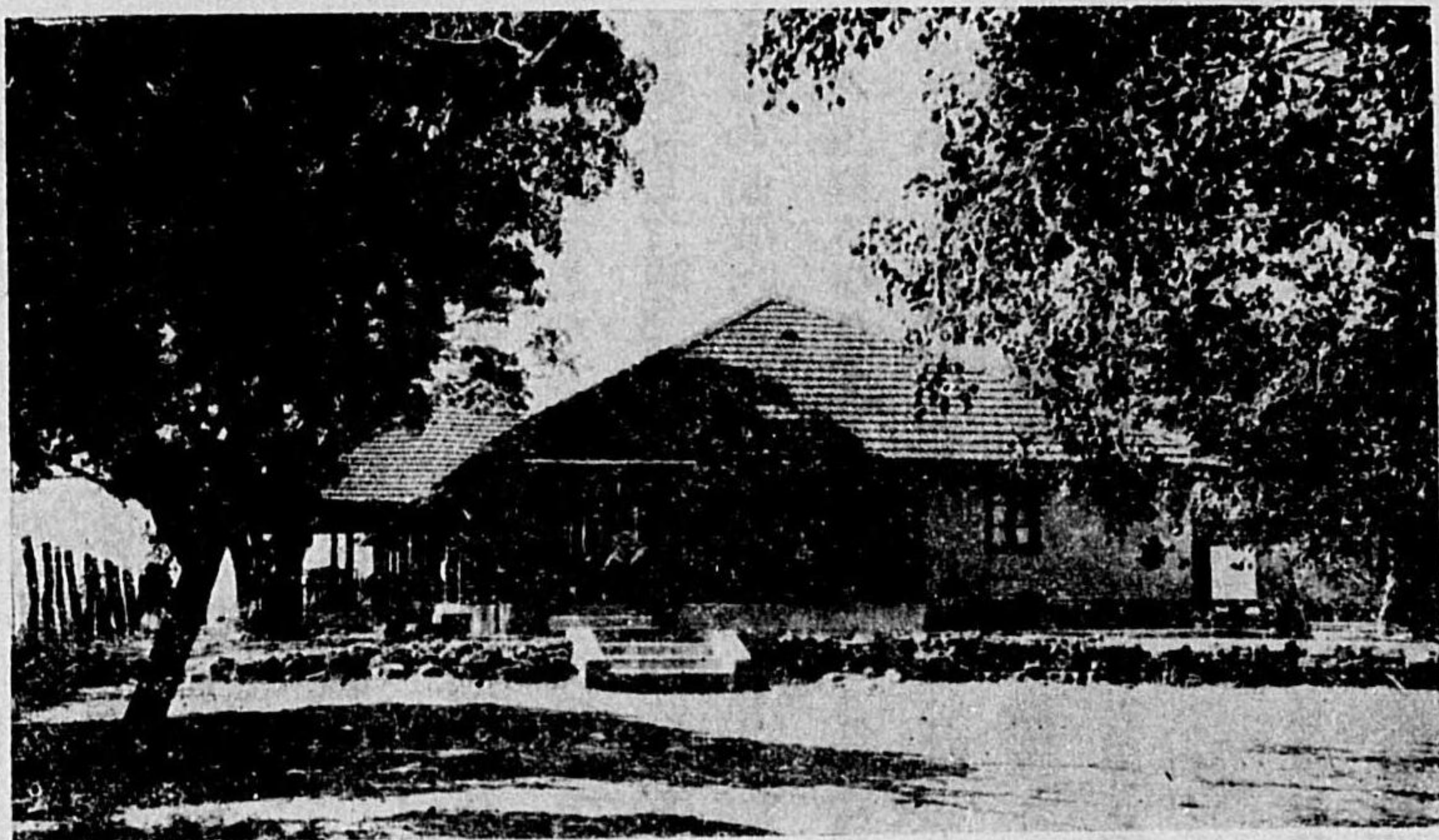
尤も古倫母から直行するのだと汽車の方がよからう。若し朝七・二五にフォート驛 (Fort Sn.) からでると、その日の一五・四〇に着するので、つまりアナラジャブラ驛からのると、マホ驛でさんざん待たされた上、これに接續するのである。左もなくば夜汽車で二一・〇〇頃のと、翌朝八・三〇につく。これなら寢臺へひっくり返つてねてゐる間につけるから、沿道の景色は見えない代りに、時間には全く無駄はない。何れにしてもポロンナルワ驛で、現在自動車を得ることはむづかしく、せいせいばねのない牛車位だから、荷物でも多ければ或はR・H・迄約三哩を徒歩せねばならぬ。カンデーの佛齒寺

へ参詣してから行くなら、汽車は損で自動車にすべきで、かうなればダンブラ (Dambulla) ・シギリヤ (Sigiriya) を通り、R・H・の前まで乗りつけることができる。

## 一、ポロンナルワのレスト・ハウス

R・H・は大きなタンクに面して建つてゐるから、其濡椽からの眺めは絶景である。此大タンクはマハ・セナ (Maha Sena) 王が後二七五(應神天皇六年)につくられたものださうであり、周圍約二〇哩と稱す。日中は少し光線が強すぎるが、朝と夕とは何ともいへぬ位に落ついた気分になれる。夕日がさし込むのが缺點であるが、西の隅即ち第一號室は、西南の二方が湖水に面してゐるから最上で次は第二號。この二室は私が行った時は既に異人さんの先客があつてふさがつてゐたので、仕方なしに第三號室に入ったが、一方は食堂だし、一方は空室であつたため、其靜かなこと申分はなかつた。

一月三日に着いて、二泊の上五日の夕刻に退去したのであるが、此時分は未だ寒暖計をもつてゐなかつたから、どの位の温度であつたか知らぬが、滞在中暑氣は可なりきびしかった。ミットンによると、此建物は其設計施工をP・W・D・に依頼したところ、外觀をよくしようと思つたせいか、南面させてしまった。併しこれは根本的の誤りで、例ひ冬でも濡椽はあつて到底やりきれたものではない——“the verandah is utterly intolerable to an ordinary mortal”——といつてゐる。成程暑いには暑い一月の初め位では左程でもない。普通の日本人なら、黄檗宗伽藍の天王殿に鎮座まします彌勒尊の様な



ポロンナルワのR.H. (昭和十一年一月四日)

トバ・ウェワ (Toba Vewa (Wewa)) と呼ぶ大きな湖とも沼ともいふべき「タンク」 (Tank) に面して建つてゐる。四室あり。一室に寢臺二つおいてあるから、つまり八人は泊れるわけである。中央に食堂と、前方に凸出した濡椽をとり、客室は其兩方に二つづつある。南面してゐるため、晝食の時は可なりあついが、朝食と夕食とは中央の濡椽でたべると、洵に何ともいへぬ位心地がよろしい。夜になって月がでると、沼はまことに凄い。時々蛙が鳴くだけで、他にはまるで音なく、總てしづまり返つてゐる。

體格の持主でない限り、アッターリー・イントレブルなんてことはありはしない。かうなつてくると英吉利人なんか氣のどくなほどいくぢがない。

ポロンナルワの夜は、折柄丁度いい月夜であつたせむもあらうが、濡椽の前の大沼は、月明りでは對岸が見えぬため、縹渺として際涯を知らず、時たま一二疋の蛙が鳴く以外には閑閑寂寂として聲も音もなく、まことにおそろしい程の靜かさで、ただ椽柱上部の電燈の光に集つてくる大小の蛾類を襲撃の目的を以て、軒桁を靜かに歩み、適當の距離に近づくと一撃の下に極めて巧みに自己の腹中に収むる守宮を除いては、あたりは全くの平和其物であつた。



早曉と夕刻と、濡椽からの眺めは何物にもかへ難い位で、正に價千金。但し朝は早いだけよろしい。朝寝の常習者はこの景色を鑑賞する資格はない。とにかくこのR・H・は、事情さへ許すなら、一月位滞在しても恐らくあきる様なことはあるまい。

### 一二、遺跡の分布

遺跡は随分澤山あるが、主要なものを一通り見學するのなら、時間は僅かですむ。といふのは大體五つ位にかたまつてゐるので、一つづつ離れ離れになつてはゐないから始末がいいのである(二三)。私が最初着した時、運轉手はワッサンを通じて一〇ルービーで古蹟全部を案内すると申出したが、到底一日ではすまないから、二日間雇へばいくらかときかせたら、一ルービーくれといった。だから私は二日間雇入れる事にきめたが、實はこれは甚だつまらぬことであつた。どうせ雇つたのだからといふ考へでガル・ビハラ——Gal vihara だが、本名は Kalugal Vihara 即ち "Black Rock (granite) Temple" ださうだから、直譯すれば「黒岩寺」とならう——へ三度行かしたところ、同じ場所へ三度も行ったからとて幾分の増金を要求したりした。而も宿からここまで僅に五分もかからぬ位で、車に乗る事なんかまことにつまらない。

身體強健な者は徒歩に限る。私は最後の日即ち一月五日午前八・四〇に宿舍を出で、ポットグル・ビハラを除き、道の東側にある遺跡(二三はイハへ、他にロクタス・)を南から北へ全部一巡して歸宿した

ら、正に一一・四五で、つまり三時間と五分かかった。尤も寫眞は殆んど撮らなかつたから、この位ですんだのであらう。だからもつとゆつくりして一三・〇〇頃歸り晝食をすまして一五・〇〇頃から南方のポットグル・ビハラへ往復すれば、一日でゆつくり片づけることができる。

主要なる遺跡は總て道の東側にある。R・H・から道に出で、横切つて土手に登れば、そこが即ち王宮の址である。尤もここに寫眞禁止の立札があるから、若し私が最初にここから見たのだと、寫眞はとれなかつた筈だが、北の方から逆に見て、二日目のひるすぎ初めてここに來たし、其立札の意味を潜心研究して、禁止は此場所即ち王宮址と解したから、それだけは遠慮してとるのをやめた。此王宮址の彼方にラジャ・マリガワと呼ぶ大きな建物と、少し離れて尙ほ東方の低地にあるクマラ・ポクナ(Kumara Pokuna) (廿三) といふ非常に興味のある沐浴池とがあるのを序にみたが、どうもこのポクナは大變に面白いと思つた。規模はさう大きくはないが、石で疊んだ長方形の浴槽で、中央に獅子で飾つた噴水があり、水は摩伽羅の口から流れ込む(大概どこでも流入口はマカ) 仕掛にしてある。其他にも流入口と溢れた水の流出口がつくつてあり、いつまであてもあきないから、できたら半日位はぼんやりしたかつた位であつた。

此一群の遺跡から小徑を傳ひて北行すれば、今度はツバラマ寺(Thuparama Vihara)の一廓に出る。ここは建物が多いのみならず、洵に珍らしい意匠のものや、佛像等の優秀な作が割合に残つてゐる。最も注目に値するのはワタ・ダーゲ(Watadage = Circular Relic-house)で、ツバラクラマ王

(Parakrama Bahu) の建立せる佛齒寺と考へて多分間違はなからうといふ説がある。其北にはこれとよく似た名のハタ・ダーゲ (Hata-dage) といふのがある。一にアタ・ダーゲ (Ata-dage = House of Eight Relics) といふ。此本堂の壁面と門とに、例のハンサの行列が彫刻をしてあつたのが、私には大分に面白かつた。其東にサト・マハル・ブラサダ (Sat Mahal Prasada) といふ六層堂があり、また他にもいろいろある。

併しながら私がここに特に紹介しやうと思ふのは、ツバラマ寺の北、ワタ・ダーゲの西にあるニッサンカ・ラタ・マンダバヤ (Nissanka-lata-mandapaya) といふ長い名の建物で、其うちに一基の佛塔があるからである。此記事は佛塔のことをかくのが主なる目的だから、他の面白い建物は割愛し、これだけに止めておかうと思ふので、後に一通り記載しておくことにする。

サト・マハル・ブラサダ即ち六層堂の東に沿ひて更に北進すると、叢林の間を大分歩かねばならないが、遂に漸くにしてランコット塔の南面に出る。大分樹木があるせいか、割合に近づく迄見えず、どちらかといふと、まあ突然と目の前に出るから、ヤアこんな立派な塔があるかと驚かされるのである。尤も大概の旅行者はこんな方から行かず(といふのは、歩かなければならぬから)、反対に北方から遠望しておく位だから、こんな愉快な散歩的見學はできないのである。

ランコット寺の北には小徑があり、そこをまた北に行くと、祇園寺 (Jetawanarama Vihara) (二冊) の一廓にでるが、ここは少し高地になつてゐる。今では一般にジェタワナラマで通てゐるが、本名はラ

ンカチラカ (Lankatilaka) といふので其舊名亦ラウタラウである。

南から行けば最初に大きな建物がある。バツダ・シマ・ブラサダ (Baddha (Buddha)-sima-Prasada) といふ本名ださうであるが、終りのブラサダをバツダ (Pasada) とかいたのがあるので、何れが正しいのかまだ調べてゐない。とにかく普通はプライアリ (Priory) (修道院) と呼んでゐる。外郭は殆んど正方形をなした——實は東西に少しは長い——大きな建物である。

ランカチラカに就ては【錫蘭考古局報告書】 (Memoirs of the Archaeological Survey of Ceylon) 第二冊に

“the Lankatilaka: this is the building which is now erroneously known as the Jetawanarama, there can be no doubt as to its identity since it bears its name inscribed on the inner side to the left hand guardstone.”

とあるので其名が判るのである。此建物は長さ 170 呎 × 70 呎あり、其高さ亦 70 呎で内に大きな佛像(顔面亡し・但立像)を安置す。此祇園寺の北にキリ・ダガバ (Kiri dagaba) がある。此はランコット塔に亞ぐ大塔である。

キリ・ダガバを左手にみて東北方に進むと、そこにはガル・ビハラ(前出)即ち黒岩寺にでる。これがまた大したもので、

“This rock-hewn shrine, strictly, Kalugal Vihara or the Black Rock (granite) temple, stands un-

rivalled as in its special features the most impressive antiquity par excellence to be seen in the island of Ceylon, and possibly not rivalled throughout the continent of India.” と云ふ二合に寝めちぎられてゐるもので、其美事とは、私にとつた寫眞を全部示しても、また中中足りない位である。こゝには塔はない。

此黒岩寺の裏から尙ほ北進を續けるならば、有名な蓮花浴池 (Lotus Bath) やギマラ・マン・セヤ堂がある。前者は五重八瓣の石蓮花形沐浴池で、いろいろの形の石——とつたとつみで、一つ一つ作を施してあるが、其石の形が殆んど皆異なつてゐるのである——を集めて組立てたもので、形もよく類例は殆んどあるまいと思はれる。後者は今は最北方にあるので、ランカチラカ(蘭國寺)によく似た建物を指してゐるが、實はこれは誤つた命名だらうで、ガム・ビンラとロータヌ・バヌとの間に、尨大なる而も荒廢せる塔婆の名だらうである。【報告書】には、これに就て

“Next comes the Tamil Tope (Darniathupa) or Great Tope (Mahathupa). This is the enormous tope immediately north of Gal vihare. As the present day it is so collapsed as to resemble a natural hill all covered with jungle and haunted by elephants of which the track are to be found on the very summit. Its name in Sinhalese form, Demala Maha Säya, has now been most inappropriately given to the Northern temple’ ……….”

とあるが、【錫蘭の上都】にはやはり其誤もつたまゝで、【報告書】にいふ北殿に此名を用ひてゐる。併

しながら此書の著者はあとの方に、この事に言及してゐる。曰へ

“Not very far to the south of the Lotus Bath, and east of the path, is a huge, shapeless mass, once a dagaba; this is called to day *Uragala Vehara*, but Mr. Bell says that this is the true Demala maha-seya, the largest dagaba of all, “1,300 cubits round about,” a Ceylon builder’s cubit being equal to 2 feet. This dagaba was built by Parakrama; the name Darnio corrupted to Demala embodies the fact that Tamils who had been taken prisoners were employed upon its construction.”

右引用文中にある周回一三〇〇キニビットは莫大だから、少し遠慮して【報告書】挿入の地圖によりてみると、直徑に於いてランコット塔の約三倍ある。だからざつと徑五四〇呎となり、アナラジャ市の祇園塔(ほんとうの無畏山塔だといふ)の徑三一〇呎は脚元へもよりつけぬ事になる。従つて其高さも、あれの四五〇呎の割合から推すと、七八四呎といふ數字がでてくるから、どうも大變なものであつたのだらう。事實は到底判らないとすると、かかる大伏鉢を想像してみても何等差支はない筈である。我國に於ける法勝寺八角九重塔は、縦横八十四丈と傳へてゐるが、そんな馬鹿氣た大きさのものがある筈はない。第一その様に高い木造層塔は構造不可能であらう。そんなものは廻廊の規模をいつたのか、左もなくば傳説にすぎない。相國寺の塔の三十六丈といふのも大分怪しい、先づ東大寺東塔及西塔の三十二丈が最高であつたらうといふ事に考へられてゐる様であるが、例ひそれが大伏鉢で、木造層塔ではなかつたにせよ、八十

丈近くのもものが存在し得たらしい事が想像できなくもないのは愉快である。

此北殿の内陣には同様に首部を亡失せる大立像を安置してある。壁面のフレスコ畫は實に美事なもので、其複製は古倫母博物館に於いてみる事が出来る(出後)。アジアンタ窟院壁畫の最優品に匹敵するものと言はれてゐる。

以上で本道東側の遺跡、即ちポロンナルワ廢都の主要なる遺跡は一通り見學を了し得るのである。次はR・H・の南方にあるポットグル・ベハラ (Potgul Vehara) と呼ぶ圓形の平面をもつた建物。一九〇四年といふのたから、明治三十八年のことだが、初めて此附近の叢林を伐採して、此建物が現はれたので、それ迄はそこにある建物の存在だけが判つてゐただけであつたさうだ。建物は壁が非常に厚く、地盤のところ約十五呎もあるが、多分これは重量の多い圓屋根でも支へるためであつたらうと考へられてゐる。此建物へ行く迄にバラクラマ大王と俗稱されてゐる大像がある。

\* \* \* \* \*

ポロンナルワの遺跡は先づこれで大體終りである。南端の「ポットグル・ベハラ」から、北端の北堂なる謂はゆる「デマラ・マハ・セヤ」に及んで、幾多の珍らしい立派な建築が並んでゐるのである。さうしてアナラジャ市と同様、ここでも亦、遺跡が割合に小面積に分布されてゐるのは、時日に制限されてゐる見學者にとっては、洵に好都合であるといへるのである。

### 一三、塔 婆

誰人がみても、直に塔婆たることを肯定し得るものが二基、他に小塔婆一基とがあるから、左に簡單に其記載を試みやう。一體ポロンナルワは後三六八(仁徳天皇五十六年)に初めて王居になつたので、トバ・ウエツの大湖は、此時に掘鑿されたのださうである。さうしてここは其大湖の名に因んで「トバ」(Topare)であるべきだといふ。現在の名稱はさう古くつけられたのではなく、いつか古名が排拆されてしまつたのである。

其後アツガボヂ三世 (Aggabodhi III) (後六二三、推古天皇三十年)王が、ここに宮殿を建築されたさうであるが、アツガボヂ七世 (後七八一、天應元年)の時初めて首都になつたといふから、第八世紀の終りのことであつた。併し主要な建物は第十二世紀の王であつたバラクラマ・バン (Parakrama Bahu, 1164—1194 A.D., 一説 1153—1186 A.D.) (長寛二年—建久五年。一説 仁平三年—文治二年)王の時代のものであるから、先づ我國なら平安末から鎌倉初期へかけてのものである。だからアナラジャ市のよりずっと後れてゐるのである。さうしてバラクラマ・バフ三世 (後一二八八、正應元年)に至り、全く放棄されてしまつたのであつた。

#### (1) キリ 塔 白 塔

地圖にキリ・ベハラ (Kiri Vehara) とかいてあるのが即此で(二三)、祇園寺(同)の北方に當る。「キリ」

とは乳白色といふ意で、これは其表面が全部乳白色の塗料 (Chunam) で覆はれ、日光があたると白大理石の様に光り輝いたからださうである。いつとつたものか知らぬが、【世界地理風俗大系】第五巻、印度のことをかいたうちに掲げてある寫眞は、大分にまだ樹木が生へてゐて、廢址としての氣分は充分にでてゐるが、頗るなさけない有様である。現在では全部大掃除がしてあり、大に美しくなつてゐるは有難い次第である(三五)。但しあの本には、これをアナラジャ市の無畏山塔(アバヤ)と間違へて解説してあるのは困つたことであるが、それは偶然の誤りで止むを得ないとしても、同じ塔を謂はゆる祇園寺と共に同じ書物の別のところに掲げ、其解説に、無畏山塔には遙に及ばないが、かなりの大塔であるとかいてゐるのは、折角だが何が何だか混線して支離滅裂に終つてゐる。まことに氣のどくだか、どうもよく知らないでいい加減に解説したためであらう。實物も見ず、書物もよまらずにかくとよくこんな結果になるものである。

「キリ」が乳白色といふ意なら、Kiri Vohera (Kiriwehera) は即ち「乳白寺」といふことになる。これでは語呂がよくないから、其まゝ應用して「乳白塔」といつたのではものにならない。そこで遼陽の白塔の眞似をして、ただ「白塔」と呼ぶことにしようと思ふ。「キリ・ダガバ」等といふより、この方が耳にすつと柔かに響く。相輪が途中から折れてゐるのは惜しいが割合によく保存されてゐる。アナラジャ市のに比べて大分に形が面白くない。といふのは、肩が張りすぎてゐる點である。祇園塔や無畏山塔に比べてみれば(寶物でなくとも)、誰も氣がつくであらう。つまり肩の駄肉を少し削り取つて貰ひ度い

のである。併しこれは時代が下がつたからかうなので、これは註文する方が少しばかり無理であらう。ファーガッソンによると此塔は直徑約七〇呎、高約一〇〇呎あるといふ。さうして煉瓦で築造され、漆喰を塗つてあるため、其時代(バラクラマ・バ)に於ける當然拙作と認められるものよりも尙ほまづく見えると評してある (Fergusson: "History of Indian and Eastern Architecture, Vol. I, p. 245) が、私のみたところでは夫れ程でもない。これは小さく酷評で氣の毒だが、夫れにしても肩の怒つてゐるのだけは、どうも氣になつていけない。

□ ランコット塔 || 金輪塔

ポロンナルフに於ける最大塔であるが(三三はハ、三六―三九)、アナラジャブラのにくらべると大分小型で、即ちその順序は、(一)無畏山塔・(二)祇園塔・(三)金粉塔・(四)金輪塔といふことになり、この次に蕃椒塔がくるさうである。此塔は一名「ルアンウエリ・サハ」と呼び「金粉場」といふ意だといふ、然るに其詳細の記事に就いては、ファーガッソンとミットンと随分の相違があるので、何れが眞か私には判然しない。またこの二つ以上に大相違をした記録があるかどうかは承知せぬので、取あえず試みに兩方の記事を引いてみると、  
ファーガッソンの

"Next in importance to this is the Rankot Dagaba, about 500 yards south of the Jetawanâ

rama, 186 ft. in diameter, and of about the same in height. This, though only half that of those in the older capital, is still larger than any known to exist in the continent of India. It is ascribed to Kirti Nissanka Malla, a Kalinga prince, at the end of the 12th century, and is in fair preservation. Its base is surrounded, like those in Burma, by eight small black shrines—two at each of the cardinal points—having conical roofs, and between each pair is *asana*, or seat for a Dhyanī Buddha.”

“ミントンの塔”

“This is Rankot dagaba, and it appears small after the larger specimens at Anuradhapura, though actually ranks not behind, but amongst them, being fourth in size of those that are known, coming after Abhayagiri, Jetawanarama, and Ruanweli, but before Mirisaveti. Another name for it was Ruanwelle-saye, the “Place of Golden Dust” (Tennent), which links it up as identical with Ruanweli. It was built by Parakrama's second queen between 1154-86……. It is mentioned as “the great golden stupa” because it was topped by a golden “umbrella.” The circumference at the base is 555 feet; the original height was 180 feet:…….

こゝは風である。其差を表示してみる。(マレー案内記の参考のため附記す)

人名	直径(約)	高(約)	創立者	創立年代
フナーガッソン	一八六呎	一八六呎	キルチ・ニッサンカ・マラ	第十二世紀末
ミントン	一四四呎	一八〇呎	バラクラーマ王第二妃	一一五四—一一八六
マレー案内記	一八〇呎	二〇〇呎		第十二世紀

ベネカには白塔と一所に至極簡單にかいてある。序だから試にかいてみよう。

“Rankot- order Goldspitzen- Dagaba, die über 60m hoch und 55m breit ist, aus der Zeit Parakrama Bahus, mit acht später angebauten Kapellen…… Kiri Dagaba, über 30m hoch und 20m in Durchmesser.”

これによると直径一八一呎半・高一九八呎といふことになり、マレー案内記の最も近い。どれかほんとか、元より測定等しなかったから、私にははっきり言へない。

ポロンナルワ遺跡について最も詳細懇切に記載してある【錫蘭考古局報告書】(Memoirs of the Archaeological Survey of Ceylon) 第二卷(一九二六年發行)には、ただ僅に

“The large tope at the southern end, now called Rankot Vehera, is the Ruvanväli built by Nissanka Malla or enlarged by him.”

とあるだけで、殿堂の廢墟等に就いては可なり懇切丁寧に多くの圖を入れてかいてあるのに、塔に關しては至極簡単な記載しかなく、寸法も何も掲げてない。併しニッサンカ・マラ (A. D. 1198) が創建したか又は擴張したといつてゐる。創立とするとバラク라마・バフ一世の第二后の建立説は消滅せねばならぬが、擴張したのなら少しも差支はないのである。だから何れにしても第十一二世紀末として不都合はないことになる。さうしておくとして此所に掲げた四説共皆生きてくる。

肩が張つてゐて、形に不滿な點があること白塔と同じであるが、景色として眺めるには北方の高地、即ちバッダ・シマ・プラサダ (Buddha Sima Prasada (Badhasima Pasada)) (三三) の南側からが一番よろしい (三六)。如何にも廢墟らしい廢墟が眼前に展開する。だんだん近づくとき駄目になる。但し相輪や平頭は甚だよく保存されてゐて、其基部にある牛肉の佛像の中には、殆んど損傷なしに残つてゐるのがあるが、それをみるには南側へ廻らねばならぬ (三七)。三八は近よつて西南方からみたものであるが、其相輪基部の圓壙形をなせる所即ち捺の右方に、少しく高くなつてゐるのが最もよく残存せる立像である。三九は塔身基部の四方にある小聖龕である。

(ハ) ニッサンカ・ラタ・マンダバヤの小塔

R・H・から主路にでて、少し北行すると右の小高いところに大遺跡群がある。ここには「ワタ・ダーゲ」(Wata-dage, 舊名 Dathadhutghara)・「ハタ・ダーゲ」(Hata-dage 舊名 Tivankaghara) 其他

珍らしい建物があることは既に記したが、そのうちニッサンカ・ラタ・マンダバヤといふ割に小さい建物がある。ミットンの書物には "Hall of the Flower Trail" といつてゐるから、譯せば——甚だ拙い——「花跡堂」位のうしろであらう。【錫蘭の上都】(第21卷・) 214頁) 215

"Then we see perhaps the finest of all the gems in this mysterious necklet of architecture which decorates the terrace. This is the *Nissanha lata-manjapaya*, the Floral Altar or "Hall of the Flower Trail" A space of some 84' x 28' is enclosed by an artistically designed post and rail fence of stone. But this is no sample of a "Buddhist railing, for it lacks the essential points of that style. It runs round a stone platform from which rise most curiously designed pillars. In the centre of the platform or altar slab is a small dagaba."

とあるだけで、柱に就ても塔婆についても、これ以上餘り記してない。併しこの「ホームト・キョーリアスリー・デザインド・ピラーズ」といふのは、植物の幹に象つた浪形をしたもので、柱頭はぎつと植木鉢の如き形をした、周圍に蓮花を彫刻したものである。此柱頭は花とも蕾とも考へられるものであるが、寧ろ幹の方が面白い。三二は塔婆を主にしたので、柱は前後に浪形を描いてゐるから、これではよく判らない、従つて幹の面白いところはでてゐない。さうして例ひ浪形柱でも、石で出来てゐて且つ充分太いから強度に於いては少しも心配はないのである。

此建物と塔婆のことは、【報告書】には少しばかり書いてあるから、参考のため抜き書きをして置く。

“……A *ceitya* is usually a *tope*, but not necessary so. There is only one *tope* on the quadrangle and that is a small stone one erected on a stone platform and formerly covered by a canopy which was supported on stone pillars shaped to represent lotus stalks. It bears inscriptions which call it the Nissankalata-mandapaya or Nissanka's “winding plant hall.” There is no reason to question this ascription as the style appears to be post-Parakrama. There is no trace of any other *tope* on the quadrangle;……”

ほんの一言、ただ小石塔婆といつてゐるだけで、薩張仕方がない。但し建物の方は「ワキンゼンダ・ブランド・ホール」だから、「曲莖堂」位のことか。

塔婆は小型で相輪を缺く。基壇は塔身より一際大きく圓形をなし、其側面全周囲にそひて佛像を刻んでゐる。大して美術的のものではないが、手頃の大きさで面白いものである。相輪を失つたのは洵に惜しいことである(三三三・三三三)。

#### 一四、古 倫 母 へ

R・H・からポロンナルワ驛迄三哩、徒歩するより方法がないと聞かされ、出發日即ち一月五日の午後は外出を見合はせて休養をした。夕食を六時にくり上げ、六・三〇に愈よ出かけることになったが、荷物だけ運ぶつもりでワッサンがどこから雇つてきた牛車は、思ったより廣いので、私もワッサンも

乗って驛へ向つた。然るに其牛車たるや、印度の片田舎にて辛ふじて得られるトンガ (*tonga*) やエッカ (*ekka*) —— 何れも低級馬車 —— と同様に、弾機が取つけてないから、可なりこたへるところへもつてきて、少し道路がよくないが、ちかみちをしていいかときいたから、差支なしと答へた。これが大失敗であつた。といふのは其近道へ入るや否や、路面の凹凸甚だしい上に、殆んど水溜りばかりで、車の進行は非常にのろく、前後左右にゆられ、何とも仕方がなかつた。そのうち日は漸く暮れてきたから、少しでも明るいうちに本街道へ出ればいいと思つてゐたところ、しまひに出るにはでた。さうしたら人家も相當にあつたが、漸く半哩きただけであつた。

然らばあと二哩半あるわけである。途は間もなく淋しくなり、兩側は奥底の知れぬ叢林で、いつ迄行つても人家等はない。たまにどうかすると通行人をおひ越したり出あつたりする位。だから猛獸毒蛇の襲撃を受ける心配はないらしいが、薄ぼんやりでてゐる月光に照されながら、淋しいみちを通ることは、自動車か何かなら問題はないけれども、あけっぱなしの牛車では大して愉快なものではない。尤も牛は背中に大きな瘤のある種類で、相當に早く走る事は走るが、それにしても牛だから知れたもの。燈火としてはカンテラ一つだけで、馭車の老人が奇聲を發すると、其聲に應じてかけ出すが、もの一分とたたぬうちに、又のそりのそりと歩き出すといった有様。ワッサンは連りにやかましくいつて車を急がすから、まだゆっくりではないかといふと、生返事をしながら又いそがせ、遂に無事驛に着いたので、此時は大分安心をした。



後にきいたのでは、彼は途中追剥が出やせぬかと心配をしたさうな。彼の話によると、此邊は可なり  
たちが悪く、先づ生命を断つておいて、もちもの全部を掠奪するのださうな。だから到底如何ともする  
ことが出来ぬさうで、寸鐵を帯びてゐないのだから、襲撃されたら、同時に總てが終りをつけるのであ  
るといふ。私はそんな事はまるで氣がつかず、従つて考へもしなかつたが、萬一氣まぐれの豹でも飛び  
出したら、どうしたらよからうかと思つたりした。あとから考へれば實に馬鹿氣た事で、正氣の沙汰で  
はないかも知れないが、どうもこんなところで日が暮れてからの旅は甚だ以て感心できない。若しいつ  
かポロンナルワ驛から汽車に乗らうとする諸君があつたら、あかるいうちに驛へついでおく方がいい。  
そのためにはR・H・で辨當をつくらせて携行し、驛へついでから夕食するとよろしい。日中暑氣は可  
なりひどいかも知れぬが、その位がまんすればいい。併しお蔭で日暮れて途遠しといふ経験を初めてし  
た。口ではいふが體驗したのは此時が最初であつた。

\* \* \*

私は幸にして無事師子國の二大佛跡の見學が、例ひ一通りであるにせよ、すまし得たのを限りなく喜  
んだ。汽車も勿論一人であつたから、大に落ついて休息することができた。併しながらC・G・R・  
(Ceylon Government Railway)と銘を打つた廣軌列車の一等室には、洗面の水も手洗の水もまるま  
りあつた。すべて運輸課長の責任だと思ふが、下級現業員のナマクラに原因したと推定する。このあ

たり、どこかの國の田舎廻りの汽車と同じである。汽車は一月六日の六・一五古倫母(Fort Stn.)につ  
いたが、驛の洗面所で漸く顔を洗ふことができたのであつた。

### 一五、古倫母の一日

此度態古倫母迄行つた目的は、博物館をみるがためであつた。此地は四回目だから、市中の觀光は  
やめにした。荷物は驛へ一時預けとし、驛食堂で朝食をすまし、ワッサンに人力車(人力車は澤山ある。自  
にき)を雇はせてのり、先づ博物館へ行つた。ところが先年本館内向て左手の一室に陳列してあつたアナ  
ラジャブラやポロンナルワからの出土品は、總て本館の後方平屋建吹放しの別館内に移されてゐた。光線  
等も不充分のところがあり、どうも甚だ見にくく、これでは優待なのか虐待なのか見當がつかず、可な  
り失望したが、其代り本館内向て左手二階の奥の室に、シギリヤとポロンナルワの謂はゆるデマラ・マ  
ハ・セヤ堂——前述の通り此名を北堂につけたのは誤りださうだが——のフレスコ畫の寫しが多數陳列  
してあつた。後者は現場に於いては中中さうはつきりせず、またゆっくり見てゐることもできなかった  
が、ここでは充分觀覽し得た。

車夫は涅槃寺へ案内するといつた。どうせ下らぬとは思つたものの、ひまつぶし位の考へて行つてみ  
たら、果してつまらなかつた。ここに極新しい塔婆が一基あつた。これは古いのを塗り直したのか、或  
は新しく築造したのか知らぬが、見たところは相不變まっ白で至極新しく見えた。要するに態でかけ

る必要は全くない。これだけで驛へ歸つた。九・四〇から一二・四〇迄雇つたから正に三時間なのに、車夫は涅槃堂への往復をたてに取り、増金を要求したから、これは直に撃退したが、馴れぬ人殊に初めての人は注意が肝要である。すべてに氣をつけないと田舎もの扱ひにされる。

午前中は左程でもなかつたが、午後は大曇りとなり、暗雲低迷時少雨あり。若しこれがひどくなつて、先年の様にアナラジャブラとマダワチチャ (Medawachchi, Madawachichi, Madawachchiya) (In. Sh.) との間のタンクでも氾濫してカルバートを流しはせぬかといふ心配をしたが、二〇・一五に汽車が古倫母をでた時は全く安心することができた。

## 一六、再び 印度へ

此巡禮記は便宜錫蘭の佛塔から書き出したが、此度の旅行は地圖に矢印を以て記した通り、昭和十年十二月十四日孟買發、ビジャプール (Bijapur)・ハンビ (Hampi) の廢墟・マドラス・ママラブラム (Mamallapuram)・キンビヨナム (Kumbakonam)・タンジョーワ (Tanjore)・トリチノポリ (Trichinopoly)・チンネベリ (Tinnevely)・チルチェンジュール (Trichendur) 等、各地の建築を見學して渡嶋したのだから、それで「再び印度へ」といふことになつたのである。

一月七日朝六・〇〇、タライマンナ・ビーヤに着た時は少し曇つてゐたが、連絡船へ乗つた頃には東方に薄雲が少しあつただけで、よく晴れた。船は時間表通り六・五〇にでて九・一〇にダヌシニコデの

棧橋についた。同時に汽車がくるから、直に乗り込み、又食堂も直に開始する様な仕組になつてゐる。

一〇・一〇汽車が棧橋をでた頃には、一天拭ふが如く洵に綺麗に晴れてしまつた。さうして遙か右手にラメスワラム大堂の東門が、旭日を一ばいに受けて光り輝いて天に沖してゐるのがよく見えた。だから例ひ少時間でもいいから、其見學を決心したのであつた。

汽車はラメスワラム行の分岐點なるバムバン驛 (Pamban Jn.) 着。ところが支線の方は一二・二五でないで發車せぬから、驛で待合はせると一時間と三十二分無駄になる。自動車を探したがそんな文明の利器は、この様な片田舎にはないさうだし、又あつたところでも路面が悪くて通せぬといふ。然らば馬車はないかときかしたが、牛車ならあつた。ところがこれも亦路が悪くから二時間では到底行けぬとの事に、僅か七哩のところだが、如何ともなし難く汽車ののを待った。この汽車は二十七分を費し、一二・五二にラメスワラム (Rameswaram) 驛へ着した。今度でるのが一三・四五だから、五十三分だけある。

斯る際に、従僕の良否、といふよりは氣がきくかきかぬかは、旅行がうまく出来るか出来ぬかに大影響があることは述べるまでもない。なせまた五十三分間ですませやうと決心したかといふに、若し一三・四五にのり後れると、次は一八・五五 (即ち午後六時五十五分) (約七時) しかない) だから、それだと此夜の宿泊地なるマヅラ着は、ま夜中の〇・四〇になる。これでは何とも致し方がないので、是非豫定通り行動せねばならなかつたのである。

終點で下車するなりワッサンは大聲で馬車を呼び、乗るや否や叱咤號令してめくら滅法にかけさせたが、いやに遠い。漸く西門の前といふところへ停つたので、下車したが大變に小さい門で、どうも様子がおかしい。夫れでも此土地には大堂は一つしかないといふので、先づ間違のないことだけは判つたが、マレー案内記(第十二版、一九二六年)によると、島の北部にある周圍三哩ばかりの湖水の中にある高地の上に建てる、といふ様なことが書いてあるので、ササラムにあるセヤ・シャー廟 (Sher Shah) の様なものを考へてゐたのに、池も何もなく、あたりは大して美しくない町があり、表(即ち東側)は一町半も海岸から離れ、此朝ダヌシユコチの棧橋から遙にながめた東の大ゴブラムは、最早東側はすっかり影になつてゐた(第七頁)。

漸く談判して靴のまま廻廊を一周する許しを得た。此大堂は廻廊さへみれば他はまあどうでもいい。それでも北側の廻廊を西から東にぬけ、海岸まで行き更に南側の廻廊を逆に東から西に出で、待たしておいた馬車へのつた。驛へかけ付るなり車へのるといった有様で、随分忙がしかったが、それでもワッサンが頗る敏捷に働いたので一分一秒の無駄なく、一四・二三バムバン驛から汽車にのり込み、其ため一九・三八に無滞マヅラ (Madura Jn. 地圖III 6 左上) 驛に着することができた。

大正十二年一月十八日、初めてマヅラに着いた時は、直にD・B・へ行つて泊つたが、今度は驛も改築され、其二階に立派な室が澤山とつてあるから、泊るところに不自由はないと、前からワッサンが知つてゐると見えてさういつてゐるが、此所につくなり彼は苦力を呼び、荷物をかつがせて樓上に私を案

内した。成程大變に工合のいい室が十ばかり並んでゐて、居心地も大分よく、食堂は階下にあるし、何一つ不自由はなかつた。

翌八日には大堂とテッパ・クラム(沐浴用大タンク)とを再見學し、同夜マヅラ發九日朝マドラス着、一泊の上十日にはコンジベラム (Conjeevaram) に向ひ、同地のD・B・に二泊して古い印度教の殿堂數棟の見學を了し、十二日三度マドラス歸着泊、十三日朝八・三〇マドラス・セントラル (Madras Central) 驛發、ボンベイ・エクスプレスで十四日朝一〇・一五にボンベイ (V・T・) 驛歸着、第一回の旅行を終了したのであつた。

此旅行は一日ものばすことができなかった。して出来ぬことはないが、費用に多大の相違を來すからである。毎年耶蘇降誕祭に近づく、各鐵道會社で特別往復割引券 (Concession Ticket) を發行し、通期期間十二月十三日から翌年一月十四日迄(正午より正午迄といふ)、往復で全運賃の1/3だけ割引となるから、大した相違であるが、同じ線路を往復せぬといけないうである。だから私は十二月十四日夜ボンベイ發(十三日には出かけられなかつたから)、往路にホトギ(地圖II 4)・グンタカル(地圖II 5)間を棄權し、ホトギからビジャプール(地圖II 4)・ホスベット(地圖III 5)經由グンタカルに至る間の切符は別に買求め、更にマヅラからチンネベリ(地圖III 6)間は、また特別割引往復切符を買ひ、其他錫蘭嶋に於ける分と、バムバン・ラメスワラム間(此間一等車なし)等は、何れも別に買ったのであるが、十四日正午迄にボンベイに歸着せぬと、切符は無効となり、全額を支辨せねばならぬことになるから、大に都合して一ぱいの期限迄を有効につかつたのであつた。

\* マドラハトリチノポリーノ南九十六英里ニシテ……停車場ノ樓上ニ投宿セリ此地モ亦古來一王國ノ京城タリシ所ニシテ……市中ニ古ヘノ宮殿ヲ存ス旅宿ニ朝食ヲ喫シタル後チ先ツ有名ノ寺觀ト宮殿トヲ巡覽セリ。

\*\* 寺觀

婆羅門宗ノ大寺觀ニシテ南北ノ長サ八百四十七尺東西ノ長サ七百四十四尺アリ規模壯大ノ石造ニシテ寺中ニ九百九十本ノ石柱アリ俗ニ一千柱ノ寺觀ト稱ス分テ數部ト爲シ巨石ヲ以テ彫刻セシ無數ノ偶像ヲ羅列シ内院ハ晝尙ホ暗黒ニシテ常ニ燈火ヲ點ゼリ外國異宗ノ人ハ此内ニ入ルヲ能ハス又廊下ノ中央ニ方形ノ小池アリ池水腐敗シテ綠色ヲ帶フト雖モ宗徒ハ之ヲ靈池ト稱シ或ハ浴シ或ハ喫スト云フ又最モ驚クヘキ建築ハ九基ノ高塔ニシテ其最モ大ナルハ高サ二百五十二尺アリ悉ク石造ニシテ方錐形ヲ爲シ無數ノ偶像ヲ彫刻セリ……(高塔にコブラと假名をつけたのはゴブラの誤植であらう。コブラでは眼鏡蛇の様である)。

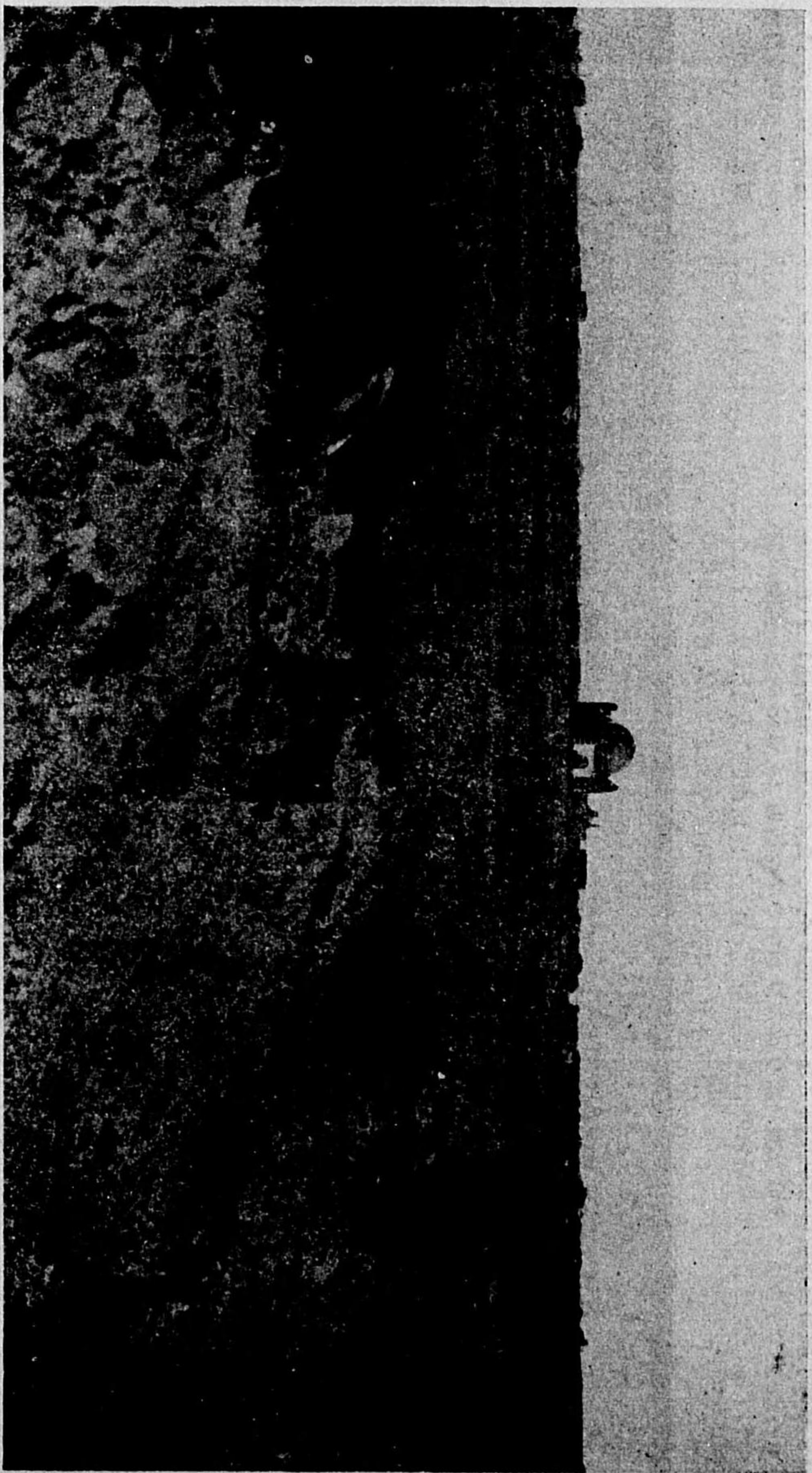
\*\*\*

テッパカラム池

市外ニアリ方形ニシテ南北ノ長サ九百九十五尺東西ノ長サ九百四十二尺池中ニ小嶋ヲ作り島内ニ寺院ヲ建ツ又池邊ニ石堤ヲ築キ周圍ニ馬車道アリマドラ名勝ノ一トス

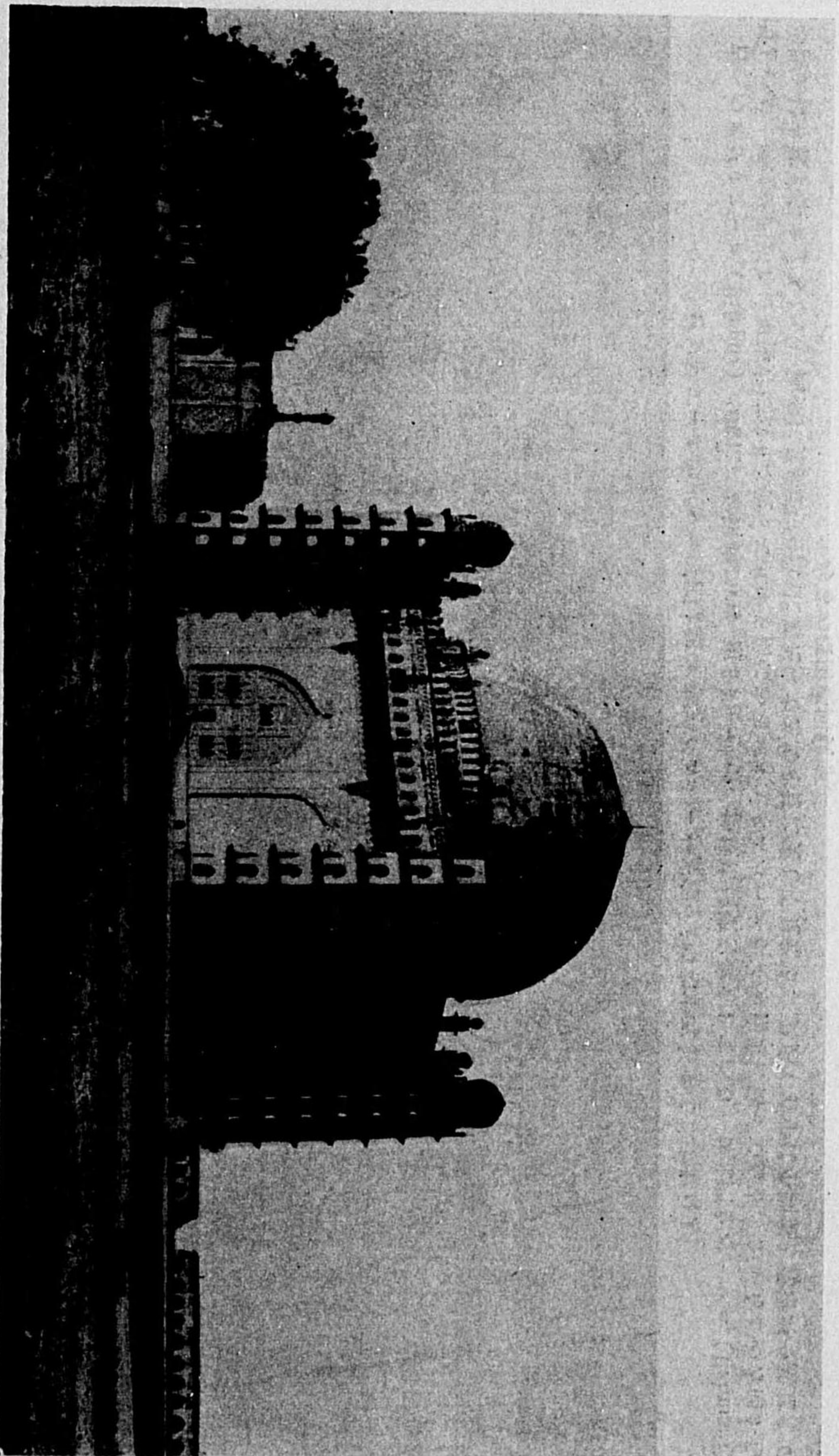
(以上【印度紀行】明治二十年發行、陸軍文庫、第二一八—二二〇頁)

マヅラ堂に就ては【印度旅行記】451頁に平面圖と其名稱を、寫真と解説とは第462—467頁に、記事は同第460—470頁に、更にテッパ・クラムは記事と圖とを同書第471—474頁にのせておいた。尙ほテッパ・クラムと云ふ言葉はマレーの案内記には TEPPA KURAM (South India), a tank surrounded by steps with usually a temple in centre. となる。



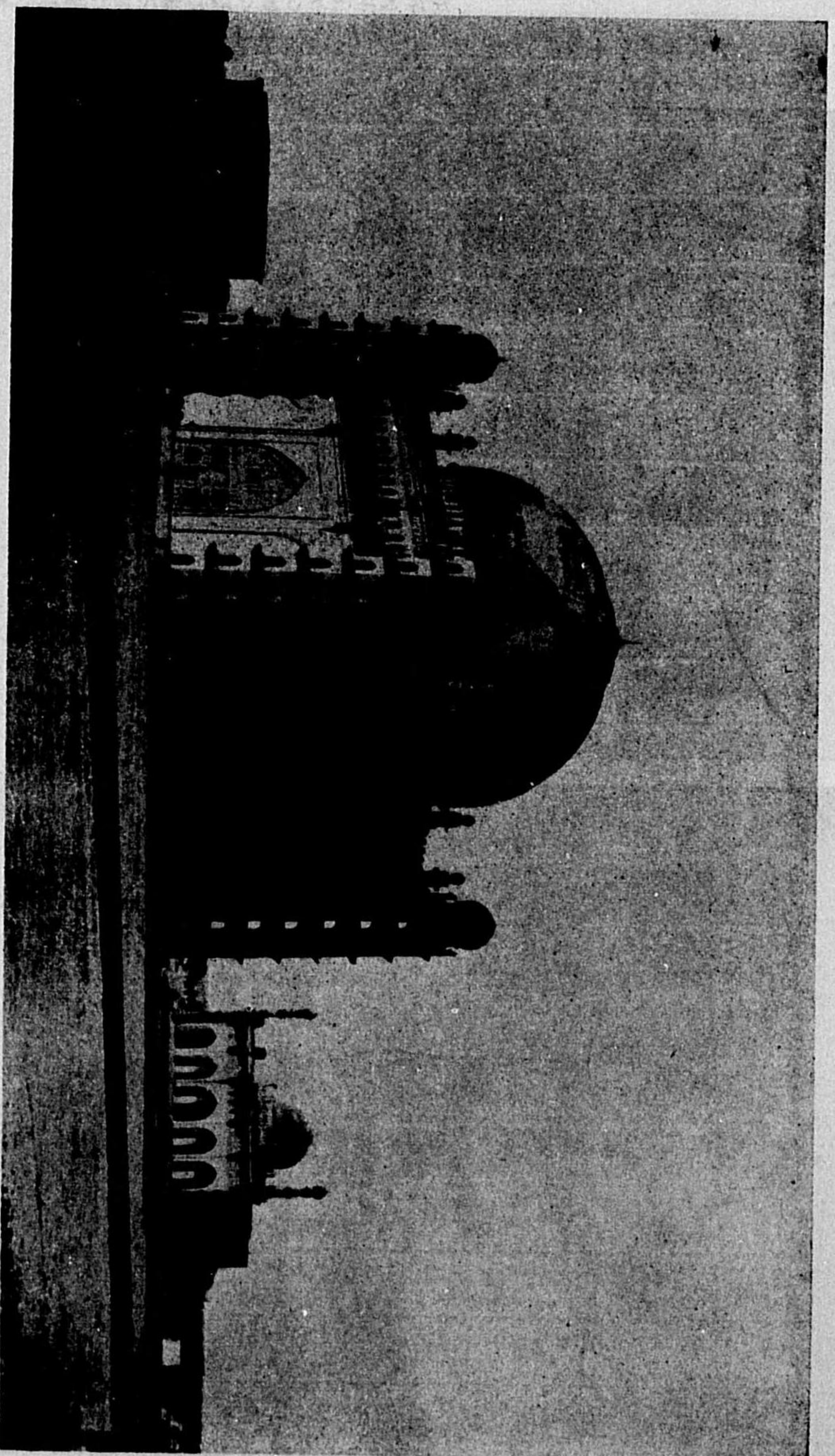
ベジヤアールのパーマニ門よりエル・グムバツ遠望 (昭和十五年十二月十七日)

古ヘのベジヤアール (Bijapur) の町は、東西約二哩、南北約一哩半の地域に城壁を廻らしてある。其北門をパーマニ (Pahmani) 門といふ。驛は此門からは東南方に當リ、従つて其すぐ前にあるエル・グムバツも亦東南方に當つてゐる。だからこの方向からの眺めは午後が最もよらしい。西側に光線が—はいにあたつてゐて非常に美しく見える。其直ぐ右手に小圓蓋と光塔が—基見えてゐるのは附屬回教寺。



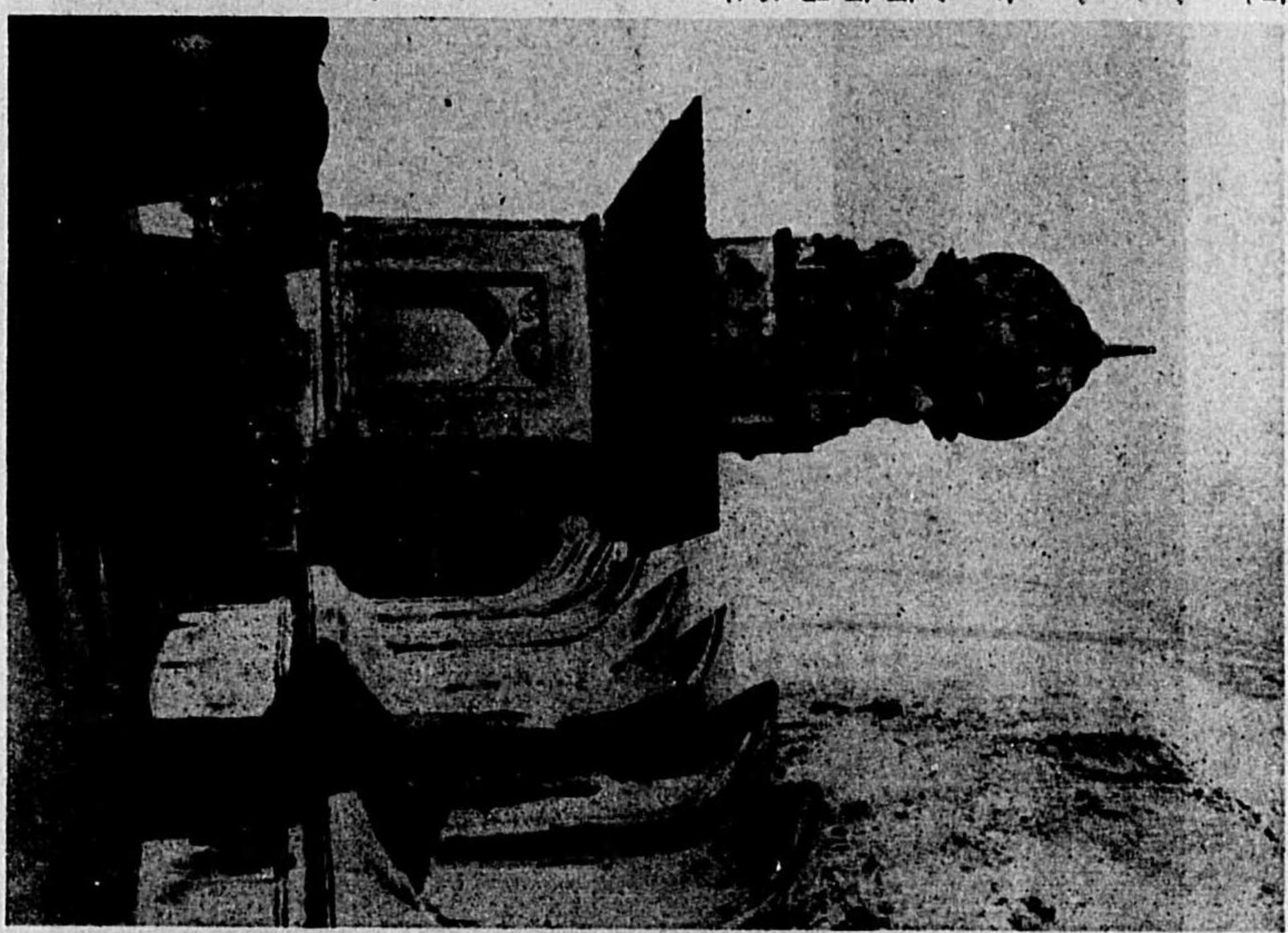
エル・グムバーツを東南方よりみる (昭和十年十二月十五日)

ホトギ驛で乗換へた汽車がビジャプールに近づくと、右手遠方に圓屋根が二つ見え、行手沿線に此建物がよく見える。何しろ其形に特色があるので、直ぐそれと認められる。全體の地がクリーム色で、煉型のところは石だから黒い様な色をしてゐる。エル(Gol)といふのは、圓形といふことで、グムバーツ(Gumbaz)とは圓屋根を意味するペルシヤ語ださうな。四方の八角塔内には階(次頁へ)



エル・グムバーツを東北方よりみる (昭和十年十二月十五日)

(前頁より) 段があつて、屋上へ出られる様にしてある。此建物はビジャプール王國第七代の王なるムハムマド・アチル・シャー(Muhammad Adil Shah)の墓で方形の平面を有し、外法196呎、圓屋根徑約125呎、軒迄の高さ地盤から約100呎、圓屋根の頂上迄約200呎。時代は第17世紀の中葉。小モスクが附屬してゐる。



右。ヨル・グムバーツ西南隅光塔  
同 西側附属小塔  
（昭和十一年十二月二十五日）

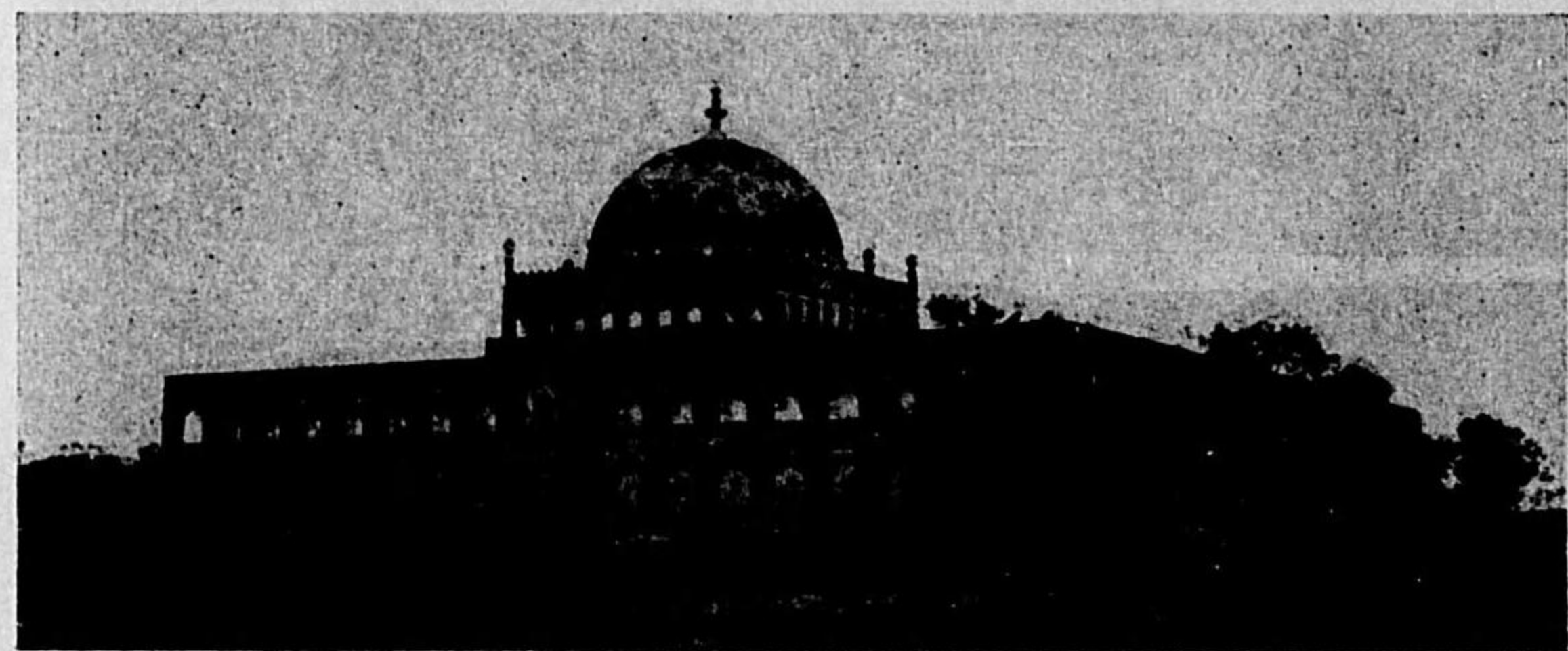
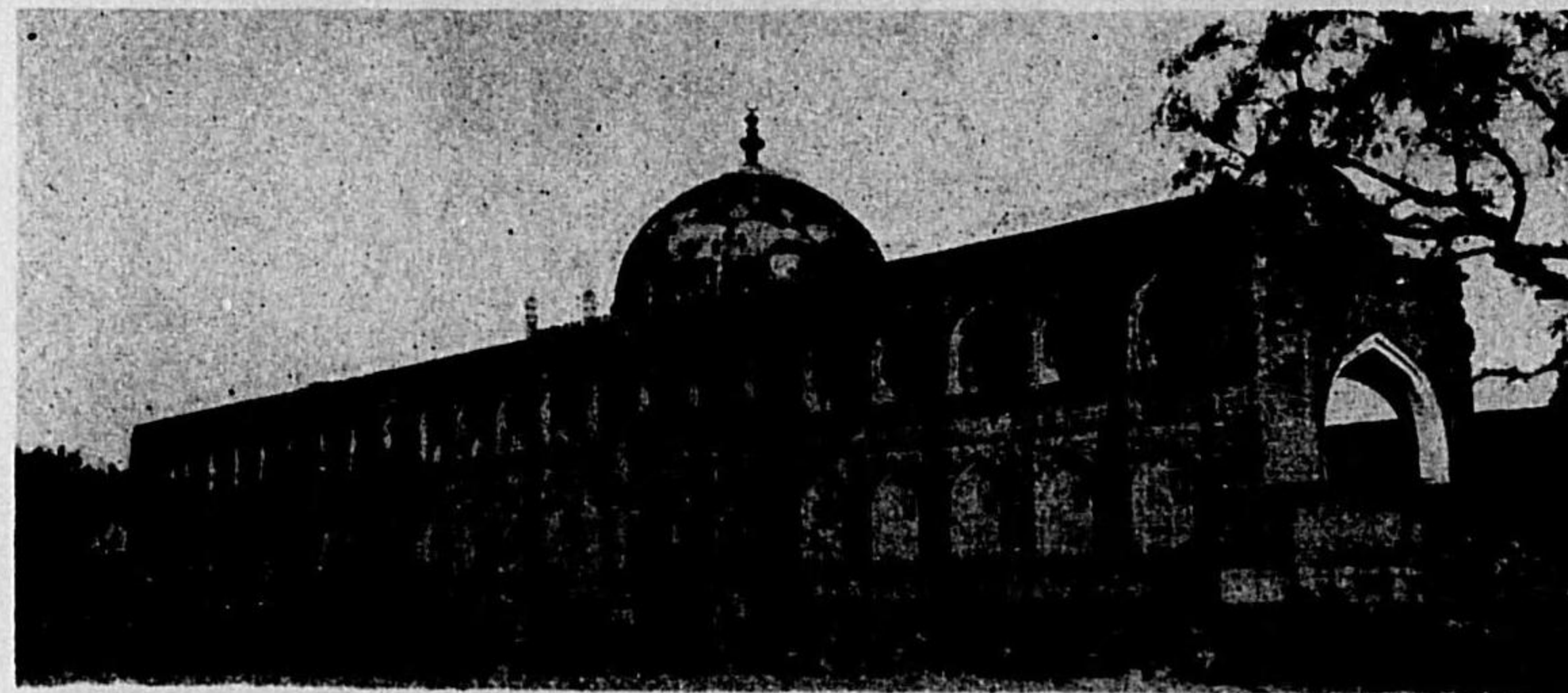
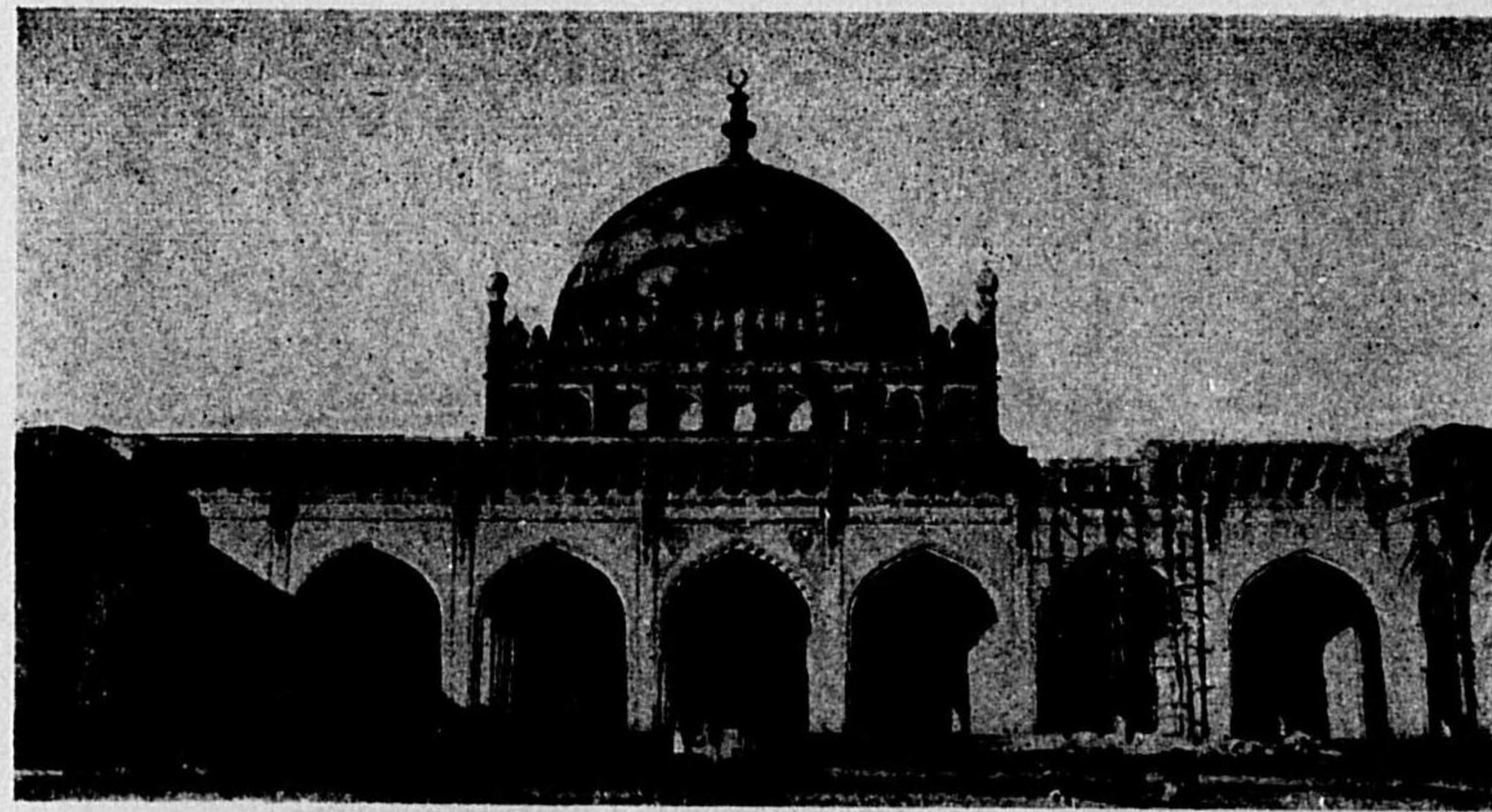
左圖の圓蓋の形を第12頁の圓の夫と比較せよ。



ゴル・グムバーツ断面一部

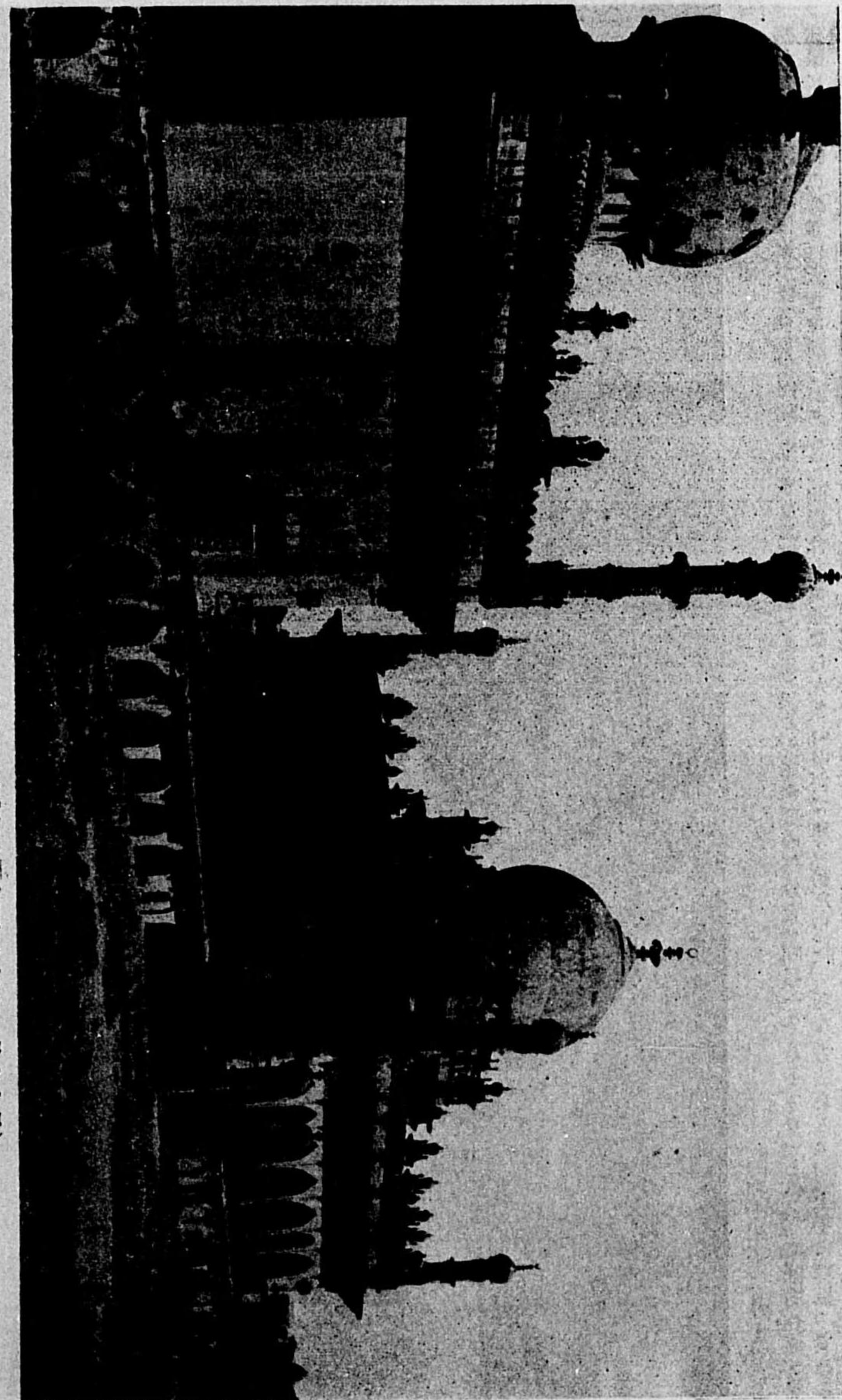
四角な建物に圓屋根をかけると、四隅に大きな弧三角ができる。この三角形の部分を「隅弓」(ゲウキユウ)といふ。東羅馬やサラセン建築には、時に非常に大きな隅弓がある。此場合も普通なら大きいのができる筈なのに、巧な方法を取り、上手に取扱つてゐるから、頗る有名だが、到底二三行で判る様な説明は書けない。先づこの様だといふ事を見せるため、寫眞だけ示しておく。

(昭和十年十二月十五日)



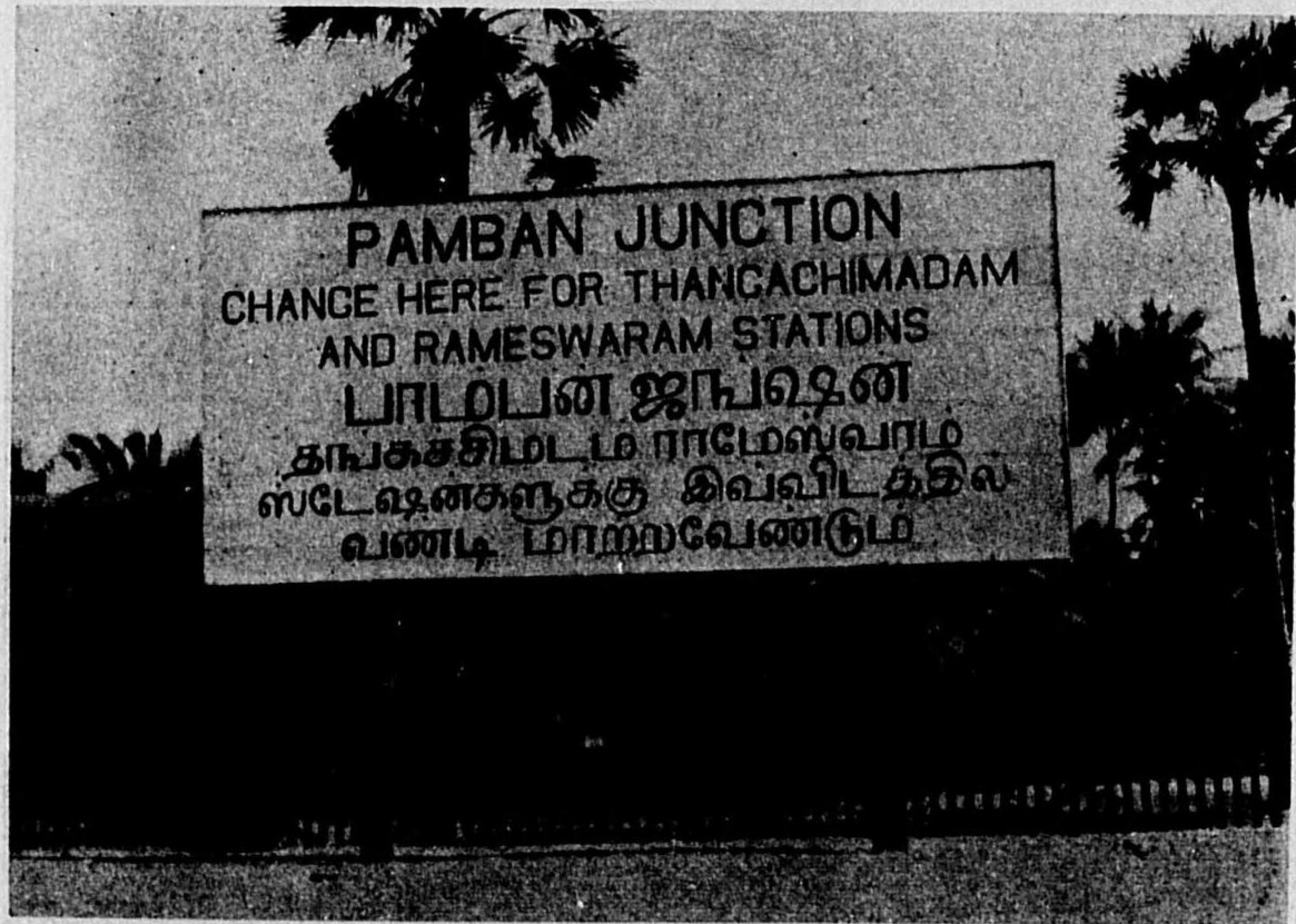
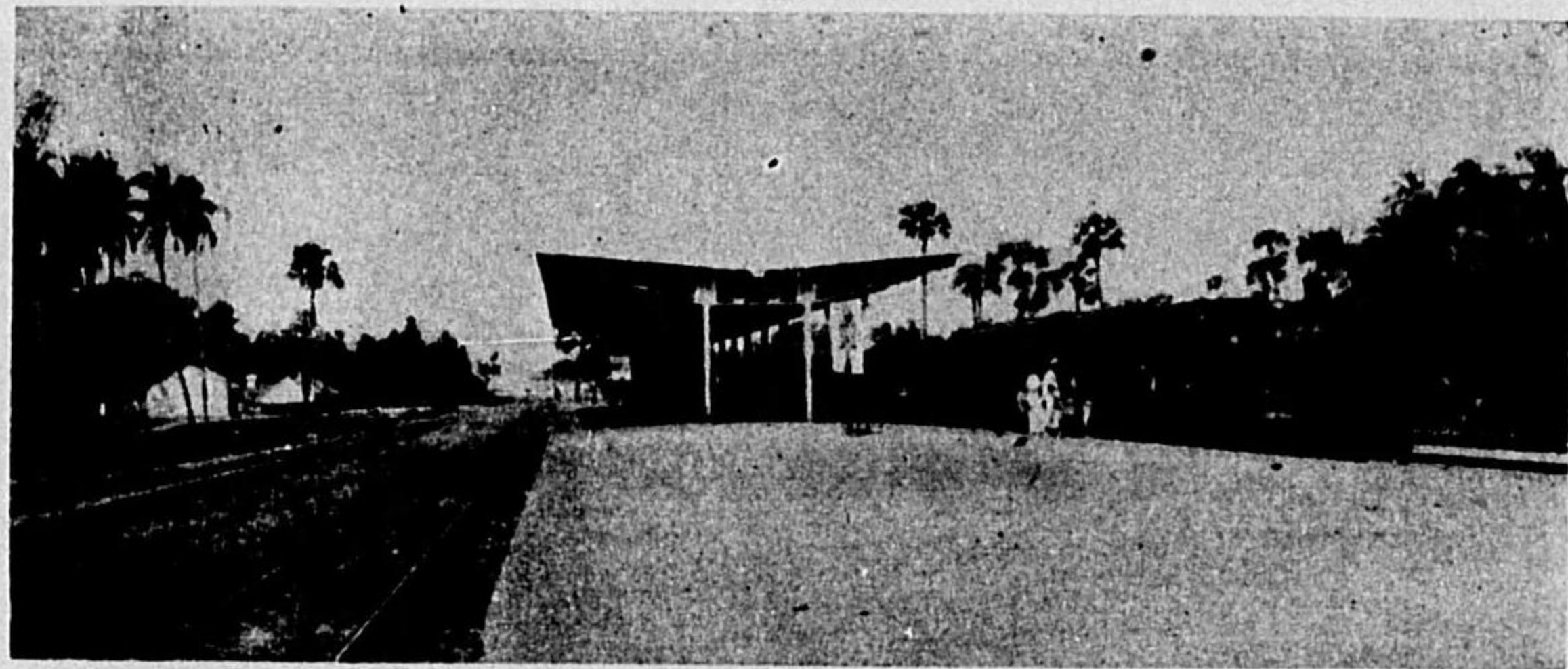
上。 ビジャプールのジャーマ・マスジド正面 (昭和十年十二月十七日)  
 中。 同 側面 (昭和十年十二月十七日)  
 下。 同 背面 (昭和十年十二月十五日)

(正面軒蛇腹の一部修理中で、足代が架けてあり、惜しい事に美観を損してゐる。)



イブラヒム・ラウザに於ける回教寺 (左) と廟 (右) (昭和十年十二月十六日)

イブラヒム・ラウザ (Ibrahim Rauza) は、ビジャプールの城壁の西門の西方約半哩、道路の右側の少し入った広い地域内に、回教寺と相對し建つ。回教寺は東面し、廟は西面してゐるから、ひる日中に行かないと、兩方の正面に日光がさしてゐない。イブラヒム二世 (1580(天正八年)即位) と妃と其他家族四人、併せて六人の墓が内部にある。美しい立派な建築。



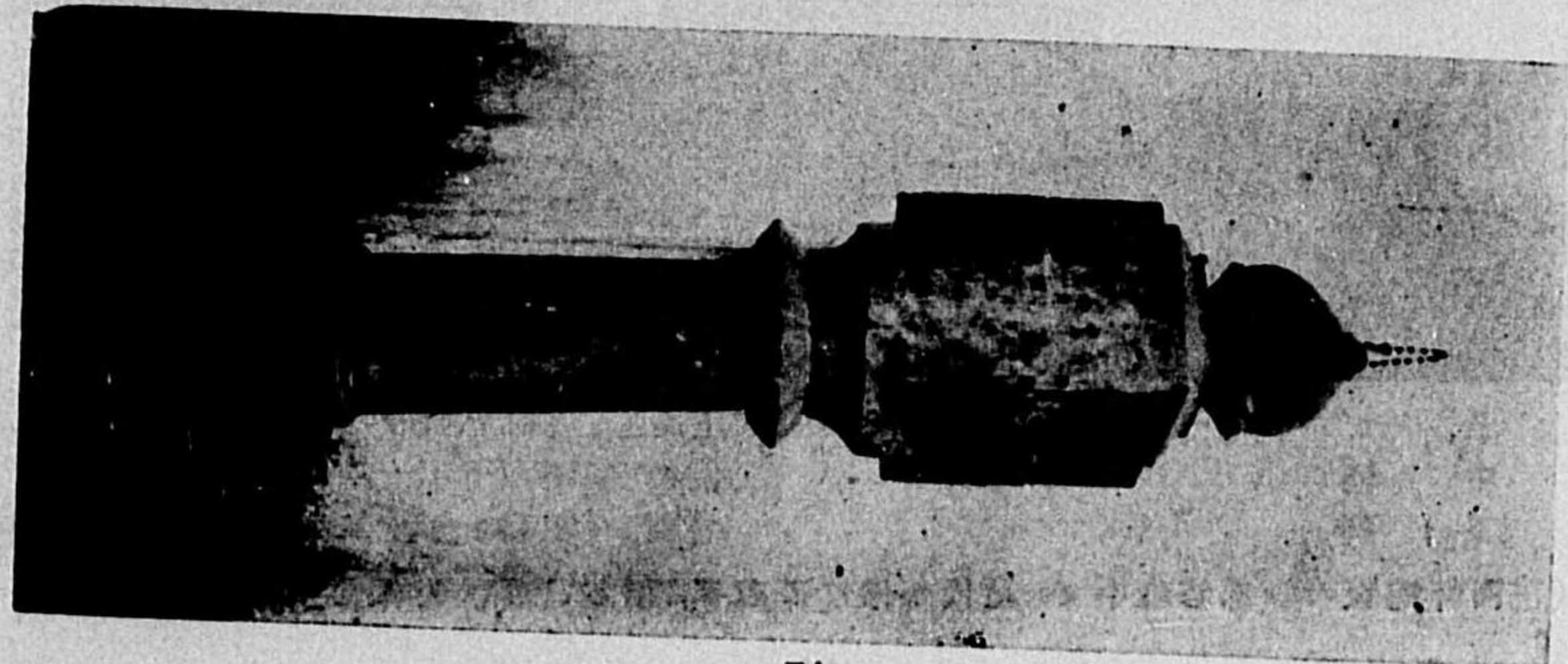
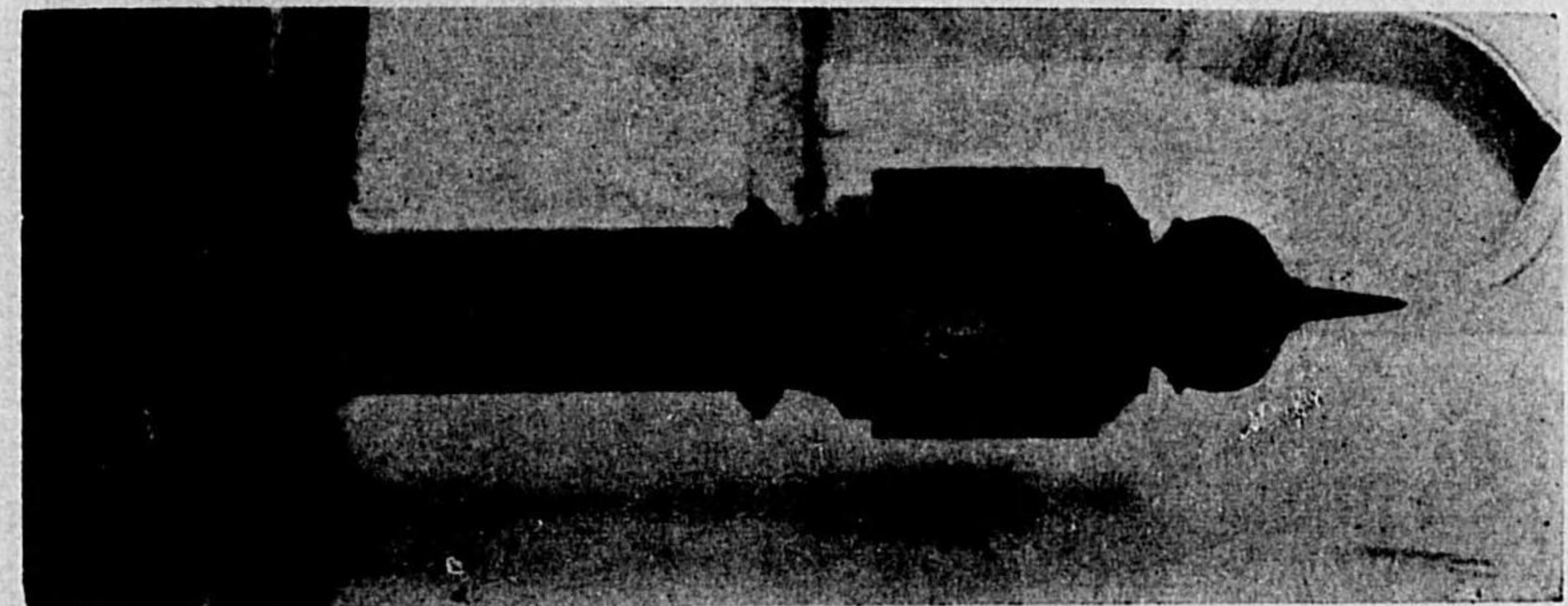
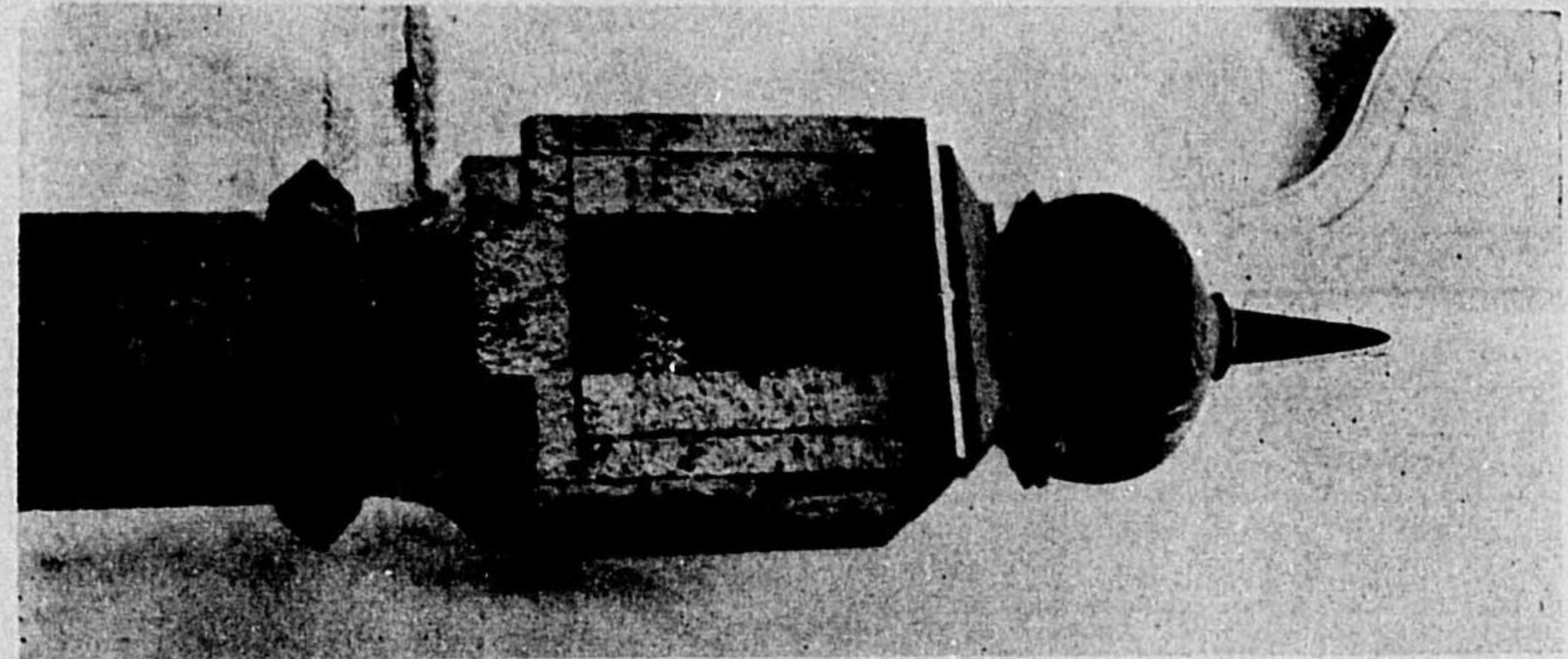
上。ラメスワラム線分岐点パムバン驛風景 (昭和十一年一月七日)  
 下。同 立札 (昭和十一年一月七日)

上圖乗降場の左に見えてゐる線路は、手前の方がダヌシュコチで、先の方がマツラである。だから上り列車は向ふの方をむいて停る。右方に停つてゐる列車は、ここからラメスワラムの方へ行くので、一日に五往復してゐた。汽車の連絡が都合よく行かないので、車を雇ふつもりのところ、車もなく道路も不良で、結局汽車のぞる迄待つより方法はなかつた。

下圖はパムバン驛立札。タンガチマダムだのラメスワラムだの、相當に長い名と思ふかも知れぬが、此位なのはまだ始末にいい方で、長いになると19字位のものもある。例へばチルナッチャッタングヂ(Tirunattiyattangudi)・チルチットラムバラム (Tiruchchittrambalam) 等で、次は18字のドッダッパナヤッカヌール (Doddappanayakkannur)、併し又短い方ではウナ (Una)・ルク (Ru:) 等もある。ナバ (Naba)・タダ (Tada)・マンザイ (Manzai) 等は我々に親しみがあつてよろしい。



右。アサリ・シクリン廟内の石燈  
 (昭和十一年十二月十五日)  
 中。シヤイヤ・マズジト内部の石燈  
 (昭和十一年十二月十六日)  
 左。同 部分  
 (昭和十一年十二月十六日)  
 (右・中の物指は曲尺の一尺・左火袋上のは曲尺の約一尺二呎)  
 何れも同一意匠。中臺が大變に小さいのと、笠がないのとで趣きは大分異なつてゐるが、竿や基礎等は我國の夫れによく似てゐる。これと同一の形式のものを、私は同じくビジヤアールのエル・グムベリーツ及びイヒラヒム・ラウサでみた。だから或は此邊の地方色かも知れない。印度に於ける石燈の實例として面白いものである (第166頁参照)。







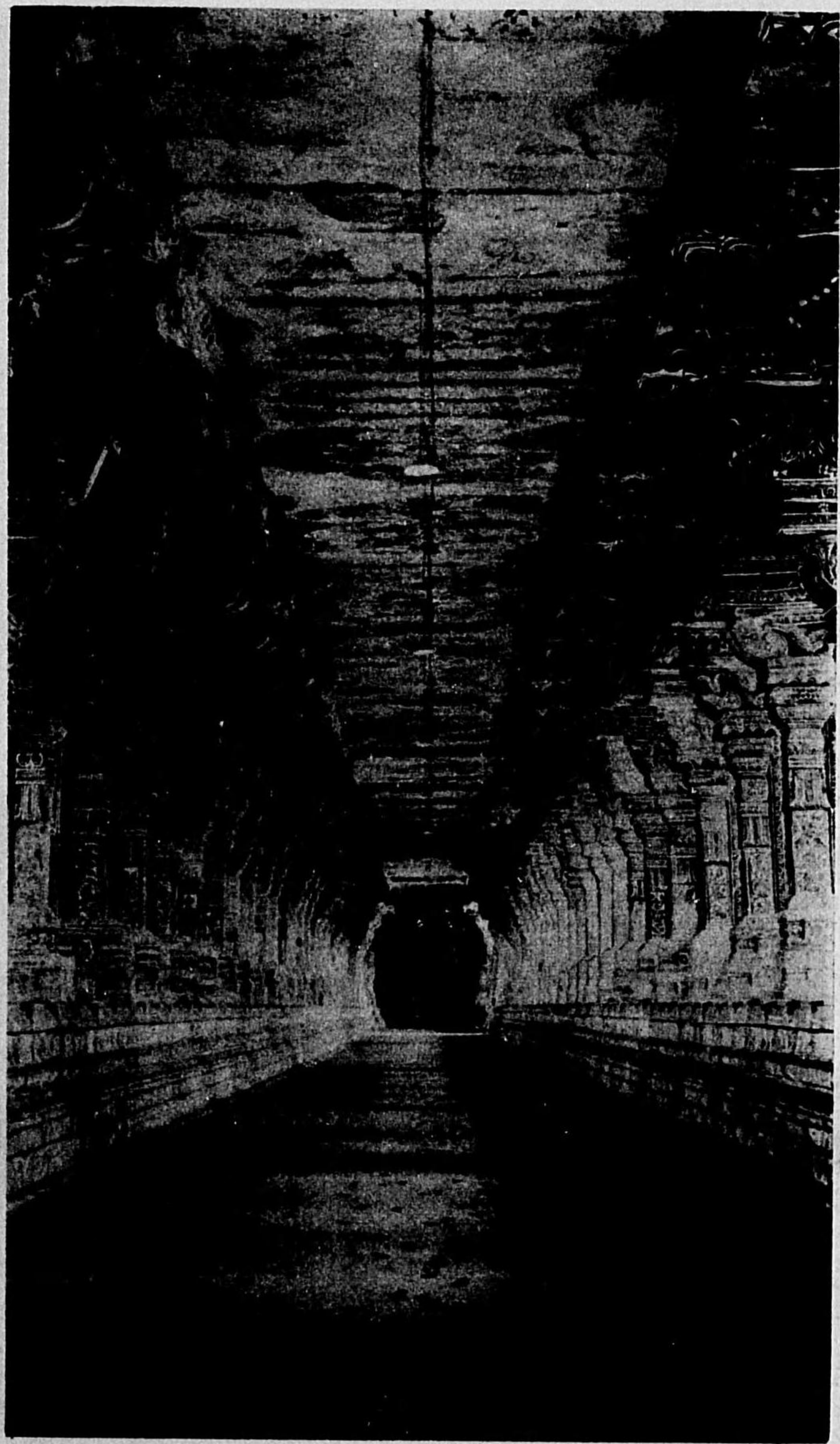
ラメスワラム大堂西面ゴブラム

（昭和十一年一月七日）  
驛から大堂迄随分ある。従者が大聲叱咤して馭者を督責したので、瘦馬は馳通したが、それでも十五分かかった。ついてみたらこの通り、ダヌシユコチあたりから遠景によく見えたゴブラムは、どこへ行ったかまるで判らないので、ことによつたら別の建物ではないかと思つたが、この土地には祠堂は一つきりないさうで、漸く誤りでないことを知つた位に、小さい貧弱なゴブラムであつた。



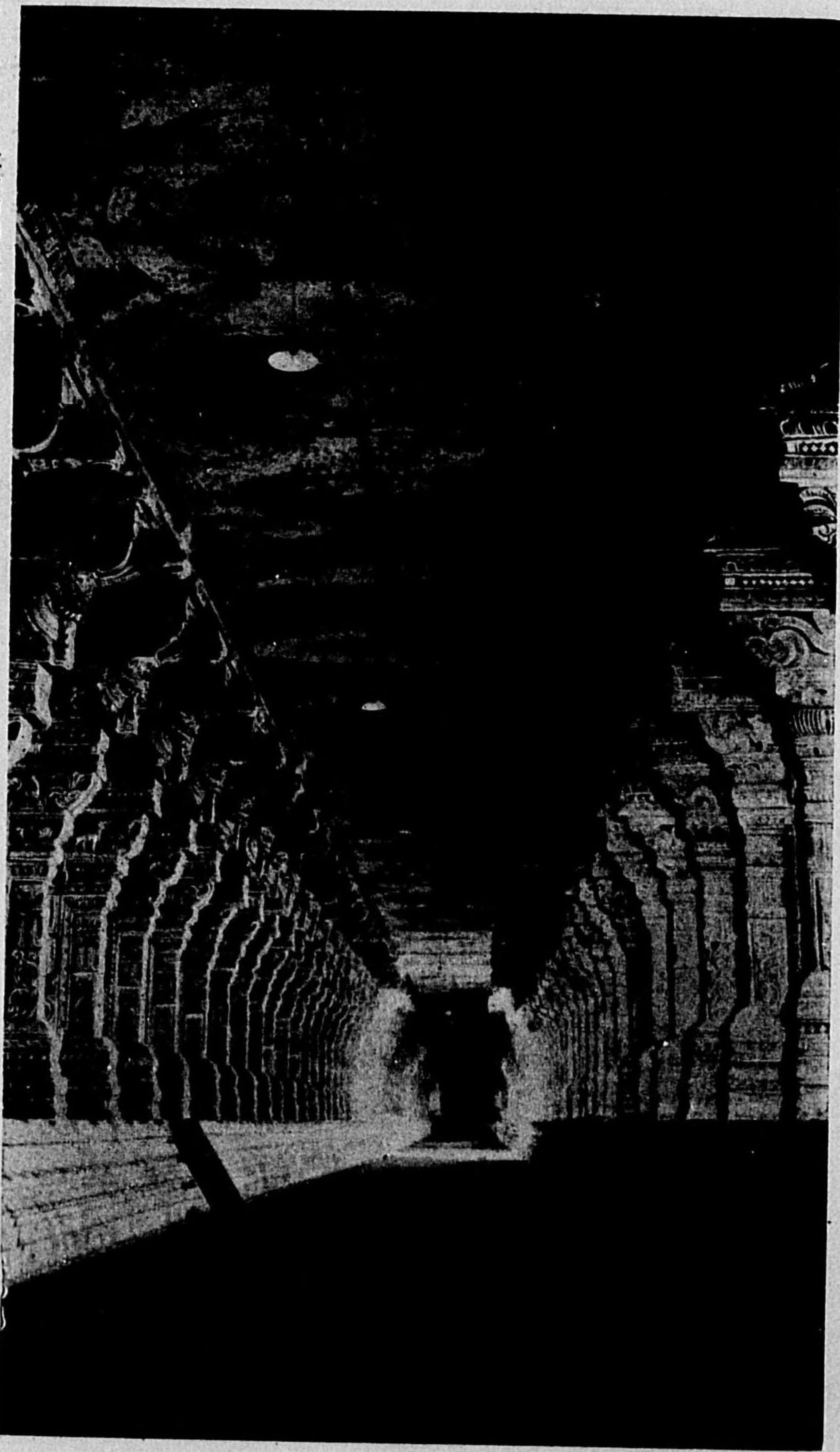
ラメスワラム大堂東面大ゴブラム

（昭和十一年一月七日）  
昭和十年十二月三十一日、錫蘭嶋へ印度の方から行く時に、遠方に初めて此大門をみて、歸りには是非一見したいと思つてゐたが、歸りには其通り漸く目的を達することが出来た。但し午後になつたので、太陽が南方へ行つて了ひ、東側はかげになつてしまつたのは惜しかつた。驛の方から行くと、西門の前でゐるから、大廻りをしないとこちらへは出られぬ。



ラメスワラム大堂北側廻廊  
此圖は北側即ち左側の廻廊を西から東に向つて、次圖は南側即ち右側のそれを東から西に向つてみた寫眞である。此大堂は廻廊が立派な點で頗る有名で、フアガツソンも其著「印度及東洋建築史」に於いて随分褒めてゐるが、私のみた南印地方に於ける（次頁へ）

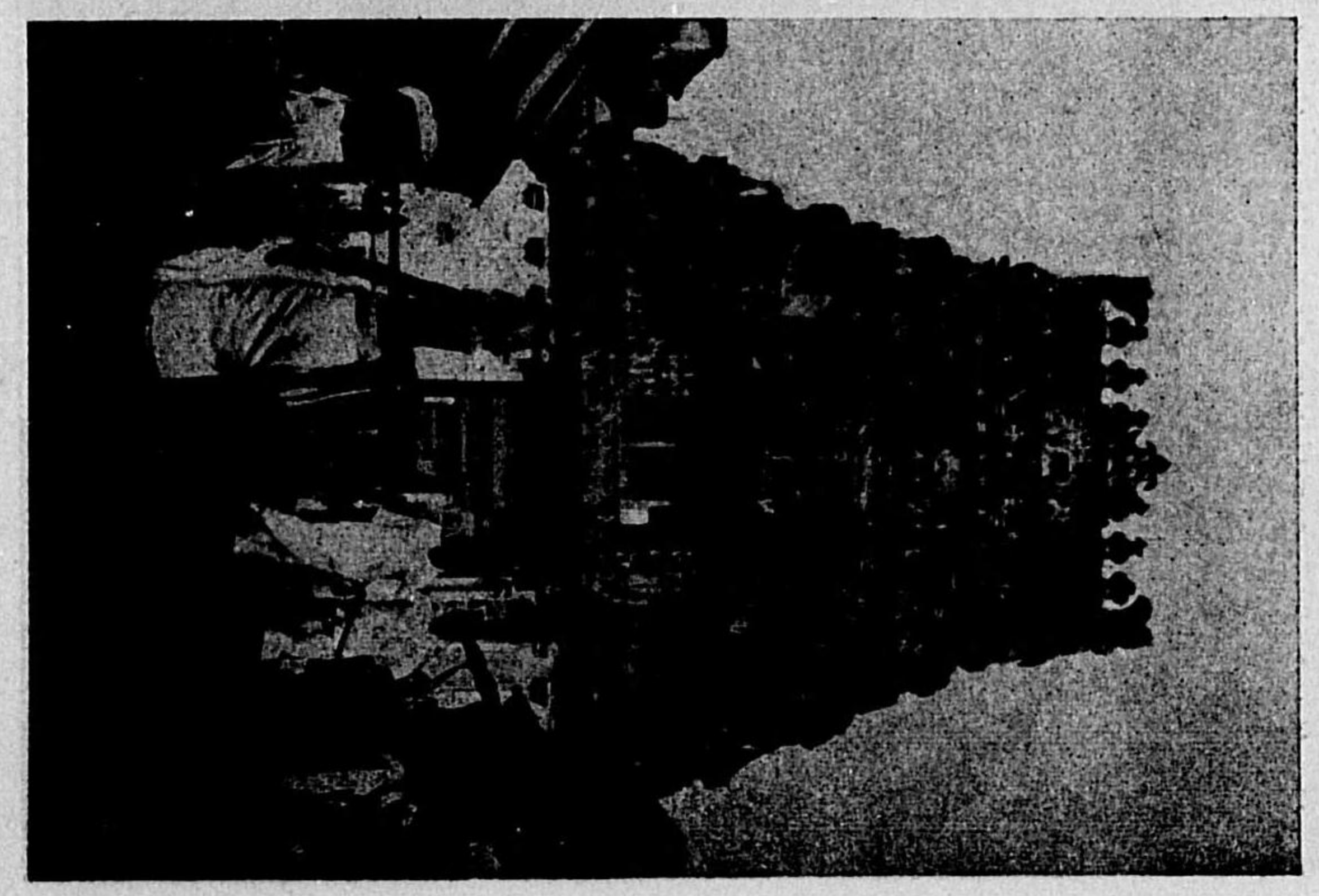
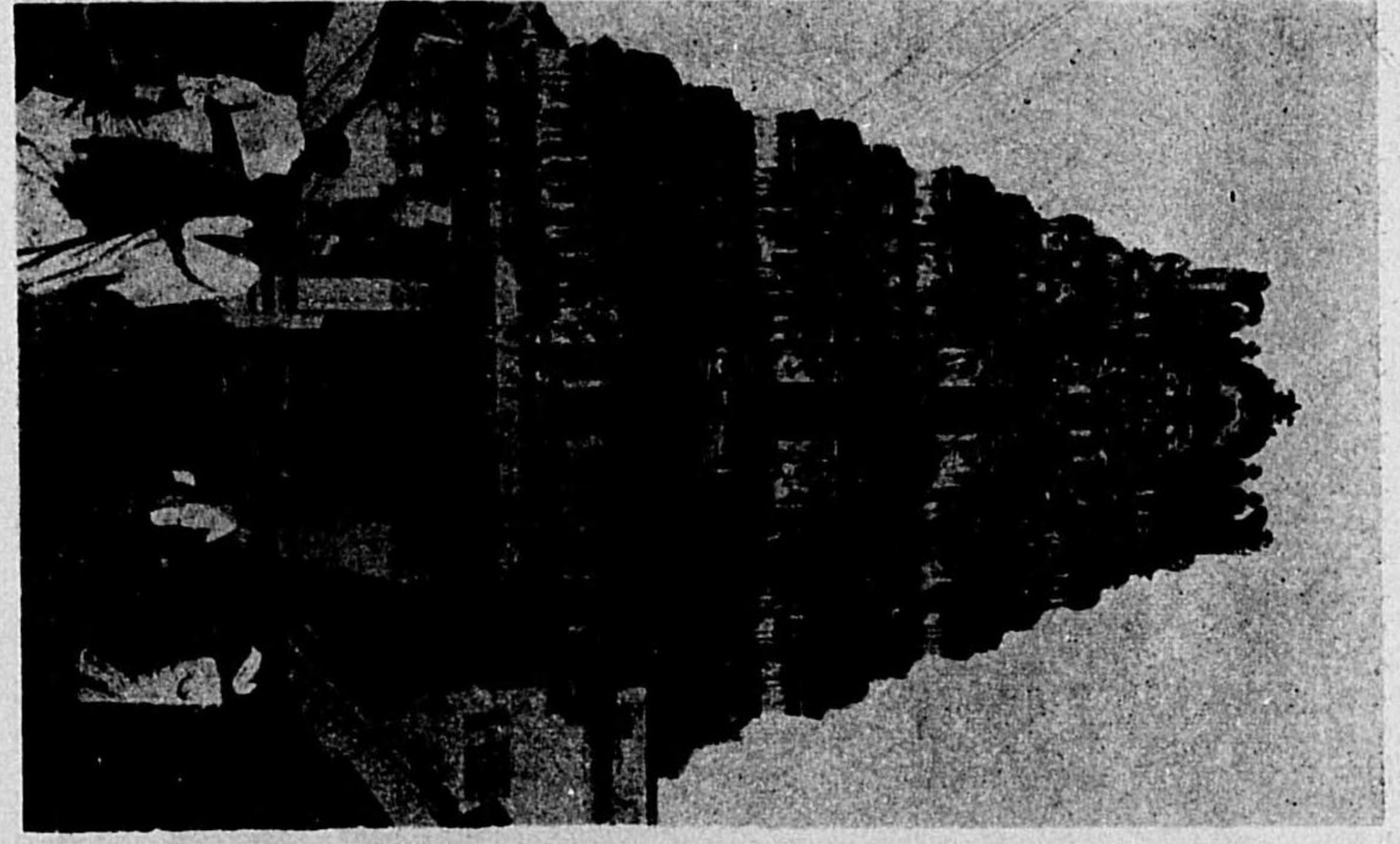
（昭和十一年一月七日）



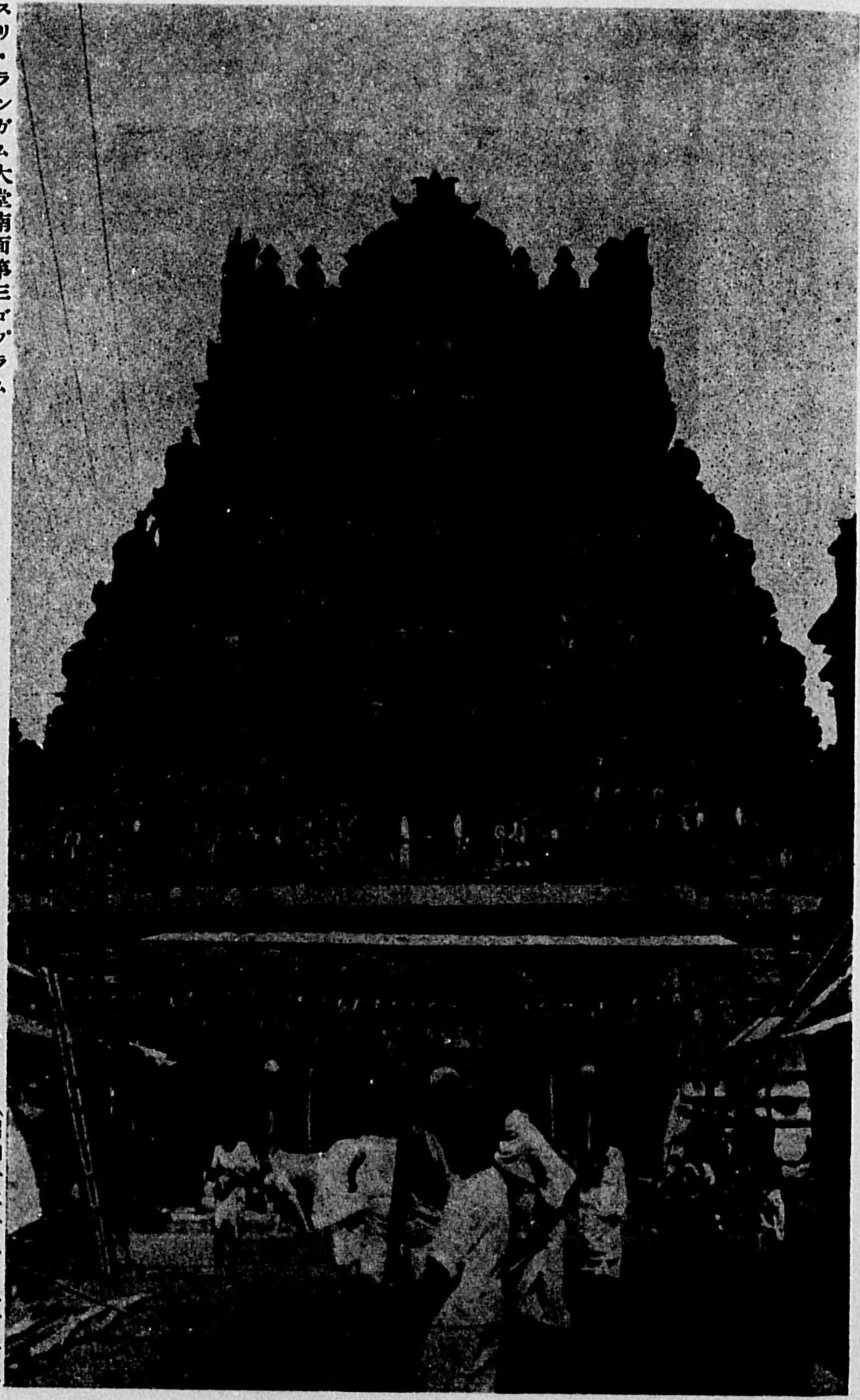
ラメスワラム大堂南側廻廊  
（前頁より）印度教の大殿堂のうちでは、この位長くて堂堂たるものは他になかった。右も左も同じではあるが、餘り立派だから向きをかへて兩方を寫しておいたのである。本殿はどの様であるか異教徒は近づくべくもないので、様子は知らない。あぶなく靴を脱がされかけたが、辛じてそのまま廻廊を歩き且つ寫眞をとる事を許されたのは幸であつた。

（昭和十一年一月七日）

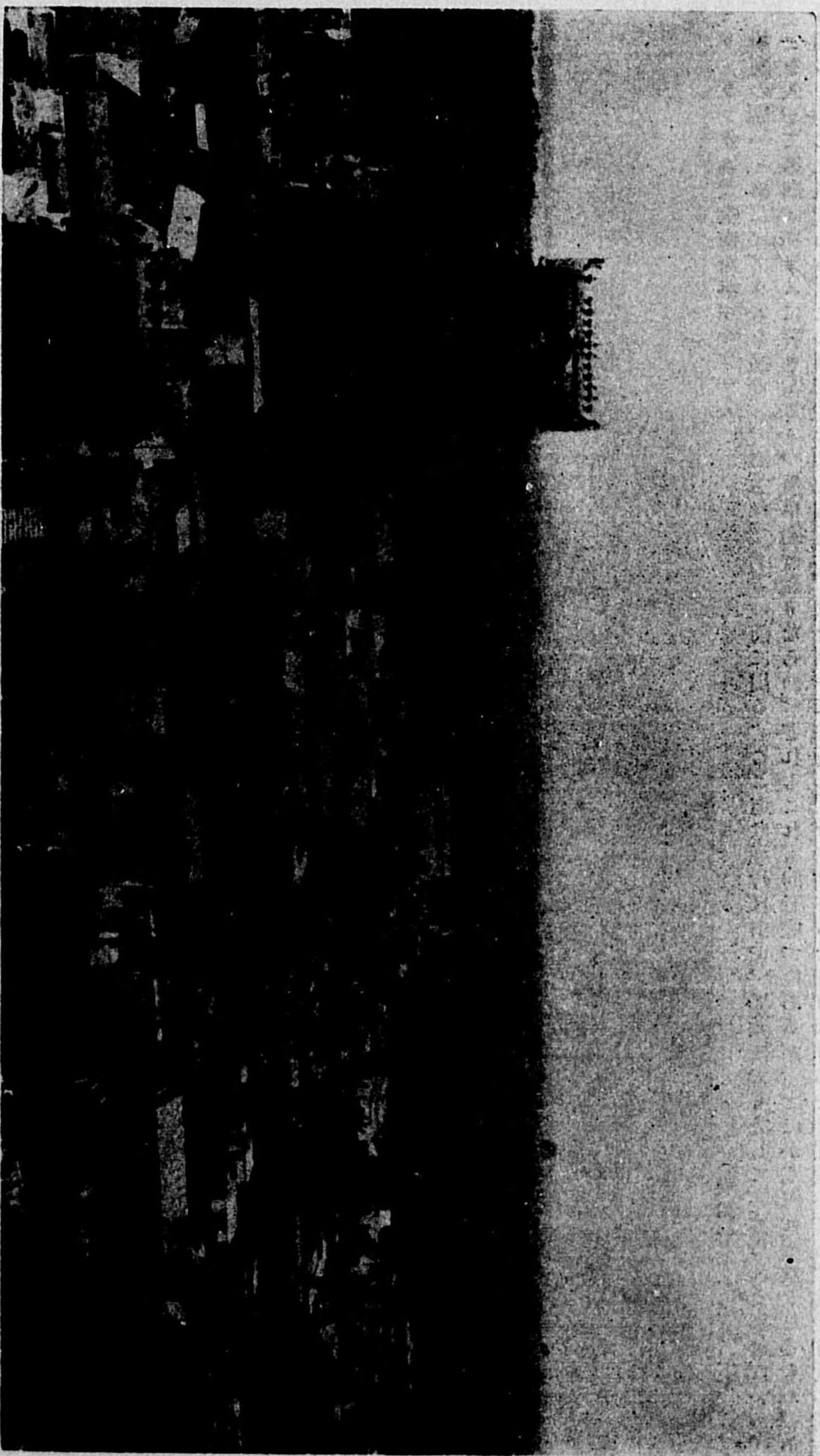
右。スリ・ランガム大堂南面第一ゴブラム  
 第二ゴブラム  
 左。同  
 トリチノホリ（Trichipoly）の北三哩には、南印最大と稱する大殿堂あり、ス  
 リ・ランガム（Sri Langam）大堂として知られてゐる。ゴブラムばかり  
 でも南方に六、東方に三、北方に五、西方に二、一ヶ位は間違へたかも知れないが、  
 これだけでも十六ある。殊に南から北へは合せて十一、84頁以下四圖に示した様に、  
 實に壯麗である。



スリ・ランガム大堂南面第三ゴブラム  
 前圖の第一・第二ゴブラムを通ると、第三ゴブラムの前に出る。ここ迄は通行自由で、異教徒でも決してとめられる事はないが、  
 ここに入って第四ゴブラムに突き當ると、最早通行罷りならぬ。どれもこれも同じ様ではあるが、とにかく何れも堂堂たるもの、か  
 う揃うと洵に立派である。この第四門の前を右折し、突き當つて左折し、マンダバムを通りぬけると千柱堂へでる。其千柱堂の前右  
 手にあるのが即ち東面第三ゴブラムで、83頁に掲げた高大なる門である。



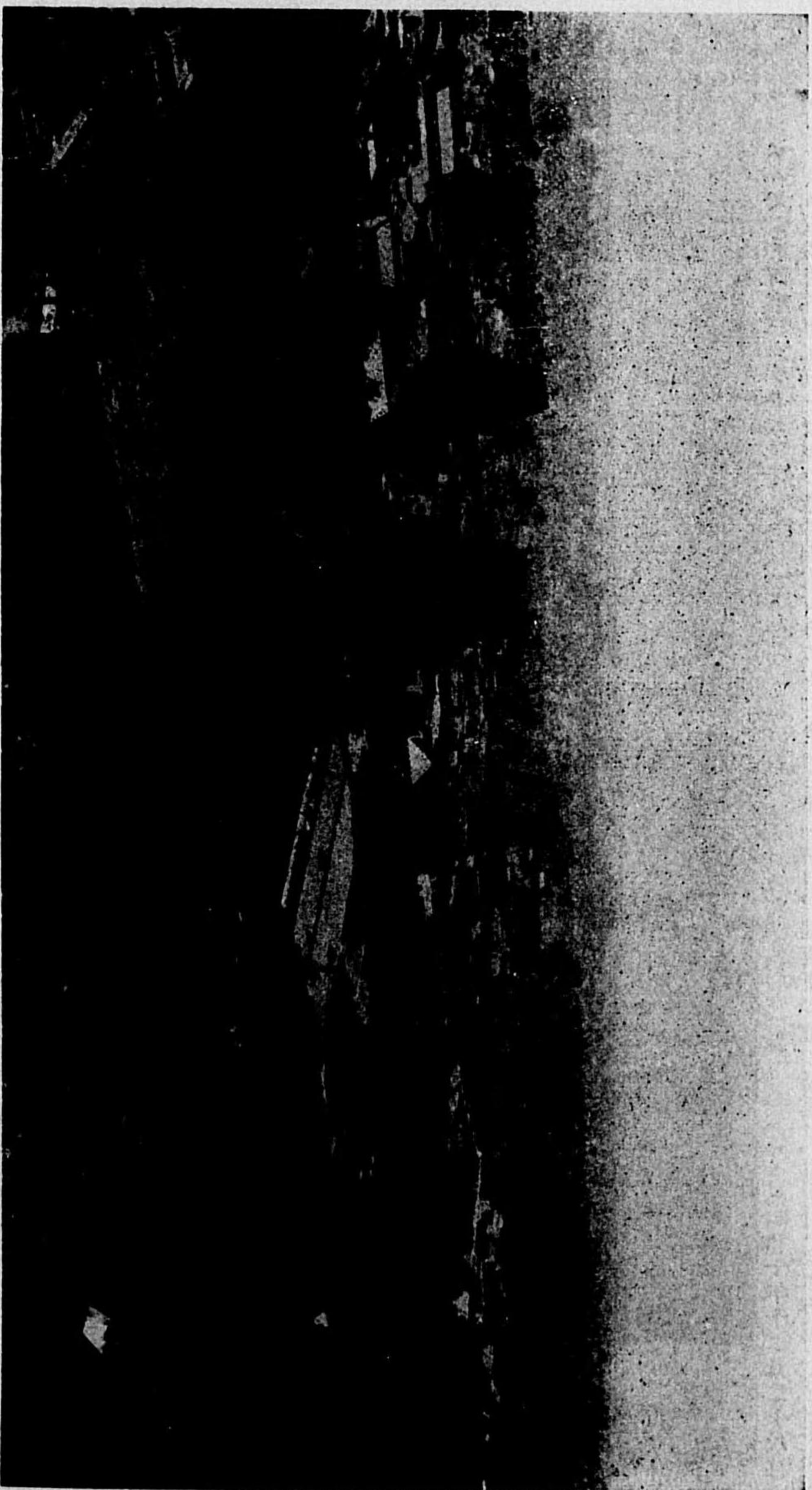
(昭和十年十二月二十八日)



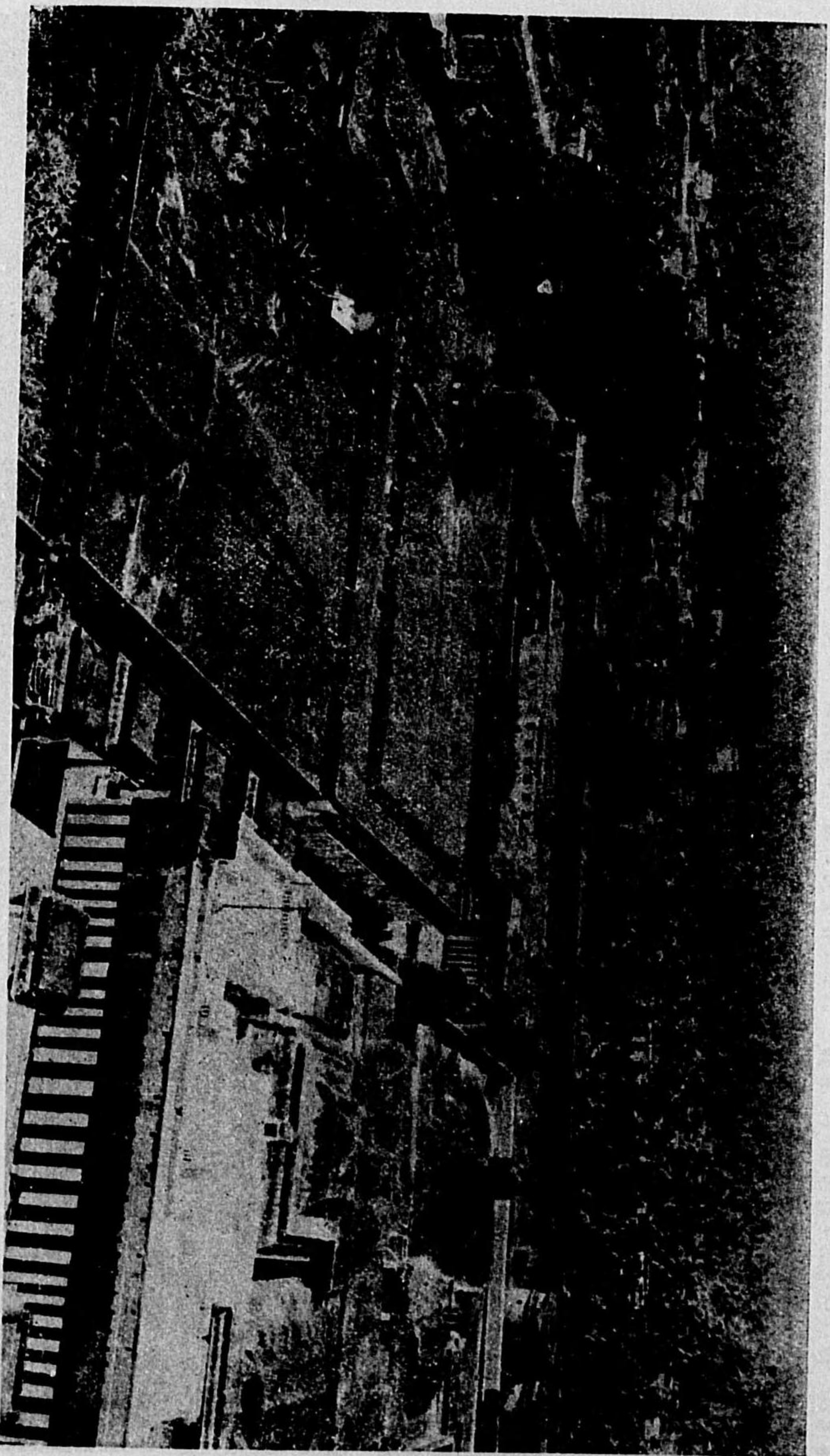
スリ・ランガム大堂東第三エゾラム上より東方の遠望（昭和十年十二月二十八日）  
 前頁に示した大エゾラムの最上階には四方に窓がある。其東の窓から東をみたところ、圖の左手に尙ほ二つ門が見える。近く上部だけ見えてゐるのは第二、全體寫つてゐるのは第一門である。右方窓が雲煙縹渺たる地平線に、袋網たる梯形が二つ見えるのは、ジャムラケスワラム堂(Jambukeswar Temple)である。此堂はスリ・ランガム堂の東方約1¼哩にある。祭神はシバでこの方は大分規模も小さい。併し凡そ第17世紀の初頭と考へられてゐる。こちらの祭神はビシュヌ。



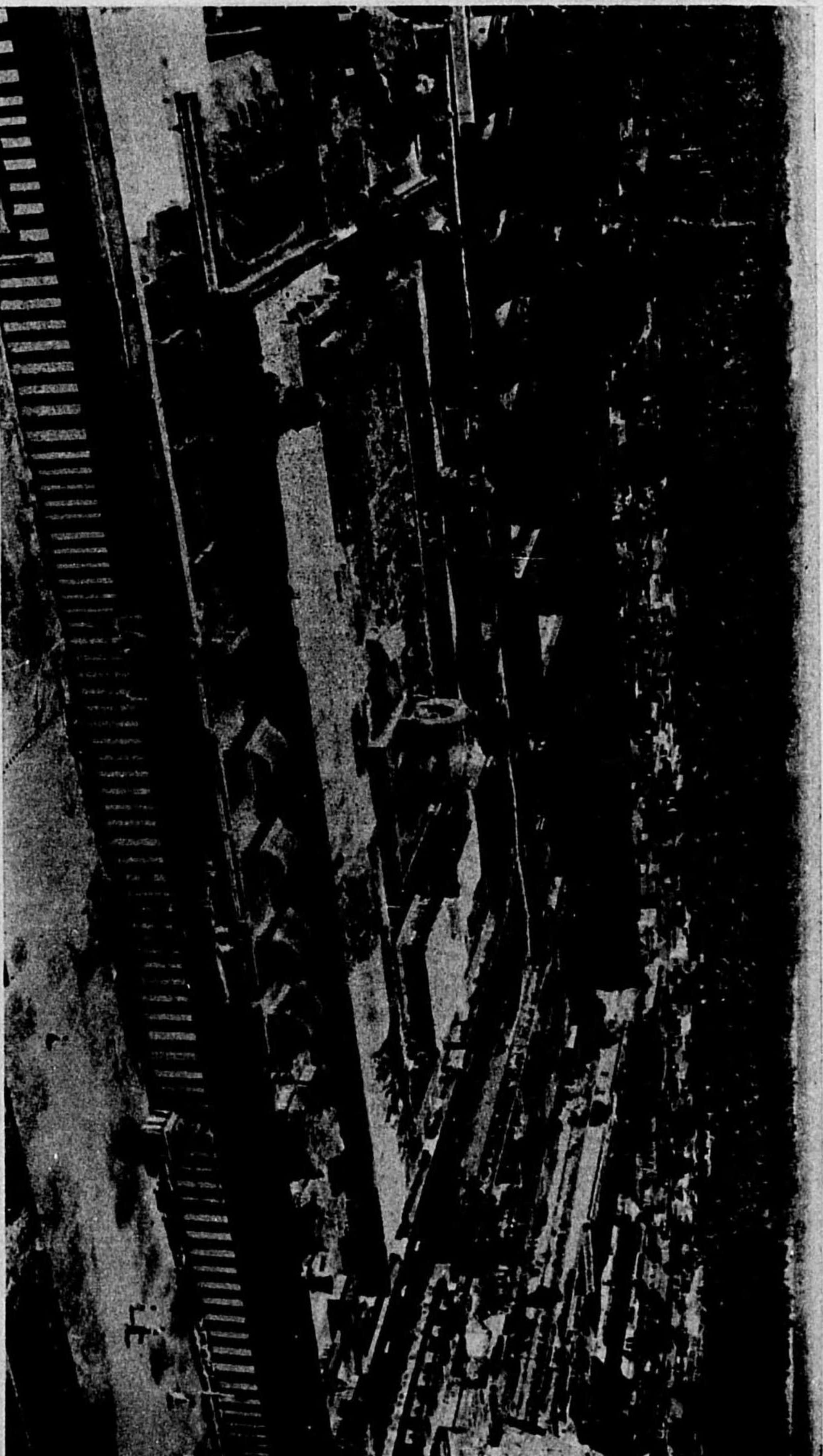
スリ・ランガム大堂東面第三ゴプラム  
 スリ・ランガム大堂東面第三高門は圖の様に高大であるが、下から十一階目、切妻下の窓の所迄は、階段により容易に登る事ができ、そこから祠を俯瞰する事も、景色を觀賞する事もできる。前圖は此高門の頂上から撮つた寫眞である。此高門はペライ・ゴプラム(Velai Gopuram)といひ、其高さ一四六尺、最美なる門の一。  
 (昭和十年十二月二十八日)



スリ・ランガム大聖廟 其一 (昭和十年十二月二十八日)  
スリ・ランガム (Sri Rangan) の大聖は、一にセリンガム (Serilingam) ともいふ。その外廓 2475呎×2880呎だまうである。以下掲げる四枚の圖は、何れも順に南から北に及んでゐるので、第83頁に示した東方第三エゾラムの上から撮つたものである。「其一」は西南方をみたところで、最左端の最遠最少 (次頁へ)

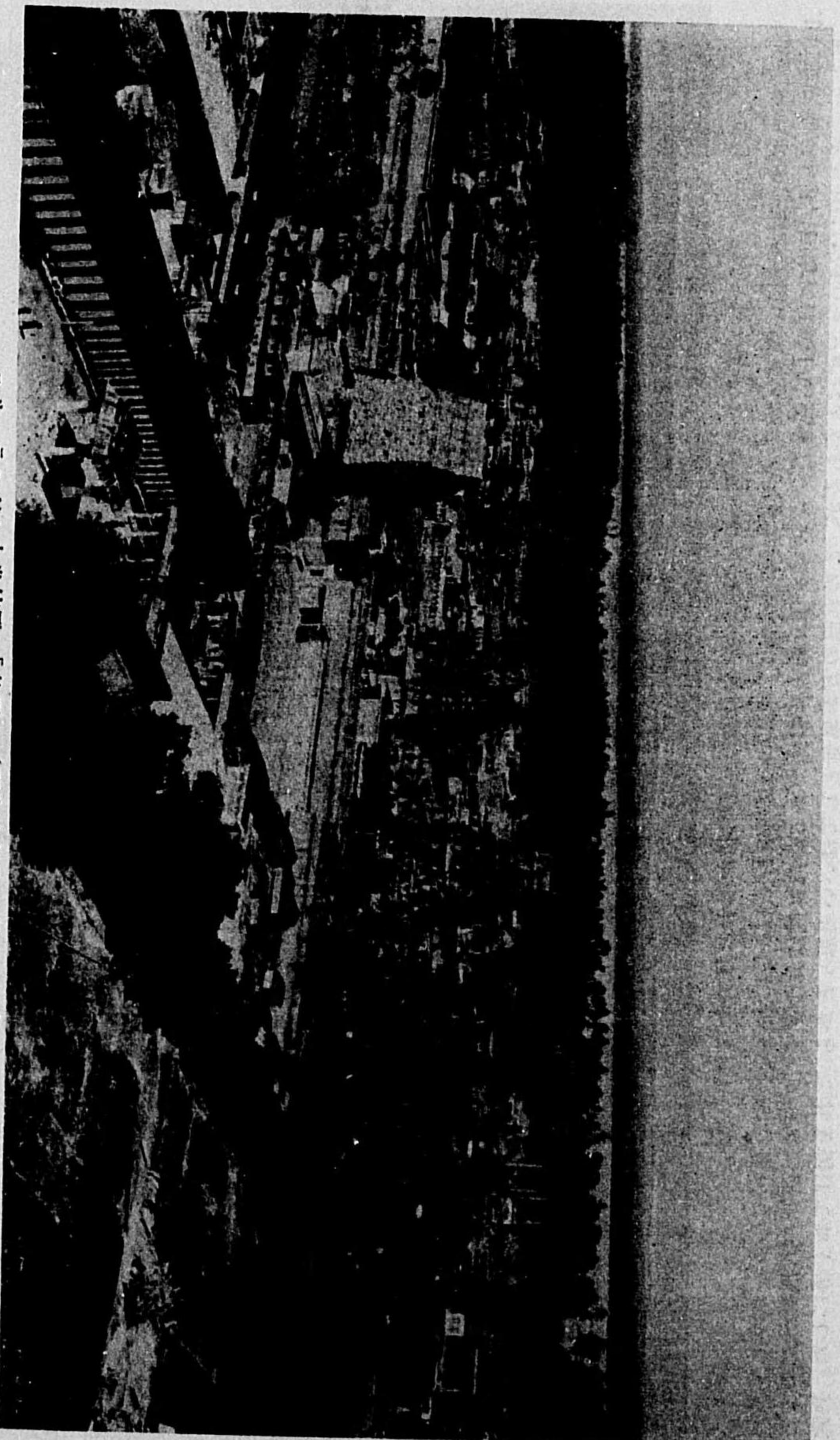


スリ・ランガム大聖廟 其二 (昭和十年十二月二十八日)  
(前頁より) のエゾラムは、第56頁に掲げた夫れである。夫れから大きなのが二つあり、右端に近く小さいのがあって、更に右端に小さいフォームが見えてゐるが、この邊は「其二」でみた方がはつきりしてゐる。ここを通り抜けると更に小エゾラムがあり、其少し右に屋上に吹き放し方一間の實形造がある。これが「其三」の左端に續 (次頁へ)



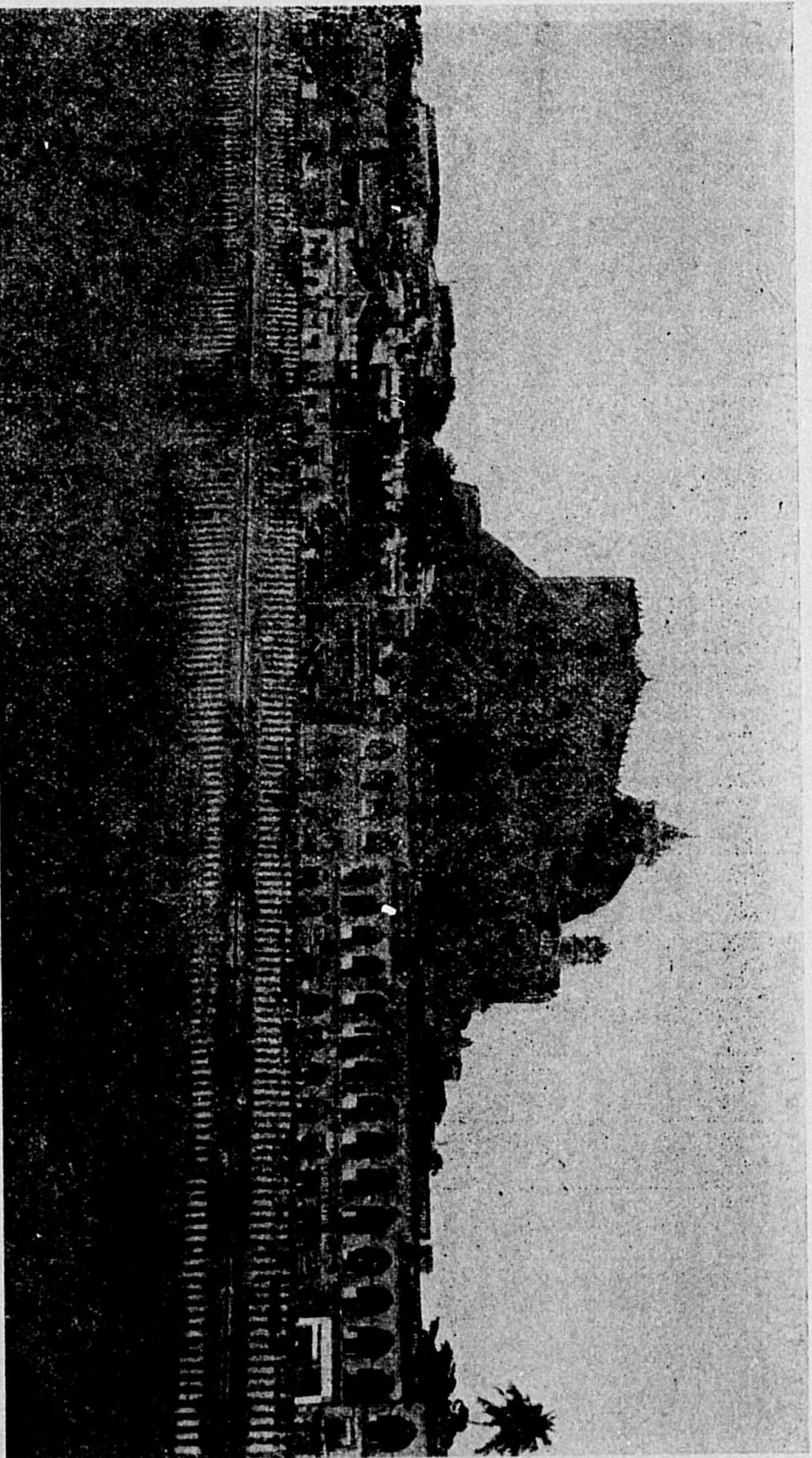
スリ・ランガム大堂俯瞰 「其三」 (昭和十年十二月二十八日)

(前頁より)くのである。つまりこの實形造は「其三」の左端にある。その右にもう一つエアラムがあり、それから愈々内陣か内内陣か、最も神聖なところで、丁度「其三」の上下左右からいっても中心と思はれるところに、特殊の圓蓋が見えておるのだが、つまりベッシュヌ神の安置されておるところで、其後方即ち圓の右端に近く、南のと同じ位の (次頁へ)



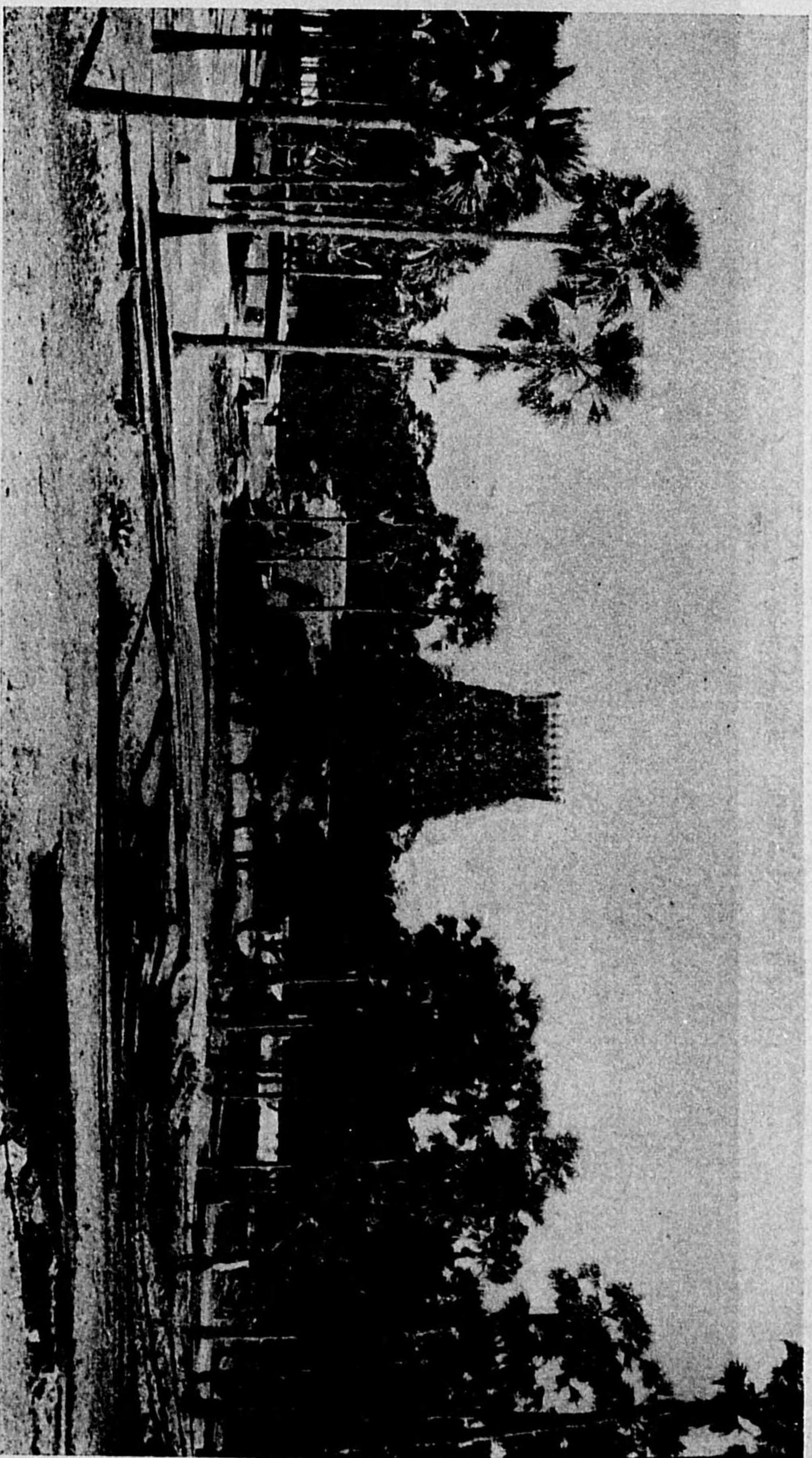
スリ・ランガム大堂俯瞰 「其四」 (昭和十年十二月二十八日)

(前頁より) エアラムがある。其エアラムは「其四」の最左端にある。夫から北へ四つもエアラムがあるが、その内の一つは修理中で、素屋根が架けてあるのは惜しい。尙ほ西門は二つ(「其三」左上)、東門は三つ(第82, 83頁)ある。「其二」―「其四」の較幕の様なのは、石壁を白と代赭 (Indian Red) とで交互に塗ったもの。右下の三角は千柱堂の屋根の一部。



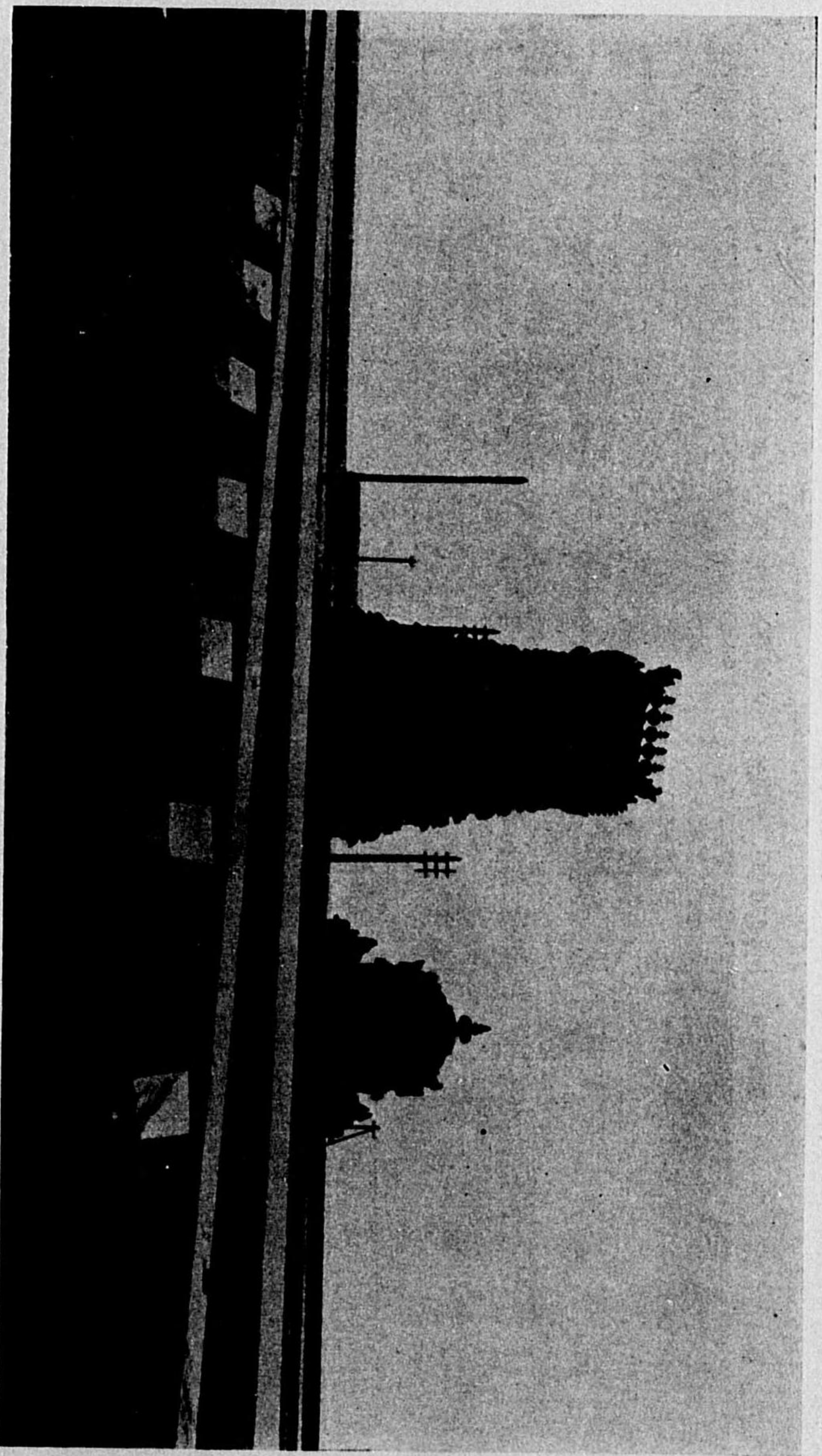
トリチノボリーの岩祠 (Rock Temple) (昭和十年十二月二十八日)

トリチノボリー市の中に、突如と聳えた大きな「岩」がある。「Rock」で通用してゐる位に大きく特殊の存在である。さうして其岩上には祠堂があり、西方には美しい大きなテッパ・クラム即大沐浴地がある。此窟眞は其テッパ・クラムの西側から池をへだててとったもの。池の中には例のマンダバムがあるが、この窟眞の方が風景としてはいいと思つたから、これを掲げておく事にした。異教徒を登らせるかどうか知らないが、岩上からの景色はさぞよからう。



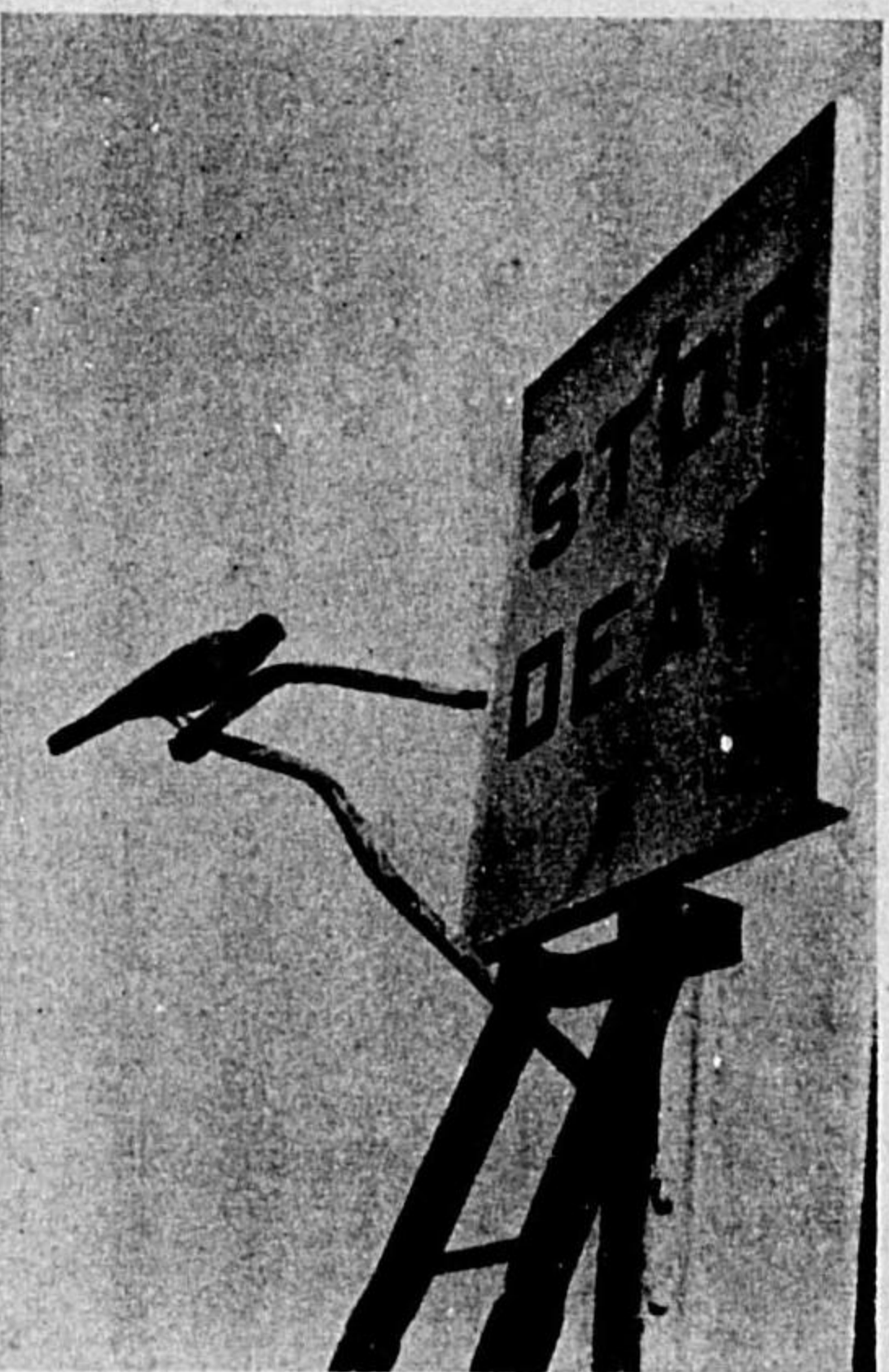
チルチエツツール大堂西エゾラム遠望 (昭和十年十二月三十日)

チルチエツツールの東南方約二十哩、海岸にチルチエツツール (Thiruchendur) の町があり、ここにシバの第二子なるスブラマンヤ (Subrahmanya) を彫った大堂がある。其西の大門を西方耶子樹林を隔てて遠望したところ、まことによくあたるの風物と調和してゐる。此種の大門は市中にあつても (80, 81, 82頁)、この様な樹木の間にあつても、何れでもよろしい。



チルチェンズール大堂本堂の屋根 (昭和十年十二月三十日)  
本堂は其全景を何れの所からも見る事ができない。漸くにして塀の上に出た部分だけを見得るのみである。そは遂行ったところで、大したものではあるまいと思はれるが、此屋根の工合では、これがやはリドワビス建築である事が判る。

ダマシユコチ棧橋所見



(昭和十一年一月七日朝)

# 印度佛塔巡禮記

(第三回)



## 一七、アジャンタ (Ajanta) 窟

僧俗を問はず一度でも印度へ行ったことのある人は、大概は孟買・甲谷他の間を往復する様である。さうして其序に例ひ那爛陀や華氏城址を訪はぬにしても、佛陀伽耶・鹿野苑・アグラ・デリー・アジャンタ・エロラ・エレフアンタ位は見物する筈だし、それに随分有名だから、ここに紹介するに及ばぬかも知れぬが、とにかく簡單に一通かいておかう。

今度はい行かなかったが、前にはジャルガオンから行った。大正十一年十一月二十二日早朝、前夜孟買 (V. T.) 驛から乗車した一行四人は、ジャルガオン (Jalgaon) 驛下車、朝食をすましてから自動車二臺に分乗してファルダプール (Phardapur) に向ひ、同地の D. B. に着後直に弾機のないトンガ(低級馬車。牛がひく)ののもある第96頁で行くこと四哩、窟院のある丘の下に達し、下車徒歩斜面を登って見學したのであつた【印度旅行記】第7頁。

アジャンタの町はオウランガバード (Aurangabad) の西北六〇哩、G. I. P. 鐵道ブーサバル (Bhusaval) 驛の南三五哩を距つさうで、謂はゆるアジャンタ窟院は此町の西北約四哩、さうしてファルダプールの東北約三哩半(普通四哩と云)にある。ハイデラバード國有鐵道 (N.G.S.R. = Nizam's Guaranteed State Railway) のオウランガバード驛から車を通ずる由だから、先年の様に再び弾機なしのトンガに乗らなくともいいかも知れない。ファルダプールの宿舎は、D. B. の他にマハラジャの G. H.

もあるが、この方へ宿泊を希望するなら、やはり前以て同國考古局の許可を受けねばならぬさうである。いふ迄もなく D. B. の性質として、宿泊希望者は到着後二十四時間だけ空室占領権があるから、若し他の旅人があとから来れば、満一晝夜の後には其室を明渡さねばならぬ規則である。だから退去せねばならない。かういふ風だから若し幾日間か滞在見學がしたければ、寧ろ豫め日數を決め、G. H. へ滞在を其筋へ依頼した方が安全であらう。但し私はここでは經驗がないから、例ひ G. H. でもバルランプールのその如く宿泊も乗物も總て無料かどうか知らない。

窟院は殆んど半圓形をしてゐる岩面に掘鑿され、總計二十六並んでゐるが、内部に塔婆を有せる制多 (Chaitya) 窟と、毘訶羅 (Vihara) 窟即ち僧坊とは、別に順序もない。外から見た時、正面に馬蹄形の大きな拱を有するのが前者で、列柱があつて上部が楯式になつてゐるのが後者だから、一見明らかである。ここには四つの制多窟があるので、それは第九・一〇・一九・二六である。前二者は古く、後の二つは比較的新しい。従つて内部の塔婆も亦同様である。

四〇は窟院全景の半分で、圖には第一窟から第十二窟までが見えてゐる。そのうち左手の馬蹄拱をもつてゐるのが第九號・第十號の二制多窟で、四一は前者内部の塔婆である。その次の四二はその正面の一部を寫したものであり、壁に薄肉に陽刻した小塔婆を見せるのが此圖を掲げた目的である。かかる場所へ塔婆を刻したのは、別にここに限つたことはなく、どこにでもあつて決して珍らしくないが、此塔は平頭上に天蓋即ち相輪があり、第一輪の周縁から懸花 (Festoon) の様な瓔珞が下がり、椽も割合に

太くはつきりと見えてゐる。此は大變面白い形で、輪が三倍に増して九個となり、其上に水煙・龍車・寶珠等がつき、其儘三重又は五重の構造物の上にとると、日本古來の層塔となるのである。圖では伏鉢の下方に玉垣が同様に圓形に廻つてゐるが、三重や五重(寶塔でも多寶塔でも)の構造物の最上層の屋根は、常に寶形造だから、最上部の雨仕舞のために、降棟の集合點に金屬製(石造の時)の「露盤」を置き、其上に「伏鉢」をのせたのである。

印度の塔婆には、最下部に我國の露盤に相當する方形の部分はあるか無いかといふに、大塔婆——前回前前に掲げた如き——には、大きな基壇がそれに當るとすればあることになる。小工藝品に於いては四方に精巧な彫刻を施した、立派な方形の臺を持つてゐるものがある(後)。この様な場合には、それごとそっくり上の方にあげられたと考へてよさうである。

話が少し横にそれたが、序でだから書いておいたのである。ここで元に戻すことにして、此窟院は内部の長さ45呎×幅23呎×高23呎ある。さうして八角形に荒削りした十四本の柱で「身廊」(Nave)と「側廊」(Aisle)とに分れ、後方は圓形をなし謂はゆる「後陣」(Apse)に終つてゐるので、其全形は羅馬のバシリカ(Basilica)又は早期耶穌教建築(Early Christian Arch)と同様であるが、この後陣のところに塔婆があるのである(四一)。此塔婆は平頭上部まで11呎、方形の五重石蓋の上には元は相輪があつた筈だが今は亡い。其時代は約前二世紀に起原すと推定されてゐる。

四三は第一九號窟の塔婆で、前述の第九・第一〇號窟の次の制多窟である(第一一—一八は、何れも毘訶羅窟)。年代は約

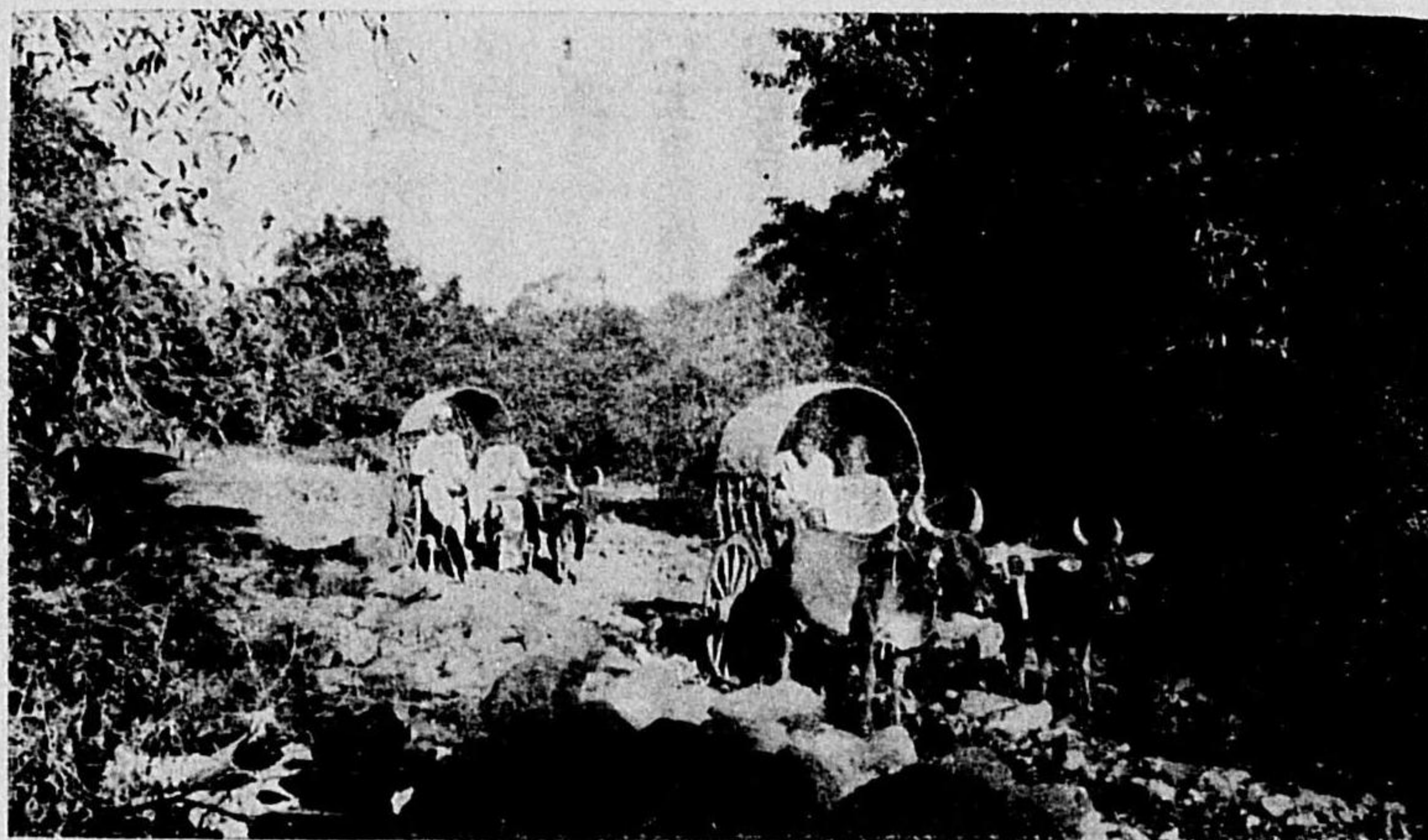
後五〇〇年と推定されてゐるが、窟の長さ46呎×幅24呎×高24呎で第九窟とよく似てゐる。併し時代が下るだけに随分澤山に裝飾がつけてある。即ち塔婆の正面を半圓拱型にほり凹め、正面向き立姿の佛像を刻みだしてゐる。但し此佛像は左右相稱できちんと立つてゐる有様は、藥師寺東院堂本尊の如くであるから、直立不動の姿勢と言ひ度いが、膝もつかず踵もつかず、少しばかり行儀のよくないところがあり、若し兵隊なら分隊長たる下士官からやかましく言はれるところである。

### 一八、カネリ (Kanheri) 窟

大きな窟院で制多窟も毘訶羅窟もあり、且つ孟買に最も近い。孟買市の北方約二〇哩。B. B. & C. I. (Bombay Baroda & Central India) 鐵道のボリヴリ (Bolivri) 驛を西方に距る約五哩といふから、ずっと二里で知れたものだが、其道路たるや到底自動車を運轉するわけには行かぬ、だから歩くか牛車によるより他はない。其牛車も聞くとところによると、前以て準備せねばならぬので、だしぬけに行けば歩くより方法はないさうである。

孟買・ボリヴリ間は幅の美しい電車が絶えず運轉してゐる。我國には未だ残念ながら、あの様にゆつたりとして而も快速の電車はないやうである。而も一等となると大概いつも空っぽだから、そこへのつてゐると、得意にならざらんと欲するも、さう行かないのである。

昭和十年十二月十二日、早朝宿舍を出でボリヴリ行の電車へのつた。當時江商株式會社孟買支店長で



カネリ (Kanheri) 窟院道 (昭和十年十二月十二日)

B. B. & C. I. 鐵道のポリブリ驛を下りて暫くの間は、廣い上等の道路だから、自動車でも何でも運轉ができるが、間もなく細い分れみちを入ってからは、随分ひどい所を通るやうになる。さうなると鐵輪を嵌めた彈機なしの頗る頑丈な車でないと到底間に合はない。つまり寫眞にみる様な車で、背中に瘤のある牛二頭で挽く。これを Bullock Tonga といふ。この「ブロック・トンガ」が漠漠の道を走るときは、泥土の粉末が飛散して天日爲めに暗く咫尺を辨じ難く、又大小の玉石の累累たる河原を行くときは、絶えず注意をしてゐないと、筒形穹隆の様な日覆の骨に頭を打つけ、ヘルメット帽は凹み、麥稈帽はつばを折られ、一度で廢物となる覺悟をせねばならぬ。

あつた丹治顯一さんの厚意で、同店勤務の西尾さんが案内をしてくださる事になり、辯當や飲料を用意され、從僕一名をつけてくださった。勿論下車驛から窟院迄の牛車も前日から手配をして頂いたのである。私には何一つできないので、ただ見學希望の場所を申出ると、いつもいろいろ世話をしてくださるので、萬事滞りなく運び、洵に感謝にたへないのである。

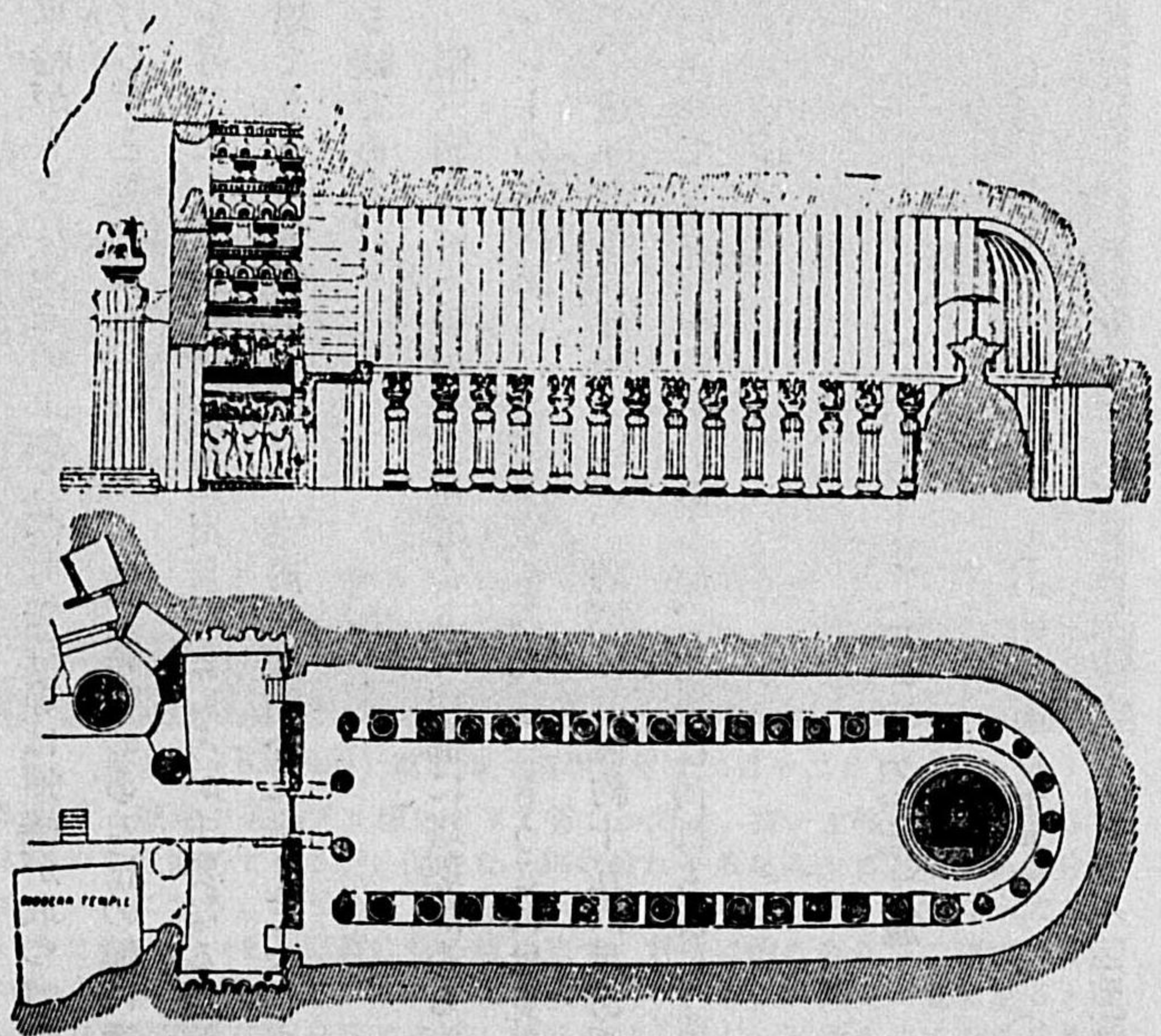
電車が孟買のグラント・ロード驛をでた時はまだ漸く東が白らんだ位であつたが、終點に達した時は既に夜があつていい天気であつた。二十分待つたら次の電車がついて神戸在勤の鐘紡會社の上柳昇平さんが降りて來られた。

これで人が揃つたので出かけることになった。牛車は随分ひどい道を走つた。僅か二里でも可なり身體にこたへた。何にしる雜樹林の間の凸凹道や河原の石ころの上を、遠慮會釋なく引張り廻すのだから、車輪が大きな玉石の上から落ちた時等は彈機が取つてないのだから、其衝撃は頭の心までガンと響ける。ともかくも二時間ゆられて窟院のある丘の麓に達し、下車してから五六町ばかり歩いて少し山腹を昇つたら、第一窟の前に出た。ところが主要なる窟院は殆んど總て西向きなので、午前中のため逆光線であまく寫眞がとれず、窟内も亦割合に暗くて大してよくなかつた。ここはどうしても午後行くに限る様である。

第三窟といふのが制多窟であり、内部に塔婆があるが、窟殿の形も塔婆もさう大したものではない。マレーの案内記にはカーリ窟をみたら、もうこれは見ないでもいい位だとある。成程其通りよく似てゐて、造り方も大分粗っぽい。塔婆は直径約十五六尺あるが、天蓋は勿論平頭も失はれてゐる。此窟の正面向つて左方に小塔婆があるが、此等は何れも後により以上の好例を圖示するから、ここでは全部見合はしておく。

### 一九、カーリ (Kari, Karle) 窟

孟買とプーナ (Poona) との間にあるボルガット (Borghat) 山脈の中腹には、多數の窟院が掘鑿されてゐる。コンダーネ (Kondane)・バーシヤ (Bhaja)・ベツサ (Bedsa)・シハラワツチ (Shelarwadi)



制多窟の身廊のつき當りのアプス (Apse) になってゐるところに、塔婆があること圖の如くで、いつでもかうなつてゐる。斯様な平面の建築が地上に建てられた時も、塔婆の位置は同様である。  
(History of I. & E. A. 挿圖複寫)

棒へ椅子を結びつけた乗物があるから、登山が苦手の紳士諸君でも容易に目的を達し得る筈である。

及びカーリ窟であるが、このうちカーリ窟が最も有名である。此等の窟院は何れも約前一〇〇より後一〇〇の間に造られたもので、大概似た時代でさう大差はない。此窟院は G. I. P. (Great Indian Peninsular) 鐵道のマラヴリ (Malavi) 驛の北方三哩に位置し、これが最も近い驛ださうである。アジャンタ・エロラ同様今回はとうとう行けなかつたが、先年は同鐵道のロナウラ (Lonavla) 驛から自動車で行つた。何れにしても山の下まで車で行けるし、山に登るにしても、前以て準備さへすれば、

多くの窟院が山の中腹に竝んでゐるが、そのうち制多窟は唯一つである。規模も大に裝飾も立派で、印度に於いては第一位の一つだといふ定評がある。寫眞帳にも繪葉書にも書物にも、何にでも寫眞が出てゐるから必要がないかも知れぬが、折角だから塔婆だけだしておく事にした(四四)。尙ほ前頁の挿圖を参照すべし。塔婆はアジャンタのに酷似してゐるが、珍らしいことに相輪がある。その上に椽も輪も木製だから大に面白いのである。サンチの大塔婆等の輪も、破片が残つてゐるが石造である。これは雨曝しだから當然で、石か金屬でなければ短時日に腐朽して了ふ筈である。ここのは窟内だから木でも安全な筈である。

“.....Kârlé, is situated near the railway between Bombay and Poona, and is the finest of all—the finest, indeed, of its class. It is certainly the largest as well as the most complete chaitya cave known in India, and was excavated at a time when the style was in its greatest purity.....”

“The building,....., resembles, to a very great extent, an early Christian church in its arrangements,.....The general dimensions of the interior are 124' 3" from the entrance to the back wall, by 45' 6" in width.....In height.....being only 45' from the floor to the apex. といふ様なことがフーガッソンの書物にかいてある。

四四は少しばかり寫眞のとり様が拙いため、下の方が白くなりすぎて朦朧としてしまつたが、塔婆は

二重圓形の基壇上に建つてゐるのであつて、其各の基壇上部に玉垣が刻んである。玉垣下のある間隔に配置されてゐる四角な小さい孔は、いづれ當初は木でも挿し込んであつて、それから然るべく裝飾として嬰珞か何か下げたのであらうと考へられてゐる。平頭の上部に殘存せる相輪は、圓形の下端に一面に彫刻がついてあるといふことだから、或は當初のもので得難い標本かも知れぬが、下からみたところでは、暗くて何も判らない。ましてそばでみる機會はなかつたのだから、今でもはつきりしない。

### 二〇、バージャ窟院とベドサ窟院の見學

此二窟院の見學に就いては、例の如く丹治さんに随分迷惑をかけてしまった。大體このあたりになると、孟買に長期在勤者でも殆んど行つてゐないのだから、まして普通の旅行者は全く行かないと思つてよろしい。だからどう行くのが最もいいか尋ねたところで、その名も知らぬ人が大部分である。

出來たらこの二つを一日にすまし、其上うまく行つたらカーリ窟院をもう一度覗き度いといふ、甚だ蟲のいい條件を申出したところ、丹治さんはあちこち聞き合はしてくだされた結果、バージャ窟の近くにバンガローを持ってゐる印度紳士がゐるから、前日から出かけて先づそのバンガローに一泊してカー

\* History of I. & E. A. Vol I. p. 135:— "This canopy was circular and minutely carved on the under surface." "Cave Temples of India" p. 235, and plate 13 & 40.

リ窟をすましておき、翌日あとの二つをすまして孟買へ歸つたらよからうと教へてくださったが、私が行かうと思つた日は一月十九日の日曜日で、この日だと東綿の齋藤さん(當時の東洋綿花株式會社孟買支店長)も同行されるし、江商社員も二三名行つてくださるし、萬事都合がいいが、若し前日からすると、私一人のために大勢に迷惑をかける虞が多分にあるので、宿泊すること、從てカーリ窟の再見學は中止し、十九日早朝出發といふことに決定した。

私が居候をしてゐた江商支店の宿舎からは、十九日前六・〇〇に準備のため設營隊といつた格で、若い社員が晝食等を用意して先發された。其時の話にロナウラ驛の少し先きに四辻があるから、そこに住民一人を待たしておく。だから注意をしてゐてそこで下車し、それから徒歩するのだといふことであつた。此朝は六・三〇迄に齋藤さんが車をもつて私のところへ來るといふ約になつてゐたので、五・三〇に紅茶と焼麵包少しで朝食をすまして待つてゐたら、六・二〇に來られたので、其車に私と從僕(毎度紹介した)とのり込み、六・二五まだ眞つ暗らの道走り出した。孟買市内は四つ辻や三つ辻のところ、紅と緑との信號がでること日本の都會と同じであるが、朝早いから殆んど障礙物なしに全速をだすことができた。而も支店長用の買ひたての新しい上等の車で、無賃ドライブは洵に心地のいいものである。

併しながら先き迄自動車で行くのは愉快ではあるが、思つた程樂ではない。といふのは孟買の町を外れて暫くの間は舗裝がしてあるが、それからは日本の田舎道と全く同一で、前方に車が一臺走つてゐた日には、砂塵濛濛として暗嶮、とてもやり切れたものではない。殊に前をローリーが走つてゐたら百年

目、道を譲らぬことも亦我國と同じく、何哩でも泥土の粉末をあび乍ら走らねばならず、運轉手の心理状態は各國共通だといふことがよく判る。

指定の四つ辻のところ迄約三時間かかり、九・三〇にそこへついた。住民一人ではなく、先發の諸君も共に、皆で六名ばかりゐた。ここから同じ街道を十分ばかり走って下車した。此間に街道の左手に大きい分れ道があり、その角に「カーリ窟へ」といふ立札があつたのをみた。下車したところは鐵道線路(G. I. P. R.)の踏切で、右手に少しはなれて山脈が見えた。ベドサ窟へ先きに行き、一度歸つて晝食をすまし、次にバージャ窟をみて歸孟するといふ計畫を先發隊でたて、其通り實行する旨を話された。くたびれぬ間にゑらい方をすましておくのは、いい考へだと一同大に賛成をして直に歩き出した。ベドサは右手の山脈の向ふ側で、ここから二哩だとの事であった。二哩なら約三十町、一里ないのだから知れたものだといふので、速歩で出かけた。私の荷物は全部ワッサンが擔いだから、私は肩から雙眼鏡をさげただけで、手ぶらで大分得意になつて山を自あてに進んで行つた。あの山までは知れたもの、あの山を越す位何でもないといふ氣で。

然るに大變であつた。山を登りかけて、餘り暑くて汗がでるので先づ上衣をぬぎ、雙眼鏡と共に誰れかにもつて貰ひ、一休して更に登つたが、いつ迄行つても峠に出ない。こんな筈はないがと思ひながら更に勇を鼓して前進し漸く峠まで辿りついたらそこに一軒家があつた。日本だと茶店があるはずだが、印度にはそんなものはない。此一軒家で案内人は何か尋ねたらしく、山の向ふ側の途を歩きだした。こ

れがまた中中やっかいで、果してこの途でいいのかどうか疑はしくなつてきた。つまり案内人がよく知らぬらしいのであつた。而も其案内人といふのは、バンガローの所有者がつけてくれたので、土地の者で地理に明るい筈であるのに、此有様は如何にこんなところへ行く人が少ないかといふ證據になるのである。

夫でも遂に右手に窟院正面の一部が見えたので安心はしたが、一度すつかり山を下りて了ひ、更に復登らねばならなかつた。窟院前の石段を上つて行くのは實にいやであつた。併し最後に窟院の正面に立つ事ができたが、時計をみたら正に一一・四五であつた。故に車を下りて二哩ときかされて歩き出してから、二時間以上かかつてゐたのである。山の中腹で休んだ時間を差引いても正味二時間だから、二哩は五哩の誤りらしく、掛値なしの五哩であらう。つかれたが休むひまなく一・一〇迄働きつめた。いくら空腹でも晝辨當はマラウリ驛近くのバンガローに置いてあるのだから、どうする事もできなかった。

餘り長時間自分の勝手ばかりしてはすまないで、歸ることにしたが、元の途を戻るのは大分やっかいだからといふので、直ぐ裏から山の頂界線にでることに衆議一決した。ところが枯草——いくら暑い國でも一月あたりは枯れる草があると見える——が一面に途に生へてゐるため、靴が這つてまるで歩けない。つかれてゐるせいもいくらか歩行を困難ならしめたろうが、何とも仕方がなかつたので、某さんと案内の住民とに兩腕を抱へて貰ひ、まるでぶら下る様にして一町ばかり歩いたといふよりは、引ずられたといった方が遙に適當する様な状態で行進したが、漸く山の背にでたので途が平たくなり、獨りで

歩けた。その引ずられて迂る斜面を上って行った恰好が面白かったといって、齋藤さんは往路に、自身が五歩に立止り十歩に一休し、恨むが如く慙ふるが如き眼で人の方を見たことなどは、まるで棚に上げて了ひ、今日は實に珍らしい面白いものをみたといって、大分うれしさうであった。可なりお人がわるくいらせられる様である。

峠の一軒家迄戻った時は大に安心をしたせいか、一行は歸せずして路傍の石の上に腰を下ろした。扱てそれから山を下りるのであるが、最も近い途を通過して街道迄出やうといふことに意見が一致した。山で少しばかり弱ったものだから、何でも早く廣い道へ出たいといふ考へばかりで、車のあるところ等は誰も考へなかった。ところが其近路なるものがとても變なので、先にきた方が餘程よく、大分樂であったことがあとで判ったが、最早如何ともなし難く、道だか何だか判らないやうなところを歩き、遂に辛ふじて街道へ出た。

併し車のおいてある所はそこから半みち以上もさきの方で、而もそれがこれから食事に行く方向なので、だから、歩いて行けばいいのに誰も歩くものはなかった。つまりくたびれきって動くのがいやなのである。その結果齋藤さんが、一所についてきた運轉手に車をとりに行くべく命令されたので、それをいいことにして皆休んでしまった。そこは街道の方が兩側より少し高くなつてゐて、路面には少し粉末泥土があるので、ローリーでも通ると相當に濛濛とするが、手巾をだして鼻孔にあてがう位で、動くものは一人もなかった。無理もないので、何れも朝六時前に紅茶二杯に焼麵包二切位たべたきり、平素は隣り

へ行くにも大袈裟に自動車といった綿屋さんが、大過劇の勞動をした後で、而も時は正に午後三・二〇であつたから。

遙か遠方の、街道へ突きだしてゐる山の鼻から、車が二臺現れた時は一同顔を見合はして笑つた。これは最大の喜びの現はれで、何かいふのは面倒であつたのである。バンガローへ着いたのは三・四〇。先發隊が氷と曹達水とを澤山持ってきておいてくれたので、先づ洗面をした後、含嗽するのに印度の水は危険だとあつて、曹達水を用ひたりした。其筈で一度腸窒扶斯にやられたら、總てが終りと覺悟せねばならぬ。だからこれは決して贅澤ではない、正當防衛であるのである。

曹達水を含嗽用にした後、ラムネに氷塊を入れたのを何杯飲んだか記憶しない事程左様に渴したのであつた。それから晝食と稱するものを終つたのは正に午後四・一〇。去る大正五年七月二十九日、大分縣東國東郡武藏村の兩子寺<sup>ふたご</sup>を朝出發、夕刻國東町に着して一泊した事があつたが、この時晝食のすんだのが午後四・三〇であつた。あついのに朝から歩きづめで随分くたびれたが、其時以來の記録で、いつ迄も記憶に残るであらう。

最早日も大分傾いてゐたので、直にバージャ窟へ出かけた。バンガローからももの一分と走らぬうちにマラブリ驛で、ここから三分位で山の下に達した。車はもう走れないので下車徒歩したが、おそろしく登りにくい斜面であつた。併し奮發して休憩する事なく、間もなく窟院前の廣場に達した。西向きのため西日が一ばいにあたつてゐて、非常にはつきりしてゐた。制多窟はカーリやベドサの様に前に袖

がないので、全體が明らかに見えた。

制多窟の前を少し南へ行くと「塔婆窟」があり、十四基の塔婆があった。平頭の美しいのや、圓形基壇の玉垣を持送で支へしめたり、相輪を上岩から刻みだしたり、いろいろのがあった。此塔婆窟の尙ほ少し南方に僧坊があった。軒に小塔婆と立姿の像と一つおきに刻み、内部も中面白くできでゐた。ここにゐて寫眞をとつてゐるうち日輪西山に没した。

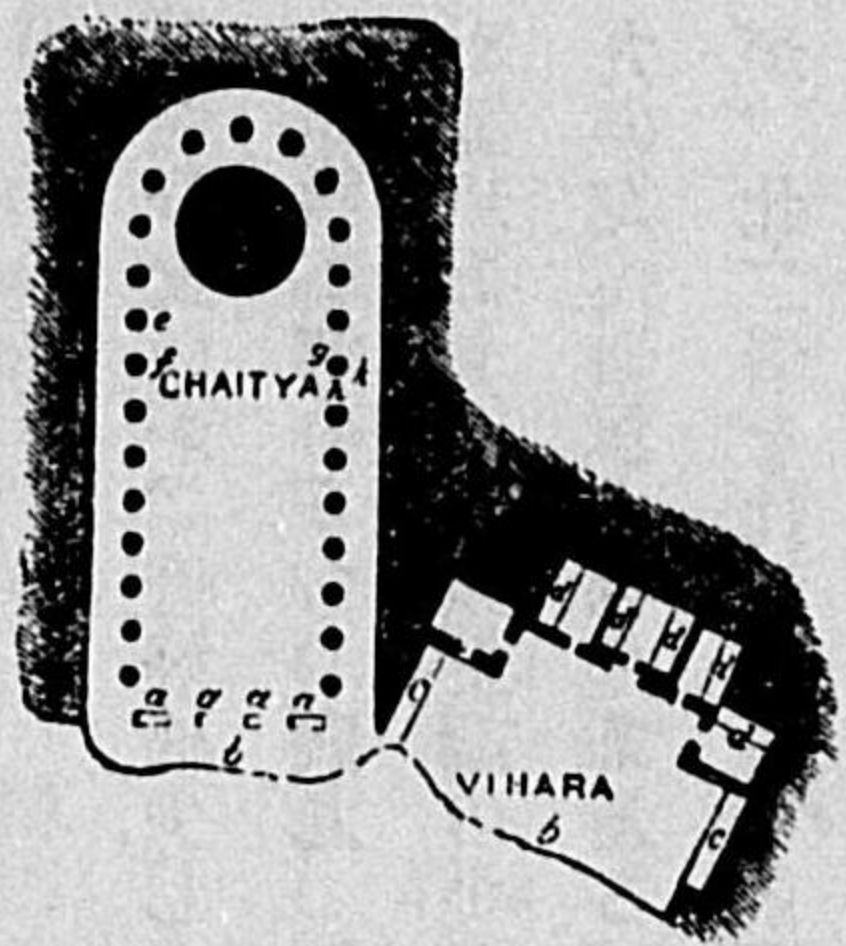
バンガローへ歸つたのは六・三〇。十分間休憩し、六・四五に先發をした。江商の諸君はあとへ残つて片づけて行くから、先に歸つてくれといふのをいい事にして失禮をした。無事孟買に歸着したのが二二・一〇。齋藤さんに分れて自室に入り直に入浴食事を了つたのが二二・五〇、寝たのが二三・二〇であつた。

## 二二、バージャ (Bhaja) 窟

### (1) 制多窟

前述の如くマラブリ驛から一は34哩他は1哩とあるが、此は丁度窟院の下の車で行ける終點迄と山の上迄との差位にみればよろしい。窟院は大小精粗合計一八あるさうだが、其内第十二號の制多窟が立派であり面白くもある(四五・四六)。大き60呎×27呎。内部は例の如く身廊と側廊とに分れてゐて、其

間は27本の内方に著しく傾斜した柱で上を支へて、後陣は圓く其部に塔婆がある。塔婆の大き徑11呎高



58. Chaitya Cave, Bhaja. (From a Plan by J. Burgess.)

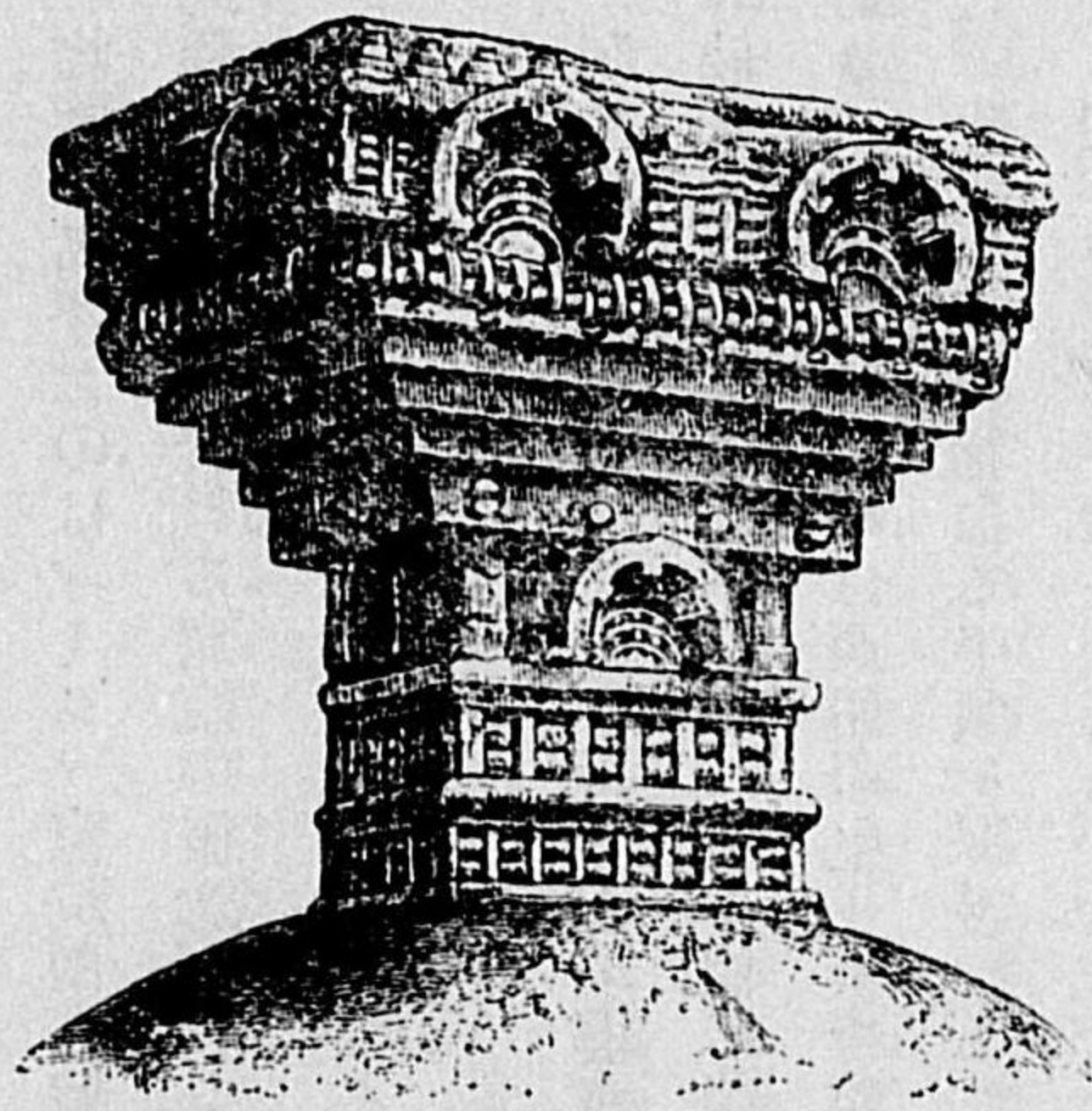
10呎。私は勿論下からみただけだから、實物は知らないが、平頭には椽を挿込んだ孔があるといふ。これは小塔婆窟の塔婆からみてもさうあるべきである。尙ほ遺物を收めた痕跡も歴然ださうだが、其上の蓋にある平たい石を積み重ねた部分は、此塔には全く缺けてゐる。さうして窟院及び塔婆の様式手法からみて、約前二世紀と推定されてゐる。

此所に掲げたのはバージャ窟院制多窟及び其南隣の毘訶羅窟の平面圖であるが、前掲のカーリ窟及び此圖で、印度に於ける窟院の概念が得られるであらう。これと圖版と比べてみれば一層明瞭であらう。

### (2) 塔婆窟

制多窟の前を通過して少し行くと塔婆窟があり、内に十四基の小塔婆を刻んである。第一にあるもの即ち最北最前のものは、ここにある總ての塔婆のうちで、最美の平頭を有すること、挿圖に示した通りである。私の行った時は亞鉛の生子板で臨時に屋根がしてあり、薄暗くでどうもうまく寫眞がとれなかつた。此屋根は類稀なる平頭を保護するには、安價で効果があり、至極適當だが、そのため美觀は殆んど全く殺がれて了つたといつてもいい位である。此平頭の高さ三呎八吋あるといふ。





62. Capital of a rock-cut Dāgaba at Bhājā.  
(From a Photograph.)

バージャ塔婆窟内最美なる平頭  
(History of I. & E. Arch. 挿畫複寫)

十四塔婆のうち、五基は窟内にあつて、徑四呎八吋より六呎三吋に及び、前方にある二基は遺物を伏鉢内に藏する様になつてゐるといふ。其後方の三基は大なる平頭を有してゐるが、最左端のものは石造の檼を有する由書物にかいてある ("Buddhist Cave Temples of India," p. 50)。併し私はこれに氣がつかなかつた。だから相輪との關係等がどういふ風になつてゐるか、ここに記すことはできかねるが、小塔婆で石造の檼のは他にもあるから決して珍らしい事もないし、又木造の檼よ

り大分太いが、恰好は少しもわるくはない。

窟内塔婆のうち、四九・五一に示したものは、天井から相輪を刻みだしてゐる。此相輪の中央下端に小孔があり、平頭上端の小孔と一直線上にあるのは、この間に木造の檼を挿入した事は勿論である。四九の左に大きく見えてゐる塔、及び五〇の右に少しでゐるものの平頭と相輪とは、五一にだしてあるが、此二者を比較すると前者の方が平頭は立派である。而して相輪を上から刻みだしたのは、カネリ窟にもある。

### (ハ) 毘訶羅窟

前記塔婆窟の前を過ぎ、更に少し行くと面白い毘訶羅——毘鉢羅ともかく、Vihara——窟がある。略ぼ正方形で、大きき16½呎×17½呎といふ。内外共に彫刻があるが、正面軒のところに、塔婆と立像と一つおきに刻んでゐるのは珍らしい。何れも平頭があるが、相輪はどうかはつきりしない。ものが小さいのと眼鏡はもつてゐたが覗くひまがなかつたので、今更はつきりしない。塔身の周圍に「懸花」(Festoon)の様な飾が施してある。薄肉の塔婆には珍らしくはないが、相當の大きさのものにはあるか否かよく知らない。此場合は至極小さいものだが、大分厚肉だから、少しばかり面白いのである(四七・四八)。

### 三、ベドサ (Bedsa) 窟

既に記した様に、私はベドサ窟へ先きに行ったので、バージャの方から都合のいい道がついてゐるかどうかわからない。併し位置は同山脈のバッナ (Panna) 河に面せる側にある。普通ベドサといつてゐるが、一にカルンジ・ベドサ (Karunji Bedsa) とらふらうである。

此窟院は古制多窟と、他に類例のない珍らしい毘訶羅窟と、其他小窟院及び水槽より成る。制多窟の正面は實に立派だが前方に一岩石があり、福一間長六間許りの通路が中央に切開いてゐるので、立派だが正面は漸く柱頭が見える位で、あとのいい所は全部隠されてゐる。併しその狭い通路を過ぎて、ほん

とうの窟院の正面に立つときは、誰人も其精巧さに感嘆せざるを得ない事程左様に立派である。

制多窟の大き45呎×21呎、内部の塔婆は二重圓形の基壇上に建つ。而して最下部と上下兩基壇の上部とに、何れも玉垣を廻らしてゐる。だから玉垣は三重にあるわけである。塔身の上部には石蓋の割合に大きな平頭を頂き、更に平頭の上には木製の檼の頂上に、相輪の代りに蓮花(?)をあげてゐるのは、それが後補にしても餘りにいい加減な取扱ではあるまいか。思ひつきは至極賛成だが、ここはやはり椎茸型の傘の方かよささうである。然るにこれを「薔薇の花の様な裝飾」とかいた本がある。試みに左に抜書してみると

“The box of the capital is small and is surmounted by a very heavy capital in which stands the square wooden shaft of the umbrella, surmounted by a rose like ornament, the umbrella itself having disappeared.” (Buddhist Cave Temples of India, p. 54)

である。折角だが「ローズ・ライク・オーナメント」では工合がよくない。薔薇の花をのせるなんか、一體どこから考へついたのでらう。英吉利人は飛でもないことをいふものだ。無論これは蓮花とすべきである。例ひそれが蓮花でないとしても、蓮花とみる方がどの位釋當か知れやしない。だから「ロータス・フラワ・オーナメント」とすべきである。

マレー案内記には、内部天井に肋がある様にかいてあるが、それはとうの昔にとれてゐて今はない。これも亦見ないでかいた結果であらねばならぬ。この事に関して薔薇と蓮と間違へた書物の記事の方が

正しいやうである。曰へ

“It contains a dagoba; and its roof, which is ribbed and supported by 20 octagonal pillars 10' high. (Murray, “Handbook India Burma and Ceylon,” 1926 p. 469)

“……all the wood work has disappeared with the last 20 yrs., for Westergaard (in 1844) described it as ribbed; and a writer in the *Oriental Christian Spectator*, about 1861 found fragments of one timber lying on the floor.” (“Buddhist Cave Temples of India,” pp. 53, 54)

尙後者には

「少なくとも一八七一年(明治四年)迄は、柱に當初描いたと思はれる佛菩薩等の痕跡が残つてゐたが田舎役人が窟院内を清潔ならしむるために、内部全體は胡粉を塗りたてたため、繪を全く臺なしにしてしまった。」

とかいてある。人事ではない、我國に於ける古建築に類似の例はいくらもある。例へば古い神社建築等は、模様が汚らしくなつたといつて、そこいらのいい加減な田舎繪かき迄に行かない様な職人を連れてきて、一山百文の彩色をして丁ひ、赤や青や緑の濃厚な原始的色彩で折角のをめちやめちやにしたり、古い寺の本堂が高尙な色をしてゐたのに、子供たましの様な強烈な繪の具を塗つたりしてゐる。餘りきのどくだから、名稱と所在地とは預つておくが、どうかこの様なことは、神職なり僧侶なり、社寺建築を預つてゐる人人に於いて、もう少し頭を高尙にして、毒毒しい色を塗りこくらない様にして貰ひ度い

ものである。

身廊側廊堺の柱は少しく内方に傾いてゐる。向つて右五本の柱の上方に、蓮花・輪寶其他の模様を薄肉に陽刻してあるが、これについてもまたあの本には薔薇文があるとかいてある—— have roses and other Buddhist symbols——のでみると、著者はよくよく薔薇の花と思ひ込んでゐるものらしい。他に小塔婆あるも大したものではない。

### 二三、ナシック窟と町の観光

アーメダバード (Ahmedabad) 市に三泊して、市内及び附近の名所舊跡の観光を最後として、西北印度の旅行を終り、二月二十一日早朝孟買市に歸着し、東綿支店員宿舍の客となった翌翌日、丁度日曜日なので齋藤さんと一所にナシック (Nasik) 窟院の見學をすることになった。天氣は連日好晴に決まつてゐるので、その方の心配はないので安心をしてゐた。當日早起六・一〇にコラバ (Colaba) の宿舍を出で、丁度一月前バージャとベドサへ行つた時の街道を再び走り、途中休みなく——村で道路改修のための資金として、通過の自動車等を停止させて、八アンナ乃至一ルーピーの税金をとる。これをトル・タックス (toll tax) といふ。車の多い時は、少し大袈裟だが、錢取所の前に珠數繫ぎになる。隨分うるさく相當の時間が無駄になる。かういふ時は止むを得ず休むことになるが、それも勘定に入れて——正に四時間を費し、一〇・一〇窟院への分れ道のところに停車した。

孟買の方から行くと、道路の右手即ち東の方から山脈がでてきて、道のところで終つてゐるが、其突出した部分の北面に多くの窟院が掘鑿されてゐるのである。ここへ上るのは、下車してからゆつくり歩いて二十分位あれば充分、女子供でも老人でも容易に行ける。朝早くないと日はあたつてゐないから、寫眞をとるには都合がよくないが、何しろ孟買から走りづめで四時間だし、いくら印度が熱帯でも日が短いので、午前六・一〇ではまだ眞つ暗で何ぼ何でもこれより早くに出られぬし、窟院の前に立つた時は一〇・三〇で、殆んど正面は影になつてゐた位であつた。だからもう一層のこと第一號窟から順順にみて行くことにした。

下から斜面を登り詰めたところに立札があり、「觀覽無料」(No fees charged to visitors) とかいてあつた。このようなことは當然過る程當然で、どこでも料金をとる所なんか殆んどありはしないのにこんな札をなせたのであらうと思ふかも知れぬが、番人等は人の顔さへ見れば、何とかして金を得べく先天的に手をだすことになつてゐるので、一文でも貰はねば損だと考へ、其通り實行してゐるのだから、かうでもしておかないとさうさくて、到底見物も觀覽もできない様な状態である。政府でたてた博物館の出入口のところさへ、類似の意味の立札があるのだから、如何にうるさくつき纏ふかが想像できるであらう。埃及・シリア・パレスティン等何れもこの仲間である。

一〇・三〇から一三・一〇迄、二時間と四十分を費して卒業しておき、下山して車内で晝食をした。實はこの分れ道に一軒家があるから、そこで休憩でもすればよからうが、日本の茶店の様なわけに行か

ねるから、車内ときめたのである。一四・〇〇にここから7哩(マレーにはナシックの西南5哩とある)を距てたナシックの町の見物に行くことにした。廣い街道を全速で走るのは、常に細心の注意を拂ひ優秀なる伎倆の運轉手が操縦してゐる以上、洵に愉快なものである。間もなく町に達し、何とかいふ有名な印度教殿堂の前に停車をした。

大して私にとっては興味ある建物でもないし、内部は異教徒のためには開放されてゐないから、初めからいや氣がさしてゐた。私は別に齋藤さんをだしぬかうといふ様な悪意は毛頭なかったが、殿堂のすぐ傍に川があつて、浴客や洗濯女で賑つてゐたので、其方へ足が向いたから、川のふち迄下りて行つたところ、そこは大變な賑ひで、川へりに沿ひて多くの殿堂が並び、そのうちにはベンゴール式の屋根——起り屋根で軒反りも反對になり、中央が起つてゐるもの——を有する門等があるので、面白くて動けなくなり、齋藤さんのことなんか忘れて了つて、うかうかと寫眞等を取り乍ら三十分ばかり費し、車のところへ歸らうとしたら、少なくとも一見快感を與へざる頗る瘁猛なる面貌を有る大きな犬に吠えられ、辛ふじて車の内へ避難できたが、今度は齋藤さんがどこへ行つて了つたのか判らないので、運轉手は喇叭を鳴らしたりいろいろしたうち、漸く歸つてきて、さんざん探したが見當らなかつた、どこへ行つて了つたのだといつて、少少御機嫌が斜であつたが、元來親の代からの仇同士ではないのだから、直に仲直りをして復一所に並んで車にのり、一五・〇〇出發、談笑のうちに無滞コラバの宿舎に歸着した。表示機に現はれた距離によると、コラバ・ナシック間126哩、ナシック窟院・孟買間111哩とあつた。

ナシックには宿泊するところが無い様にきいてゐた。以前は土曜日の夜汽車で孟買をでると日曜日の朝、といったところで夜中だが、ナシック・ロード驛に着く、さうして夜があける迄車内に寝てゐてもいいさうで、朝になってから車を雇つて窟院へ住復し、又ナシック・ロード驛から汽車で歸るとよかつたが、今はそんな汽車はないからとて、日歸りの252哩を突破したのであつた。然るにマレーにはD・B・もあるし、十室を有するホテルもある——但し突然行つたのでは泊れないらしい——とかいてゐるから、私のした様な無理をしないでも、よかつたかも知れない。將來この方面の見學を望む諸君は、出かける前にコラバ驛でもきいてみるとよからう。

## 二四、ナシック (Nasik) 窟

### (イ) 制多窟

普通「ナシック・ケーブズ」で通つてゐるが、地方的には「パンヅ・レナ」(Pandu Lena) 窟といつてゐる。合計二十三あつて、年代は前一世紀から後二世に亙るといふ。この二十三窟のうち、三つの大毘訶羅窟(僧坊)と一つの大制多窟とがある。此所には最初に制多窟内の塔婆について簡単に記するにとにする(五三)。

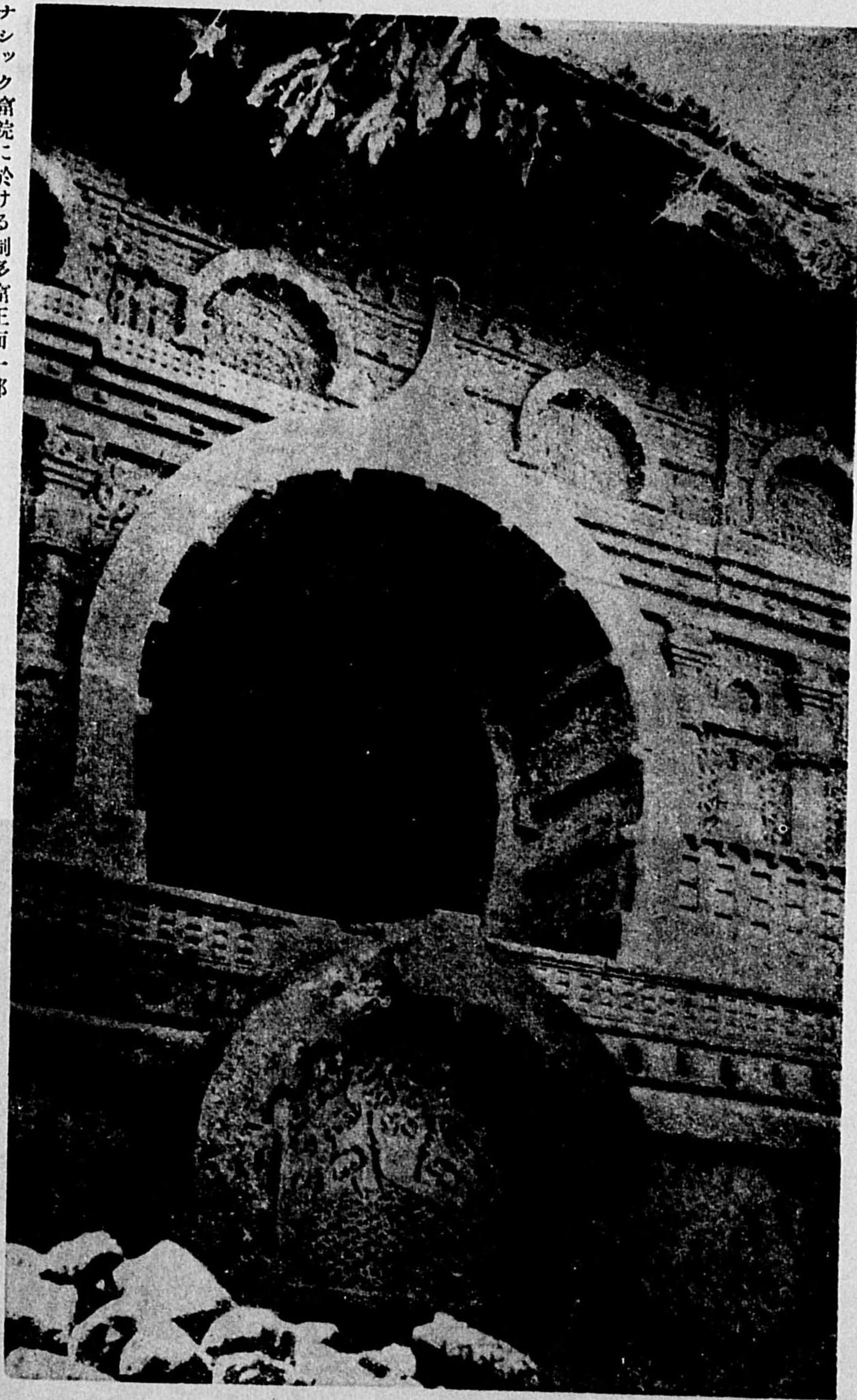
其正面は非常に手の込んだ立派なもので、大きな柱こそないが、大體に於いてベドサ窟に似てゐる。内部は深39呎×幅22 $\frac{1}{2}$ 呎×高23 $\frac{1}{4}$ 呎、内部の體裁は例の如くで、後陣は圓形に、列柱を以て身廊と側廊に分れた、中央に一基の塔婆がある。併し塔婆の下部はベドサと異り、圓形のたけ高さ一重の基壇に玉垣を廻らし、其上の塔婆は徑5 $\frac{1}{2}$ 呎高6 $\frac{1}{2}$ 呎ありといふ。とにかく現在相輪はない。

(□) 毘訶羅窟

其一 ゴッタミプトラ (Gautamiputra) 窟

第三號窟が即此で、大僧坊であり、中央の大室は深46呎×幅41呎、兩側及び後面に、各室前に共通の腰掛ができてゐる。室は右側に7、後面に6、左側に5、合せて18あるが、其後室の中央に稍や廣き壁があり、其壁面に一基の塔婆が薄肉に刻みだしてある(五四)。

此塔婆は制多窟のそれと同様高さ基壇があり、上に玉垣を廻す。完全なる平頭があり、五個の相輪を有す。平頭上五重石蓋の最上重の上部に、五個の三角形の裝飾がつけてあるが、此三角形は底邊が相接してゐるから、全體として鋸齒状をなしてゐる。但しこの部分の鋸齒狀裝飾は決して珍らしくはないので、既にバージャの塔婆窟内の塔婆に於いても見た所であるが(四九)、それはこの様に大きくはなく、従つて石の面から少し刻みだされただけであつた。併し此場合は各三角形が獨立してゐて、さうして例は少し大袈裟だが、埃及國サッカラの有名な段塔(ピラミッド)の如く、頂點に於いて合すべき二邊が一直



ナシツク窟院に於ける制多窟正面一部  
ナシツク窟院は合計二十三窟あるが、この制多窟は第十八號窟と呼ばれ、ここでは最古のものに屬し、カール窟殿と略ぼ同年代即ち前約一世紀と推定されてゐる。この正面の裝飾の隨所に佛教的の要素を見出し得るであらう。大窓の右方、柱間に小塔婆も見えてゐる。  
(昭和十一年二月二十三日)

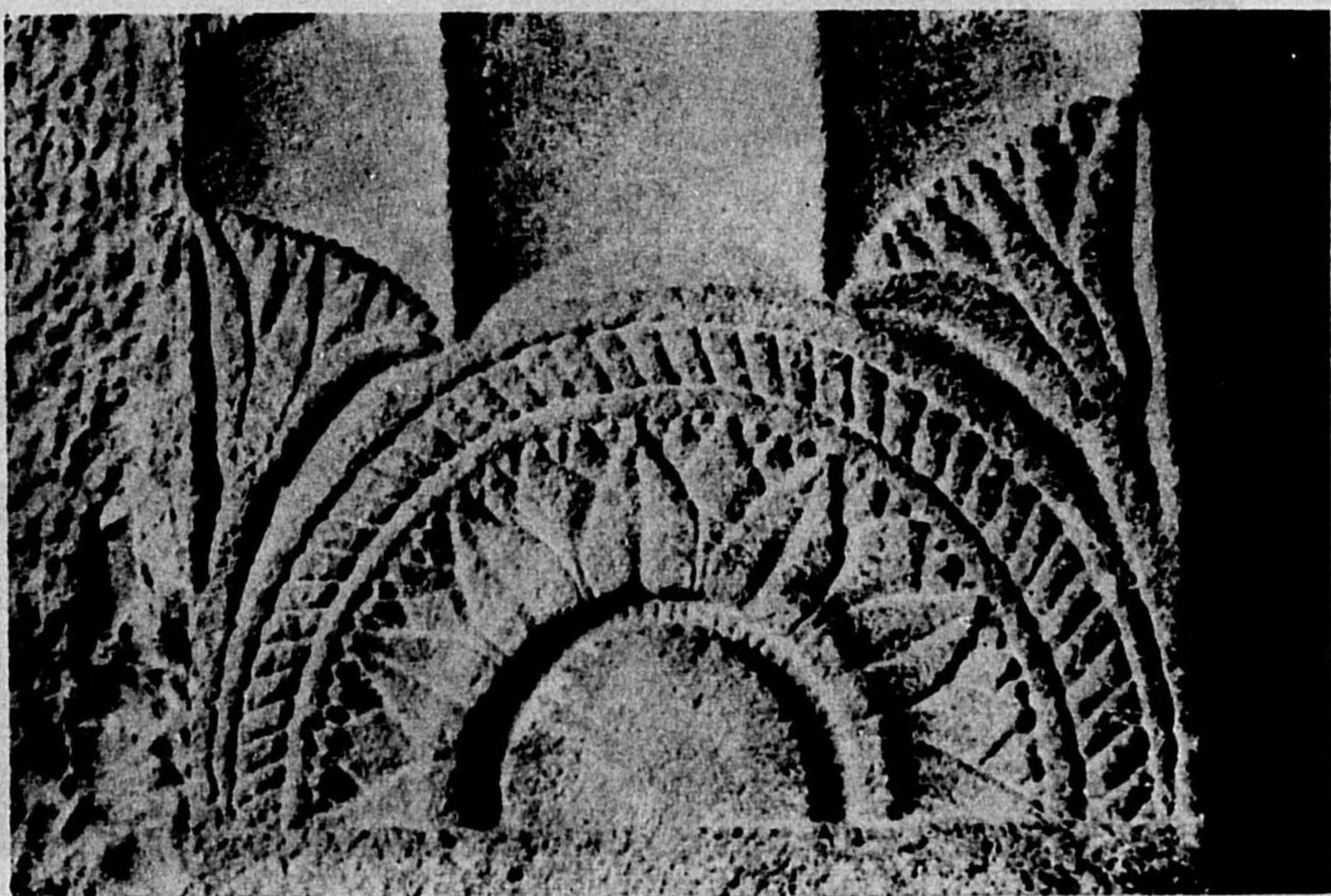
下。ナシツク窟院の毘鉢羅窟正面片蓋柱下部文様  
上。同

(兩圖共昭和十一年二月二十三日)

上部文様

片蓋柱の一で、上下に半分、中央に完全な裝飾附蓮花紋があり、四隅に埃及式蓮花の横向を彫刻したもので、これ等をより効果的ならしむるため、柱面に縦に二本の稜線をつくる如くすきとつてある。だから非常に明瞭に見える。

満開蓮花紋は、中央のよりも上下の方が、印度には普通である。つまり瓣端が三角形をなす如くにしたのである。先づ一特徴と見てよろしい。四隅の蓮花の横向きはサンチ丘上第一塔門柱上部(七一)やパールハット廢塔玉垣笠石(一五三)等にも現はれてゐる。



線をしてゐない(五五)。

サンチ大塔の復原圖のうちのある案には、平頭の上部が斯の如くしてあるし(後)、又繪等でもみるところであるが、實際はどういふ風になつてゐたのか判然しない。併しこの場合のものが割合に大きいので、段形をした方錐形のもの——杉なりに石を積んだのであらう——を軒に並べたのではあるまいかと想像をすることができる様である。天蓋の軒等もこの手の裝飾が用ひられたとはいけなからうか。よく似ているので考へてみたのである。

支那山西省雲崗の石佛寺は、此頃では少しでも其みに關心をもつてゐる人は、寫眞位みてゐると思ふが、あの各窟の内部に薄肉に刻みだしてある法隆寺式天蓋の軒上に、三角のものと圓いものが一つ隔きにつけてあるのを、私は以前から何であらうかと思つてゐたが、どう考へても何を現はしたのか考へられなかつた。併し今はこの塔婆の裝飾から、木か何かで三角形のものを刻み、圓形のものも新に加へて、一つおきにつけたのではないかといふ見當をつけてみたのである。勿論それはたださう思っただけで、大して研究もしないのだから相當に根據は薄弱である。識者の高教を待つ。

平頭の頂上から石擦をだし、上に一個の相輪あり、中央擦の左右から浪形曲線形に夫れ夫れ一本づつの擦を更に出し、二個づつの相輪をつけてゐる。輪は何れも椎茸の如く、例によつて例の形をしてゐるが、上がつかへてゐるので、かかる手段方法を用ひて多數の相輪をだしてゐる彫刻は、印度に於いては珍らしくない(殊にアマラバチ塔婆に多いやう)。

此窟院はヤジナ・サタカルニ・ゴウタミプトラ (Yajna Satकर्नि Gautamiputra) 王の命より、開鑿されたのださうだから、其王の名をとりゴウタミプトラ窟と呼んでゐる。此人は在位後一七二—一九一年 (成務天皇四十二年より仲哀天皇即位元年の前年まで) 迄の \* アンドラ (Andhra) 王朝の一王であつた。

#### 其二 ナハバナ (Nahapana) 窟

第十號窟は後一二〇年より前、鄔闍衍那國 (Ujjaini, Ujjayana) の王であつたナハバナ家の六銘文を刻んでゐるさうである。中央の廣間は深45呎×幅43呎、室は左右に5つと後面に6、合計16あり、第三號窟に亞ぐ大室で、おなじく後面中央の壁面に薄肉に塔婆を刻んであるが、後世塔身の中央に陪囉嚩像を刻み、塔婆を臺無しにしてつた(五六・五七)。

此塔婆を第三號窟の夫と比較する時、誰人もその殆んど同一であることを肯定するであらう。ただ平頭上の三角飾が、他の多くの例の様に小さいこと、椎茸型の相輪が三個である事だけの相違で、あとは同じである。後刻の大立像は例ひ塔婆の神聖を少なからず瀆したにせよ、決して拙いものではない。

\* 印度に於ては、モールヤ (Maurya) 王朝が前三二—一八四までつゞき、次にシュンガ (Shunga)、カンバ (Kanva) の二王朝をへてアンドラ王朝になつたが、アンドラ王朝は後二三六年 (仲哀天皇三十六年) に滅亡した。

#### 二五、エロラ窟 (Ellora) 窟

エロラ窟院は、アジャンタ窟院と並びて盛名を馳せてゐて、正に印度窟院中の雙壁の様に言はれてゐるし、事實其通りであるが、其見學も亦今回は都合で見合はせた。先年行つた時の有様は、拙著に詳細記したが、参考の爲少しかいてみると、大正十二年二月四日夜二三・四五に孟買發、五日朝マンマード (Mannad) 驛着、驛食堂で朝食をすまし、バイデラバート行の汽車に乗換へ、其午後ダウラタバード (Daulatabad) 驛について、驛前の D・B・に泊つたのである。併し當時の日記帳にも出發した時間しか認めてないので、今はつきりしないが、何でもマンマード驛で三時間ばかり待たされた記憶がある。とにかくついた日は半端になつて了つて仕方なしにダウラタバードの城塞を見物すべく出かけたが、これも途中から引返して了ひ、つまり無駄になつたのであつた。試みに昭和十一年三月の時間を繰つてみたら、此時間が替はらぬ以上、孟買 (V・T・) を七・〇〇發、マンマード驛で乗換 (二十分)、ダウラタバードへ一五・二三着といふことになるのが最も好都合であらう。もう一つ手前にエロラ・ロード (Ellora Rd.) といふ驛があるが、ここへ下車しては甚だ不便で、何とも仕方がないらしい。丁度信度河流域のハラッパ (Harappa) 遺跡見學のためには、ハラッパ・ロード驛へ下りずに (下車したくも、急行は停らぬ)、もう一つ先のモントゴメリ (Montgomery) でないと埒があかないのと同様と心得ればよろしい。エロラ窟院の近くに D・B・があり、そこにはカンサマがあるから、食事の用意をさせることができ

る。先年は三日間ダウラタバードのD・B・に滞在したが、印度パン(少し油気のある薄い四角なもので)とカレー・ライスばかりであった。いくら本場でも田舎のはさううまくない、新宿の中村屋でたべるように行かないので、少しばかり閉口しなくなかった。私がエロラのD・B・で晝食をつくらせたとき、カンサマは其夜マイノワから婦人客が三人宿泊することになってゐるといったが、これは前以て室の豫約しておかないと、かういふとき困る。尙ほここには立派なG・H・もある。だから將來見學を望まれる諸君は孟買でも甲谷他でもいいから、領事館からでも手紙をだして貰つて豫約(D・B・)なり許可(G・H・)なりを得ておき、窟院に近いで泊る工風をした方がいい。さうして充分見學することを勧告する。大正十二年二月八日、ダウラタバード驛から孟買へ歸着した時の日記の終りに、「次回好機を得再び印度に遊ぶ時があつたら私はエロラとアジャンタとへもう一度行つてみるつもりである」とかいておいたが行けなかつた。何でも一回ですます様に心がけないといけない。

エロラの窟院は佛教窟一二・婆羅門教窟一七・耆伊那教窟五、合計三四を算す。ここにはカイラサ殿の如き有名なものもあるが、夫れ等は姑く惜き、制多窟内の塔婆に就いて記してみる。

此地所在の十二の佛教窟のうち、第十號窟が即ち制多窟で甚だ美しい。窟の大きさ約深86呎×幅34呎高×34呎あり、窟院の前は大きな平場になつて居り、その正面は二階の様につくり、正面上層に濡椽をと

り、其下を柱五本で支へてゐる如くしてある。階上正面の壁には普通にみる大きな馬蹄拱窓はなく、大きな一つの拱にすべき部分を、中方立(ナカホ)にあたる柱二本を以て三つに區劃し、上方は三葉形として下部は胴蛇腹の如き無目を以て埋め、上の方の中央の小部分だけを馬蹄型の窓にしてある(五八)。

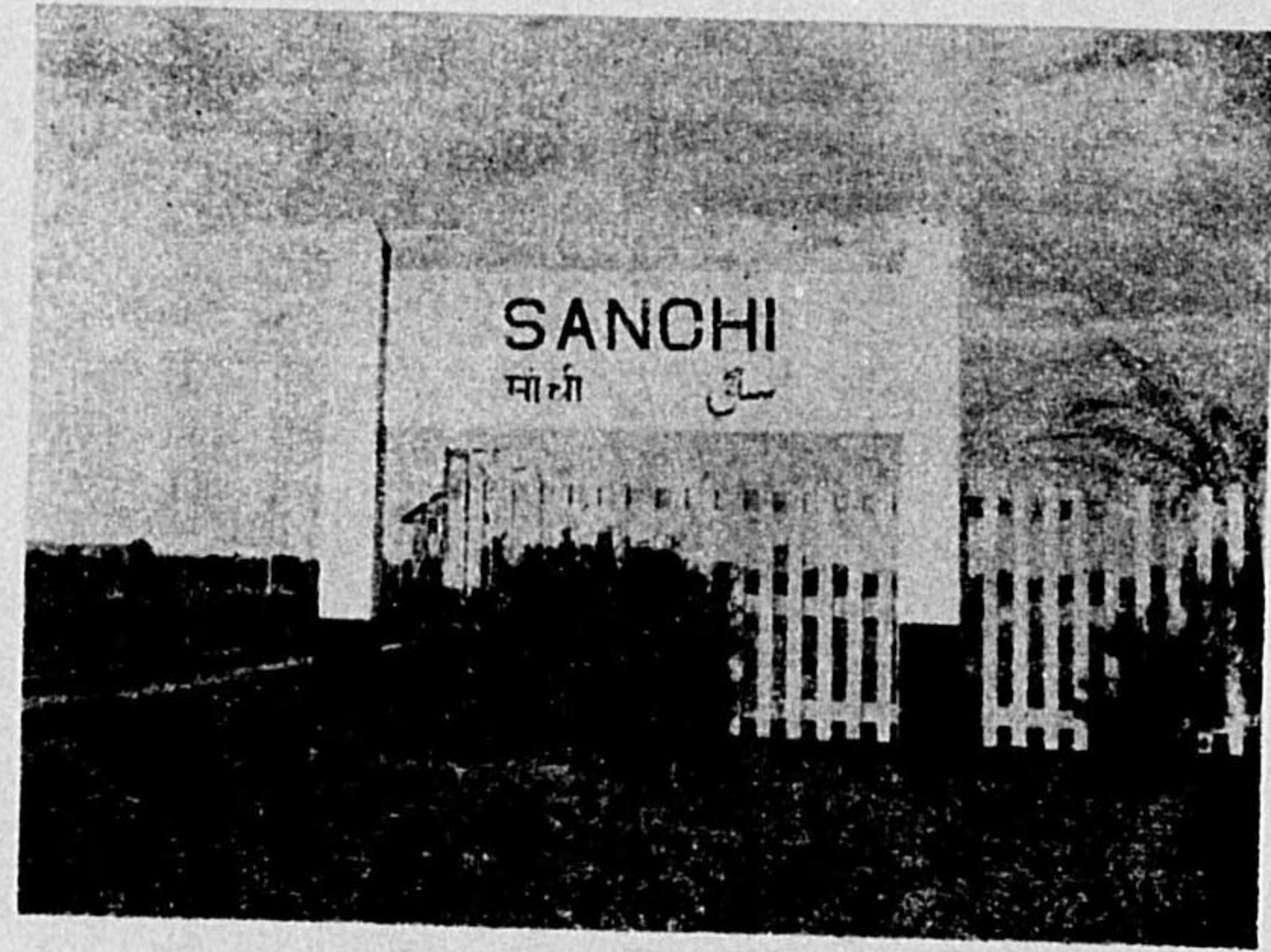
内部には大きな塔婆があり、正面に佛像を刻んである。塔婆は平頭(方形で)を有するも相輪を缺く。ある書物には“but no umbrella”とあるが、これは何も此場合に限つたばかりではなく無い方が多い。まさか初めからなかつたのではあるまいが、甚だ曖昧な書き方ではつきりしない。私は勿論上まで登つてみることは、できもしないし、しもしなかつたから、今以てはつきりしない。

此窟は一に毘首羯摩窟 (Visvakarma (Vishvakarma) Cave) といふ。中央の大像を毘首羯摩像として、大工・指物師・彫刻師等の工人が、禮拜のため多く參詣するために、此名がついたさうである。塔婆高さ27呎といふ。

(昭和十一年十二月四日稿了)



印度佛塔巡禮記



サンチ驛立札  
(昭和十一年一月二十一日)

(第四回)

## 二六、サンチ (Sanchi) へ

昭和十一年一月十四日、南印から錫蘭への旅行をすまして孟買へ歸着し、それから西印度へ出かけるため、用意をしたので約一週間を費したが、出發の前日バージャ窟とベドサ窟との見學をすまし、其日も朝から夕まで殆んど働きつめであった。さうして其次は入浴夕食と目まぐるしく、一八・三〇に宿舍を出で、V・T・驛へ行つたが、荷物は既に早くワッサンが運び出して客車に積んであるのだから、私はただ自分の身體だけもって行けばいいのである。江商支店の殆んど全部と、東綿からSさんが見送つてくださった。非常に辭退したが、外國へ行つては通用しないのであきらめた。

領事館からの手紙だといって、大きな封筒をTさんから渡されたが、いやに重かつたので、ことによつたら日本からの便りも入つてゐやしないかと思ひながら汽車へ乗つた。私の室は幸なことに相客はなく、一八・五〇にそろそろ動きだしたとき、皆一齊に帽子を振り、私も窓から半身をだして見えなくなる迄應酬し、皆さんの厚意を感謝しながら出發をした。封筒をあけてみたら、故國の知人からの手紙が四通あり、そのうちには建築や發掘物の寫眞等を入れて近況を報せられたのもあつて、大變に面白かつたが、ねむいのとつかれとで、間もなく消燈をした。

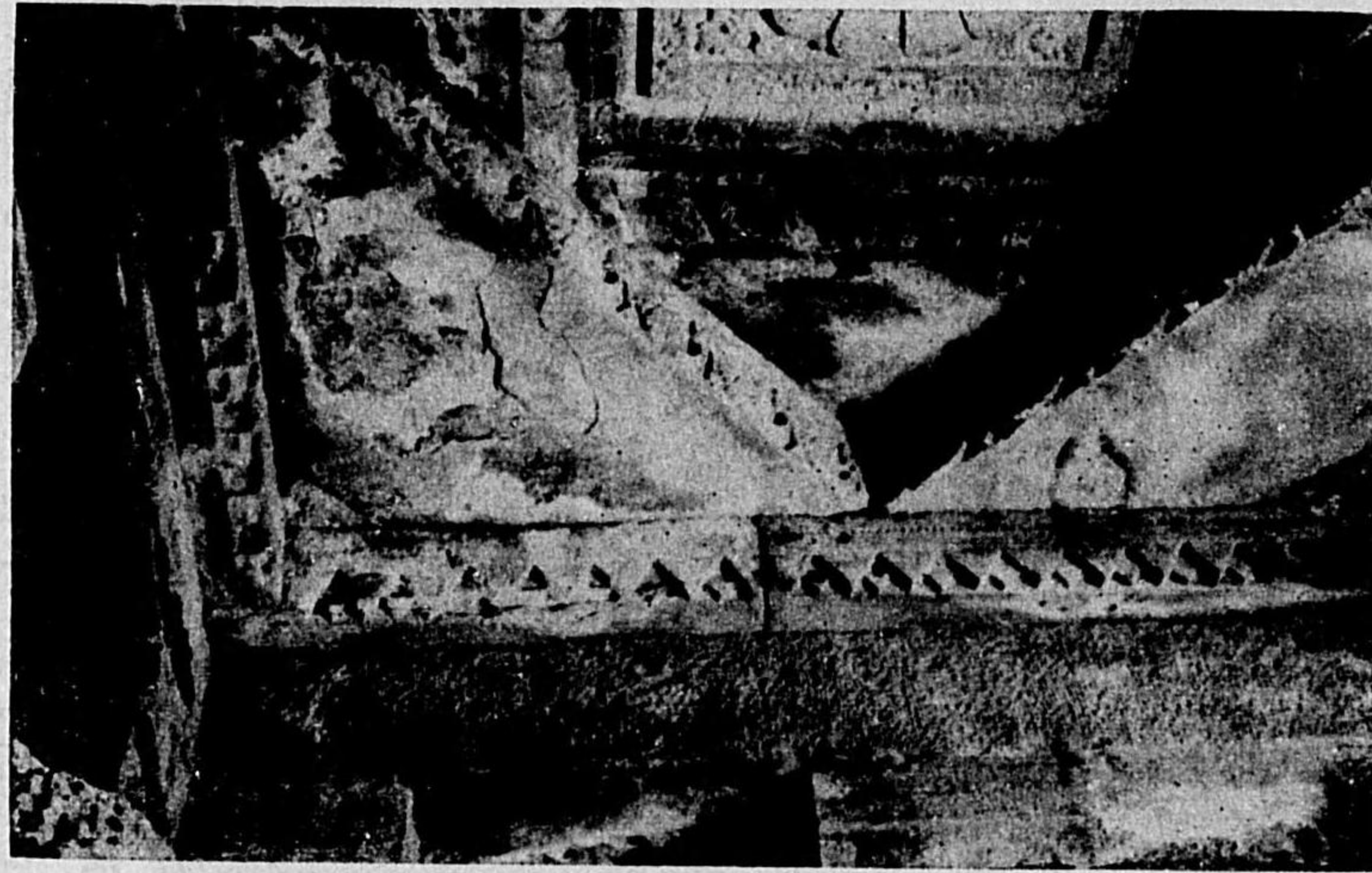
此汽車は急行列車である。急行はサンチ驛には普通は停車しない。併し前以てポール (Bhopal) 驛長に依頼しておく、一二等客のためには特に停車させてくれるのである。そこで此度はそのためにポ

ール驛長に電報を打つ事と、サンチのD・B・に二泊の準備をさせる様にしておいたといふ事とを、Tさんの秘書役のHさんからきいてゐたので、ゆつくり手足をのばしてねることができた。

大正十一年に初めて行つた時は、十二月一日の二・三〇にV・T驛を發車し、翌二日前五・四〇サンチ驛に着したが、汽車がポール驛に停つた時、従僕が驛長を引張つて來たので、私が何か言はうとしたら、先方からサンチ驛へ停車の事は承知してゐると言つてくれたので、大變に安心をしたのをよく記憶してゐる。この時もボンベイから、當時東綿支店に勤務して居られた佐藤さんと云ふ方が電報を打つておいてくださったのであつた。汽車がサンチへ近づくと、汽車の進行する方向の右手、即ち東方の丘上に、大塔の輪郭が——丁度夜の明け方で僅に東が白んでゐたから——はつきりと見えた。此時私はどういふものかここは法顯も玄奘も行つてゐないといふことも大に手傳つたためであらうが、非常に感激したので、それから十五年たった今日でも其時の興奮の工合は、極めてはつきりと頭に残つてゐる。

併しながら今回は、何にしる孟買を出たのが夕刻であつたから、着したのは前九・一三頃で、時が時だったので、輪郭ではなく全形がよく見えた。早速D・B・に行つたところ誰も居ず、聞くところによると、前日誰かがどこからか態來て、私が二泊することをカンサマ (Khansama) (食事の用意をする) ことのできる番人に話し、いろいろ準備をして引あげたさうである。さうしてみるとHさんの電報の結果、附近の江商に關係ある印度人の使用人が行つてくれたものと見える。まことに有難いことである。

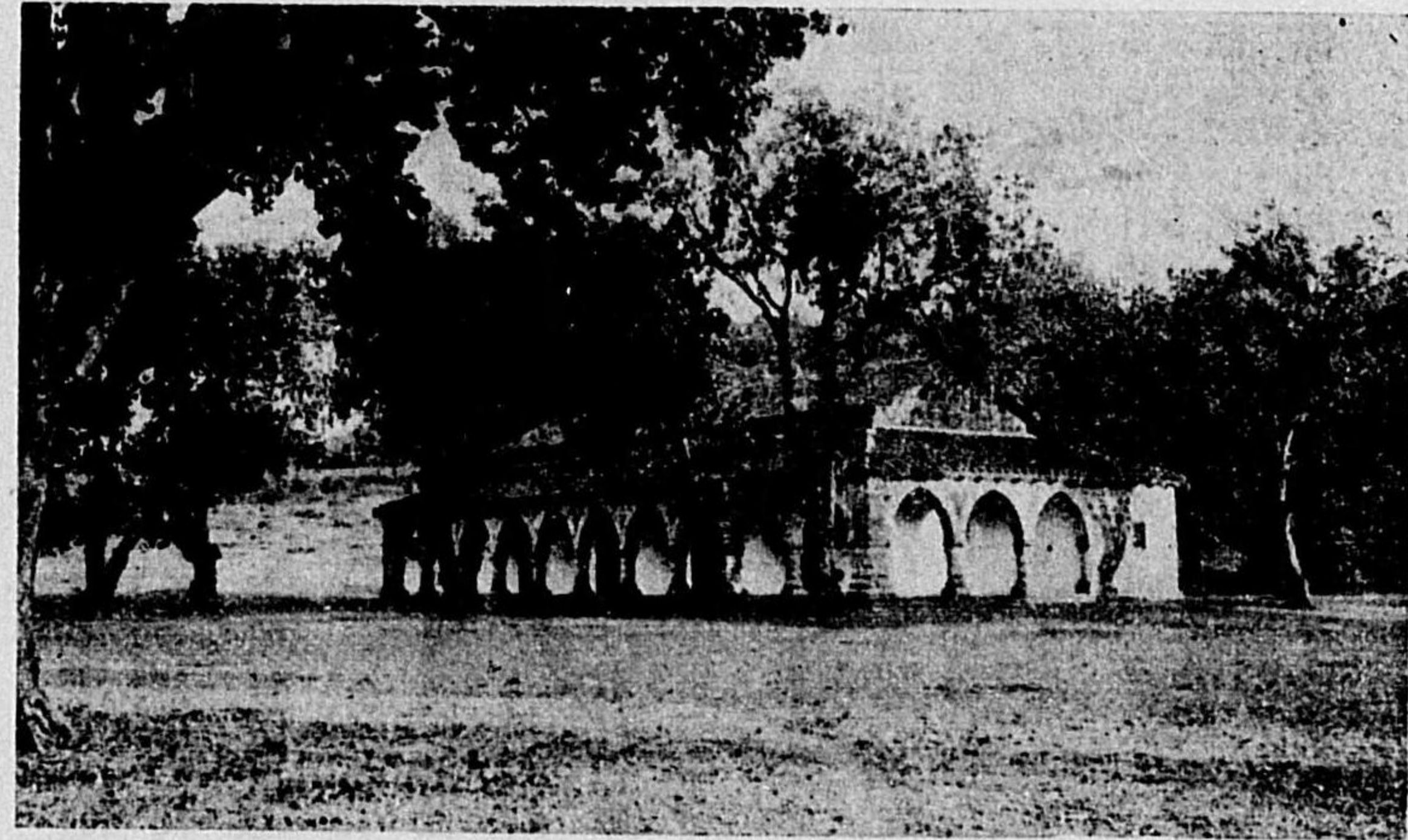
ここのD・B・は二室しかなく、北面して建ち背面を除いた三方を溝椽が廻り、周圍は廣く靜かなる



サンチ丘東方廢堂初重天井一部見上げ  
(昭和十一年一月二十一日)

室が正方形で且つそれが相當に大きな場合、天井を一石で覆ふには少し大きすぎるとき、先づ中央に面積 $\frac{1}{4}$ の正方形をつくる如く、四隅に $45^\circ$ に石を置き、更にその上に同様の方法をくり返し、最上部を一石で覆ふ方法は、印度に於けるジャイナ教祠堂に多くみるところである。夫れと同じ方法をここにくり返してゐる。尙ほ私は此種の天井をアーメダバード市のシヂ・バシール (Sidi Bashir) のモスクの前に建てるマンダバムの様な吹き放しの建物の天井及び郊外サルケジ (Sarkej) に於けるアーマッド・シャー (Ahmad Shah) 廟に於いてみたが、他所ではつい氣がつかなくかつた。この $45^\circ$ の石の代りに木を用ひた例は支那にある。我國なら火打梁だが、この様にうまく正方形をなす様に用ひたのではない。此建物に於いて最下の位置で天井廻縁に當る石の側面についてゐる連続等脚三角形文様が甚だ面白い。此種の文様はグワリヤ城塞上に建てるテリ・カ・マンデル (第179—180頁) 同サス・バフ堂の裝飾 (第183頁) 或は鹿野苑發掘の僧坊軒飾 (第286頁) 等にも見出し得るが、我國のと異り何れも新しいもののみである。

んだところ、天井に近く法隆寺天蓋式即ち三角切をたたんで下げた様な裝飾が見つかったので大に驚かされた。實はこんなものは先年は全然氣がつかず、ただ天井が正方形を交互につみ重ねた様な形になつてゐたのだけ注意をし、あとは何も見えなかつた。申譯の様だが外の強烈な光線になれた眼で暗い室内をみると、殊に天井のあたりは黒暗暗——少し



サンチD.B. (昭和十一年一月二十一日)

西北方よりみたところ。室は兩端にあり、中央は食堂。濡縁が東・北・西の三方を廻り、周圍は廣く、まことに居心地がよろしい。先年獨り旅の最初の夜泊つたところで思出が殊に深い、あの時は東端の室であつたが、今度は西端で、つまり西北隅を占領したわけであつた。先年は丁度いい月夜で、餘りいい氣持だつたから、單衣がけでそこいらを散歩をしたが、今度は月もなく、うそかほんとか虎がでるといふ噂もあり、先づでるのをやめて室にとぢ籠り、日記等を認めて食後をすごした。

こと申分はない。而も前回と同様泊り客が他になかつたので、大に我意を得た次第であつた。朝食としては既に汽車中でチョータ (Chota Hazree) (早朝紅茶と燒をたべる。これをチョータ・ハズリ略してチョータといふ。これに玉子の半熟か目玉焼位をつけさせれば。朝食の代り) をすましてあるから、食べるには及ばぬ。暫く休憩して一〇・〇〇に宿舎を出で、裏道から第二塔の所へ行き、玉垣についてゐる圓文の寫眞をとりだしたが、二時間餘を費し大分收穫があつたので晝食のため一度歸宿した。午後は一四・一〇に出て丘上に行き、唯一の二重殿堂遺跡たる東方廢堂のところに行き、内部の寫眞をとるべく覗き込

\* 第159頁註参照。

お負けもあるが——としてこまかい所等はよく見えなかったのである。何分初めて正倉院を拜観した時の様に、少なからず興奮した結果であつたらうと推定する。

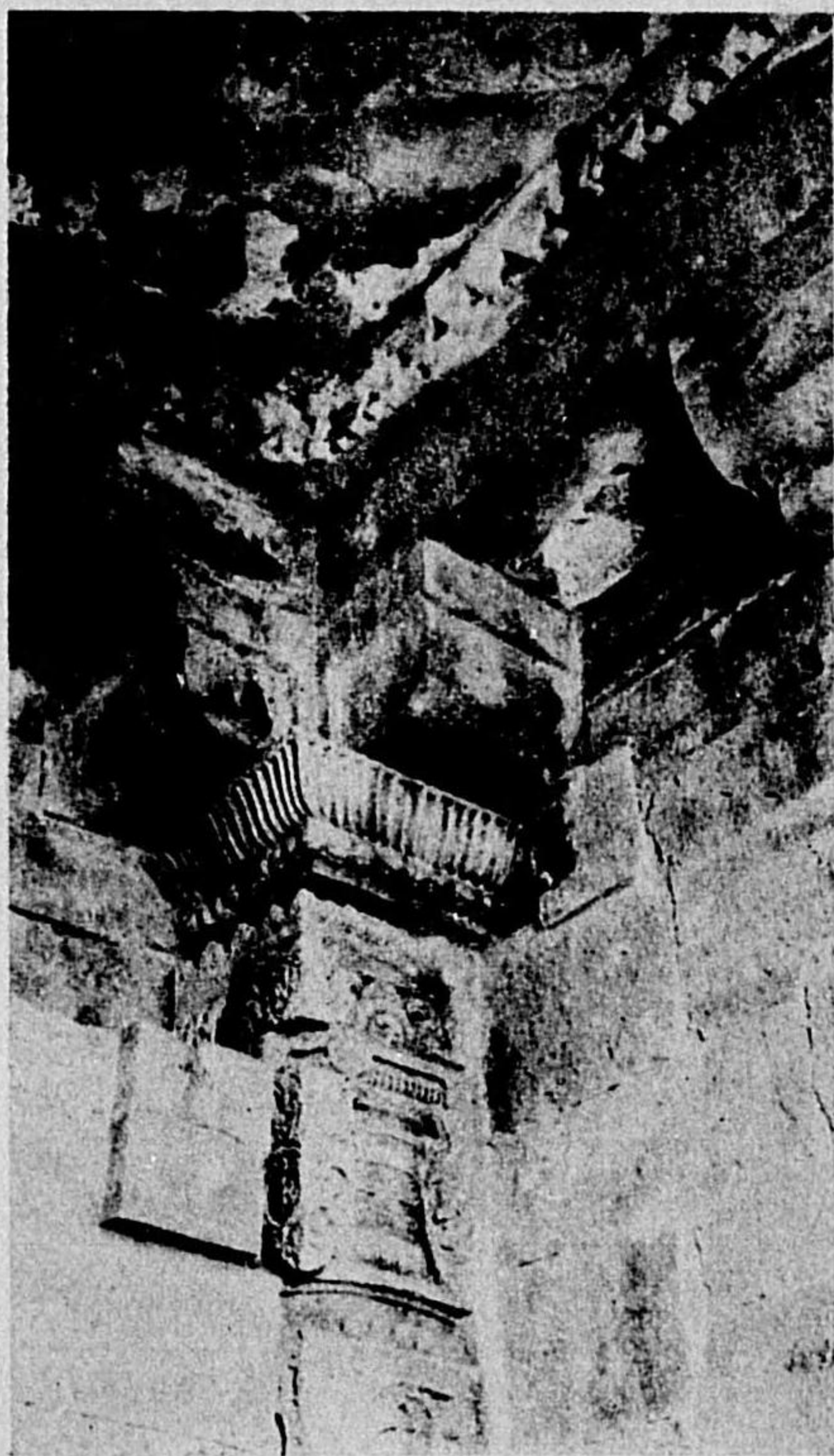
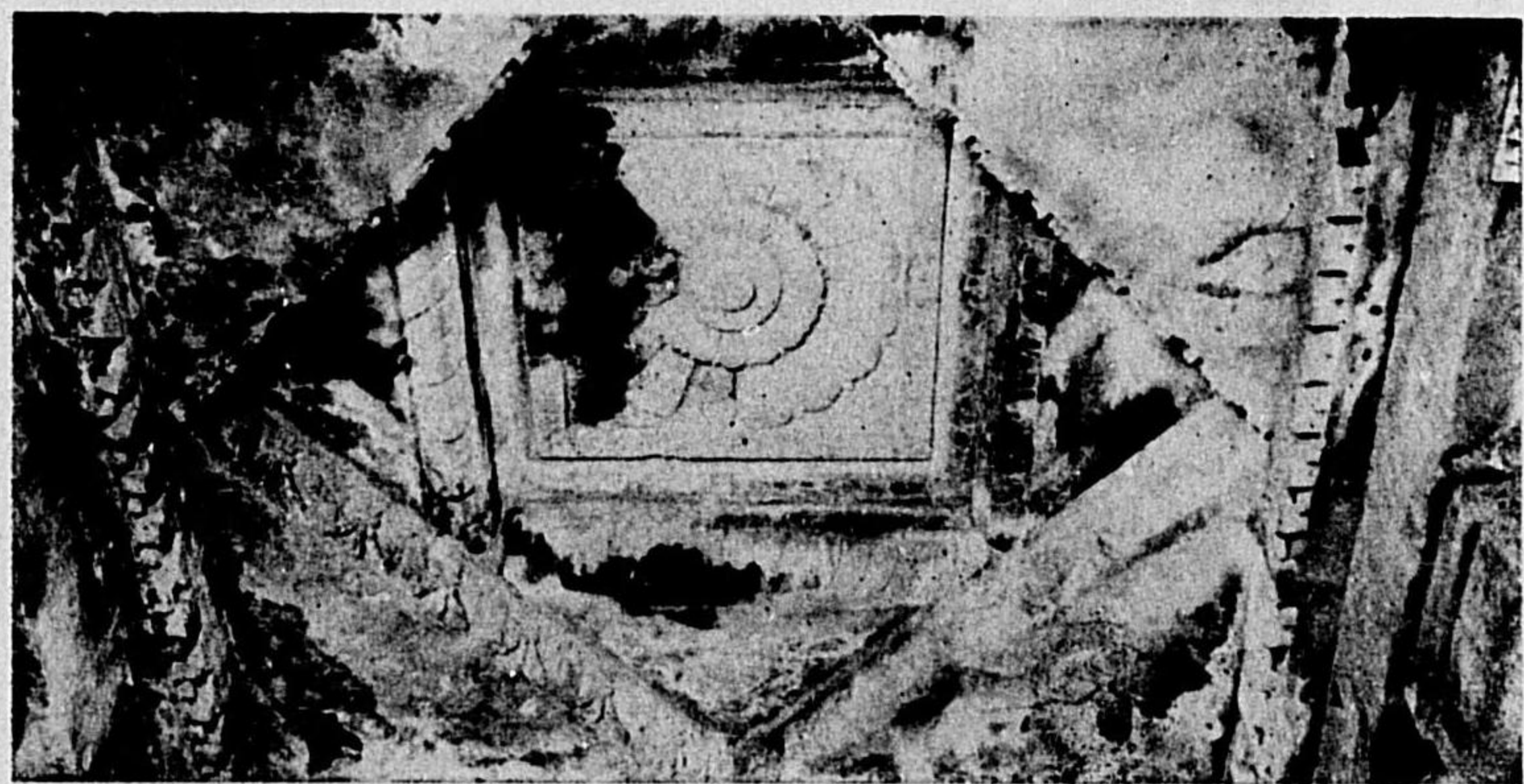
此堂は大體に於いて第十二世紀頃と考へられてゐるものである。三角飾は古いとばかり思つてゐたのに、これは少し工合がよくなくなつてきた。先年鹿野苑に於いて、發掘された僧坊の軒だらうといふ石片に、これと共に我國の飛鳥文様らしい唐草を刻したものがあつたので、うまいものを見つけたとばかり、不用意にもこの種の裝飾文様の系統が判りかけた様な氣がして、そんな様なことを何かに書きちらしたが、再考せねばならぬことになつてきた。と思ひながらも愉快でたまらず、早速フッサンに照明係を命じて、とつた數枚の寫眞のうち數例をここにだしておいた。尙ほこの事については後に二度ばかり觸れるつもりである。

先年みた相輪の殘闕を探したが今度は所在が明らかでなかつた、あきらめて再び第二塔のところに出た。何故さうこゝばかり目の仇にしたかといふに、玉垣の圓文が目的であつたからである。今度こそあの圓文を一つ残らず觀察し、できたら全部寫眞にとらうといふ、考へ得るだけで行ひ難い決心を以て出かけたのだから、夕方になれば日のあたり工合も異なるから、また都合のいい珍しいところかとれるかも知れないと思つたからである。さうして一七・三〇迄あさるつもりで、私だけ残るから先きに歸宿する様に從僕に申渡したところ、カンサマの話によると、近頃は虎が附近に出没し、仔牛と羊とを食ひ殺したりして甚だ物騒なので、夜は樹上に登り、近所の若者と共に虎を射殺するつもりだ。かかる有様だ



サントチ丘東方廢堂全景 (昭和十一年一月二十一日)

六〇の二右端 Temple とかいてあるものを西南方からみたところ。あの圖に Monasteries 12th (en. A.D. とかいてある建物に喰ひ込んである。これは第11—12世紀のものだと推定されてゐるので、境内では最近建築の一である。此時より數世紀前に、他の祠堂が建立され、周圍に作坊があつた事は新堂の方がこれ等より高く位置してゐるので現場へ行つてみれば直に了解ができる。此新堂には左右 (即ち南北にのび西面せる) 回廊が附屬してゐる。前頁及び次頁に示した天井及び連綿等脚三角文様は、此殿下層天井の一部である。上層のはどうなつてゐるか知らない。



上。サンチ丘東方廢堂天井 其一（全景）  
 下。同 其二（一隅）  
 （昭和十一年一月二十一日）  
 （昭和十一年二月二十一日）  
 第129頁挿圖の解説で大概了解し得たと思ふが、尙十分ならしむるため、ここに二圖をだしておく。テリ・カ・マンデルの内部にも、これと殆んど同じ文様があるから、比べてみると如何によく似てゐるかが一層明らかであらう。周囲の天井廻縁側面の「連続等脚三角文様」は勿論だが、次の面積<sup>14</sup>正方形側面の「蓮花に懸花裝飾」、次の面積<sup>15</sup>正方形側面の富貴寺大堂軒瓦式の「大蓮花の横向」、並中央「満開の大蓮花文」等、何れも注目すべきである。

から、虎はいつ出るか判らない。おそく迄こんな所にゐるのは危険であるといつて自分は直にでも歸りたく、私一人残ることにも不賛成であった。

サンチやアジャンタに虎がでたといふことは豫てからきいてゐたが、勿論おどかしたと思つてゐたのに、彼はまじめな顔でいつたからやめにして下山した。併しまだ日は高いから、バンガロー前で彼に別れ、一人でいい加減に歩いて鐵道線路の近くまで行き、小丘全景の寫眞をとつた(六一)。もう少し離れると頂界線に第三塔が見える筈だが、もう面倒になつたので途中の畑の中からおいたところ、折柄の好晴で日が一ぱいにあつてゐて、第一第二の兩塔は濃い緑樹の間にまっ白に光り輝いてゐたが、扱てそれを寫眞にしたら、塔が半分消えたり背景にめり込んだりして、どうも思ふ様なのができなかった。夫れから驛へ出てそこいらを歩き廻り、六時頃歸宿をした。十九日の窟院見物に少し無理をしてつかれたせいか、休養が必要になつたので早くねることにしたが、それはそれは實に静かとも何ともいい様がなかつた。このたびは月が出なかつたのと、虎の一件とで散歩するのは見合はせた。聖人でなくとも暴虎馮河はやめた方が賢いにきまつてゐる。此日は終日晴れたり曇ったり、寫眞をとるのに大變ひまがかかつて困つた。

明くれば一月二十二日、思った程晴れてゐず雲が大分にあつた。此朝も朝食はチョータ・プラス・玉子の半熟としておいたが、麵包が久しぶりで印度パン即ちチャポチイ(Chapotis)であつた。先年もここで初めて此パンをたべたが、此度も亦同様で、十二月九日上陸以來、此時がチャポチイの食べそめで

あつた。八・〇〇項出かけたが、此朝は表道から登ることにして、宿を出て少し行ったら左手の方から西洋人が一人急歩でやって来て、さも親しいやうに馴馴しく挨拶をした。都だとこんなのにろくなのはないが、田舎だから先づ大丈夫らしい。そこでよくみたところ、老人で如何にも善人らしかった。それ

サンチ丘第三塔に近き小塔群

(大正十一年十二月二日)



前回は第三塔に近く、この様な奉獻小塔婆が並べてあつたが、どこへか片づけたものと見えて、随分さがしたが、大塔上の相輪同様見つか

にしても彼は昨夜どこへ泊つたのかと思つてゐたら、昨夜は九時頃着いたが、一人でも何とも仕方がなかつたので——その筈、彼は従僕を連れてゐず、ほんとうの單身あつた——驛でねた。ところが身體が痛くて何とも致し方がなく、殆んど寝られなかつたし、朝食も未だだといつた。氣のどく至極ではあるが、これは全く本人の不用意からきたので、従僕も連れず夜晩く、こんな田舎の寒村に下車したが最後、何ともしやうがないのは當然である。それにしてもあんな驛のどこに泊つたのか知らんと思つてゐたが、これは私が氣がつかなかつたので、

驛には寢臺を備つけた一室があるにはある。併しいふ迄もなく、寢具もなければ設備といつて殆んど零だから、毛布でも持って居なければ籐の寢臺の上にごろ寝をするより他に方法はない、況や食事等は思ひもよらぬ。といつて夜になって例ひ近いところにせよ、D・B・まで来るのは、従僕でも連れて居ぬ限り不可能であらう。無理にやってくれば、虎が出ない迄も何が出るか判つたものではない。

此老人は少し心細かつたので、とにかく印度人でない人をこの片田舎でみつけたのだから、挨拶をしたに違ひない。そこで同行して丘に登り、二三ヶ所案内をしてあげたあと、正午十二時に第一塔の西の下り口で出會ふ約束をして分れた。それから自分の仕事を一通りして陳列所へ行き、一巡して地圖を一枚買った。此地圖は印刷は可なり拙いが、一九三一年(昭和六年)にできたのだから、先づ最新刊といへやう。今回其一部を複製して掲げ、遺跡の配置を一目瞭然ならしめようと思つたがどこへしまったかいくら探しても見當らないので、止むを得ず見合はしたが、将来——はもつといいのができるだらうが夫れまでは——ここを見學する人のために至極便利だから、見つけ次第掲げようと思つてゐる。それまでは六〇の一でがまんしておくより仕方がない(此圖は後に見出したので、六〇の二に掲げておいた)。

買ふときにはその様な細いところ迄は氣がつかなかつたから、價をきき先方のいふがまま一ルーピー四アンナ拂つたが、あとでゆつくり見たら一ルーピーといふ價が印刷してあつた。自分が充分間が抜けてゐた結果であるがけしからなのである。印度人なんか正直と思ふのが間違で、こんな所の番人ときては、ずるい方が當然なのである。それが若し落しものでも拾つてきてくれたとすれば、それは正直なの

ではなくて金が欲しいのである。落しものが金銭か寶石か何でない限り、隠匿してゐても何にもならぬから、金にかへるつもりで差出すと思へば、當らずと雖も遠からずである。

古蹟觀覽料は一名がルービーだが、プロフェッショナルは無料だといふから拂はずにゐたら、とうとう請求をした。シリアに於けるバルベック (Balbeck) の廢墟では、觀覽料として一ポンド (シリアの當時邦貨換算) 拂はされたことを思へば、ルービーは壹圓參拾錢位だから安いものだ、而もこれがポーバル州の収入となり、古蹟修理費の一部にあてるのだといふ尤も千萬の費途が明示してあるし、確かな領收證もくれる。或はこんな場合には、若干の喜捨をする方が我々の義務かも知れぬと思つたが、餘裕がないのでやめにした。

正午十二時に約束のところへ出遇ひ (さすがに時間は精確であつた)、どうせ歸るのだから第二塔のところへ下り、此玉垣圓文の價值を話したが、判つたのか判らぬかその邊は知らない。彼は共に D・B・へ来て晝食を命じたが、そのとき私の室をみて、こんな上等な宿泊所があるのに、昨夜おそくついたばかりに、洵になさけない一夜をあかしたといつた。食後彼はアグラへ行くといつて歸つていつた。彼は永年支那にゐた米利堅の傳導師ださうだが、D・B・で食料の他にルービーの室料を請求したといつて頗る不平であつたが、それは例ひ一分間休んでも、一泊したと同じ室料をとるのが規則だから仕方がない。此老人はこの塔婆に現はれたる文様等については、まるで何も知らず又何等の感興を惹かぬ様であつたが、この D・B・に近くなつてゐた二本の殉死柱 (Sati (Suttee) Pillars) (夫死したる時屍林と共に妻が生きたがら火葬される習慣が昔印度に於たが、其夫妻の

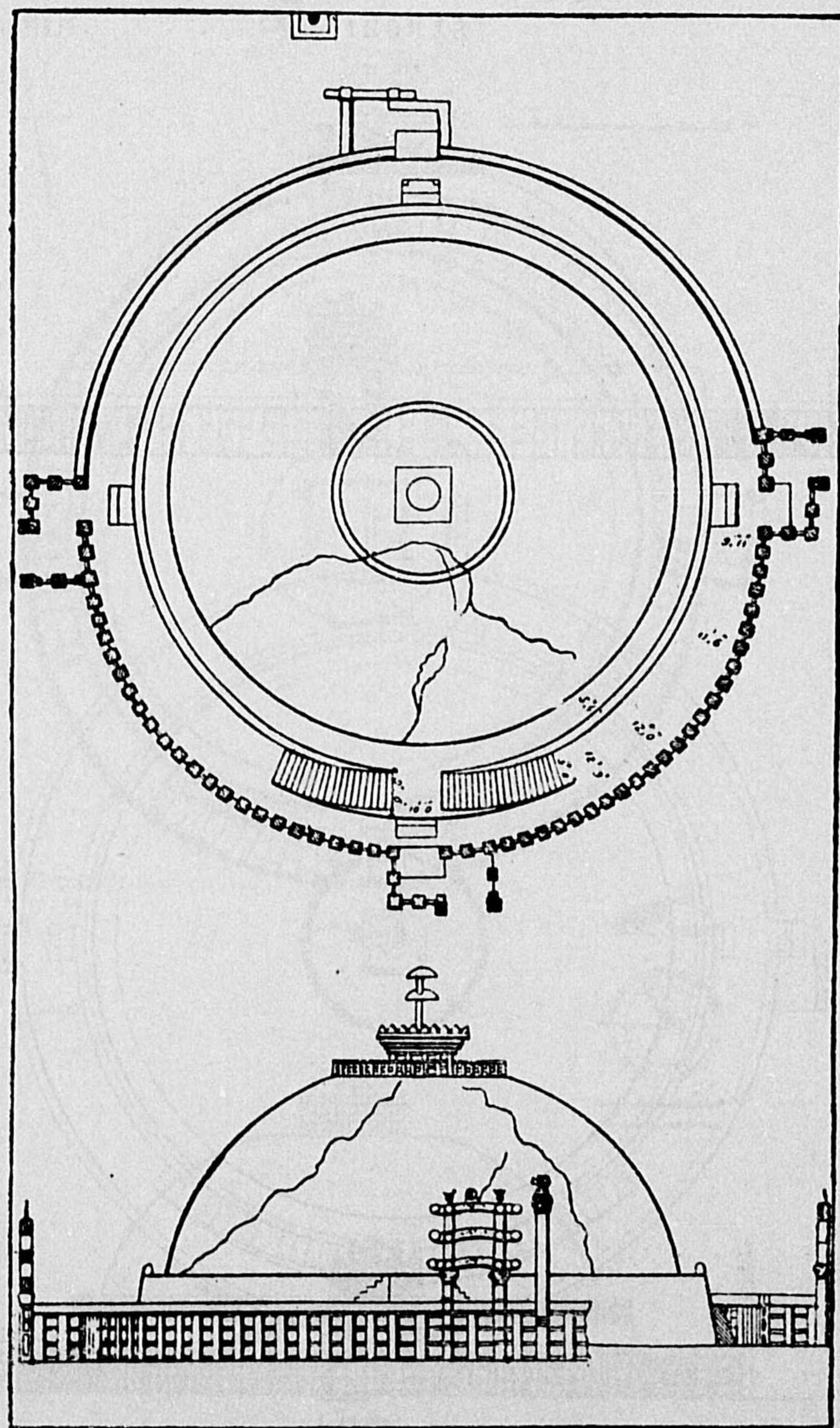
姿を刻した柱。我國の板碑の様に平たい石のものもある。下冊第 181・182 頁) の話をしたら、サチといふことについてはよく知つてゐた様であつた。但し其柱を態態見に行かうとはしなかつた。

午後は一四・〇〇に出かけて丘上に行き、第三塔附近にあつた奉獻小塔婆が澤山一列においてあつたのを探したが、夫はどこへ片づけたか、つい見出せなかつた (第 134 頁挿圖)。一時間餘りして復第二塔の所へ下り、反射をかけたりにして變つた圓文をとつてゐたら、大きな雲が出てきたので大急歸宿、夫から後一時間と十五分は大曇りで何もできず、漸くにして五分ばかり日がでて又曇つてしまった。サンチの二日は斯の如くにして過ぎ去つたのである。

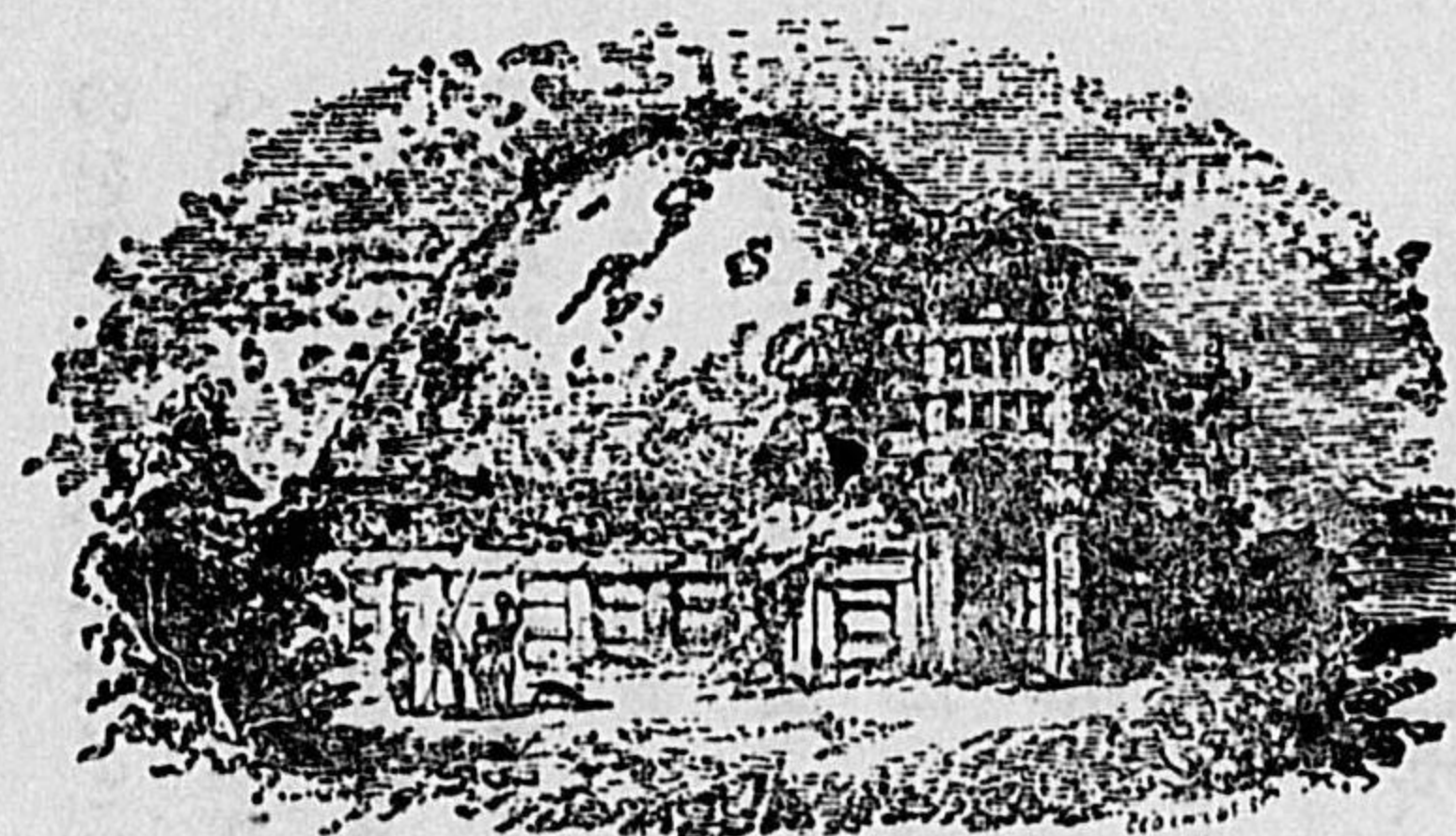
目的の第二塔の圓文は、ほんとうの事をいへばものの十日も滞在をして、拓本でもつくらねば駄目である。それもやりだしたらきりが無い、皆欲しくなる事はいふ迄もない。實は拓本の道具も持つてはきたが、到底そんな事をしてゐるひまはないから、途中で思ひ切り、ここでは二三十枚の寫眞をとつただけで満足しておくことにしたのである。

## 二七、塔 婆

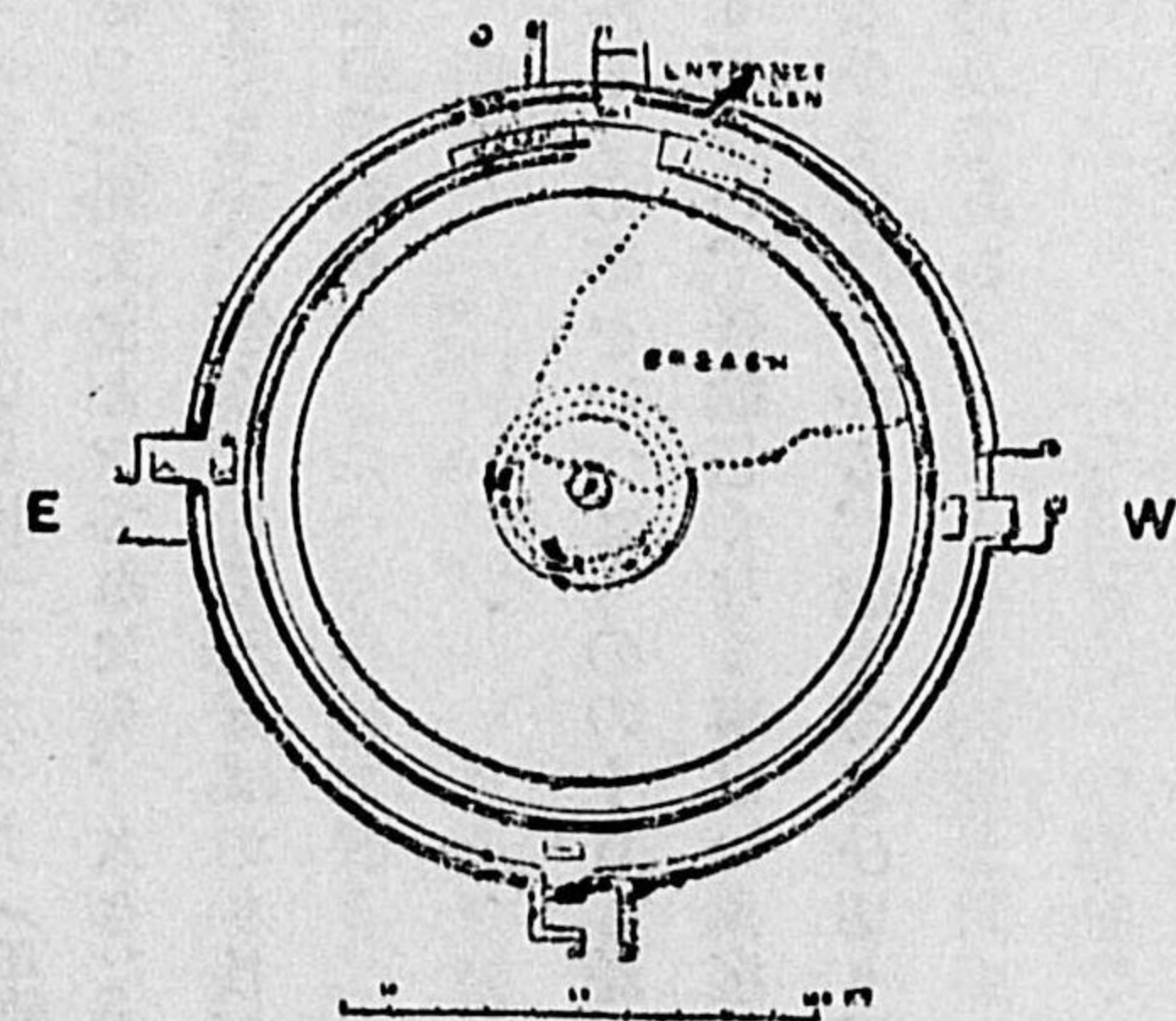
### (1) 第一塔



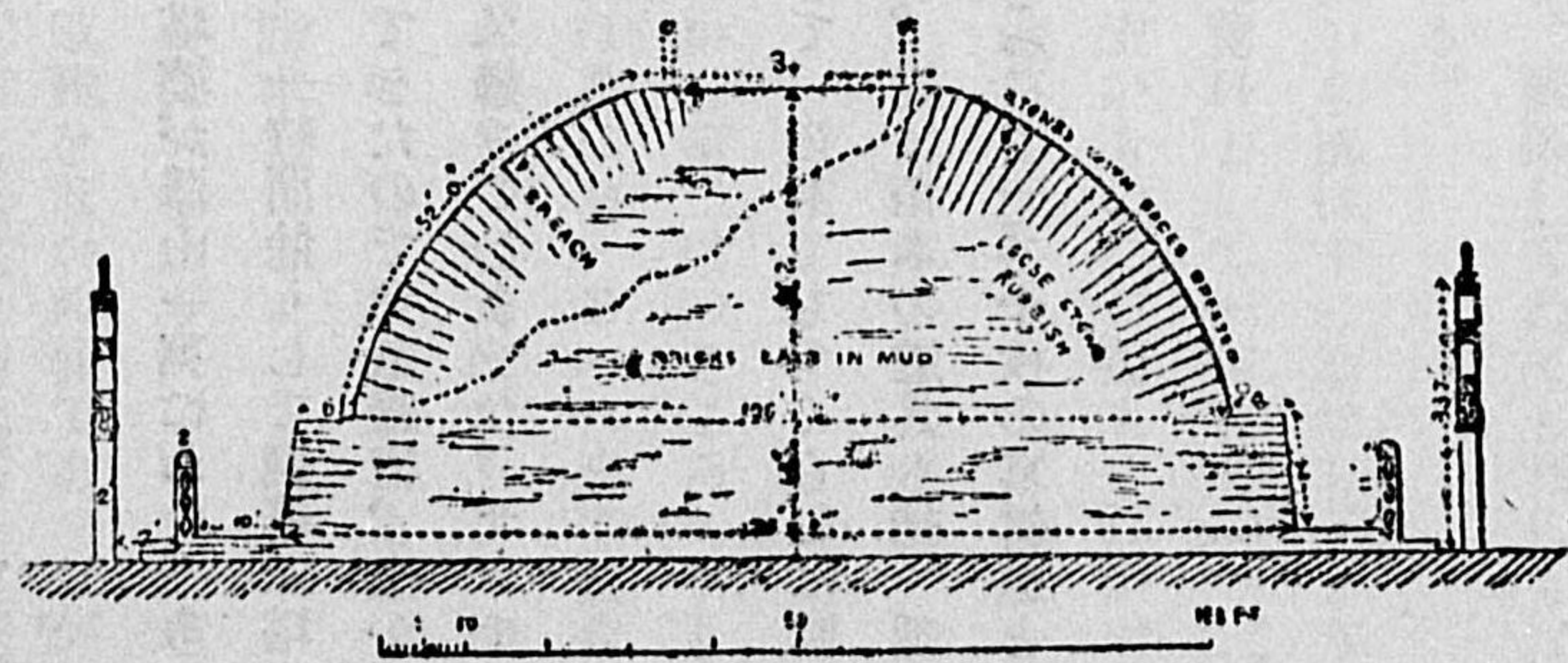
Plan und Seitenansicht des großen Stüpa von Santschi nach Cunningham. The Bhilsa Topes, Tafel VIII, London 1854.



12. View of the great Tope at Sanchi, north-east side.

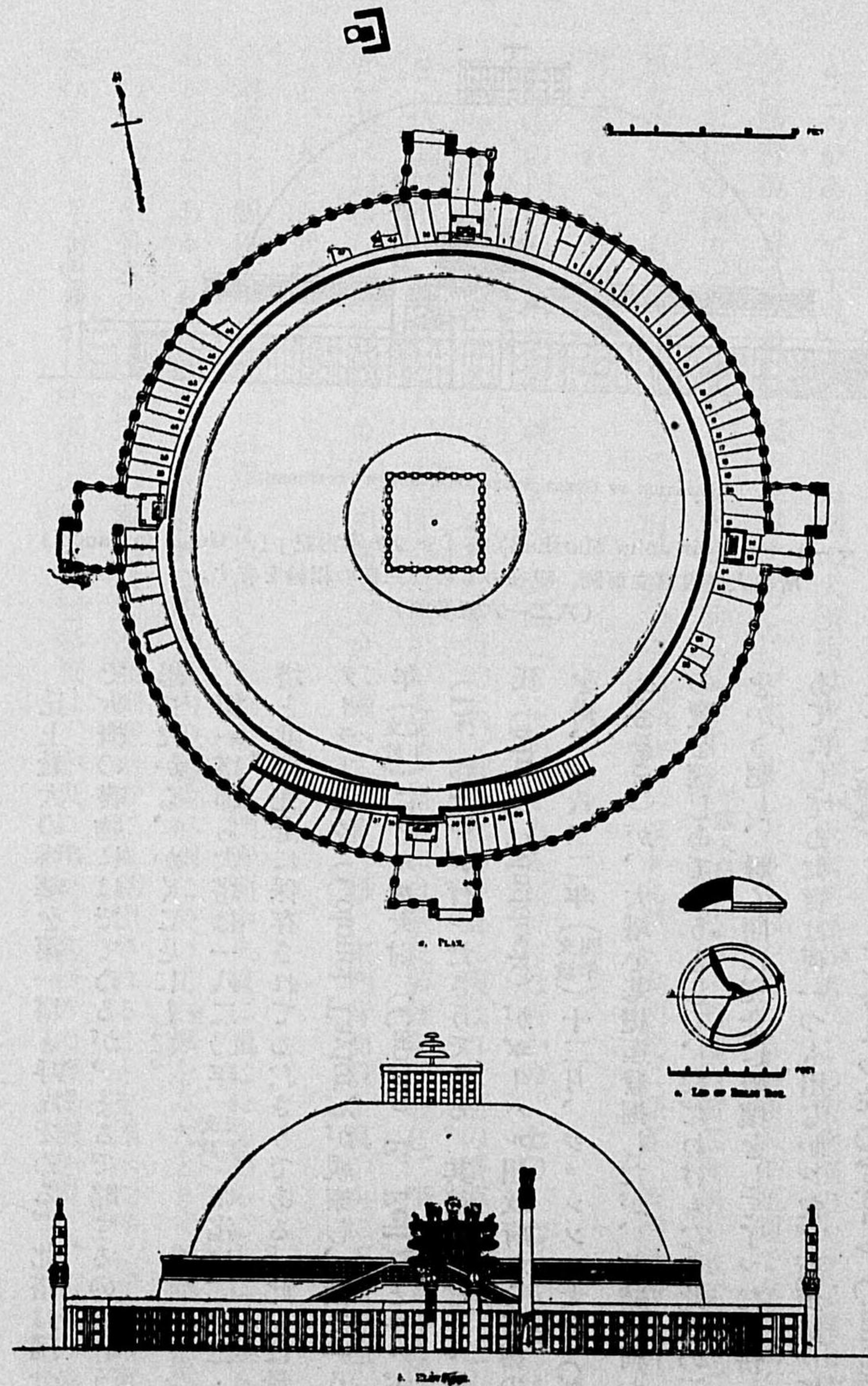


13. Plan of great Tope at Sanchi.



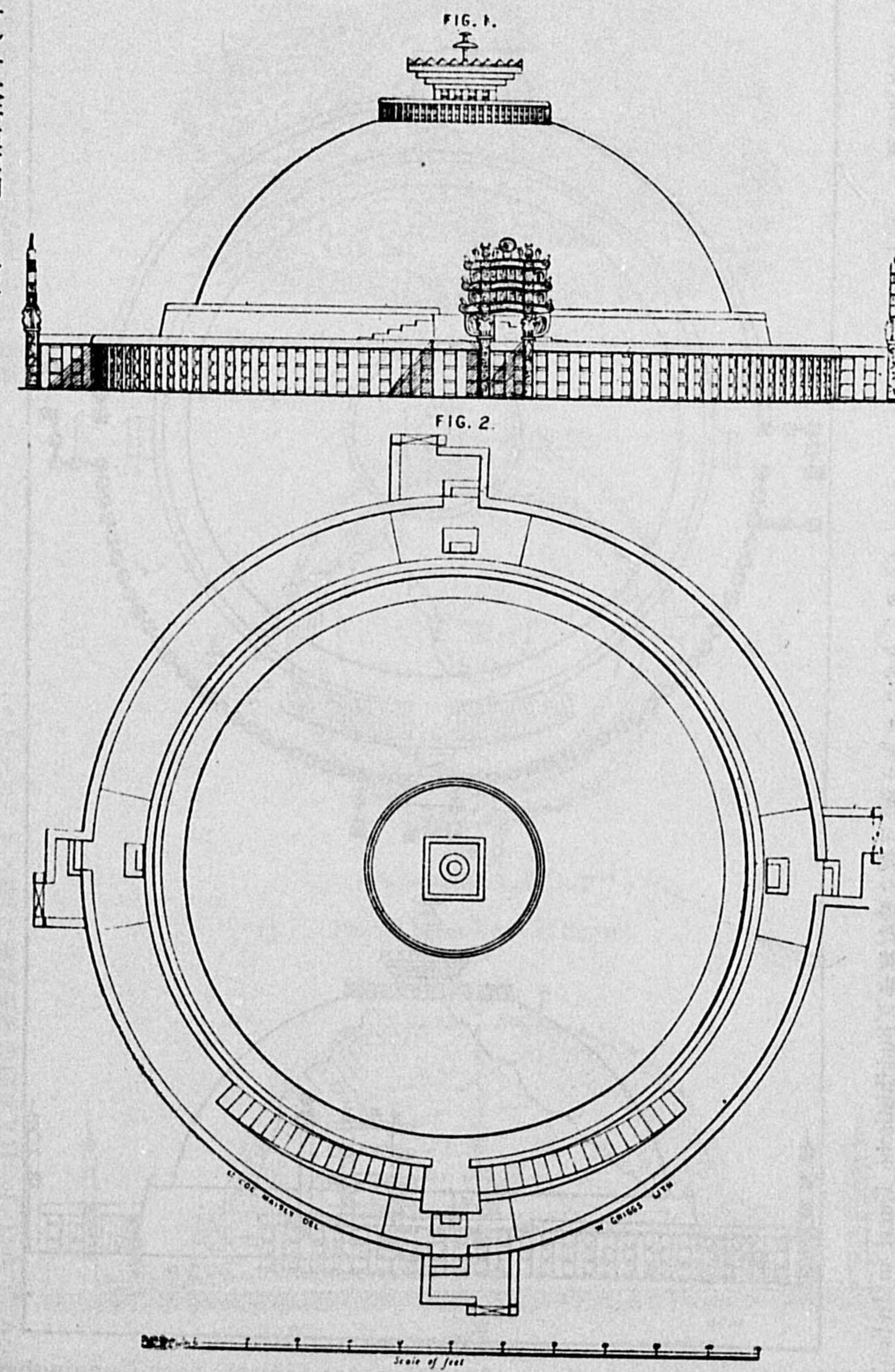
14. Section of great Tope at Sanchi.





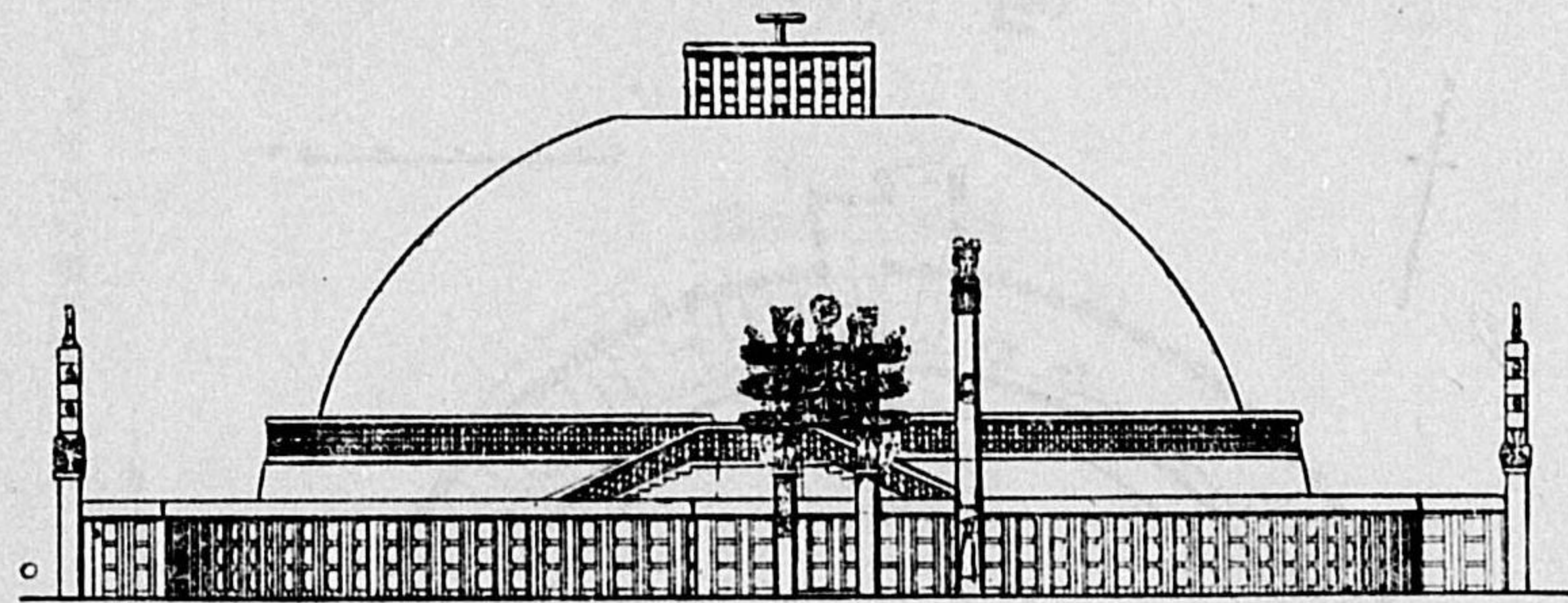
サンチ第一塔復原圖  
Archaeological Survey of India, Annual Report 1913-14. 圖版複製

サンチ大塔復原圖  
其二



(フナーガッソン著「龍樹崇拜」(Tree and Serpent Worship)所載)

PLAN AND ELEVATION OF TOPE.



ELEVATION OF GREAT STUPA FROM SOUTH (RESTORED):

ジョン・マーシャル (Sir John Marshall) 著「サンチ案内記」(A Guide to Sanchi) 所載大塔復原立面圖。現在のものは三個の相輪を有す。  
(六二一六五参照)

丘上最大の塔婆を第一塔と呼んでゐる。此塔は随分有名で大概の書物にはでてゐるが、まるで略するのめどうかと  
思つたから、かくことにした。

第一塔即ち大塔は一八二〇年(文政三年)頃迄は、第二・第三塔と共に完全に保存されてゐたさうである。此丘は最初にテイラー大佐 (Colonel Taylor) が視察し、續て一八一八年(文政元年)にフェル大尉 (Captain F. Fell) とエルド博士 (Dr. Yeld) が行つたさうである。其後間もなくマドック氏 (Mr. H. Maddock) がボーバル州政府から發掘の許可を得、一八二二年(文政四年)十二月、ジョンソン大尉 (Captain Johnson) が、大塔を基礎迄發掘したが、其結果何か高價の寶を探しあてようとして、ただわけもなく此等の三塔婆をかき廻し、瞬く間に完全に破壊をしてつた。併し折角あてにしてゐた寶は何一つも出なかつた。所が降つて一八五一年(嘉永四年)にカンニンガム少佐 (Major A. Cunningham) とマイセイ大尉 (Captain F. C. Maisey) とが發掘を續

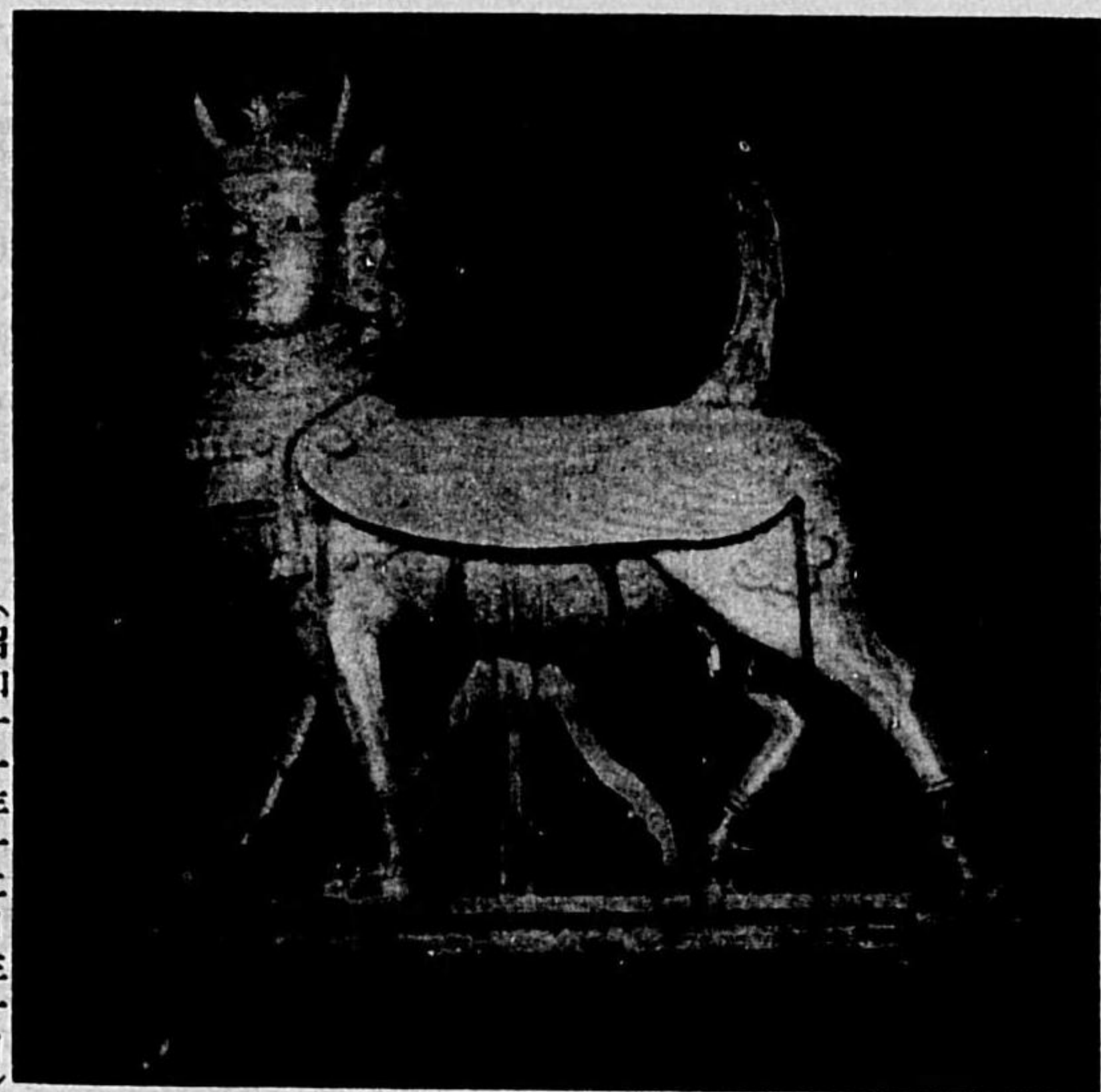
け、多くの舍利容器等を發見したのであつた。

大塔は徑121呎、高 $53\frac{1}{2}$ 呎、禮拜道 (Procession path) の高さ14呎幅 $5\frac{1}{2}$ 呎、最上部に徑34呎の平たいところがあつて玉垣を巡らす。周圍の大玉垣は東西徑144呎南北徑151呎、この南北徑の大きな理由は、南方に禮拜道へ登るために石段を設けてあるので、少し大きくなつてゐる事挿入平面圖でみる如くである。玉垣の四方に大門があり、大塔は約前二五〇年(孝靈天皇四十二年)だが、門は約前二世紀と推定されてゐた事もあつた。南門は最も古くて約前一五〇年(開化天皇八年)、以下北門・東門此に亞ぎ、西門は最も新しいと考へられてゐたのである。

此等の門の形式彫刻等に就いては、到底ここに記してゐるわけには行かぬ。七〇・七一には、ほんの一例を示したに過ぎないので、その主なる目的は、貫や柱の一部に現はれた所の塔婆を見せるためである。塔婆は小さいけれども、下に圓形に玉垣があり、塔身には懸花裝飾を廻らし、平頭の上部には三角形を並べた様な例の裝飾があり、相輪迄完全に備へてゐる。殊に東門背面最下貫中央に玉垣を巡らせること、大塔と同様である。

塔婆には關係がないが、「白澤」と思はれる彫刻が、東門背面中央貫に現はれてゐることは、頗る興味あることである。私は先年京都花園妙心寺佛殿内の墓股彫刻に於いて白澤をみたとき、雑誌【徳雲】でこれが支那や日本のみならず、歐羅巴にも小亞細亞地方にも見出されることを述べた序に、この東門の夫れに及んでおいたが、此東門中貫の背面彫刻は、中央に佛座、其後方に菩提樹を現し、其兩方から動

南印度チンネベリ大堂所蔵の白澤



(昭和十一年十二月三十日)

である、といふのは發達せる乳房があるから左様推定したのでまさか誤りはあるまい。馬人に雌があつた例のない様に、白澤亦さうであつた(三才圖會「和漢三才圖會」等に所載のものは不明)が、ここに初めて出會つたのだから、珍らしがつても無理はあるまい。性はとにかく其形態は地方的變種として取扱つておけばよからう。餘

物・鳥類・ナガ(五頭)等が參詣してゐるところを刻したものである。白澤と思はれる動物は菩提樹の右上に二頭、同じ方向に現はしてある(圖は小さくて判りにくい、有名な彫刻だから、大きな寫真はいくらでもある)。

其後印度に於いては、もう出現せぬものと思つてゐたところ、南印度コモリン岬を距る約五十哩の大都會、チンネベリ (Tinnevely) (地圖III 6 左中上)に於ける大堂の寶庫内に於いて、可なり大型で銀色燦然たるものをのみた(挿圖參照)。きき違であつたかも知れないが、祭禮のときに神體の騎乗用にするさうである。普通みる白澤と少し異り、牛角牛耳は寶冠の如くで、人耳は其下に明らかにあるほか、發達せる羽翼を有せることが目立つ。其最も珍らしいのは雌であること

談が長過ぎたかも知れぬが、何かの參考になるかも知れないから、ここに紹介に及んだのである。尙ほモヘンジョ・ダロからも、此種と思はれる形を彫刻した印章が見出されてゐる(第22頁1頁)

東西南北の四門は何れも大變立派で、美術上獨特の位置を占めてゐるが、四つのうち東と北とは其位置に建つて居り、殊に北門は完全に近い程度に残つてゐるが、西と南とはまるで崩れてゐたことが書物の挿繪にのせてある。拙著【印度旅行記】にも複寫をして掲げておいたが、日本でいへば江戸末期で物情騒然たりし時代に、サンチの丘では英國人の何とか少佐や何とか大尉等が、よつてたかつて神聖なる塔婆を破壊して寶探しをしたり、とうとう取返しのかぬ迄にめっちゃくちゃにしてしまつたのであつた。それをすっかり英國人の手で修理をしたので、勿論推定復原のところも多いが、現在の程度までに原型に復し得たのは、初めに頭を毆つてさんざん瘤をこしらへ、あとからさぞ痛かつたらうと擦つてやつたやうなもので、少しばかり人を馬鹿にしてゐる。其内容が失はれて、殘骸に過ぎぬのだから、僧侶達は喜ばぬかも知れぬが、塔婆の形式等を研究するものには殘骸でも何でも有難い次第で、半ば崩壊して上から大木が生へてゐる様な状態では、感慨に耽るのにはいいだらうが、學術上には大して役にたたぬようである。

復原に當り、頂上の平頭は失はれてゐたので、現在は玉垣を四角に廻らし、其中央より擦をたて、三個の相輪があげてある。見たところは甚だ立派で、平頭の形がはつきりせぬ以上、この方が安全であら

うし、或は又工費等の関係もあつたかも知れぬし、めつたなことは言へぬが、折角ここまでしたのに、要求するのが無理かも知れないけれども、少し物足りないといふ感がなくもない。私はここに四種の復原圖を参考のために掲げておく。(第139頁)。(第142頁)。

一は一八五四年(安政元年)に發行されたカニングガムの著書—Albert Grünwedel:—Buddhistische Kunst in Indien よりとる。此書 Buddhist Art in India (A. C. Gibson) と題した英譯あり—から複寫したもので、上段の禮拜道に玉垣がつけてないのは、まだ一本も發見されなかつたため、有無不明なのでやめておいたものと思はれる。併し何もなしでは形態も整はず、危険でもあるせいか、極めて低い石を廻らしてある。伏鉢上部の平たい部分には、圓形に玉垣があり、中に平頭をおく。それを立面圖でみると、其中央から擦をたて、上に二個の相輪をあぐ。(第139頁)。

二はフアーガッソンの著なる有名な【龍樹崇拜】(Tree and Serpent Worship) の挿圖を複製したもので、其前者と異るところは、禮拜道へ昇降する石階の勾配が緩であるから、この様であつたとすれば確かに昇り易かるべく、其他最上部の玉垣・平頭・相輪は總て同一意匠で、唯僅かに少しばかり改良をしてあるだけである。

要するに此二者は殆んど同じで、變りなしとみてよろしい。然るに【サンチ案内】にのせてある圖は、上部の玉垣を方形とし平頭を省いてあること現在の如くで、ただ相輪が一個だけの差である。これは後に施工に當り、第141頁復原圖の如く三個にしたものと見えるが、一個より三個の方が形がいいので

みると、練つた結果二個を増したのであらう。それにしても玉垣を四角にして平頭の形を兼ねさせ(?)、形式の判然せぬものを省いたところに創意の閃を見るのである。

今茲に掲げた復原圖でも四種類ある。この他にまだあるかも知れぬが、私は寡聞で見た事も聞いた事もない。さうすると全體で四種類となつてゐる。斯様に多くては困る。復原圖なんか大分えらさうに見えるが、甚だあてにならないもので、うそだかほんとうだか判つたものではない、名名が勝手な眞似をして面白がつてゐるのだらう、といふ感を讀者諸君は抱かれるかも知れないが、さうばかりでもない。何か根據がなくてはできるものではない。

先づ大體復原圖に二種類あると思へばよろしい。一は推定復原で、他はもう少し據所がある復原である。誰人も後者を希望するので、全力を盡して材料を蒐集すべく試みても、どうしても不結果に終つた際は、勿論確實性に乏しいが無いよりはいい位の程度で、自説を述べる補助に用ゆる位の考へで推定復原圖をつくるのである。事實は一つしかないが、其事實が未詳の時は、想像は自由だから、つまりいくつ圖ができて、それが合理的なら少しも差支ない筈である。動物學者がピテカントロプス・エレクタスやシナントロプス・ベキネンシス等をつくりあげたのと同じ位の確實性はあるのである。マウソロス王の墓の復原圖が十數種あるのをみても、僅少なる材料を以てしては甚だ確實性に乏しいことが判るであらう。それでも先年大騒ぎをしたネス湖の怪物ネオザウルスよりは確かなのである。

此大塔は南側にある阿育王柱や玉垣と共に阿育王の時代に、四方の門は前二世紀以降に、夫れ夫れ建設されたものと考へられてゐるが、此假定を其ま承認するわけにいかないといふ説がある。阿育王が石柱と共に建設した原塔は、其直径殆んど今の半分位で、煉瓦を積んだところの、謂はゆる埴塔であつたが、其後百年を経ずして現在の大きに石材を以て増築され、同時に玉垣を造り、かくして規模は大きくされたが、四方の門は前一世紀の後半に至る迄は、建築されずにあつたと考へられる様になつたといふことである。此説が正しいとすると、前説は當然いけないことになる。

埴築原塔の構造及び恰好に就いては、ただそれに用ひた煉瓦の大きが16吋×10吋×3吋 $(1.28 \times 0.80 \times 0.24)$ で、各所に散在する孔雀王朝時代の煉瓦と同一の寸法であるといふ一事を除いては、よく判つてゐない。尙ほ頂上には平頭の相輪と玉垣とあつたことは推定し得るが、其平頭はマーシャルの復原圖にはなく、また現在もない。彼は平頭の形式がよく判らぬのでやめたかも知れないが、高1呎8吋蓋径5呎7吋の石箱があつて、それが石椽の臺座となつてゐたといつてゐる。

前述の如く煉瓦塔婆の周圍に石材をまいた結果、直径約120呎高さ約54呎になつた。そこで玉垣を建設したのであるが、これは寄附で出事たもので、多くの檀那の名が石に刻みつけてある。かく多數の人の寄附に待つた以上、さう急にはできなかったことが想像できる。ファーガッソンの如きは百年以上もかかつたらうと考へてゐるが、當時はビヂサ (Vidisa 今の Beda) の大都是多くの巡禮を迎へたので、彼等は皆ここからサンチへ參詣したから、必ずや寄附も相當にあつたらう、さうすると多分其半分の五

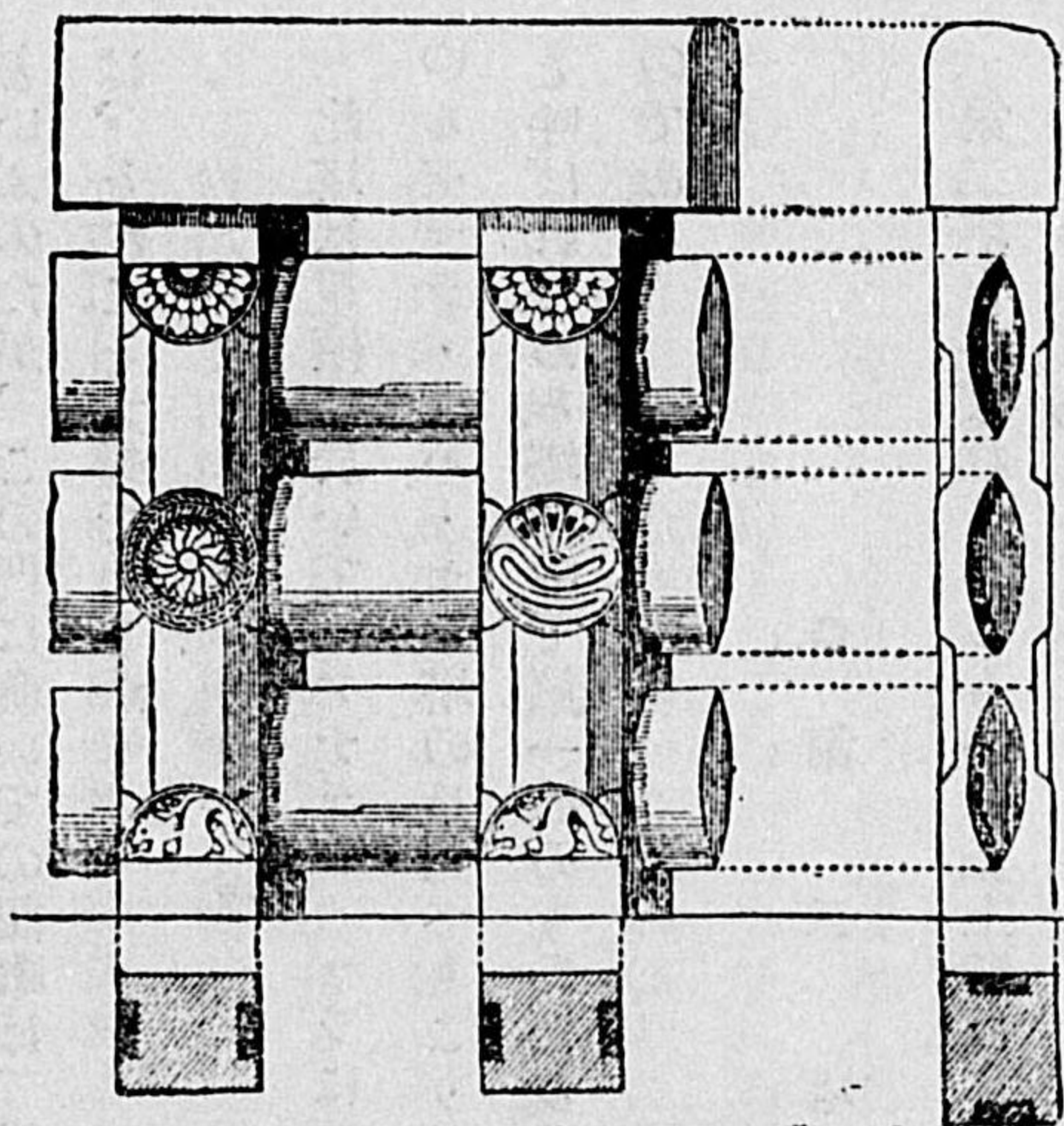
十年以内で完成できたらうとマーシャルは観測してゐる(六八・六九)。それにしても玉垣だけに五十年は頗る氣の長い話で、よく辛抱したものである。今だったら關係者がきつと集めた金をつかひ込んで疑獄を起し、玉垣事件として話題に上るであらう。

併し昔はその様な悪人は居なかつたから、それで先づ無事に玉垣ができたので、次は上下の禮拜道を鋪装し、第三に石階及び上の禮拜道周圍の玉垣を造つたさうである。さうして最後に四方の門に及んだといふのだが、この門に就いての記事は、曩に記したので間に合せておく。彫刻等についてかいてゐるは、それこそ大變であるから。

此塔は規模に於いてはアナラジャブラに於ける無畏山塔や祇園塔に及ばず、況やポロンナルワの謂はゆるデマラ・マハ・セヤ塔の足元へもよりつけないが、此附近の塔群、ビルサ・トープヌ(Bilisa Topes)と呼ばれてゐる塔群中で第一流のものたることは言ふ迄もなく、大小幾多の塔婆を遙か眼下に見てゐるのである。

(□) 第二塔

第二塔と呼ばれてゐるものは丘上にはなく、其中腹にある(六〇・六一)。後に述べる第三塔と規模殆んど同じであるが、完全に修現されてゐない(七二)。併し第三塔によりて其形を想像し得られる。而も



35. Rail, No. 2 Tope, Sanchi.  
(From a Drawing by Col. Maisey.)

サンチ第二塔玉垣正面及断面  
(H. of I. & B. A. 挿圖複寫)

玉垣は第一塔の様に完全に周囲を取巻いてゐるが門はない。門のないのは第一塔を見た眼には勿論、第三塔にさへ一つあるのだから、淋しい氣がする。其代り玉垣の柱の三個所につけてある圓文の意匠は、千變萬化——は少し誇張かも知れないが——極りなく、見だしたら面白くてやめられない。

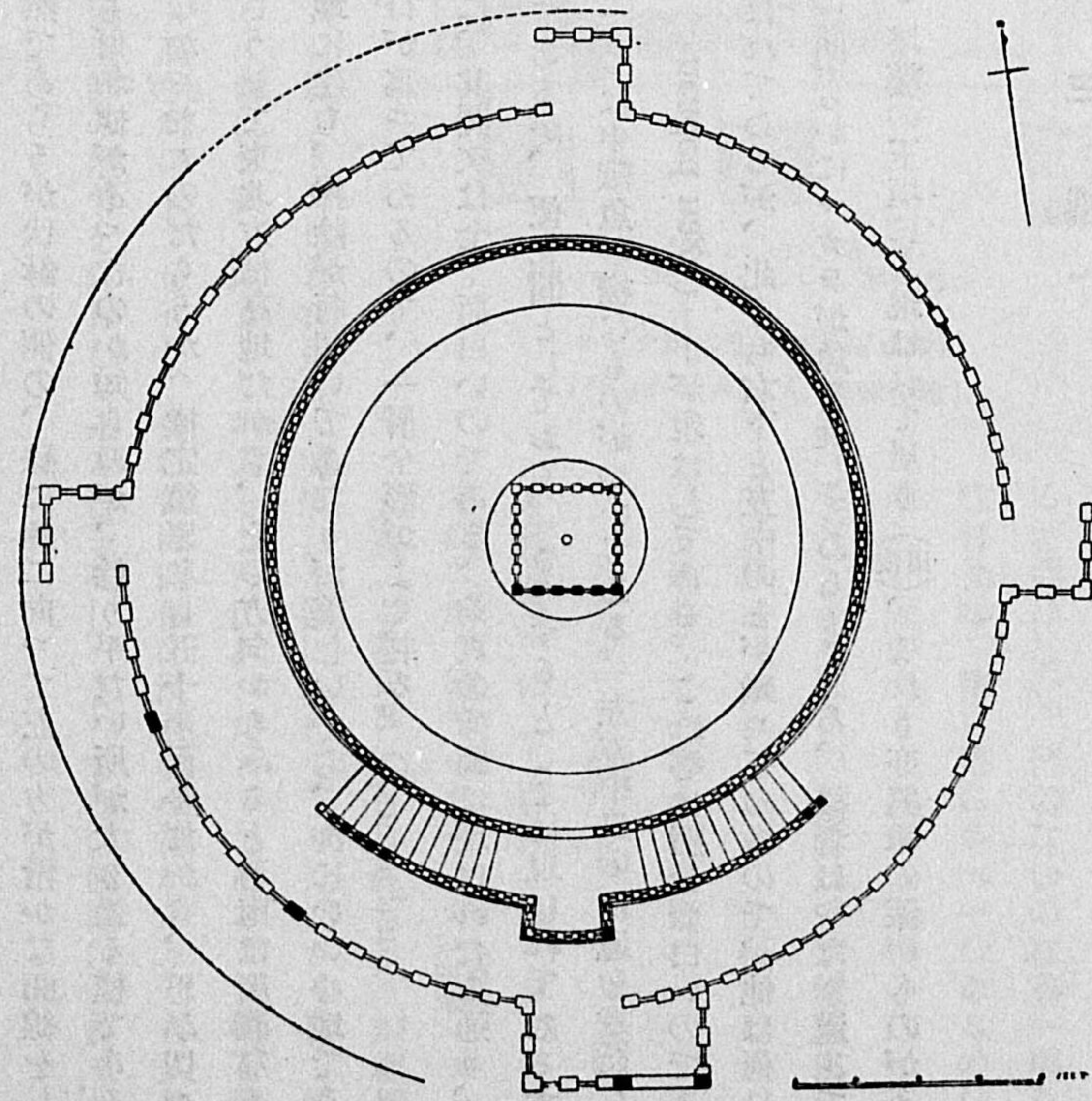
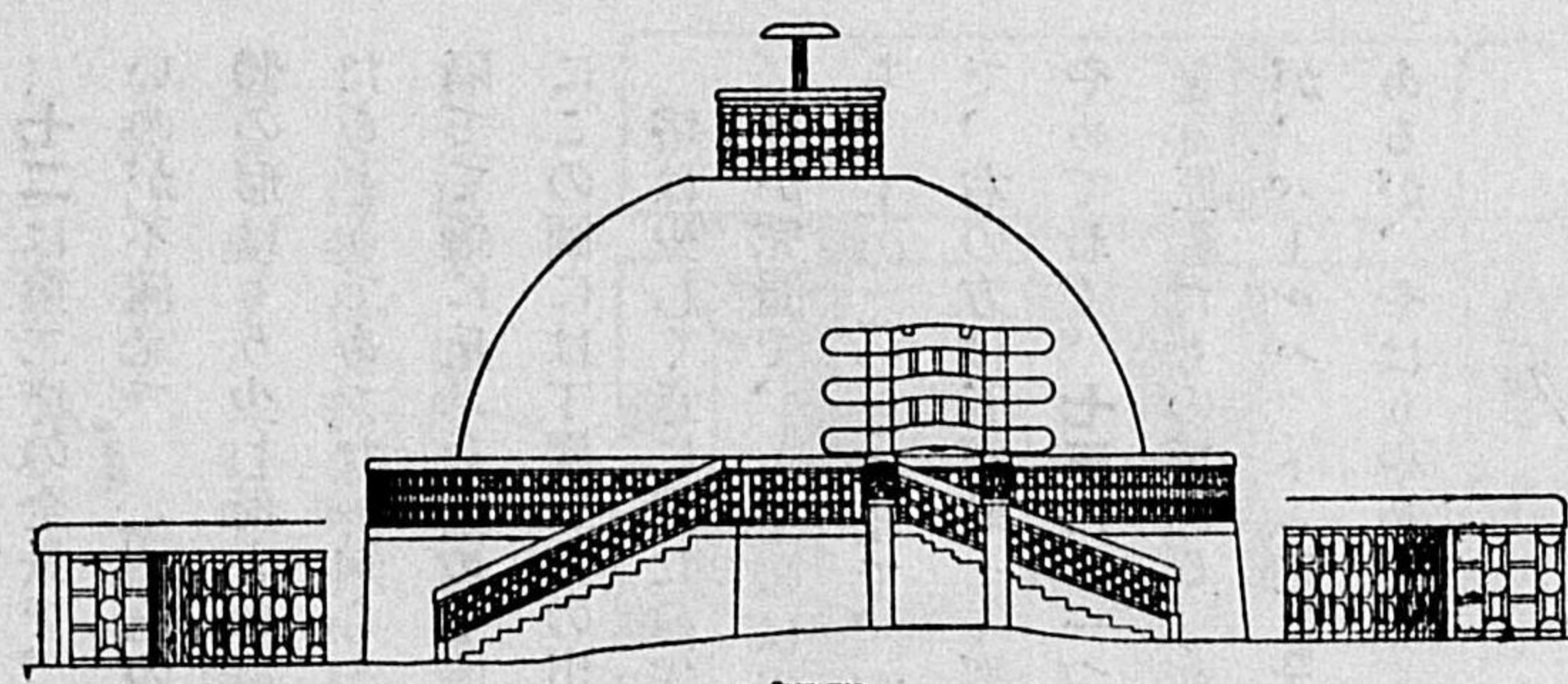
一八二二年(文政五年)ジョンソン大尉(Captain Johnson)により發掘され、爲めに半ば破壊されたが、續て一八五一年(嘉永四年)カニンガム大將(General Cunningham)が繼續發掘を

した結果、遺物の發見はできただけでも、塔身は殆んど完膚なき迄に壞して了つた。さうして此時發見した遺物は伏鉢の中央にはなく、西に2呎上段より7呎のところにあつたさうである。その石櫃は白砂岩より成り、長11吋×幅9 $\frac{1}{2}$ 吋×高9 $\frac{1}{2}$ 吋の大きさを有し、他に尙ほ四個の滑石製小箱があり、各人骨の破片を藏し、その蓋には高僧又は傳道師の遺骨を保存してゐる旨を記し、また容器の側面にも銘文があつたといふことである。

七二は第二塔の全景で、偶然であらうが伏鉢の側の、殊に圖に向つて左の方が滑かな曲線をしてゐないのが不満足である。上の方も何か據があつたのか知らぬが、餘り平たい所が大き過ぎる様である。塔全體の形はもう少し何とかならなかつたものだらうか。推定復原なら五十歩百歩だから、思ひ切つてやつたらどうであつたか知らん。さうして東北方は高地だから、その方向から見ると西南は廣潤なる郊野を隔てて遙に丘阜を望める開豁地に建ち、掃除が行届いてあたりが美しいから、洵にいい心地である。殊にこの圖には丁度三方の出入口が寫つてゐるので、一層全形がよく判る。

塔は少しく意に満たぬ代りに、其圓文は全く面白いのである。前頁の挿圖に現はれたる通り、中央のだけが完圓で、上下のは半圓であるが、便宜圓としておく。さうするとここに現はれてゐる六つのうち、上の二つは蓮花で、下の二つは半獸魚の様なものがついてゐる。左方中央のは蓮を意匠したもので、右の方は五頭蛇——那伽(5-headed naga)——が現はしてある。これ等は随分面白いのであるが、やめておく。七三にも一つ現はれてゐるが、此うち右下と左中のとが變つてゐるので、他は何れも蓮花を意匠したものである。前者は明らかにマカラが魚を食してゐるところ、後者はやはり蓮花ではあるが、パールハット(Bharhut)塔婆の玉垣にも現はれて居り(後出)、これも亦興味深いものがあるのであるが、やはりやめておく。

(八) 第三塔



サンチ第三塔復原圖

(Archaeological Survey of India, Annual Report, 1913-14 圖版複寫)

第一塔を北に距る約二十五間のところに、第三塔と名づけた塔婆がある(六〇・七四—七七)。此塔婆からカニングムは舍利弗及大目犍連の舍利を、伏鉢内上段禮拜道の高さのところから発見した。其有様は長五呎以上の石蓋で覆はれ、内に二個の石製の箱があつて、其箱の蓋に銘文が刻みつけられてゐた。各箱は1呎6吋角、蓋厚6吋、前者には黒色土製の薄い板で覆ふた白い滑石の平たい小箱があり、其傍に白檀の小片二個を置き、小箱内には小骨片と眞珠・柘榴石・瑠璃・水晶・紫石英の玉があつた。後者にも亦、二骨片を入れた滑石製の箱があつたさうである。この記事は【サンチ案内】により記したものであるが、其行衛がかいてないから、今どこにあるか知らない。

此塔は第一塔と異り、例ひ小なりと雖も唯一門を有することに注意すべきである。さうして塔身も亦遙に完全に近い半球形である。塔身周囲の玉垣は全部失はれたが、發掘修理の際若干の破片が現位地に在つたし、又東方廢堂(龕に記した内部天井に近)の基礎に用ひられてゐたのだが發見されたりしたので、此等の資料により其寸法を測定した所によると、高さ約8呎、蓮花裝飾があつたさうである。前頁の挿入復原圖参照の事。

塔婆と玉垣とは前一世紀に起原し、門は後一世紀前半の建設と推定されてゐる様である。何れにしても経過の年數に於いては、第一塔の四門に及ばないのである。とにかく建設後次第に地盤が盛上げられたため、上拜禮道への昇階段の下部、及び下禮拜道の上端が埋まつたので、下部迄現はすためには土を掘取らなければならない。併しながらさうしたりすると門柱の基礎が危くなる虞が多分にあるから、中

止したといふことである。

門高17呎、裝飾の方法は第一塔の夫れに似てゐる。向つて左方柱上部と、中貫の中央とに塔婆の裝飾がある。柱側面には蓮花の眞向きを上手に取扱つた裝飾で填めてある。此門も【中印度紀行】の挿繪によると、随分ひどくなつてゐたことが判るが、暴力で破壊しなければ如何になんば何でもあんなにはなるまいと思はれる。

## 二八、サンチ發グワリヤ (Gwalior) へ

一月二十三日は朝食後丘上を一巡した。このため最後の思ひ出にとて正路を登り、裏路から歸つてきた。八・四五に出かけて驛へ行つたが、汽車は九・一三に着した。此驛から乗つたのは私一人だけだけれども、どの客車も西洋人が一ぱい乗つてゐて、座席もない有様であつた。併しこの驛で食堂車へ行つた人があつたから、其あとへ腰を下ろして一時をしのいだ。

夫れから乗りかへたり、他の客車へ移つたりいろいろした後、ともかくも晝食の時刻が來たので食堂車へ行つたが、歸つてみたら座席も決まつてゐたので、そこに納つたところ、偶ま食堂車で同じ机へ座つた西洋人と同室であつた。この人はもう可なりの老人だつた。洵に温厚の君子らしく、ものの言ひ方等も大變丁寧であつたが、月夜のタージ・マハルを是非見ろとか、ファータプール・シクリへ行つたとか、窟院をみたかとか、種種雑多の質問をした。此等に對し私は一一答へた後、改めてラワル・ピン

ヂ (Rawal Pindi) を知つてゐるかと思つてみた。前回はベシャワーから歸りがけに、汽車が此驛に停車中、旅券調べの役人が入つてきて、いろいろ調べて手帳へつけて出て行つた有様が、つい昨夜の出來事の様眼に浮んできた。

彼の答へは頗る有望で、何度も行つたといふ返事だつたから、それではマンキアラ (Mankiala) — Manikyala Tope は此驛を距る僅に一哩といふ) との間は自動車を通ずるかと思ひ直したら、彼は世にも不思議な顔をして、マンキアラなんていふ名は初めてきくが、何かあるのかと反問をした。これには少なからず失望をしたけれども、更に奮然勇氣を鼓舞して、あそこには有名なマンキアラ塔があるではないか。とやつてみた。

後に従僕からきいたのだが、彼は陸軍少佐であつた。老人だから多分退役であらうが、さすが千軍萬馬の間を往來した(?)だけあつて、まことに落着いたもの、急がす騒がす悠然として微笑しながら、ラワル・ピンヂからラホールまでは大きな立派な道があるから、無論自動車は樂に通ずるであらうと答へた。私はこれで大に安心をすることができた。次に多分知るまいと思つてタクチ・バンハイ (Takti-Bhai (Bahai)) をあつてみたら、これはよく知つてゐて、あれならノウシェラ (Nowshera) から車で往復するとよろしい、ノウシェラにはジョージス・ホテルといふのがあるから、泊る所には困らない、と叮嚀に教へてくれた。そのうち汽車はグワリヤ驛に着いたので、老少佐に分れて私は下車をした。

(昭和十一年十二月三十一日稿了)



# 印度佛塔巡禮記

(第五回)



ドクリ驛前の哩程標

(昭和十二年二月十日)

## 二九、グワリヤ市の観光 (地圖 2)

グワリヤ驛に下車してD・B・の所在を尋ねたら、二哩位のところだとの返事であったから、それから、ホテル等より氣樂でよからうと思ひ、トンガを雇つて出かけたが、行けども行けども幅の廣い街道で兩側は竝木ばかり、餘り遠いのでいやになり、馭者にきいたら漸く半分きただけだといったので、やめにして逆戻りとし、ホテルに行くことにした。外觀頃合のはヒンヅー・ホテルなのでやめ、遂に尨大にして堂堂たるグラント・ホテルへのりつけることにした。

入つてみたらまことに工合がよく、三室で一廓をなして居り、風呂桶はスリッパ・バスで、W・C・は嘘偽りのないほんとうのW・C・といった調子であつたので、早くこれにすればよかつたと思つた。結局五十分間並木道をかけ廻り馬車代Re. 1 As. 8とられて梟がついた。此日はグワリヤに近づいた頃から大曇りとなり温度も下降し、雨が降るかと思ふと日が出たりして、天候頗る不穩であつた。この邊へ來るともう大分寒く、宿備附の毛布は一枚なので、持參したのを二枚かけることにしたが、合計三枚でしのいだのである。この様な特別大旅館でも寢具は甚だ手薄だから、もっと貸せといつて金をやれば貸すかも知れないが、とにかく自身である程度迄要意してゐないと困るのである。

グワリヤ驛は印度サラセン式の大建築、グラントホテル亦同様式の大建築。何れも相當の建築家でないで、これだけのものではないと思はれた。徒に西洋建築の摸倣でないだけに、洵にみても心地が

よろしい。我國でも早くかういふ工合に、日本固有の細部——判らずに圖版等を見て似たものをつくるのでなしに、ほんとうによく了解してゐる人の手によりて作成された圖を元としたもの——を取り入れた建築をつくり上げ度いものである。今の様に日本だか西洋だか判らない建物ばかりできたのでは、私個人としては、時代後れか何か知らぬが、甚だ心細いのである。

\* D・B・とはダク・バンガロー (Dak Bungalow) の略。

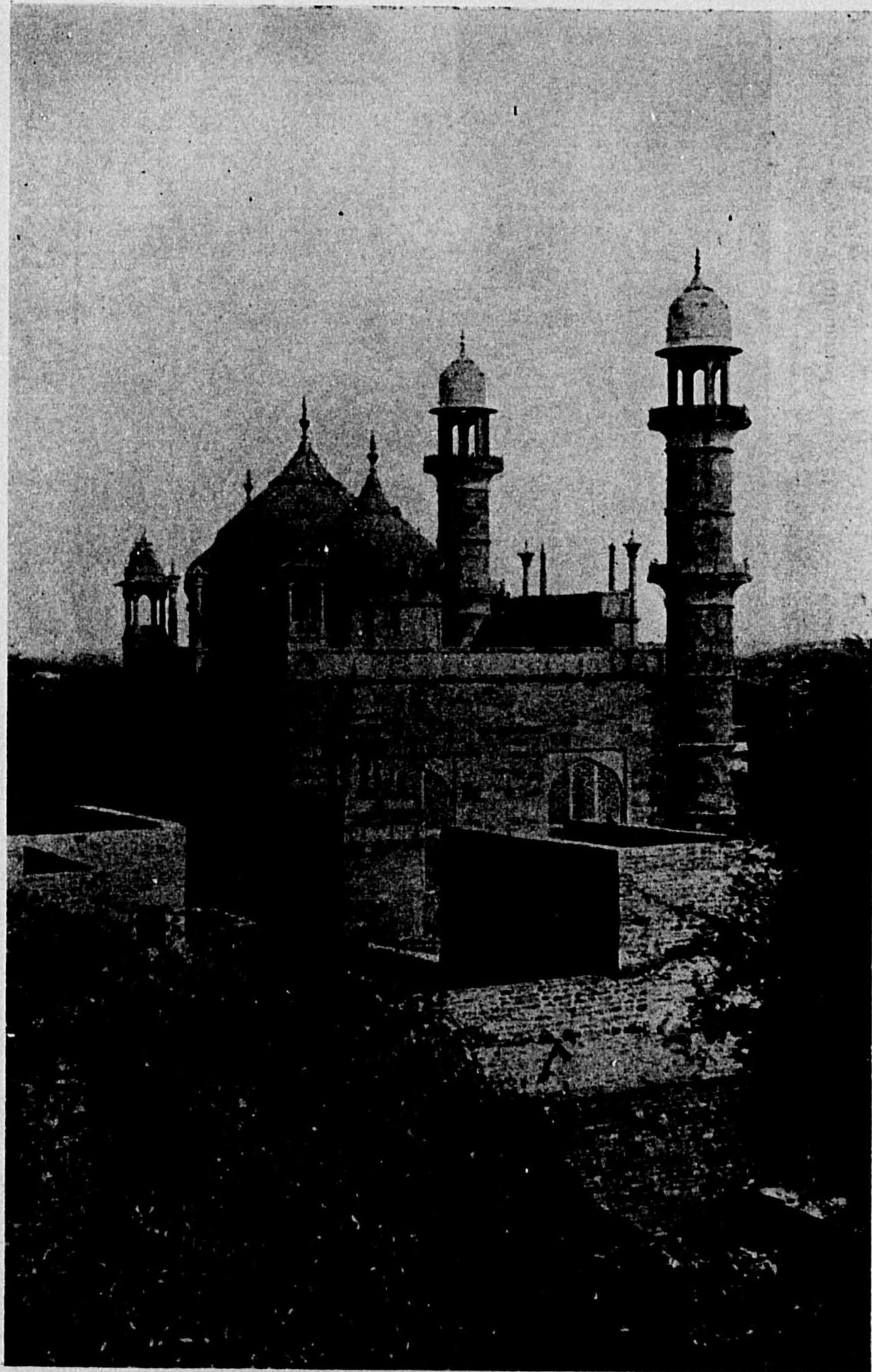
【印度紀行】に「政府の驛舎」と題し左の記事がある (同書五九・六〇頁)

政府ノ驛舎ハ之ヲ「ダック、バンガロー」ダックハ印度語ノ驛站ニシテト名ク旅客ノ便利ヲ圖テ建築スル所ニシテ印度全國英領ニ歸スルノ地及ビ英領下部緬甸ノ地大路ノ貫ク所近キハ五六英里遠キハ十一二英里ノ所必ズ之ヲ建設セリ驛舎ニ看舍人アリ旅客ノ需求ニ應ジテ食物ヲ調理シ地方官定ル所ノ價ヘテ得テ食ルノ煩ナシ又驛舎毎ニ地方官備ル所ノ簿册アリ旅客ノ此ニ休憩宿泊スル者ハ發着ノ月日時刻ト官職姓名ト時間ニ應シテ拂ヒタル金額トヲ記入スルヲ法トス凡ソ廿四時間駐泊スル者ハ「ルビー」二十五時間以上ノ者ハ二「ルビー」四十九時間以上ノ者ハ三「ルビー」ニシテ三時間以内ノ者ハ八「アンナ」ヲ拂フヲ法トス驛舎駐泊ノ規則十七條アリ……………驛舎ノ建築ハ土地ニ相應ノ材料ヲ使用シ頗ル單簡ナリト雖モ甚ダ清潔ニシテ普通ノ便利都テ備ハリ殊ニ概ネ好景ノ地ニシテ最モ旅情ヲ慰スルニ足レリ

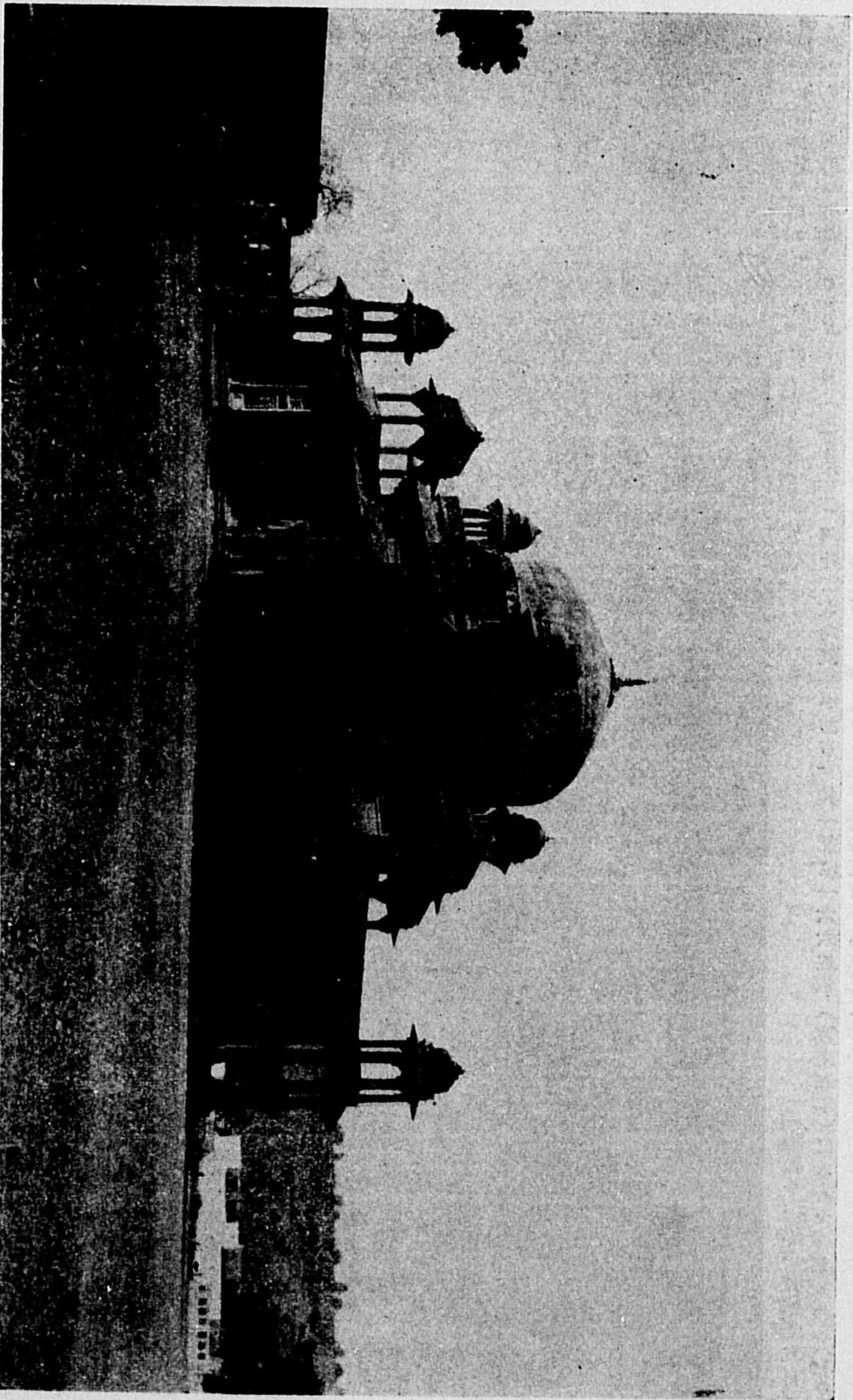
右の文中「看舍人」とあるのは、チヨキダール (Thakidar) の事をいふらしいが、番人は料理はつくりたくない。料理人を兼ねてゐる番人はカンサマ (Kansama) といふ。今日ではカンサマが居なければ食事はできないから、自分の連れて行つた従僕につくらせるか、或は驛で食パンでも買つて持つて行きでもしなければ (驛に食堂のある時そこでたべれば別だが)、つまり食事がまなしなければならぬ。食事はかりではなく、湯以外に何も得られないから、其覺悟が必要である。尙ほ又、今では一時間ゐても二十四時間でも料金は大概一ルビーで、二十四時間以上は滞在の権利がなくなつてゐる。尙ほ明治十九年でも今日でも、二十四時間一ルビーで、五十年間一定不變のところはえらいと思ふ。

明くれば一月二十四日、前日に引かへて好晴。聞くところによると、二十二日雨、二十三日曇、といった天候であつたさうな。サンチで晴れたり曇ったりして困つた筈、ここはこんな悪天氣であつたのである。二十四・二十五の兩日は、グワリヤ市に滞在していろいろ見學をしたが、此地の此頃の氣候は、丁度日本の十月初中旬位に覺えた。あひ服にあひの肌着で丁度よく、朝は朝で霧のために霞み、夕は夕で何ともいへぬなごやかな風景が眼前に展開してゐた。だから椅子を濡椽に持出してぼんやりしてゐると、空模様は到底印度とは思へぬ位で、日本と何等變りがない。だから私はここが大すきになつた。かく暑からず寒からずであるせいも、裸人間等一人も居ない。裸になつては寒くて仕方がない筈である。南方の人は衣服を着たくても暑くて着られず、この邊の人はぬぎたくもぬげないので、南の人が無作法でもなければ、この邊の人が行儀がいいのでもない。衣服が住んでゐる土地の緯度によつて變化するのは當然過る位當然で、暑いのがまんして人前をつくるひ、厚着をすましてゐて、人の居ない所へ行つてから素裸になつて大あくらをかくのでは何にもならない。

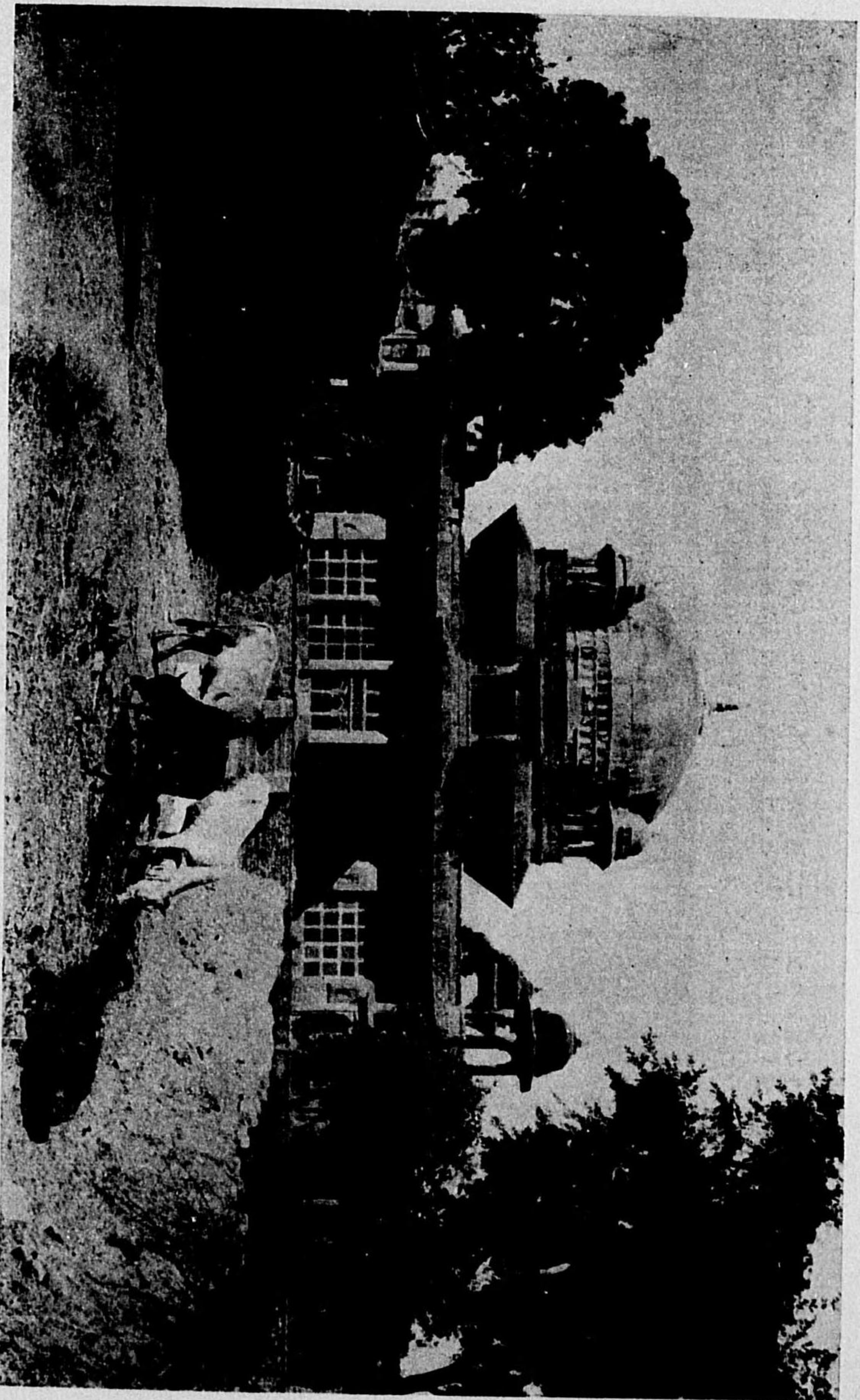
就中歐米人は人前で體裁をつくり、肌を出さぬ様に注意してゐるのは結構であるが、可なりかげひなたが多い様である。誰れも見えてゐないところでは、いい加減な行爲がなくもない様である。彼等はあつくとも平氣を装つて燕尾服やタキシードを一着に及んでしまつてゐるが、決して喜んでさうしてゐるのではないから、さうしないですむ時は決してさうしない。私は獨乙ハンサ・ラインの貨物船で印度洋を渡つたことがあつたが、船客七名が(婦人客一名を除いては)何れも食事の時、半袖のシャツ一枚にツポンをはいて出



グワリヤ市のジャーマ・マスジド  
グワリヤ城塞の北端、アラムギリ (Alamgiri) 門外に大回教寺がある。其一部は一六六五年(寛文五年)にムハマッド・ハン (Muhammad Khan) の建立にかかるといふ。正面から場所がなく、止むを得ず斜右後方から寫しておいた。  
(昭和十一年一月二十五日)



ムハマッド・ガウス廟を東北方より見る (昭和十一年一月二十六日)  
 ムハマッド・ガウス (Muhammad Gaus) はバナー (Bahar) 王やアクバー (Akbar) 王と共に第十六世紀中葉のモーガル王朝の大王者の頃、衆庶の尊敬を一身に集めた聖人であった。此廟は石造で方100尺、四隅に六角塔、各邊の中央に方形の龕出 (次頁へ)



ムハマッド・ガウス廟を東方よりみる (昭和十一年一月二十六日)  
 (前頁より) 窓がある。内部中央の墓室は方43呎、上に圓屋根、四隅に小圓屋根を設けてあるから、全體頗る賑かである。建物周囲に溝様を廻らす。窓は總て石の薄板に美しき幾何模様を透彫したもので、アラブやペルシアの建物にあるものと同意匠手法である。



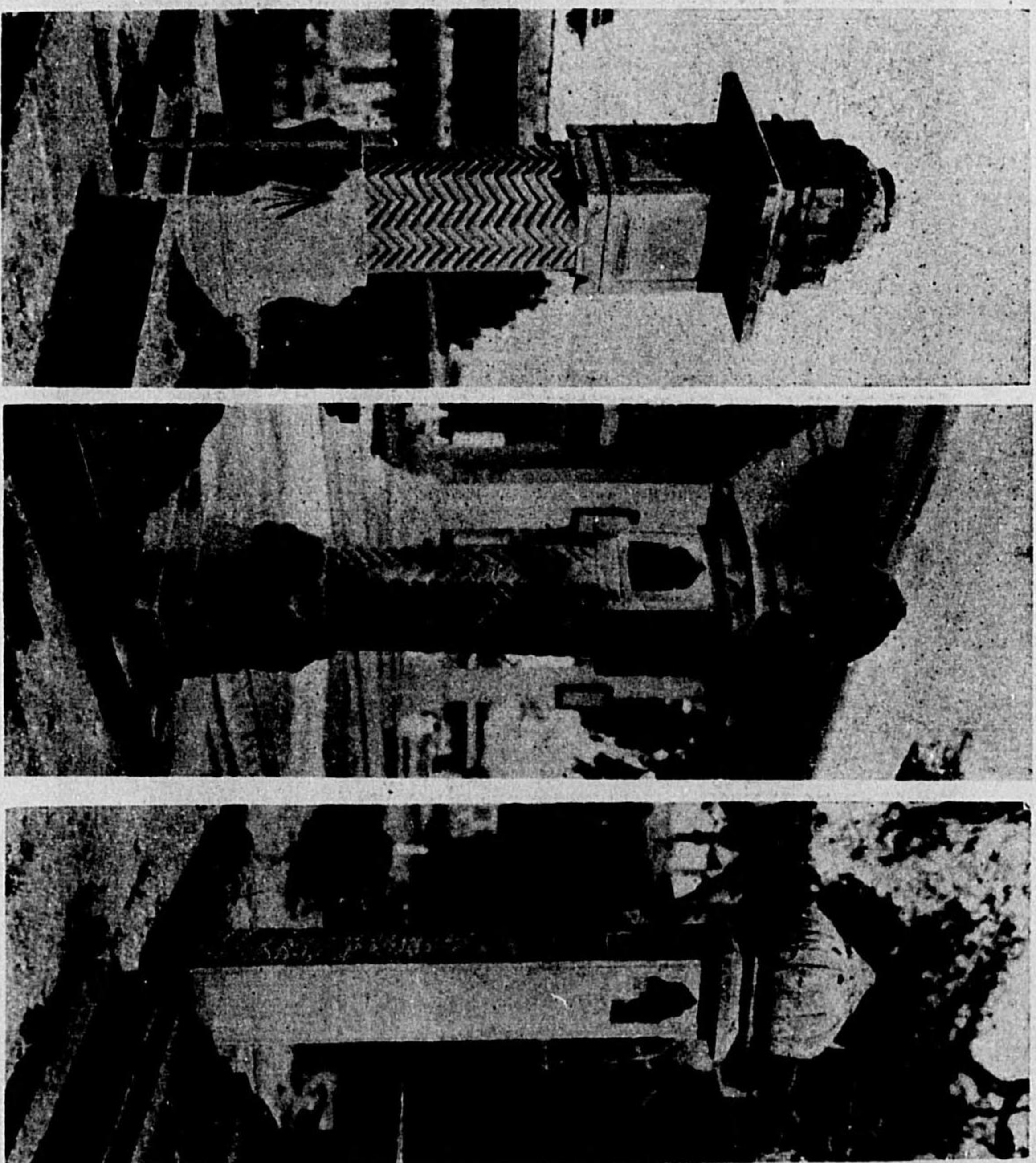
ムハマッド・ガウス廟裏の小回教墓 其一 (昭和十一年一月二十四日)

此所には廟の後方にある小回教墓のうち、可なり立派なもの三基を見せておいた、この様に小さくても、やはり窓は非常な手間をかけて、町寧に幾何文様の透刻をしてゐる。アラブヤペリーの城塞内の宮殿建築には、とても立派なものがあるから、この(次頁へ)



ムハマッド・ガウス廟裏の小回教墓 其二 (昭和十一年一月二十四日)

(前頁より) 様な小規模のものには問題にしないが、夫でも日本の石工等は、とても及ばない様な技術で仕上げてある。其傍には一層簡単なむきだしの墓が多くあり、其一端に石燈籠がたててゐるのは面白い。唯一基のところが我國のより有意義である。



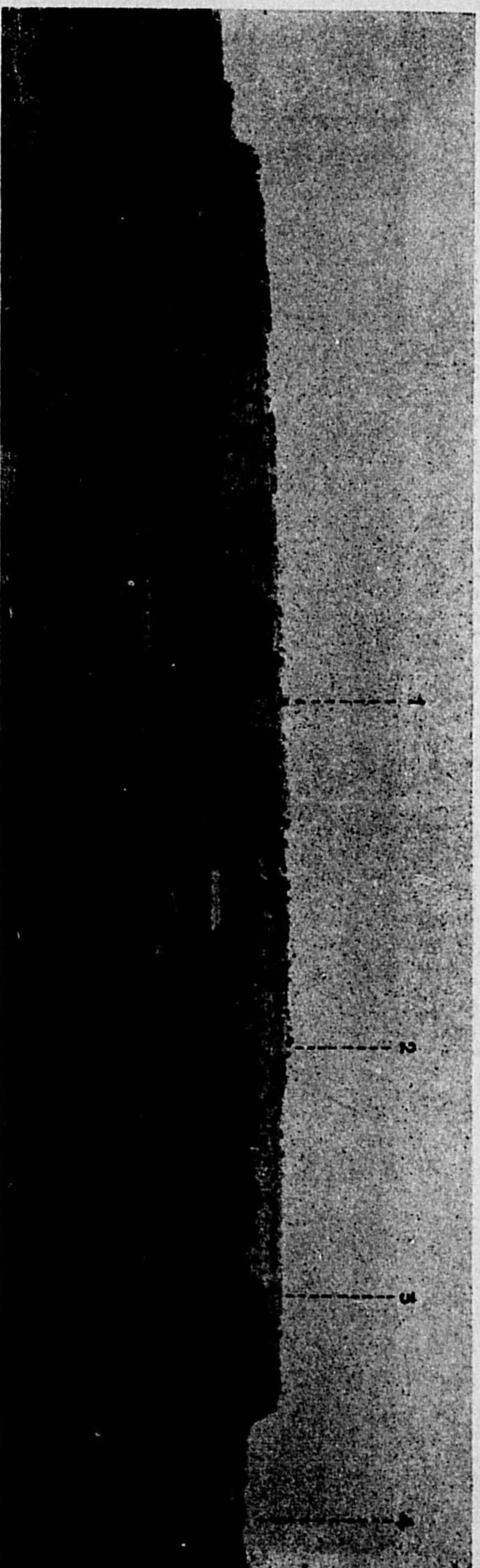
右。グワリヤ市回教墓前の石燈  
 中。同  
 左。同  
 其一  
 其二  
 其三

ムハムド・ガウス廟の後方に、小型（といっても可なり立派だが）の回教墓が多くあるが（第164—165頁）、其中の若干には、ここに三例を示した様な石燈がある。右及中には小ランプを置くため火袋に相當するものであるが、左のは型式だけで、ただ裝飾に石燈籠の様な形のもが建ててあるだけである。

第74頁のビジャナールの夫に比較すると、此方が屋根があるだけ面白い。のみならず、全體が回教建築の模範をみてゐるようで、甚だ興味がある。墓に石燈を捧げるのは日本ばかりでないことがよく判るであらう。

（左圖の物指は曲尺の二尺・二四・三）  
 其昭和十一年一月二十四日

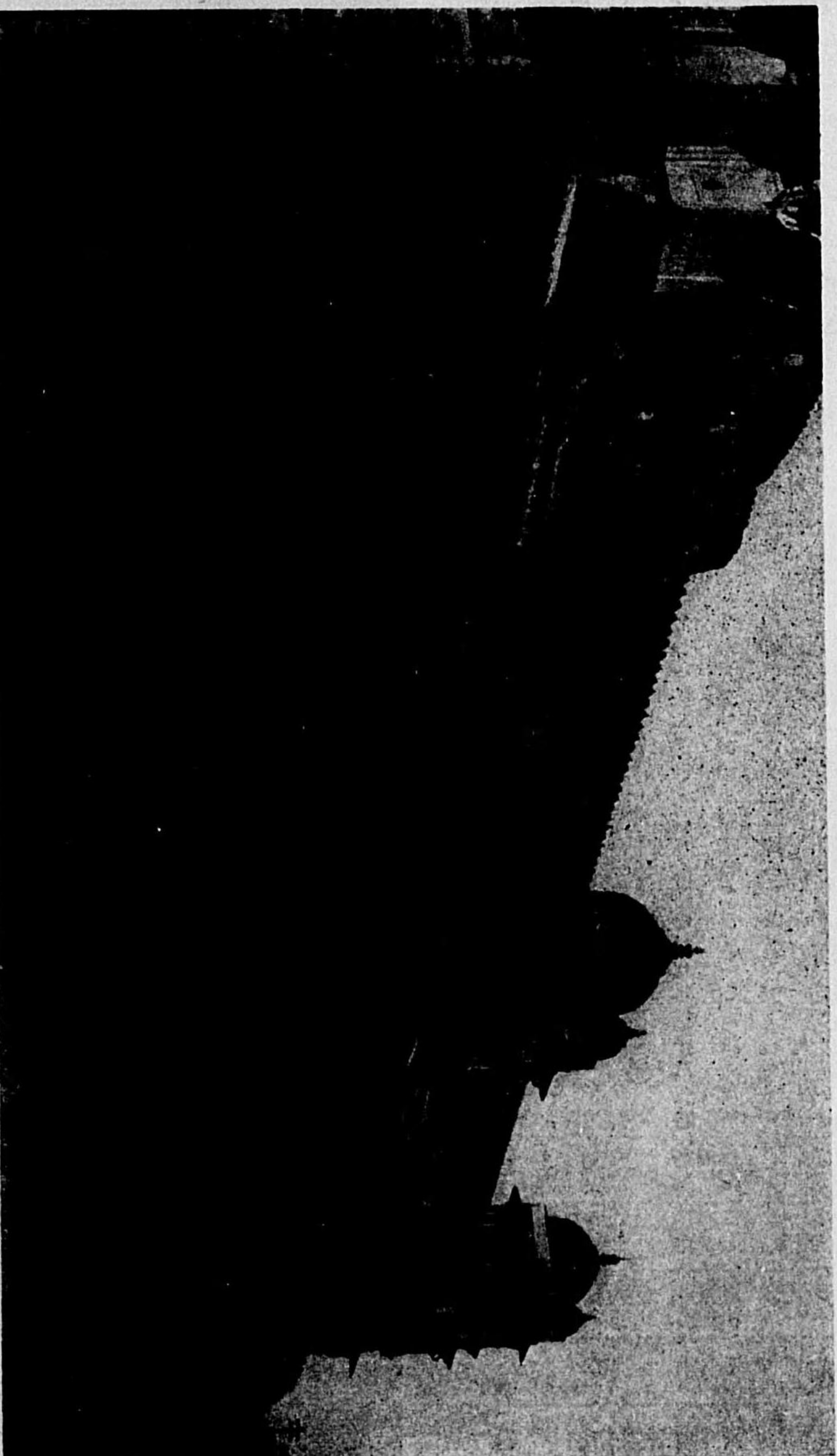
グワリヤ城塞 (Gwalior Fort) 全景 (昭和十一年一月二十六日)



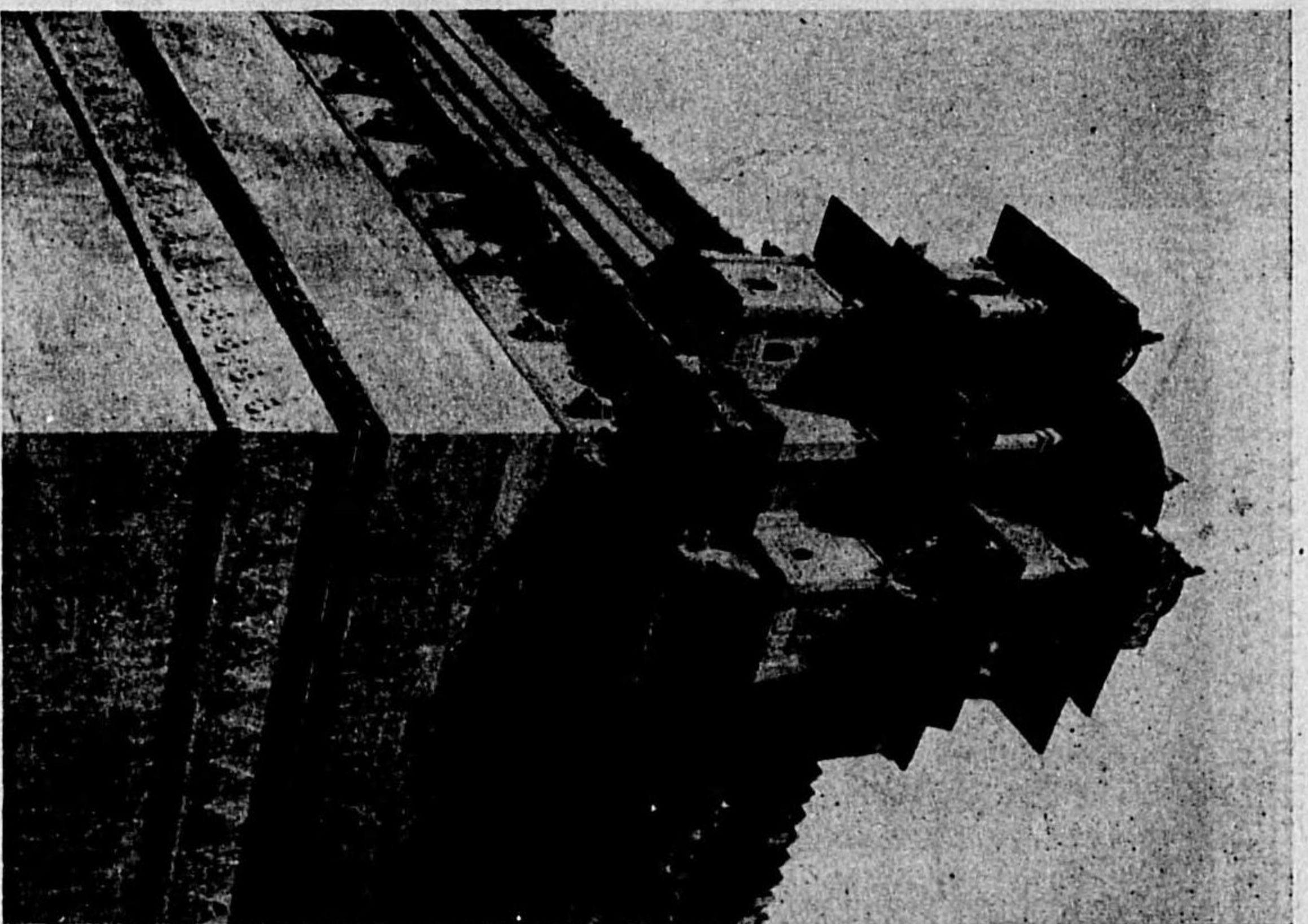
全頁に示したグランド・ホテルの正面三階の濡椽から城塞は一目に見え、洵に絶景であるが、私は此寫眞を正面向つて右の隅塔の最上階から撮った。三夜心地よく泊つた此旅館から、愈よ出發せねばならぬので、記念のために寫してみた。

- 1, テリ・カ・マンデル (Telika Mandir) 2, サス・バナン堂 (Sas Balu Temple) 3, マン・マンデル宮 (Man Mandir Palace)
- 4, グワリヤ驛 (ホテルと同じく回教建築に象つたもので、傑作の一である)

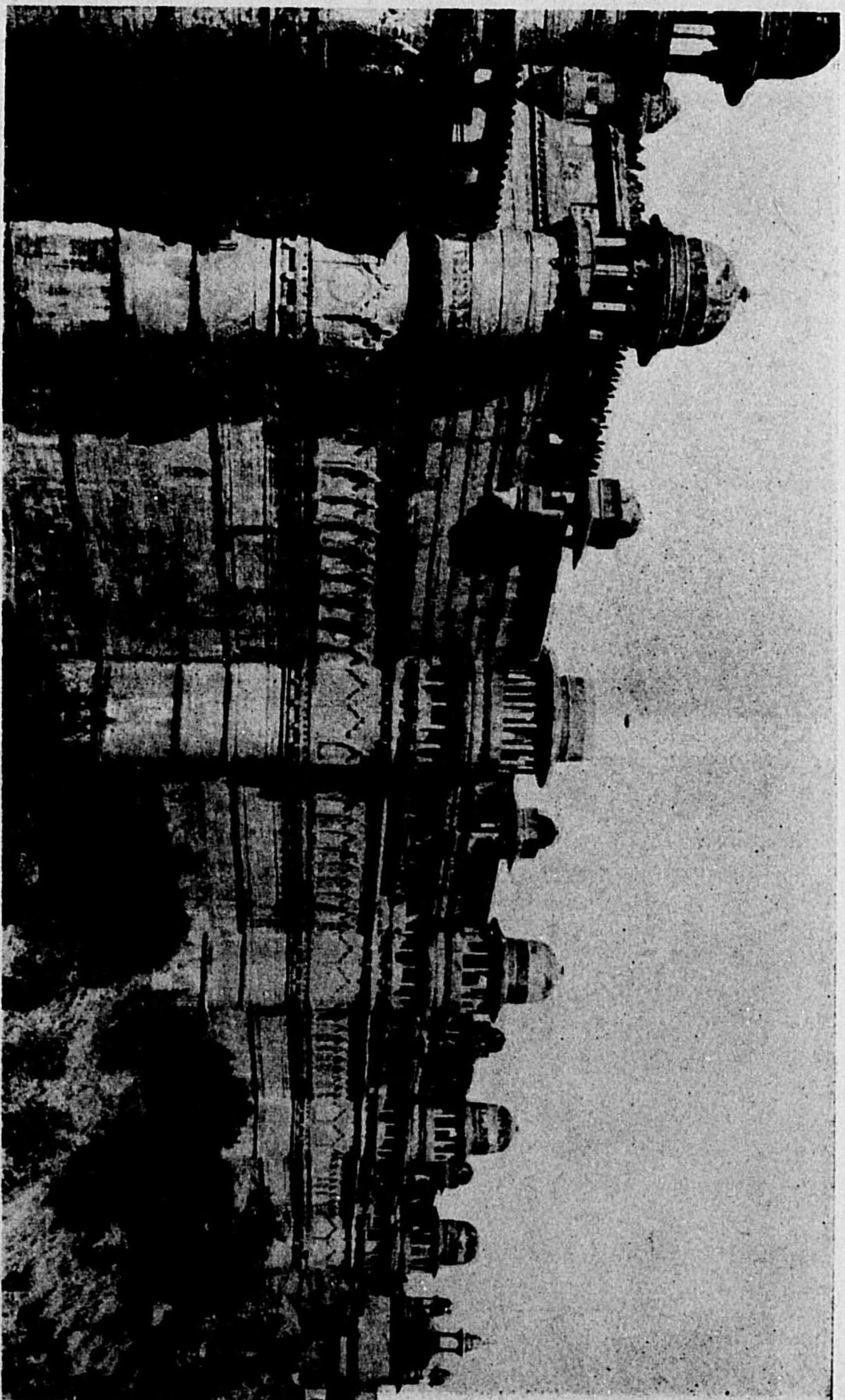
圖に於いてみる如く、此城塞は高300呎で平地より特立し、砂岩より成り殆んど總て絶壁をなし、頂上に平地がある。此丘は狭く長く、幅は600—2800呎、長さ南北1 $\frac{1}{2}$ 哩、回らせる城壁は高さ30—35呎といふ。南から北迄全部歩いて見ようと思つたが、北端に近く入れないところがあり、目的を達し得なかつた。城塞内に各種の建物がある。北端即ち此圖の右方に近く、各種の城門・宮殿・考古陳列館等があり、其他ここに數字で記した様に時代は割合に新しいが觀るべき幾多の建物がある。1, 2, 3 だけで、寫眞なんか何枚とっても足りない位である。城塞の南端から王宮を遙に俯瞰した所は甚だ美しい。何しろ四方見渡す限り平地だから、城塞上からどちらを見てもまことに絶景である。



グワリヤ城塞内グジヤリ・マハル 其一 (昭和十一年一月二十六日)  
 ジャー・マンスジド傍のアラムキリ門を入ると、グジヤリ宮 (Gujari Mahal) がある。マン・シン (Man Singh) 王 (170頁) の妃の宮殿だきらで、大きき800尺×280尺の二階建。所所に出窓があり、殊に隅のものは面白くできてゐる。



右。グワリヤ城塞内グジヤリ・マハル一部 其一  
 左。同 其二  
 (昭和十一年一月二十五日)  
 (昭和十一年一月二十五日)  
 解説前頁にあり。



グワリヤ城塞内マンスン宮東面全景 (昭和十一年一月二十四日)

案内書には Man Singh Palace とあるが、入口の立札には “MAN MANDIR PALACE” BUILT IN THE REIGN OF THE RAJA MAN SINGH A.D. 1486—1516” とある。東面の廻壁に5本の塔が建つてゐるのが非常に目立つ。1881—1883 (明治14—16) 年に修理され美しく保存されてゐる。内部から屋上に出られる様になつてゐる。側面の半圓形の出窓の狭間飾は注目に値す。



グワリヤ城塞に建つサス・バフ堂 (昭和十一年一月二十四日)

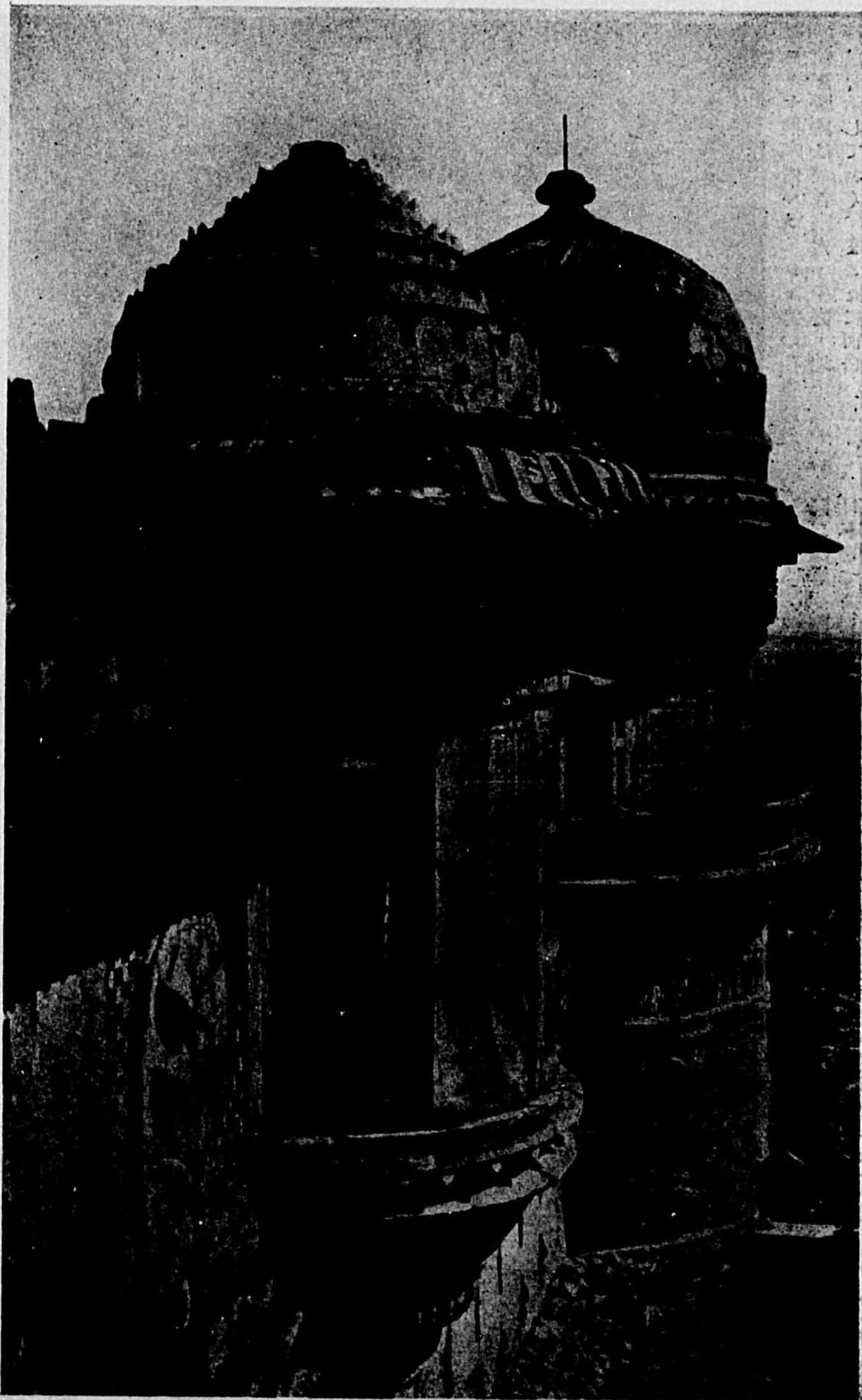
右方突角の先端に建つ建築と、其左方の稍や大なる建築とを合せてサス・バフ (Sas Bahadur) 堂といふ。ほんたうの名は Sahasrabahu で、これは「義母と義姉」・「姑と小姑」(Mother-in-law, Sister-in-law) の意味ださうな。これ等はジャイナ教の祠堂と考へられてゐたが、さうではなくて印度教のものであることが明瞭になつたさうで、其事が銘文に刻んである。其銘の一部を参考のため抜き書きをして置く。曰く “.....BUT IN FACT, THEY ARE HINDUS, AS IS PROVED, BEYOND DOUBT BY THEIR FIGURE AND BY THE INSCRIPTION RECORDING THAT THE EDIFICE WAS COMPLETED BY MAHIPALA A KACHHIYAHA RAJPUT PRINCE OF GWALIOR IN THE YEAR 1039A.D.” 即ち我が寛治七年 (平安末) の建築である。





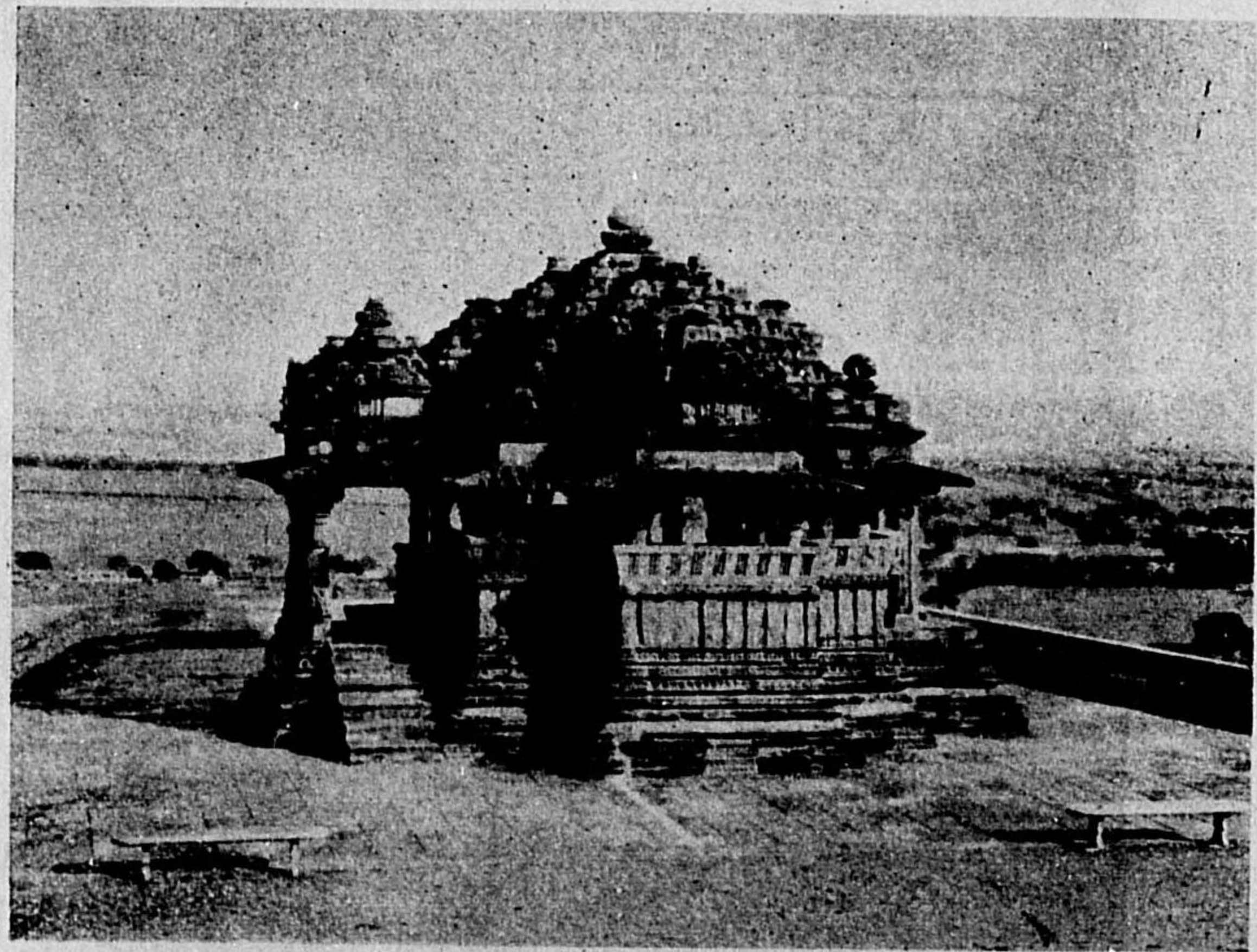
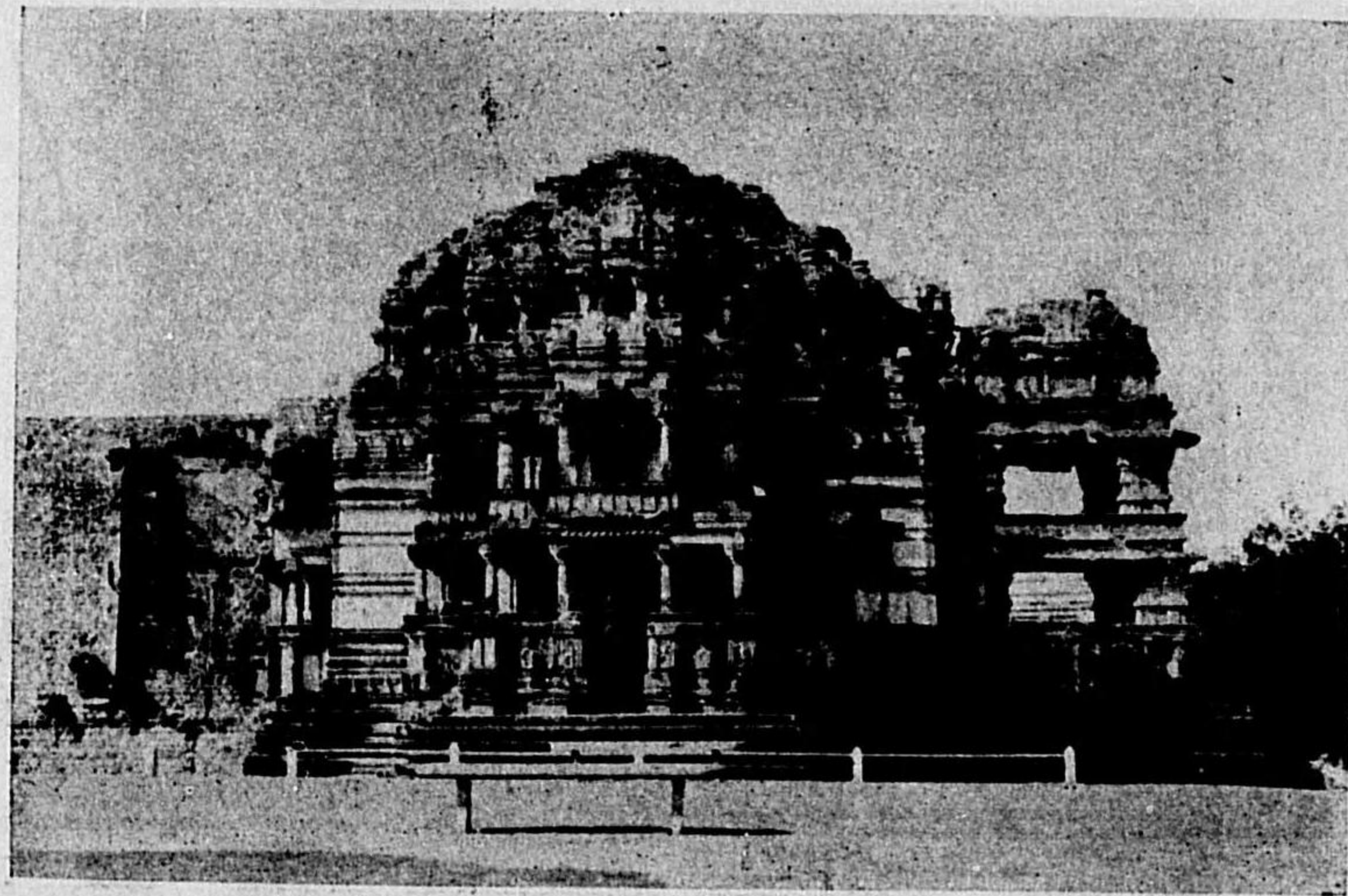
グワリヤ城塞内マン・シン宮出窓 其一  
 マン・シン宮はマン・マンチール宮 (Man Mandir) ともいひ、同王の在位 (一四八六年 (文明十八年) | 一五二六年 (永正十三  
 年) 中に建築したといふ。地上二階地下二階の建築で、この兩層でみる様に、出窓と胸壁 (Battlement) とが殊に美しい。(次頁へ)

(昭和十一年一月二十四日)



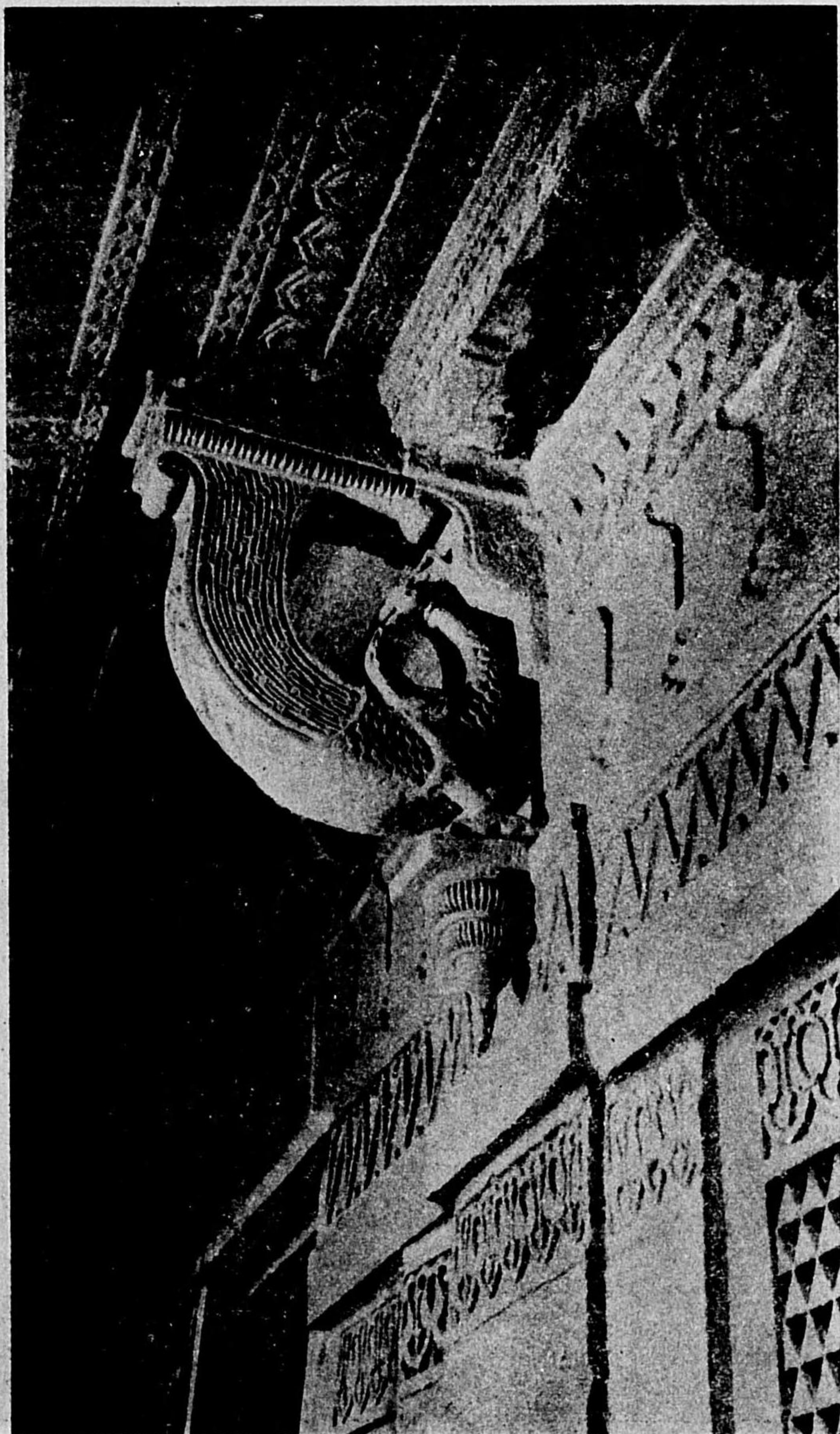
グワリヤ城塞内マン・シン宮出窓 其二  
 (前頁より) 出窓には角型のと圓形のと二種あり。塔の庇が時に蓮花瓣の彫刻をしてゐるのは注目し値す。

(昭和十一年一月二十四日)



上。グワリヤ城塞内サス堂（昭和十一年一月二十四日）  
 下。同　　バフ堂（昭和十一年一月二十五日）  
 内外共實に精巧な彫刻を以て充填してある。テリ・カ・マンデルや此建物の内部に  
 連続等脚三角文様のあるのに大分驚かされたのであった。

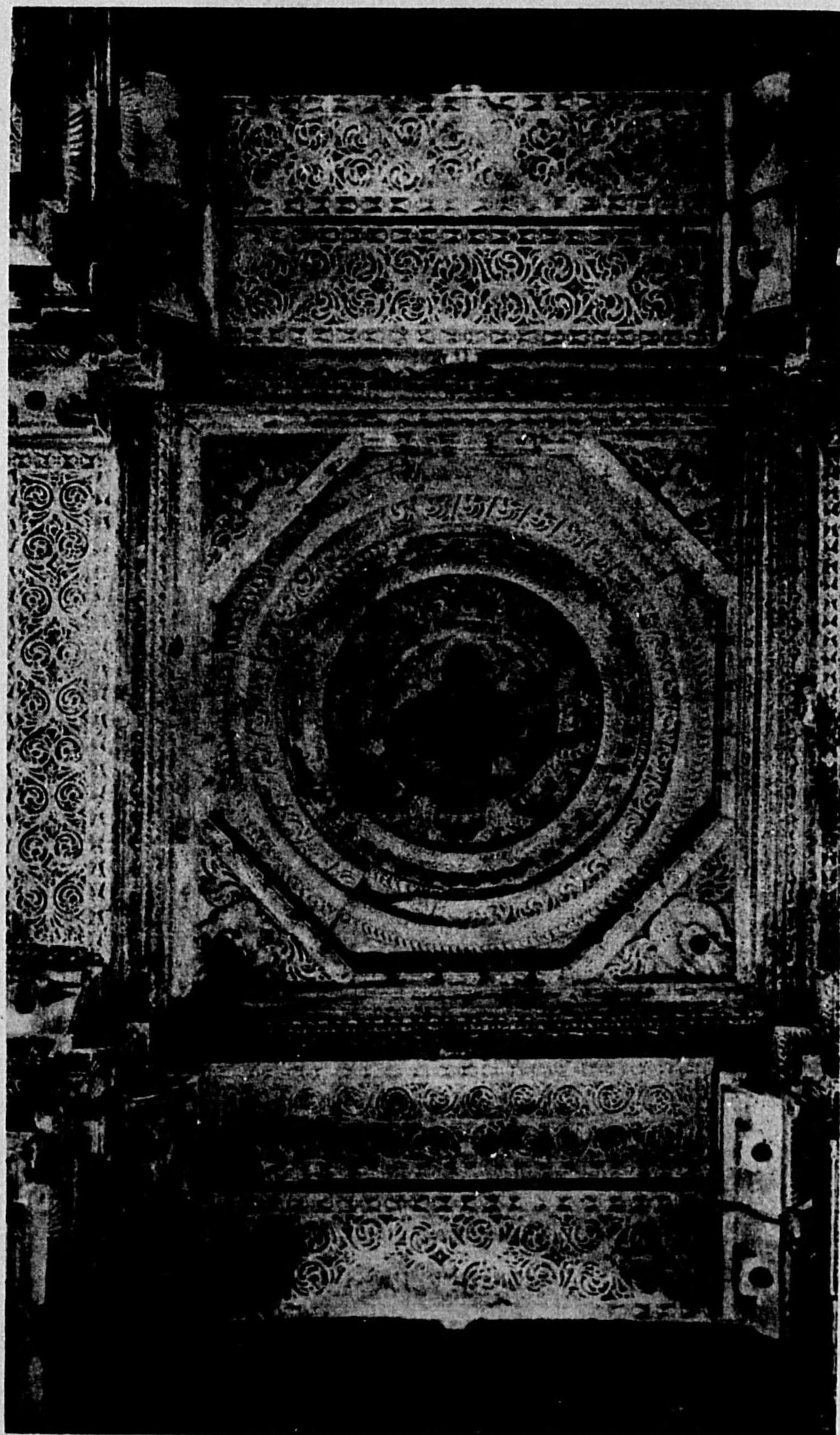
グワリヤ城塞内マン・シン宮の孔雀持送  
 此宮殿内は、各室内・中庭・地下室一階・同二階等、観るべきものは多過る程あるし、寫眞も數枚とつてあるが、ここには孔雀の  
 持送を示しておく。まことに面白い意匠で、日本等では到底案出はできない。軒下の展開蓮花文様、右下のウロコ型狭間飾等に注意  
 せよ。





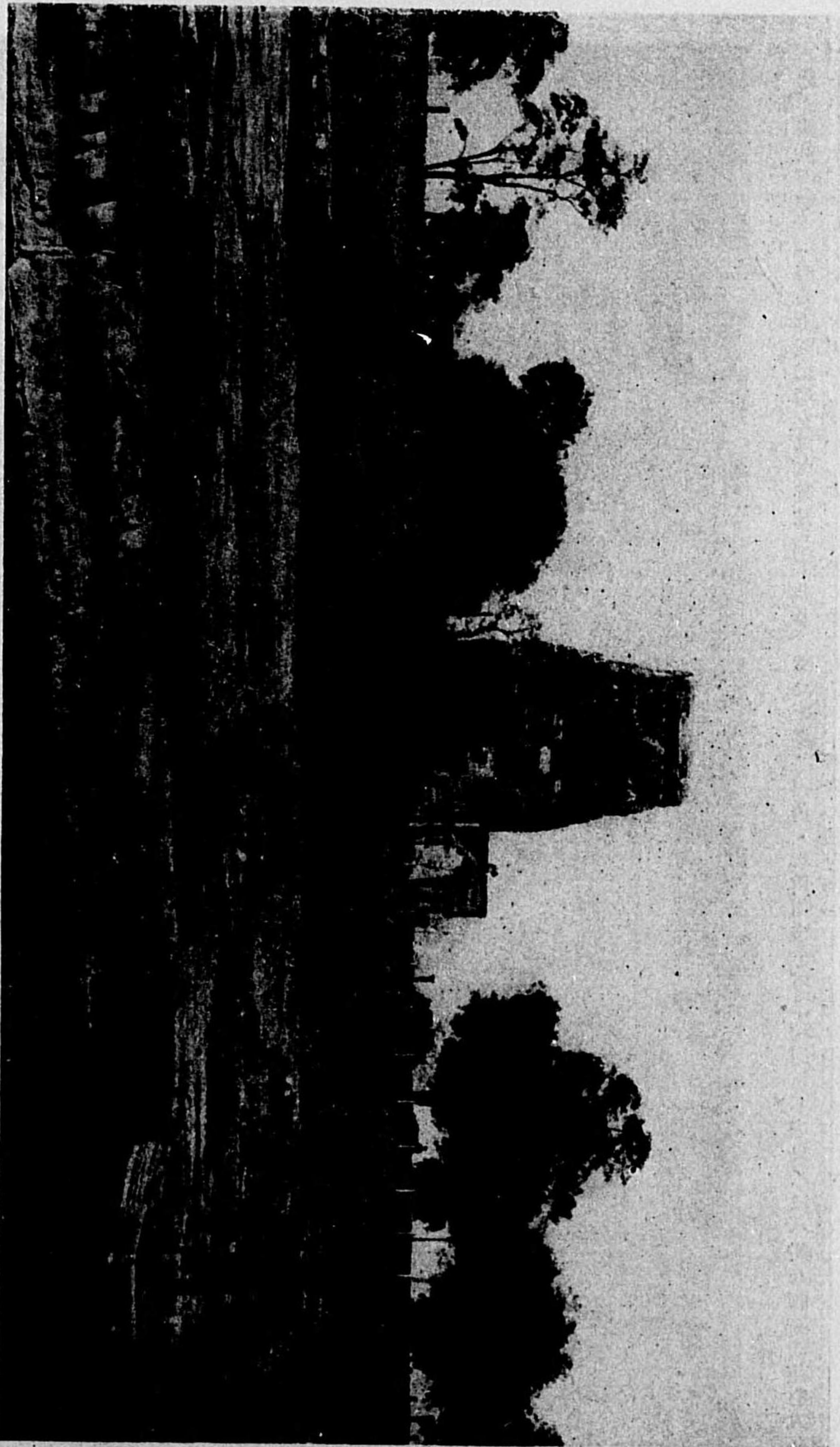
サス堂内部の彫刻装飾  
 内部は柱・壁面・天井等、床を除いて随所彫刻を以てみだしてある。螺旋文様・唐草文様・唐草文様・ダイヤアバア(花狭間繋)・市松文様・彫像等、あらゆる種類の装飾が施してある。又ナガもゐるのは興味を惹くに足る。實にナガヤナギニは随所にゐるので、洵に面白い。印度にも錫蘭にもゐるし、殊にネバルにはどこでもゐる。

(昭和十一年一月二十四日)



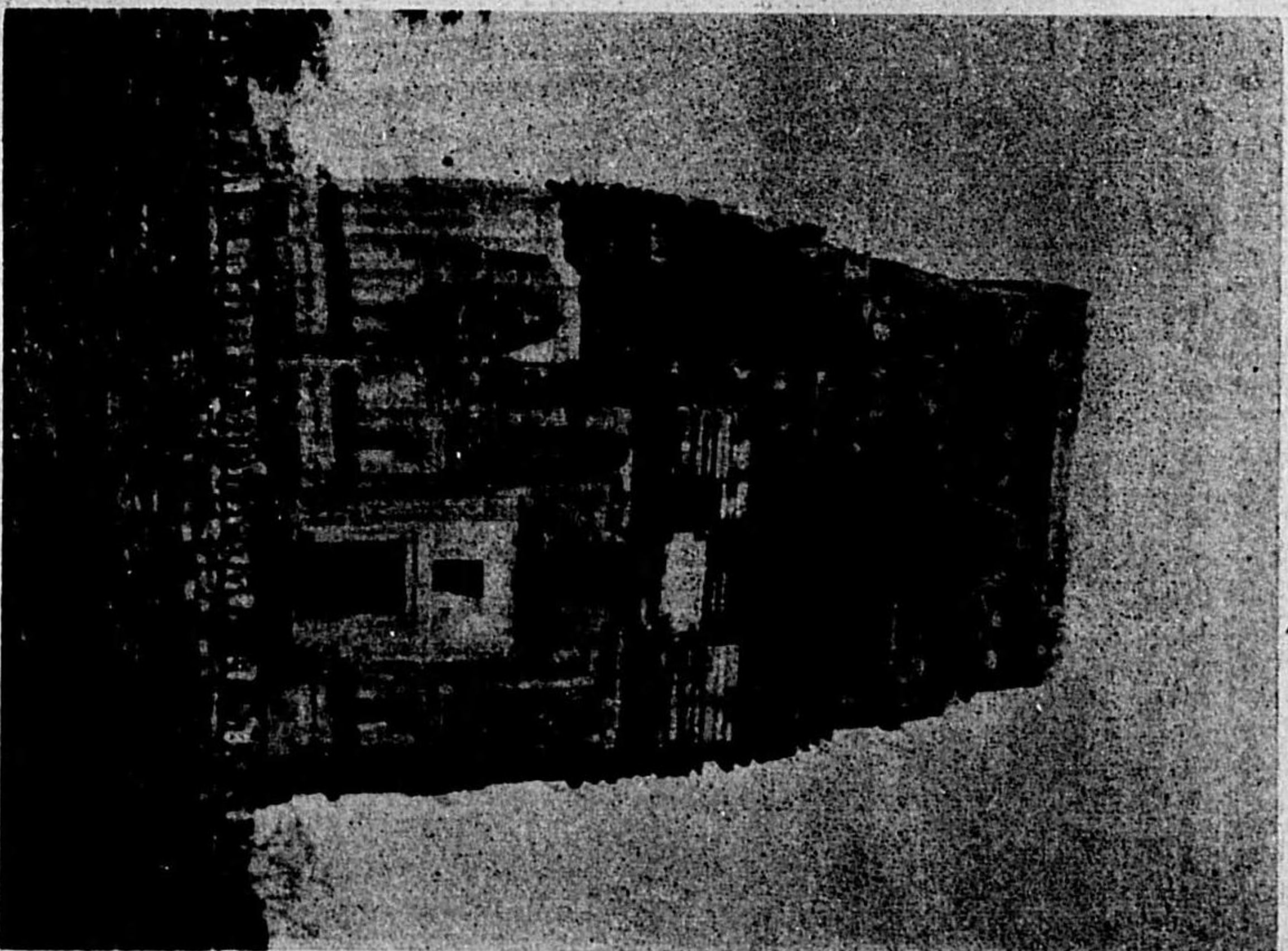
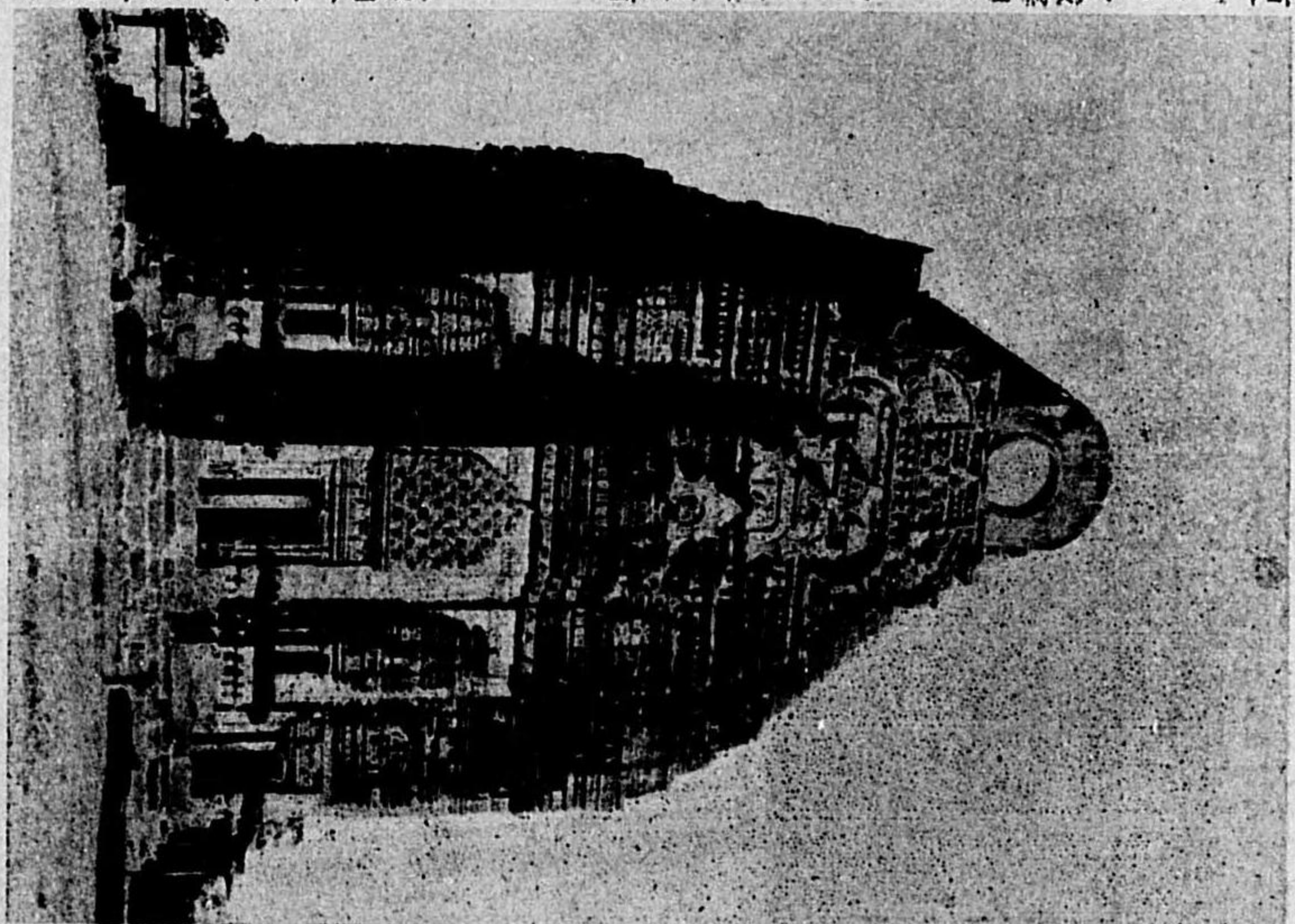
サス堂内部中央天井  
 此亦前例の如く一面の彫刻文様を以て裝飾してある。殊に天井は四角・八角圓等を巧に利用し、中央には八瓣及四瓣の花を入れてゐるあたり、マウント・アブウの諸堂の夫には遙に及ばないが、看者の眼を驚かすには充分過るものである。

(昭和十一年一月二十五日)



クワリヤ城塞内テリ・カ・マシヂル遠望 (昭和十一年一月二十四日)

「ガンゴラ池」(Gangola Talao) を隔てて、あたりの有様を一所に見せたのであるが、正面に小さい門がある。この門はその邊に  
 ったいろいろの遺材を寄せ集めて建てたといふ銘文(寫しては置なかつたが)があつた。割合によくできてゐた。



左、右、クワリヤ城塞内テリ・カ・マシヂル正面  
 テリ同 側面  
 (昭和十一年一月二十四日)  
 (昭和十一年一月二十四日)  
 都がある。此種の長い棟をもつた屋根はマラプラムにもあるし(第336・337頁)、以前はさう珍しくはなかつたらうとの説がある。